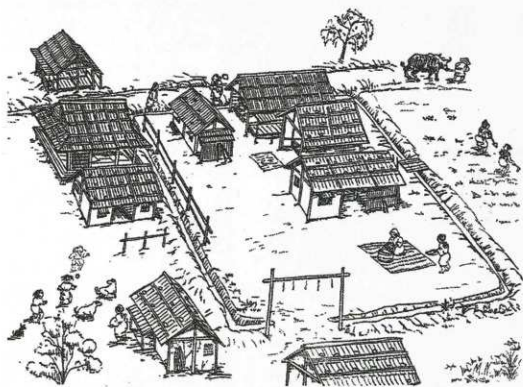


八坂本庄遺跡



例 言

- 1 本編は、八坂川河川改修事業Ⅱ工区の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、杵築市大字本庄のうち小字浜、前田など複数の字にまたがるため、大字名をとり八坂本庄遺跡とした。
- 3 報告で使用する方位はいずれも磁北である。真北は磁北から偏差東偏 $6^{\circ}0'$ である。
- 4 遺物の実測・トレースは、調査員に加え、大分県文化課埋蔵文化財資料室整理作業員及び細川愛（県文化課嘱託）、佐藤勇次（別府大学学生）が行った。
- 5 遺物観察表の作成は堤真子（県文化課嘱託）が行った。
- 6 本編の執筆は、第3章Ⅱ8（3）を清水宗昭、第1章、第3章、第4章を後藤一重、第2章を小柳和宏が行った。

目 次

第1章	はじめに	83
1	調査の概要	83
2	調査の体制	84
第2章	A区の調査	87
I	遺構と遺物	88
1	上塚	88
2	掘立柱建物跡	100
3	墓	121
4	溝	125
5	水田跡	127
II	その他の遺物	127
III	まとめ	131
第3章	B区の調査	133
I	第I面の調査	134
1	溝と条里地割	134
2	上塚	139
3	掘立柱建物跡	143
4	墓	146
II	第II面の調査	148
1	掘立柱建物跡	148
2	竪穴	220
3	土塚	221
4	惣納遺構	247
5	鍛冶関連遺構	250
6	溝	251
7	水田遺構	259
8	その他の出土遺物	267
III	第III面の調査	276
1	水田遺構	277
IV	第IV面の調査	280
1	水田遺構	280
第4章	まとめ	288

第1章 はじめに

1 調査の概要

八坂本庄遺跡は、大分県杵築市大字本庄字浜、前田ほかに所在する。

遺跡は、大きく蛇行する八坂川の右岸に位置する。現在、周辺は全面的に水田化されており、本地域の中核を担う水田として利用されている。今回の八坂川河川改修事業では、蛇行する川のショートカットが計画されたため、本庄地区の中核的水田地帯の中央を新河川が通ることとなった。このため、河川改修事業と併行して水田の区画整備事業も実施することとなり、多くの地権者の同意と協力を必要とする大事業となった。事業の推進にあたり河川改修事業は別府府土木事務所が、水田区画整理事業調査は県国東半島総合土地改良事業事務所がそれぞれ担当することとなったが、地元の杵築市も含めた相互の連携が強く求められるものであった。

八坂川河川改修事業に伴う遺跡の取り扱いについて、県教育委員会文化課に協議が最初であったのは平成5年2月のことである。県文化課は事業計画地の分布調査を行い、試掘・確認調査の必要があるとの回答を行った。平成6年3月には、試掘・確認調査の依頼を受け現地に入ったが、用地の関係から現場に入れないことが当日になり判明した。その後は、用地買収などの進捗が思わしくなかったのか、別府府土木事務所より試掘・確認調査の依頼はなく、県文化課としても試掘調査に入れる環境作りを急ぐよう再三の要請を行った。結局、別府土木事務所からの依頼により本格的に試掘・確認調査に入ることになったのは平成8年度になってからである。平成8年7月2日より、Ⅱ工区（八坂本庄遺跡）の試掘調査を開始した。試掘を行ったのは、工事の対象地である約67,000㎡である。このうち、東側の約30,000㎡については日立った遺構・遺物が確認されず、工事の着工を認めることとした。しかし、残りの部分では柱穴等の遺構が確認された。今回の八坂川河川改修1事は、蛇行部のショートカットということで、工事予定地内の保存措置をとることが現実的に困難であったため、遺跡の確認された地区全域を本調査することとした。

本調査予定地のうち、平成8年度は東側の約6,500㎡（A区）の調査を行った。調査では、12世紀前半と16世紀の遺構が確認された。特に、12世紀前半については大規模な屋敷地で、溝、樹立柱建物跡、土壇、土塀など確認された。これらは、本地域の水田開発や集落の変遷を考えるのに重要な遺跡になるであろうと考えられた。加えて、土層観察の結果、さらに下層には古墳～古代前半に遡りうる水田層が存在することも確認された。これらの状況を受け、平成9年度は残りの本調査予定地（B区）の調査を行うこととなり、平成9年5月12日より開始した。本調査を実施する範囲について、前年度より問題となっていた①新河川の築堤部、②調査区と現河川との控えについて、平成9年8月に県土木建設部と協議を行った。その結果、新河川の築堤部は調査対象から除外することに決定し、現河川に沿う部分についても、30mは安全対策の観点から調査対象外とする方針も確認されていた。よって、平成9年度に実施する本調査地区（B区）は、約20,000㎡となった。調査は順調に進んでいたが、平成9年9月の台風19号に伴う八坂川の洪水により、調査区も大被害を被り調査に大きな支障をきたすこととなった。この時の洪水被害は戦後最大規模のもので、八坂地区の広い範囲にわたり甚大な被害をもたらした。調査区の水が引き、進入路が復旧した後、現場を再開したのは10月初旬になってである。しかし、調査区内には洪水に伴う土砂が多量に残され、洪水前の状態に戻すまでは多くの時間を費やした。また、この洪水被害をきっかけに、地元住民から河川改修工事や埋蔵文化財調査に対する不満が表面化してきた。この背景には、河川改修事業の遅れは発掘調査の遅延が原因であるという誤解に基づく県農政部署の発言や、県議会における「茶碗のかけらと人命はどちらが大事なのか」という発言があった。このため、平成9年10月20日に八坂公民館において地元説明会を開催した。ここでは、これまでの正確な経緯を説明し、今後の河川改修と発掘調査の推進に地元理解を求めた。地元説明会が開催された。その後、平成9年11月27日に県土木建設部と今後の河川改修事業と発掘調査について協議を行い、Ⅱ工区（八坂本庄遺跡）の調査終了予定を平成10年5月末とした。この結果については、

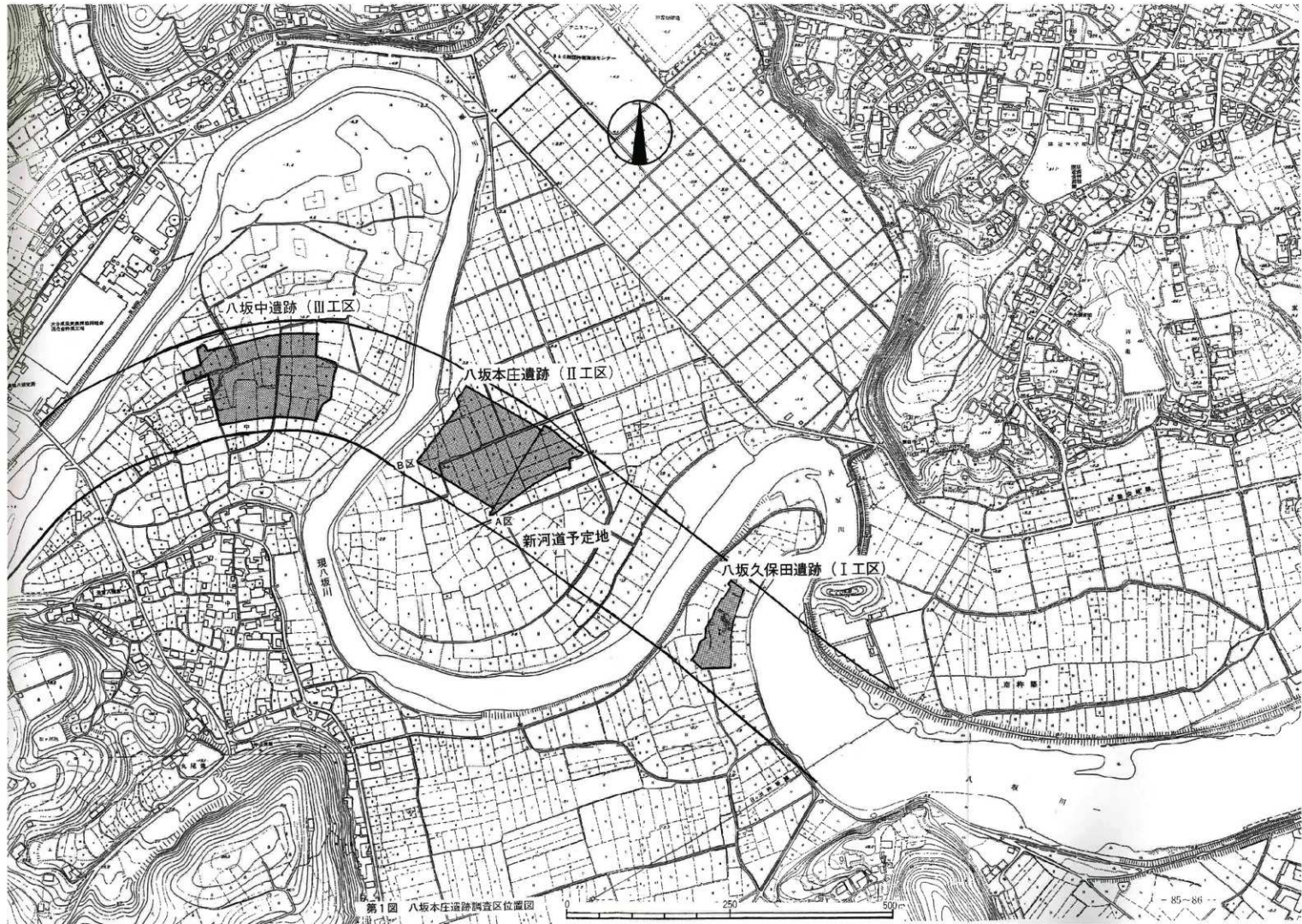
平成9年12月18日に再び地元説明会を開催し、地元で説明を行い、理解を得た。県文化課では、八坂本庄遺跡の調査終了予定の平成10年5月末にむけ、全力をあげることとなった。調査は、第Ⅰ面（近世）の調査の後再び掘り下げを行い、第Ⅱ面（古代末）の集落部分の全容が明らかになったので、平成10年2月1日に、隣接する八坂久保田遺跡（Ⅰ工区）と併せ現地説明会を開催した。現地説明会には百数十名の参加があり盛況であった。その後、第Ⅱ面の水田調査を行い、さらに下層の第Ⅲ面、第Ⅳ面への掘り下げを行ったところで平成9年度の調査は終了した。平成10年度の調査は、年度が始まってすぐの平成10年4月6日より開始した。第Ⅱ面の水田に併せ、第Ⅲ面と第Ⅳ面の水田を検出する作業を行った。この時点において、大分県下における水田調査の例はほとんどなく、手探り状態の調査であった。このため、賀川光夫別府大学名誉教授、後藤宗俊別府大学教授、飯沼賢司別府大学教授、高橋学立命館大学教授、佐々木章大分短大助教授らの指導を得て、各面の水田を明らかにしていった。しかし、4、5月に雨天の日が多かったこと、第Ⅳ面（古代前半）の小区画水田が良好な状態で検出され始めたことから、平成10年5月末終了が困難な情勢になった。このため、八坂地域各地区の換地委員長及び区長に、八坂川河川改修事業に伴う全体の発掘調査の終了は当初の予定と変更のないことを条件に、八坂本庄遺跡の調査延長について大方の理解を得た。その後、第Ⅳ面の小区画水田が本調査区内における最古の水田であることを確認し、小区画水田の状況を明らかにしていった。何面にもわたる本格的な水田遺構の検出は県下では初例で、現代にいたるまで約20面にわたる水田の変遷を、具体的な水田遺構をまじえながら語ることのできる貴重な例となった。

調査は、平成10年7月6日をもってすべて終了した。調査開始当初の計画よりはかなり早いものであったが、平成9年9月の洪水後策定した終了予定の平成10年5月末日より、1ヶ月余延い調査の終了であった。しかし、最終的な調査面積は25,400㎡にも及び、かつ数面にわたる遺構面を調査するというものであった。内容的にも、大規模な集落遺構に加え、本格的な水田調査の初例ともいえる水田遺構の検出など、中身の濃い調査となった。

2 調査の体制

本調査時の調査体制は以下のとおりである（役職は調査時のもの）。

調査主体	大分県教育委員会	
調査指導員	別府大学名誉教授	賀川 光 夫
	別府大学教授	後藤 宗 俊
	別府大学教授	飯沼 賢 司
	立命館大学教授	高橋 学
	大分短期大学助教授	佐々木 章
調査員	大分県教育庁文化課主査	渡 辺 重 昭
	同 主査	栗 原 眞
	同 主査	後 藤 一 重
	同 主任	小 柳 和 宏
	同 主任	松 本 康 弘
	同 主任	水 井 実
	同 嘱託	濱 田 教 靖
	同 嘱託	渡 部 桂 司



第2章 A区の調査

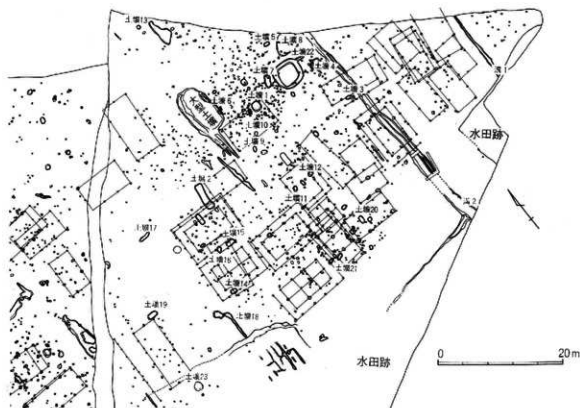
八坂本庄遺跡の中で、A区は最も東側に位置する。調査は平成8年8月21日から平成9年3月26日まで行った。調査区は、八坂川の屈曲部に向けて北側から延びてきた微高地の北東角部に位置するとすることができる。調査区の南側と東側は試掘調査の結果、泥炭層が広がり、旧河道及び水田層の存在が推測される部分で、A区は中世集落の南東角部を調査したことになる。

約5,700㎡の調査区内で、掘立柱建物跡26棟、土壇22基、方形周溝を伴う火葬墓1基、溝2条、溜井状の大型土壇1基、土壇23基、水田跡が検出されている。特に微高地のわずかな南向き斜傾となる部分に帯状に建物が展開しており、大まかには土軸を南北方向に取るものと東西方向に取るものとに分けることができる。建物はすべて掘立柱建物で、26棟の内9棟に庇が付いており、特に調査区中央には集中して見られる。さらに、ここに土壇が2基あり、僅かに離れて方形の周溝を持つ火葬墓があるなど、八坂本庄遺跡全体を見ても、ここが集落の中では最もグレードの高い地点とすることが出来る。

また、遺構理上は、基本的に茶褐色のものと黒色のものに二分することが出来る。出土遺物から、前者は11世紀から12世紀のもの、後者は15世紀から16世紀のものであることが確認できた。後者は、特に溜井状の大型土壇の東側にピットが集中的に見られたが、建物跡は確認できなかった。

また、集落部分には11世紀から12世紀の黒褐色の表土（旧表土）が全面に残存しており、その旧表土は集落の南側に展開する水田層の上層にも一部厚く被さっており、遺物が多量に含まれていた。その旧表土は調査区外の北側にも一部広がることが確認されている（杵築市教委が園地整備事業に伴い試掘調査）が、その広がりには僅か、集落の南東角部のほぼ全域を調査したと考えても差し支えない。

なお、後述のB区において述べられている遺構面（第Ⅰ面から第Ⅳ面）について、A区について言えば第Ⅱ面を中心とした調査ということになる。



第2図 八坂本庄遺跡A区遺構配置図

I. 遺構と遺物

1. 土壌

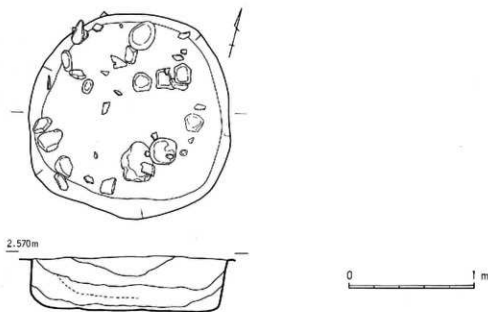
A区では計23基の小型の上坑と、1基の大型の上坑が検出された。埋土の色調から大まかには三時期に分けることが出来る。12世紀前半の集落と同時期のものは建物跡に接するように検出されるものが多く、15世紀～16世紀のものは大型土坑を中心として、その周辺に集中的に検出された。

以下、個別に詳細を述べる。

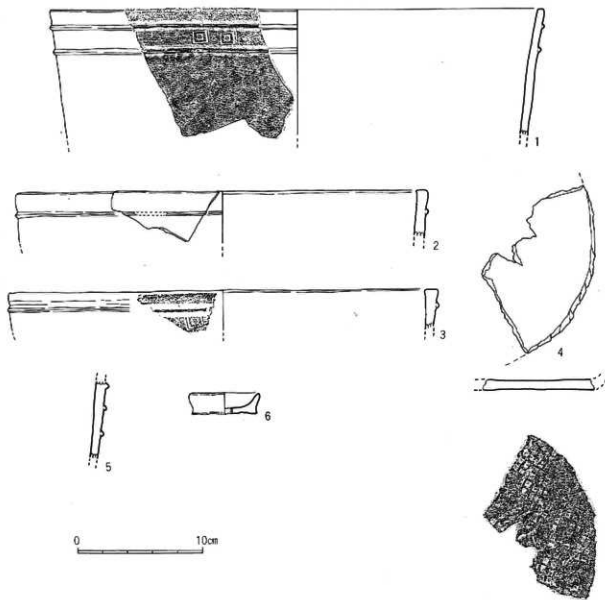
(1) 土 坑 1

建物10と切りあい関係を有する。直径1.6mで、現存する深さは35cmの円形の土坑。自然堆積で、Ⅲa層とⅣ層に炭化物、有機物を多量に含む。出土遺物は第4回1から6で1から6は瓦質土器の火鉢である。口縁直下に2条ないしは3条の貼り付け突帯を廻らせるもので、突帯間に方形のスタンプ文を有する(1)。口縁部はまっすぐ伸びるもの(1)とやや内側につままれるもの(2、3)とがある。底部外面には格子クタクキを残す(4)。6は上脚器小皿で、強く張り出す底部からやや内湾気味に立ち上がる口縁部を持つ。

これらはいずれも15世紀から16世紀前半のものである。



第3図 八坂本庄遺跡A区土坑1



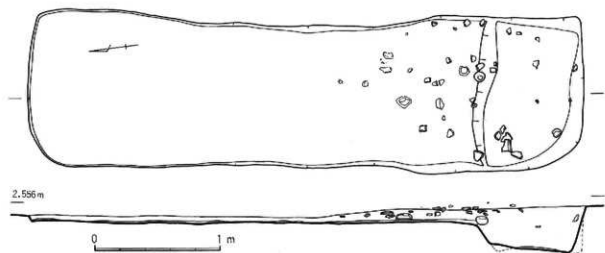
第4図 八坂本庄遺跡A区土壘1出土土器

(2) 土壘2

建物1の西に平行して接している長方形の大型の上壘である。長軸は南北方向で、長さ4.3m、幅1.2mである。床面までの深さは、全体的に5～10cmほどと浅いが、両側には南北方向に0.9mの幅で、深さ0.6mほどの落ち込みがある。

遺物は両側の落ち込み部分を中心に出土している。第6図7、8である。7は土師器碗で、内面にヘラミカキの痕跡が残る。8は土師質の甕である。

この上壘は、当初平面プランから炭窯の可能性が考えられたが、床面からまったく炭が出土せず、炭窯ではないことが確認された。性格は不明である。



第5図 八坂本庄遺跡A区土壙2



第6図 八坂本庄遺跡A区土壙2出土土器

(3) 土壙3

建物17と重なって検出された楕円形の土壙である。長軸0.8m、短軸0.7mで、深さは0.1mである。内部には少量の焼土塊が検出された。

遺物は第8図9で、上飾器碗である。内外面とも横方向の細かいミガキが施され、外方向に開く高台が付く。



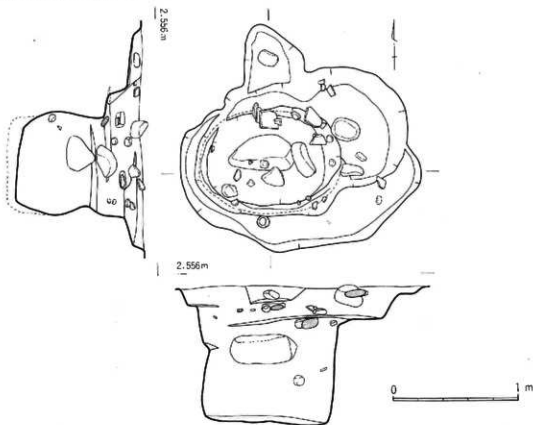
第7図 八坂本庄遺跡A区土壙3



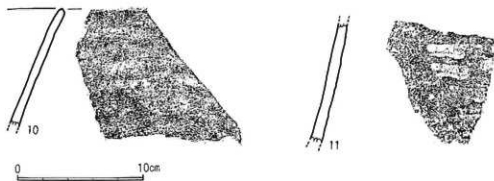
第8図 八坂本庄遺跡A区土壙3出土土器

(4) 土 城 4

2段掘りになっている円形土城で、埋土は黒色であった。1段目の大きさは東西1.6m、南北1.3mで深さは0.3m、2段目は東西1.3m、南北0.8mの楕円形で深さは0.8mである。検出面から床面までの深さは1.1mである。出土遺物は、上層から出土しており、第10図10、11である。いずれも土鍋である。内外面ともナゲ調整で、10の外面には指痕圧痕が認められる。



第9図 八坂本庄遺跡A区土城4



第10図 八坂本庄遺跡A区土城4出土土器

(5) 土 壙 5

調査区北側の岡溝墓北側で検出された隅丸の長方形を呈する土壙。長軸は東西方向である。長さ1.05m、幅0.6mで、深さは8cmである。

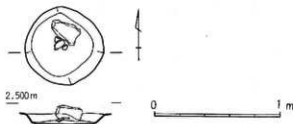
この土壙に伴う遺物の出土は無かった。



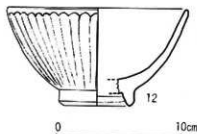
第11図 八坂本庄遺跡A区土壙5

(6) 土 壙 6

大型土壙のすぐ東側にある円形の土壙で黒色の埴土。直径0.5m、深さは0.16mである。遺物は第13図12で、青磁の椀で線刻で蓮弁文を表す。16世紀前半を中心とする時期の所産である。



第12図 八坂本庄遺跡A区土壙6

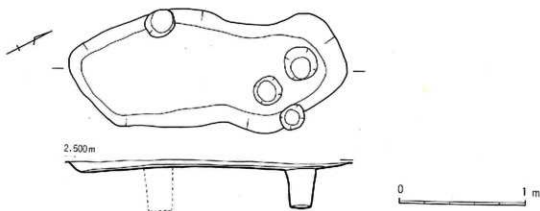


第13図 八坂本庄遺跡A区土壙6出土遺物

(7) 土 壙 7

円形周溝墓の西側にある不整長方形を呈する土壙。長軸は概ね南北方向で、長さ2.1m、幅は0.9m、深さは3から7cmである。

遺物の出土は無かった。

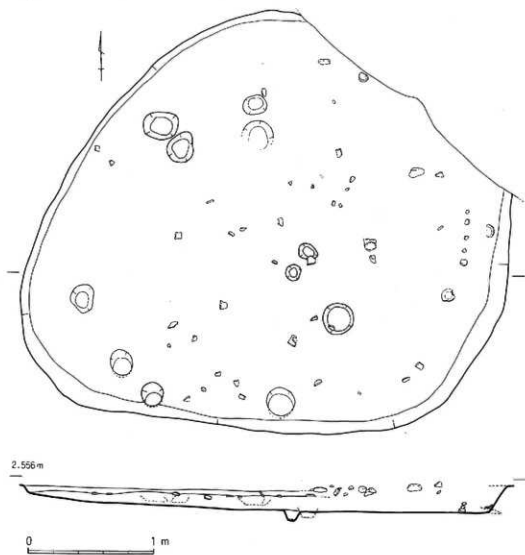


第14図 八坂本庄遺跡A区土壙7

(8) 土 壙

調査区北側で検出され、一部調査区外にかかる不整形形の浅い土壙である。長軸方向で長さ3.5(-a)m、短軸方向で3.4m、深さは5-13cmと浅い。

出土遺物は第16図13から16である。13は白磁甕で、体部内面に一条の沈線を有し、その下位に柳指文を施す。14、15は土師器碗で、内面にヘラミガキの痕跡を残す。高台部は14がやや八字状に開くのに対して、15はほぼ直立する。16は土師器小皿で、直線的に細りながら伸びる体部を有する。



第15図 八坂本庄遺跡A区土壙8

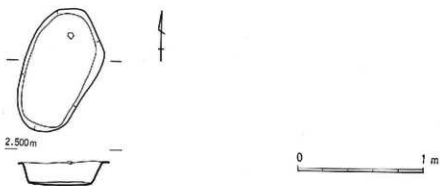


第16図 八坂本庄遺跡A区土壙8 出土土器

(9) 土 壙 9

調査区のはば中央で検出された隅丸の長方形を呈する土壙で、埋土は黒色である。長軸は概ね南北方向に取る。長さは1.0m、幅は0.5m、深さは0.18mである。

遺物の出土は無いが、埋土の色調から15～16世紀と考えられる。



第17図 八坂本庄遺跡A区土壙9

(10) 土 壙 10

建物10と重なって検出された長方形の土壙。長軸方向は、北から45°東に振る。長さは0.7m、幅0.4m、深さは0.1mである。

遺物の出土は無い。



第18図 八坂本庄遺跡A区土壙10

(11) 土 壙 11

建物11と重なって検出された楕円形を呈する土壙で、埋土は黒色である。長軸は南北方向である。長さ0.9m、幅0.7m、深さは0.12mである。

遺物の出土は無いが、埋土の色調から15～16世紀と考えられる。

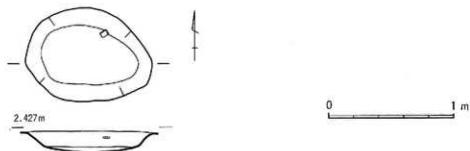


第19図 八坂本庄遺跡A区土壙11

(12) 土 壙12

建物11と重なって検出された楕円形を呈する土壙。長軸は東西方向である。長さ1.0m、幅0.7mで、深さは0.12mである。

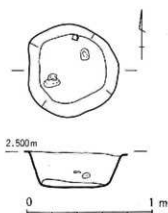
遺物の出土は無い。



第20図 八坂本庄遺跡A区土壙12

(13) 土 壙13

調査区の最も北側で確認された円形の小型土壙。直径0.7m、深さ0.2mである。遺物の出土は無いが、黒色の埋土から時期は15~16世紀と考えられる。

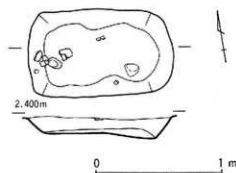


第21図 八坂本庄遺跡A区土壙13

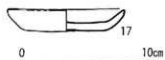
(14) 土 壙14

建物2と4と重なり合って検出された。長軸を東西方向にとる長方形の上壙である。長さ1.1m、幅0.7m、深さ0.25mほどである。

遺物は第23図17である。土師器小皿で、底部から緩やかに内湾しながら立ち上がる体部を持つ。口径は9.4cmある。



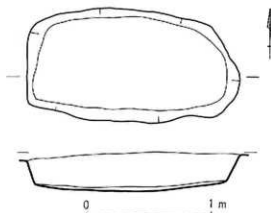
第22図 八坂本庄遺跡A区土壙14



第23図 八坂本庄遺跡A区土壙14出土土器

(15) 土 壙15

建物2と4と重なり合って検出された。長軸を東西方向にとる長方形の土壙である。長さ1.4m、幅0.8m、深さは0.12mほどである。遺物の出土は無い。

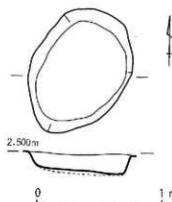


第24図 八坂本庄遺跡A区土壙15

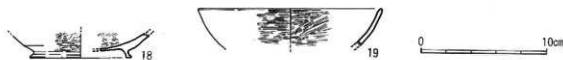
(16) 土 壙16

建物2、3、4と重なって検出された楕円形の土壙で土壙16に隣接する。長軸は北から40° 東に振れているが、長軸1.0m、短軸0.7mの楕円形を呈する。

遺物は第26図18、19である。いずれも土師器碗で、内外面ともヘラミガキが認められる。19の高台部は外方に広がる。



第25図 八坂本庄遺跡A区土壙16

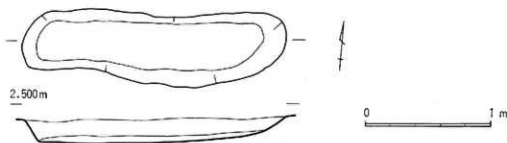


第26図 八坂本庄遺跡A区土壙16出土土器

(17) 土 壙17

調査区の中央やや西よりで確認された隅丸長方形の土壙。周囲には遺構が無い。長軸は東西方向で、長さ2.1m、幅0.6m、深さは0.2mである。

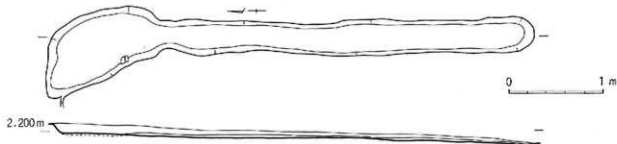
遺物の出土は無い。



第27図 八坂本庄遺跡A区土壙17

(18) 土 壙18

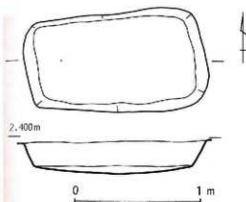
建物4の南西にあり、2つの長楕円形の土壙が連結し、南側の土壙はさらに南に直線的に延びる溝に連結する。それぞれの遺構が先後関係にあるのか、同時に存在したのかは確認できなかった。北側の土壙は長軸1.6m、短軸1.0m、深さ0.1m、南側の土壙は長軸1.2m、短軸0.7mで、深さは0.1mである。溝は幅0.3m、深さ5cmから10cmで長さは4.0mである。



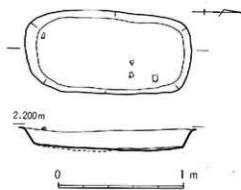
第28図 八坂本庄遺跡A区土壙18

(19) 土 壙19

建物25の北東にあり、長軸は東西方向で、長さ1.7m、幅0.9m、深さ0.3mの長方形の上壙である。
遺物の出土は無い。



第29図 八坂本庄遺跡A区土壙19

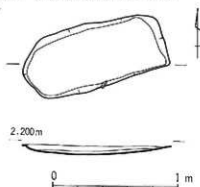


第30図 八坂本庄遺跡A区土壙20

(20) 土 壙20

建物18と重なって検出された土壙。長軸は南北方向に取り、長さ1.3mで幅0.66mの長方形を呈する。深さは15cmである。

遺物の出土は無い。

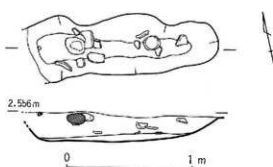


第31図 八坂本庄遺跡A区土壙21

(21) 土 壙21

調査区南側の建物7と重なって検出。長軸方向を概ね東西方向に取る長方形の上壙。長さは1.15m、幅は0.5mで、深さは中央部で8cmほどで、盛際は皿状に浅くなっている。床面には炭化物が堆積しており、覆土には焼土が多量に含まれていた。

遺物の出土は無い。

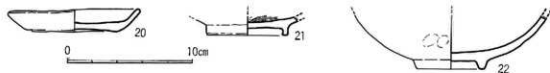


第32図 八坂本庄遺跡A区土壙22

(22) 土 壙22

円形の周溝裏に切られている溝状の土壙。長軸は東西方向で、長さ1.4m、幅0.43m、深さは0.15mほどである。

遺物は第33図20から22である。

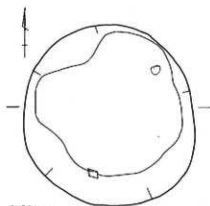


第33図 八坂本庄遺跡A区土壙22出土土器

(23) 土 壙23

調査区の南側、水田畑の広がる部分で検出された円形の土壙。直径1.4mで、深さは0.5mである。内部には焼土のブロックが堆積していた。

遺物は第35図23である。内黒土器で、内外面ともヘラミガキが施されている。体部はややふくらみ、口縁部は小さく外反する。



1.900m

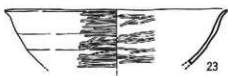


第34図 八坂本庄遺跡A区土壙23

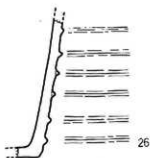
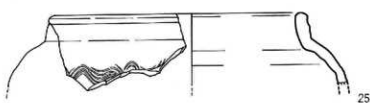
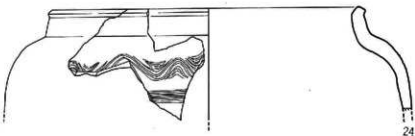
(24) 大型土壙

調査区の北側で検出された大型の土壙。平面プランは隅丸の長方形で、南側には2本の溝が伸びている。大きさは土壙部分で南北8.0m、東西5.0mで、深さは0.6mである。溝は幅0.6mのもの0.5mほどのものが重なっており、土壙から南に約6mほど直線的に伸びている。溝の深さは30cmほどで、土壙の底面から30cmほどのところから南に伸びている。

土壙は両側が浅く2段掘りになっており、床面から1段目にかけて行を貼って



第35図 八坂本庄遺跡A区土壙23出土土器

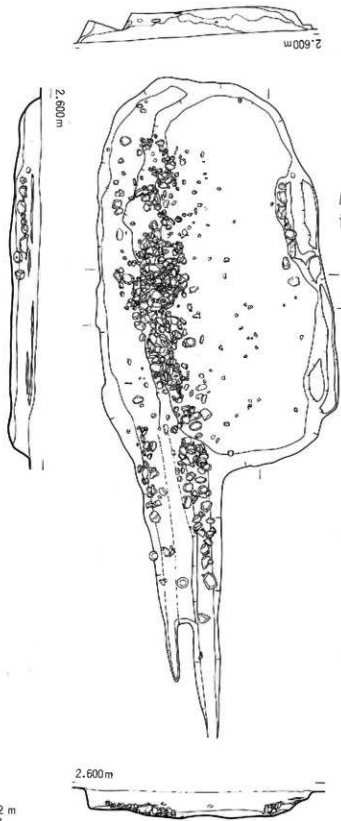


第36図 八坂本庄遺跡A区大型土壙出土土器

いる状況であった。東側は一部に石列が見られるが、全体には及んでいない。中央部には石は見られなかったで、割面部、特に西側斜面部の補強のために石を使用したものと考えられる。

遺物は37図24から26である。24、25は同一個体の可能性がある備前焼きである。肩部に襷描きの波状文と直線文が施される。26は瓦質土器の火鉢底部で、現状で6条の貼り付け突帯が廻る。

土壌の性格は、水田に水を供給する溜井と考えられる。土壌から伸びる溝は、検出時には6mほどしか残っていなかったが、その溝の延長線上には溝の痕跡が僅かに残っていた部分もあり、直線的に南に向かって伸びていたことが推測できる。



第37図 八坂本庄遺跡A区大型土構

2. 掘立柱建物跡

A区においては計26棟の掘立柱建物跡が検出されている。建物は、調査区の南側に集中し、北側やB区と接する西側には少ない。つまり、明らかにB区に展開する建物群とは別グループの一群と捕らえることが可能である。26棟の掘立柱建物を見てみると、まず主軸方位が南北方向のもと、東西方向のものに2分出来る。その中で注目されるのは南北方向に主軸を持つものに2間×5間といった梁行の長いものが複数あることである。逆に東西方向に主軸を有するものには存在しないのは、長大な建物には何らかの機能差が認められることになろう。また、もう一つの注目点は庇を有する建物が多くあることである。26棟の内8棟に認められる。特に建物2、3、5、6といった建物は集中しており、この八坂本庄遺跡の中でも最も中心をなす部分と考えられる。

以下、個別に詳細を述べる。



第38図 八坂本庄遺跡A区建物配置図

(1) 建物1

調査区のほぼ中央に位置し、東西方向に長軸をとる。主軸方位は $N88.5^{\circ}W$ である。2間×3間の掘立柱建物で、建物3と切りあい関係を有する。梁行3.5m、桁行5.9mで、身舎面積は20.65 m^2 である。

(2) 建物2

南北方向に長軸をとり、主軸方位は $N8^{\circ}E$ である。2間×5間の掘立柱建物。梁行3.4m、桁行9.1mで、身舎面積は30.94 m^2 である。

(3) 建物3

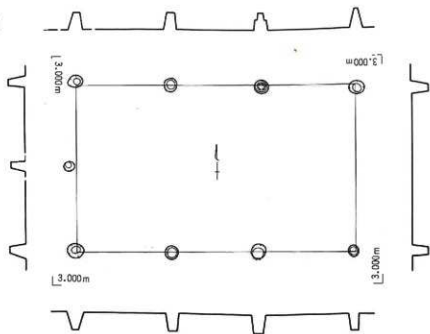
建物1と切りあい関係を有する。東西方向に長軸をとり、主軸方位は $N87^{\circ}W$ である。2間×3間の主屋に4面庇がつく掘立柱建物。さらに北側には庇に平行に柱穴列が見られる。庇部分も含めた梁行6.2m、桁行9.5mで、身舎面積は26.13 m^2 である。北側の2重の庇は、拡張の結果であると考えられる。

第54図27は柱穴から出土した。高台を有する土師器で、内外面にヘラミガキが施される。高台は高くやや外方に開く。

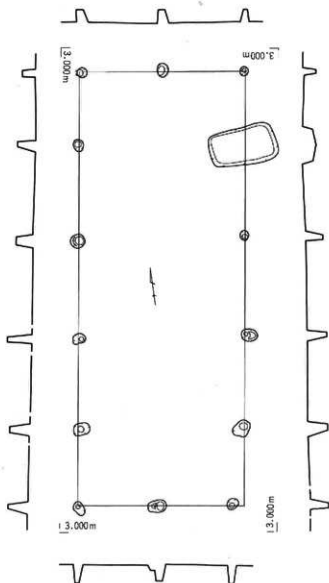
(4) 建物4

建物3に接しては並列するように検出された東西方向に長軸をとり、主軸方位は $N87^{\circ}W$ である。2間×3間の主屋に4面庇がつく掘立柱建物。主屋部分には束柱が認められる。庇部分も含めた梁行6.3m、桁行7.2mで、身舎面積は24.8 m^2 である。

建物 1

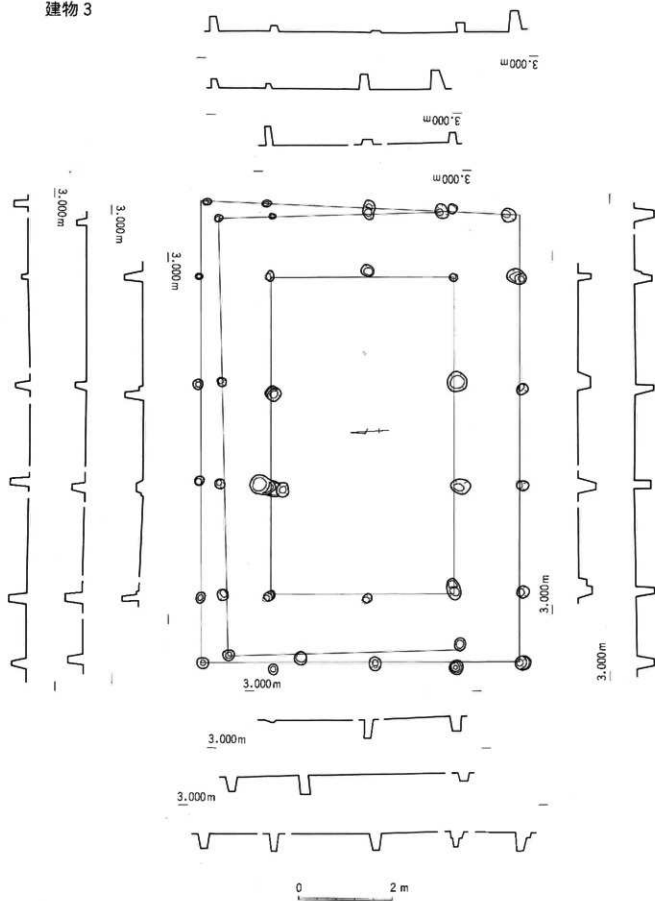


建物 2



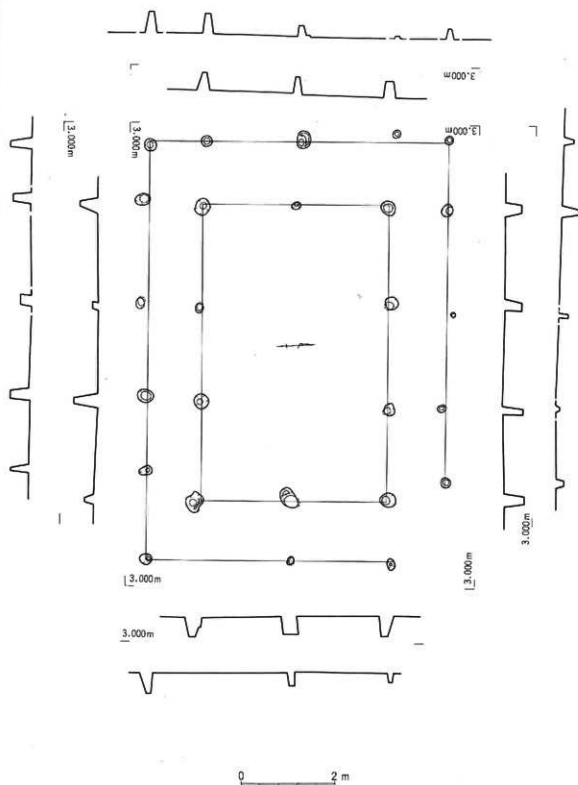
第39図 八坂本庄遺跡A区建物1・2

建物 3



第40図 八坂本庄遺跡A区建物3

建物 4



第41図 八坂本庄遺跡A区建物4

(5) 建物5

建物4に北列し、建物6と平行に立てられている。東西方向に長軸をとり、主軸方位は $N88^{\circ}E$ である。2間×3間の主屋に4面庇がつく掘立柱建物。庇部分も含めた梁行6.3m、桁行7.2mで、身舎面積は25.2 m^2 である。

(6) 建物6

集落の最も南側で、水田域に接するように建つ。また、建物5に対して一間分だけ西にずれているものの、間を半間空け、平行に建てられている。東西方向に長軸をとり、主軸方位は $N88^{\circ}E$ である。2間×3間の主屋の3面に庇がつく掘立柱建物。主屋部分には束柱が認められる。庇部分も含めた梁行5.1m、桁行10.2mで身舎面積は28.12 m^2 である。

(7) 建物7

南北方向に長軸をとり、主軸方位は $N5^{\circ}W$ である。2間×3間の掘立柱建物で束柱が認められる。また、南側には幅の狭い庇が付く。庇部分も含めた梁行4.4m、桁行7.8mで、身舎面積は26.27 m^2 である。

第54図28、29は柱穴から出土した。28は土師器坏、29は土師器小皿である。いずれもやや内湾しながら立ち上がる体部を持ち、坏は口縁部が細る。

(8) 建物8

建物7と切りあい関係のある2間×2間のほぼ方形の掘立柱建物。A区の中では最も規模が小さい。主軸方位は $N2.5^{\circ}W$ である。南北4.1m、東西3.7mで、身舎面積は15.17 m^2 である。

(9) 建物9

建物7、8号と切りあい関係がある。南北方向に長軸をとり、主軸方位は $N2^{\circ}W$ である。2間×3間の掘立柱建物。梁行4.0m、桁行6.4mで、身舎面積は25.6 m^2 である。

第54図30から34は柱穴から出土した。いずれも土師器で、30から32は小皿、33と34は坏である。小皿はやや内湾しながら立ち上がり、先端が細る。坏は口縁先端部が小さく外反する。

(10) 建物10

東西方向に長軸をとり、主軸方位は $N89.5^{\circ}E$ である。2間×4間の掘立柱建物。梁行7.7m、桁行4.5mで、身舎面積は33.88 m^2 である。

(11) 建物11

南北方向に長軸をとり、主軸方位は $N1^{\circ}E$ である。2間×3間の掘立柱建物で、東と南に庇が付く。庇部分も含めた梁行5.4m、桁行6.3mで、身舎面積は22.96 m^2 である。

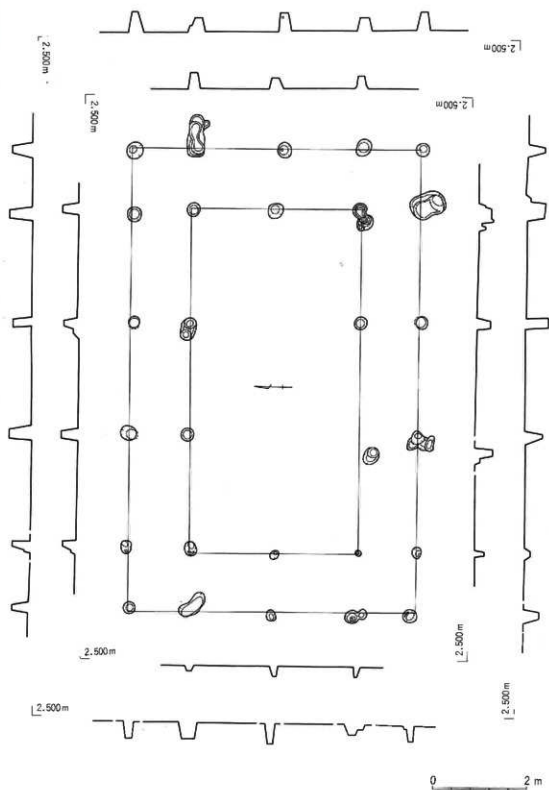
(12) 建物12

南北方向に長軸をとり、主軸方位は $N8^{\circ}W$ である。1間×4間の長方形プランの掘立柱建物。梁行3.0m、桁行9.7mで、身舎面積は29.1 m^2 である。

(13) 建物13

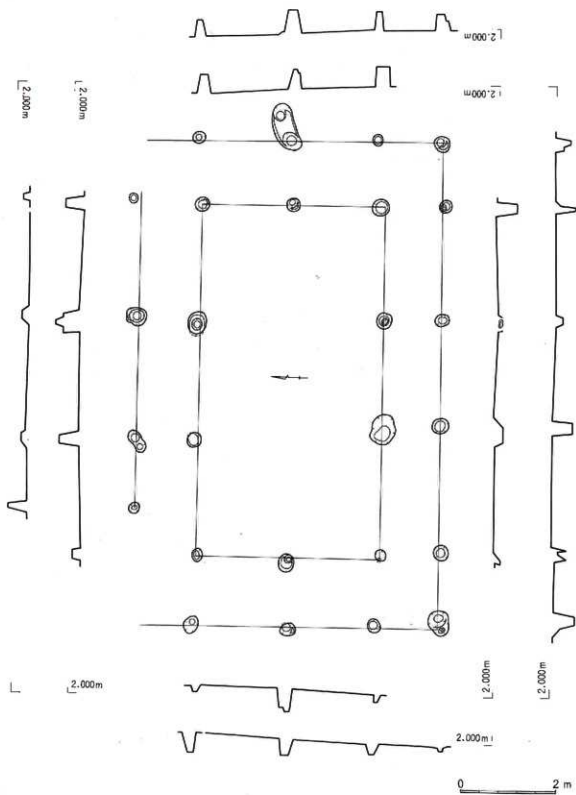
東西方向に長軸をとり、主軸方位は $N88^{\circ}W$ である。2間×3間の掘立柱建物。梁行3.8m、桁行5.6mで、身舎面積は21.28 m^2 である。

建物 5



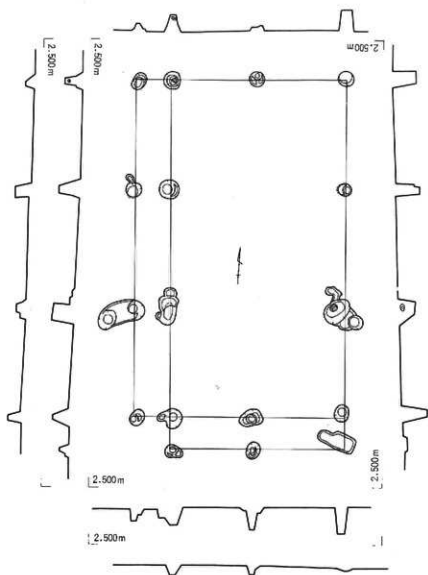
第42図 八坂本庄遺跡A区建物5

建物 6

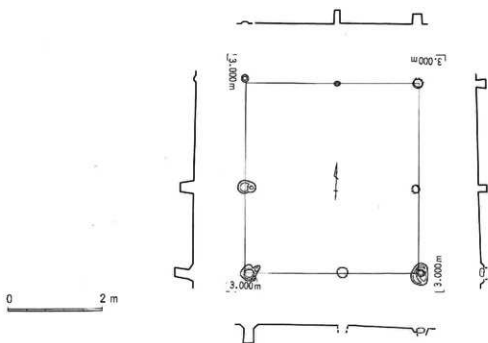


第43図 八坂本庄遺跡A区建物6

建物 7



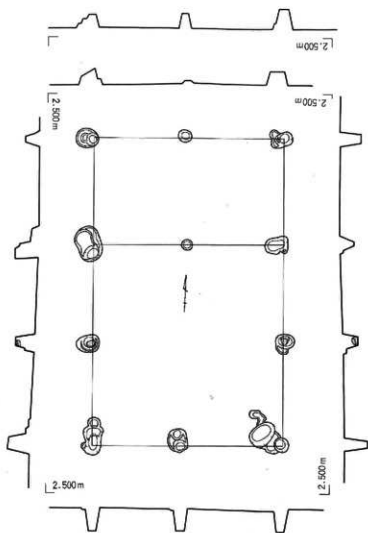
建物 8



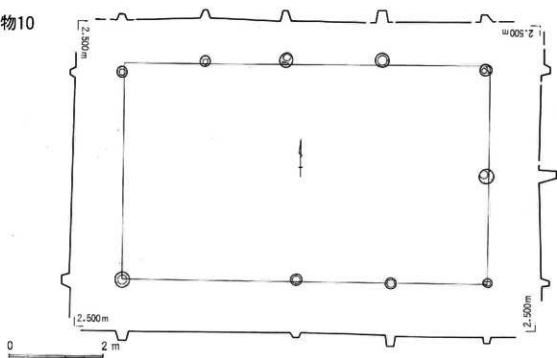
0 2 m

第44図 八坂本庄遺跡A区建物7・8

建物9

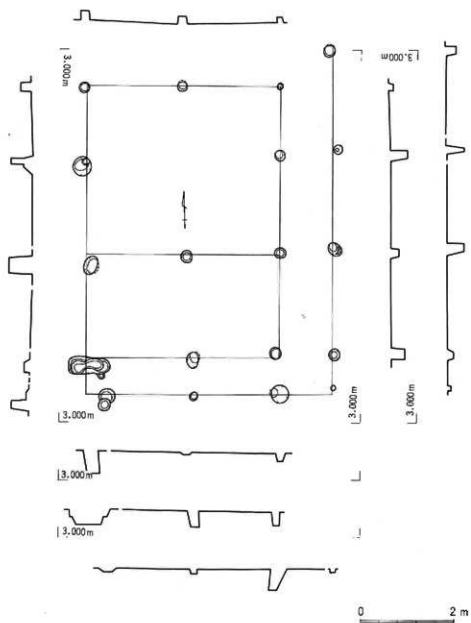


建物10



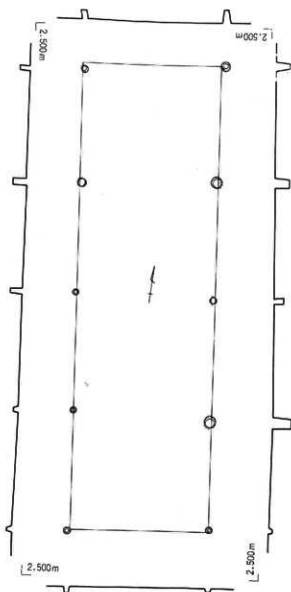
第45図 八坂本庄遺跡A区建物9・10

建物11

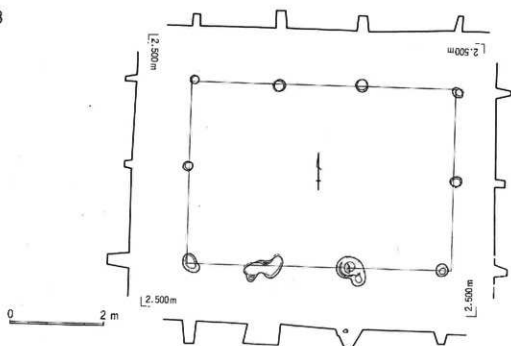


第46図 八坂本庄遺跡A区建物11

建物12



建物13



第47図 八坂本庄遺跡A区建物12・13

(14) 建物14

建物13と切りあい関係を有する。南北方向に長軸をとり、主軸方位は $N1^{\circ}E$ である。2間×3間の掘立柱建物。梁行4.0m、桁行5.7mで、身舎面積は22.8 m^2 である。

(15) 建物15

調査区の東側にある。南北方向に長軸をとり、主軸方位は $N3.5^{\circ}W$ である。2間×3間の掘立柱建物で、西側に庇が付く。庇部分も含めた梁行5.1m、桁行6.8mで、身舎面積は25.16 m^2 である。

(16) 建物16

溝2の埋設後建てられたもので、南北方向に長軸をとり、主軸方位は $N2.5^{\circ}W$ である。2間×3間の主屋に4面庇がつく掘立柱建物。庇部分も含めた梁行5.9m、桁行6.6mで、身舎面積が25.74 m^2 である。

(17) 建物17

溝2の埋設後建てられたもので、東西方向に長軸をとり、主軸方位は $N81^{\circ}W$ である。2間×4間の主屋に東と南に庇がつく掘立柱建物。庇部分も含めた梁行4.4m、桁行8.3mで、身舎面積が29.88 m^2 である。

(18) 建物18

東西方向に長軸をとり、主軸方位は $N88.5^{\circ}W$ である。2間×4間の掘立柱建物。梁行3.9m、桁行7.2mで、身舎面積は20.08 m^2 である。

(19) 建物19

建物20とほぼ重なりながら検出された。南北方向に長軸をとり、主軸方位は $N9^{\circ}E$ である。2間×3間の掘立柱建物。梁行3.9m、桁行8.0mで、身舎面積は31.2 m^2 である。

(20) 建物20

建物19とほぼ重なりながら検出された。南北方向に長軸をとり、主軸方位は $N4^{\circ}E$ である。2間×3間の掘立柱建物。梁行4.1m、桁行7.0mで、身舎面積は28.7 m^2 である。

(21) 建物21

南北方向に長軸をとり、主軸方位は $N10^{\circ}E$ である。2間×3間(1 α)の掘立柱建物。梁行は4.5m、桁行は7.4(+ α)mである。北側が調査区外に延びており、全形は不明である。

第54図35は柱穴から出土した内黒土器の椀で、外面一部ヘラミガキの痕跡が残る。

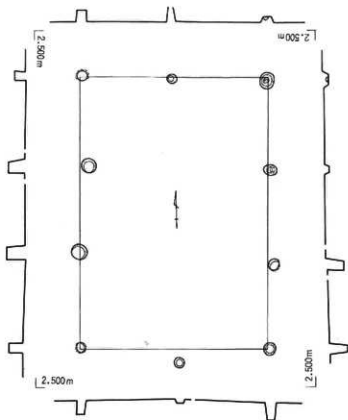
(22) 建物22

南北方向に長軸をとり、主軸方位は $N1^{\circ}W$ である。2間×3間の掘立柱建物。梁行3.5m、桁行7.9mで、身舎面積は27.65 m^2 である。

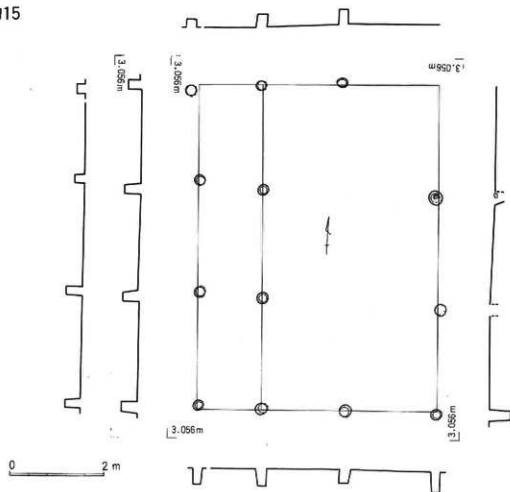
(23) 建物23

南北方向に長軸をとり、主軸方位は $N2^{\circ}W$ である。2間×2間の掘立柱建物。ただし、平面プランは長方形を呈する。梁行3.6m、桁行5.9mで、身舎面積は21.24 m^2 である。

建物14

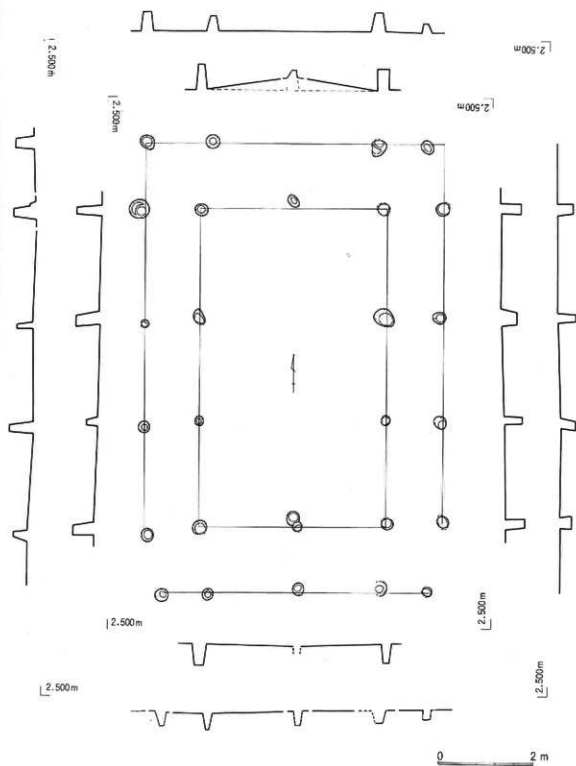


建物15



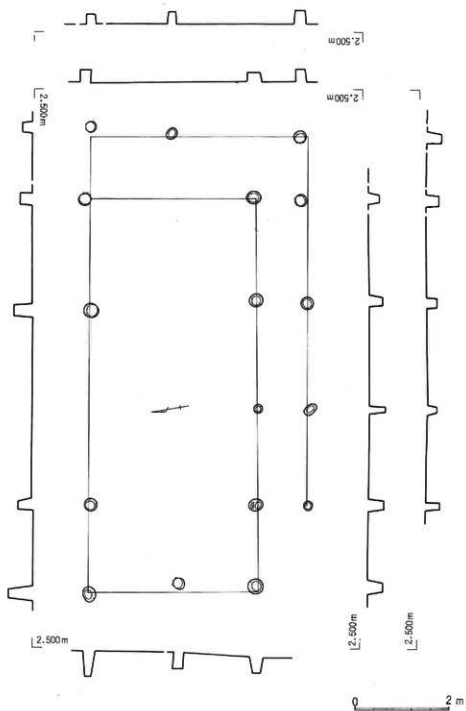
第48図 八坂本庄遺跡A区建物14・15

建物16



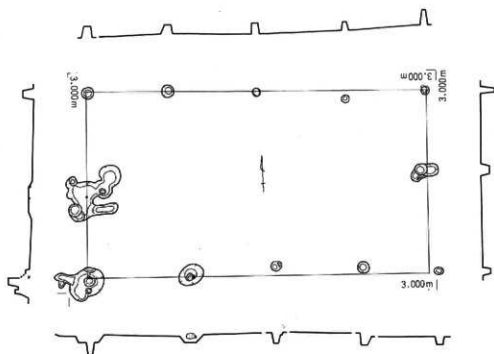
第49図 八坂本庄遺跡A区建物16

建物17

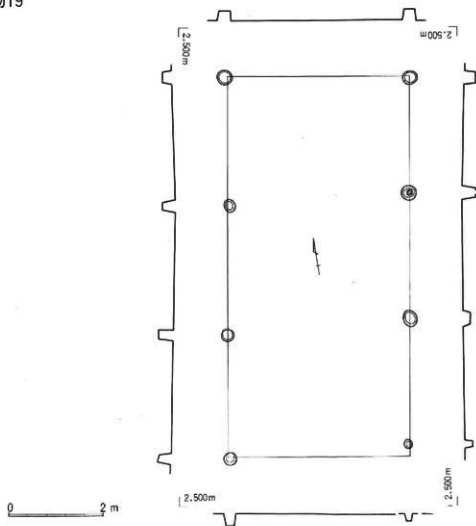


第50図 八坂本庄遺跡A区建物17

建物18

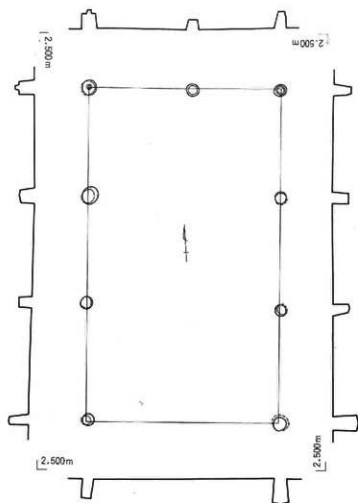


建物19

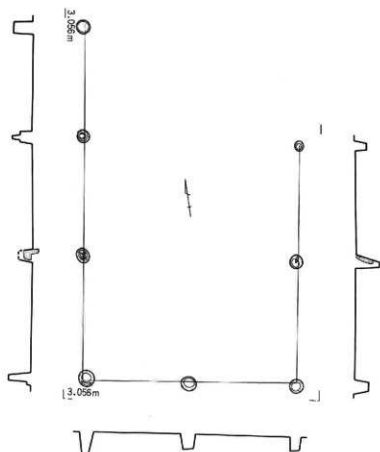


第51図 八坂本庄遺跡A区建物18・19

建物20

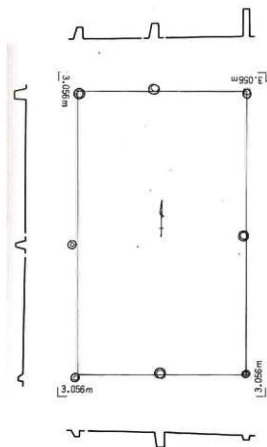


建物21

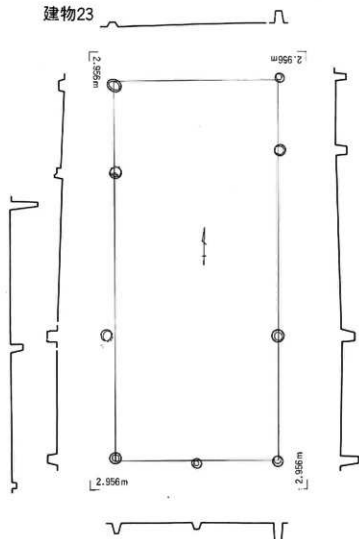


第52図 八坂本庄遺跡A区建物20・21

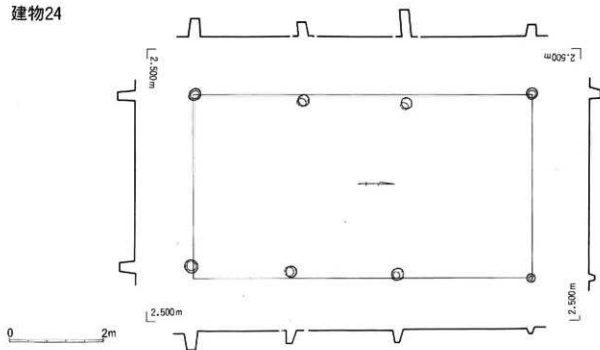
建物22



建物23



建物24



第53回 八坂本庄遺跡A区建物22~24

(24) 建物24

南北方向に長軸をとり、主軸方位は $N1^{\circ}W$ である。2間 \times 3間の掘立柱建物。梁行3.9m、桁行7.2mで、身舎面積は28.08 m^2 である。

(25) 建物25

調査区の南西に位置し、建物の密集からやや離れて存在する。南北方向に長軸をとり、主軸方位は $N5.5^{\circ}E$ である。2間 \times 5間の掘立柱建物。平面プランは長方形を呈する。梁行3.9m、桁行10.4mで、身舎面積は40.56 m^2 である。

第54図36は柱穴から出土した瓦縁の片断。

(26) 建物26

調査区の北西に位置し、建物の密集からはやや離れて存在する。南北方向に長軸をとり、主軸方位は $N4^{\circ}E$ である。2間 \times 4間の掘立柱建物。梁行4.6m、桁行7.4mで、身舎面積は34.04 m^2 である。

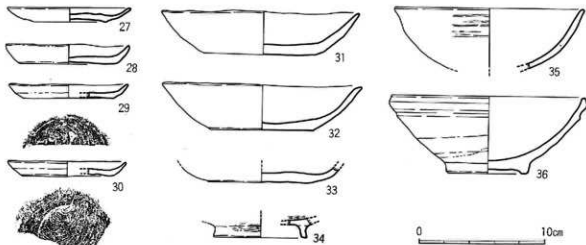
(27) 小 結

調査区の東側にある建物15と、19から24の計7棟はいずれも長軸を南北方向に取り、切り合いが認められるなど、一つのグループと考える。同様に建物1と3から6はいずれも長軸方向を東西方向に取り、庇を有する大型のものが多いなど、一つのグループとすることが出来る。その両グループに挟まれる形で小規模な建物が建っている、とすることが出来そうである。

また、建物25と建物3、4との間の遺構のほとんど無い空間は、B区にまたがる建物111があるものの、基本的に南北方向に貫通する空間となり、道の存在が推測される。さらに、遺物1と10があるものの、方形周溝墓と十麻草2基を結んだラインより北側は、15世紀から16世紀の遺構はあるものの、12世紀前後の遺構は少ない。ここは、集落の中でも特殊な空間として位置づけられる可能性がある。

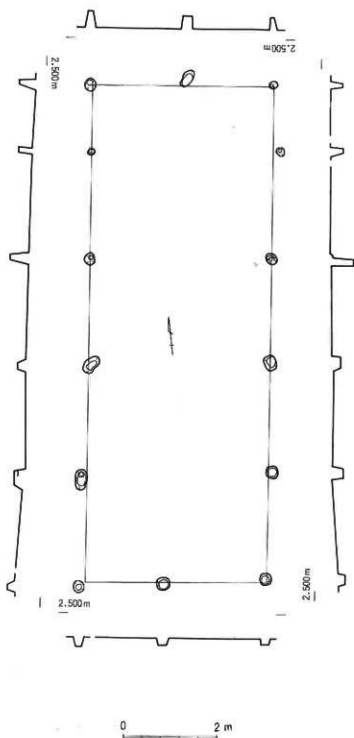
ところで、建物7と9、建物19と20などは、同一場所での建て替えを予想させる。また、建物2と3は軒を嵌めて並列しているが、やはり同時期には存在し得なかったであろう。このA区では全体的にも、少なくとも二時期の変遷が進める可能性がある。

また、建物5と6は一箇分ずれて並列しているが、間がちょうど半割分となっており、両者は棟を2箇所持ったひとつの建物になる可能性もある。今後の類例の増加を待って検討を加えたい。



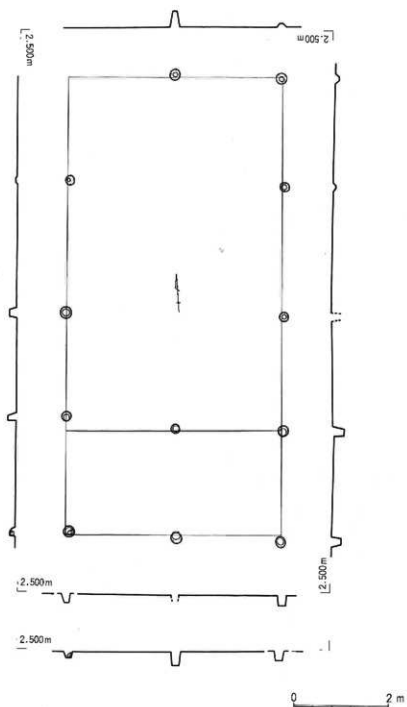
第54図 八坂本庄遺跡A区建物出土遺物

建物25



第55图 八坂本庄遺跡A区建物25

建物26



第56図 八坂本庄遺跡A区建物26

3. 墓

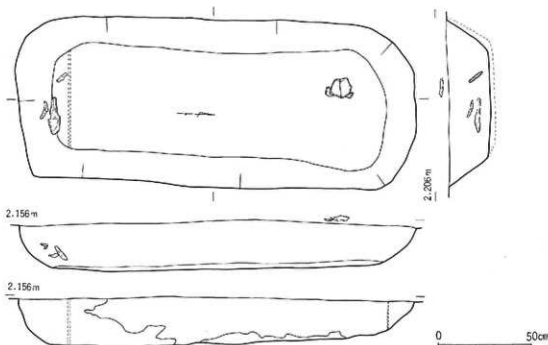
A区においては計3基の墓が確認された。遺物などからいずれも建物跡と同時期の所産である。2基は素掘りの土蔵の上葬墓で、1基は隅丸方形の周溝を有する火葬墓である。それぞれは離れて検出されており、墓地を形成するものではない。上葬墓2基はいずれかの建物（イエ）に直接関係するものである可能性があるが、方形周溝墓については、1基のみ特殊な埋葬形態であること、いずれの建物とも有機的な関連を見出しがたいことから、集落全体と大きく係わる人物が埋葬されていると考えたほうが良いのかもしれない。

以下、墓について個別に述べる。

(1) 土壌墓1

建物1の北側に位置する土壌墓で、長軸を南北方向にとる。土壌掘り方の長さは2.1m、幅は0.9m、現存する深さは25cmで、壁際は緩やかな傾斜を持って立ち上がっている。上層断面、および床面の観察から、木棺の痕跡が確認できた。その結果、掘り方の長さ2.1mのうち、中央部分1.68mが木棺であることがわかった。しかし、木棺の構造までは確認できなかった。

副葬遺物は、土壌北側の検出面で土師器椀1点（第58図37）が出土しており、土壌内部の木棺外の部分では鉄製品が3点出している。椀は底部に回転糸切り痕を残し、低い貼り付けの高台を有する。体部調整は横ナデで、ミガキは認められない。



第57図 八坂本庄遺跡A区土壌墓1

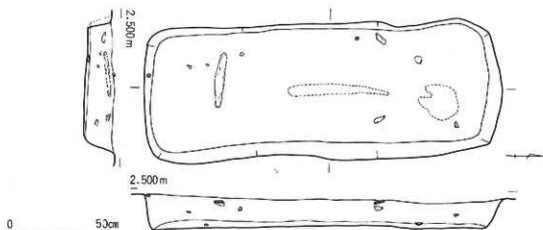


第58図 八坂本庄遺跡A区土壌墓1出土土器

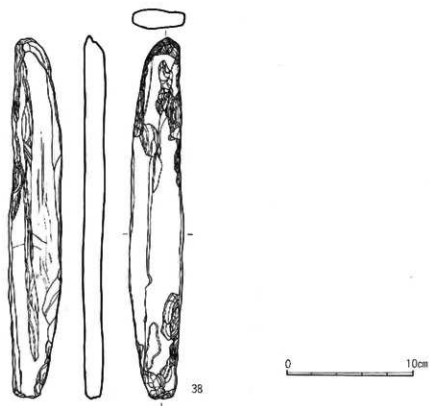
(2) 土墳墓 2

建物 3 と重なって検出された土塚墓で、長軸を南北方向にとり、頭位は磁北である。土塚掘り方の長さは1.88m、幅は0.7mである。現存する深さは20cmである。人骨は頭骸骨と考えられる痕跡が北側で、部位不明の骨片が中央付近で確認されたが、脆弱で取り上げるには至らなかった。

副葬遺物は無いが、釘と考えられる鉄製品が3点出している。



第59図 八坂本庄遺跡A区土塚墓 2



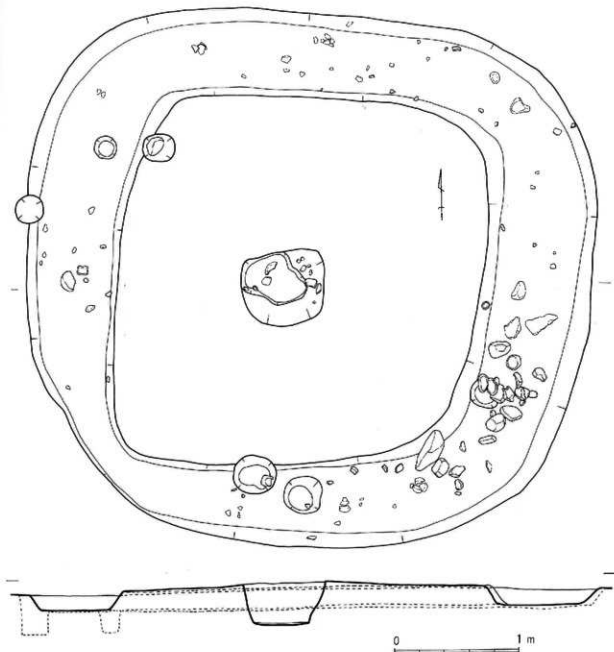
第60図 八坂本庄遺跡A区土塚墓 2 出土遺物

(3) 方形周溝墓

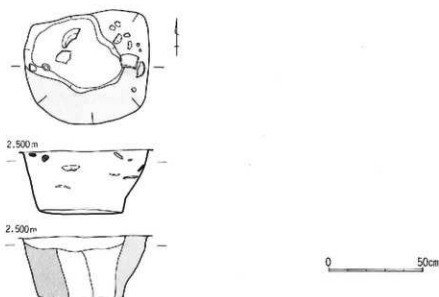
調査区北側で検出された洞丸方形の周溝の廻る火葬墓。周溝は幅0.6-0.9m、深さ15-20cmで、南東側で土師器が多く出土している。周溝で囲まれた内部の中央には60cm×70cmの略方形の上層がある(第62図)。深さ30cmで、中央部の直径30cmほどを除いて炭で充填されていた。中央部分の炭の無い部分からは焼骨と思われる微細な骨片が検出された。

中央部分には有機質の容器が埋納されていたものと考えられる。

第63図39から42が周溝内部から出土している。42は高い高台を有する土師器椀で、内面にヘラミガキを有する。39は土師器杯で、ゆるやかに内湾しながら立ち上がる体部を持つ。40と41は土師器小皿で、口径が10.0cmと9.4cmであり、大きい。



第61図 八坂本庄遺跡A区方形周溝墓



第62図 八坂本庄遺跡A区方形周溝墓主体部



第63図 八坂本庄遺跡A区方形周溝墓出土土器

(4) 小 結

八坂本庄遺跡は調査面積が約5,700㎡あり、建物跡も26棟あるが、中世前半の墓はA区の3箇所にあるに過ぎない。それは、A区の場合が集落全体の中で中心的人物の居住区であったことを示している。本遺跡のあり方と近似するあり方は、日田市宮の前遺跡や小迫辻原遺跡においても確認できる。すなわち、屋敷の区画は不明瞭であるが、集落の一角に方形周溝墓が造られ、その周辺には土塚墓が点在するのである。この点は、13世紀以降、明瞭になる屋敷区画とその内部の地蔵墓という一単位で考えられるあり方とやや趣を異にしている。もちろん、被葬者はある特定のイエの出身者であるとしても、同時に集落を一つの単位とした埋葬のされ方、といったものが存在した可能性も指摘できるであろう。

また、建物の小結でも触れたが、ほぼ等間隔で点在する方形周溝墓と土塚墓2基を結んだラインより北側には建物1と10以外には展開しない。建物1と10の厳密な時期が比定できないので可能性でしかないが、そのラインより北側の空間は、墓に伴う先祖祭祀を行う空間として確保されていたと考えられる。

4. 溝

調査区内で明確な溝は2条確認された。いずれもほぼ南北方向に伸びる水路で、底面レベルは北が高く、南が低いことから、北から南に水が流れていたことがわかる。集落の南側に展開する水田に水を供給する用水路と考えられる。しかし、溝1のほうは集落の東の限界を示すものである可能性もある。また、溝2の位置は現在でも水路として踏襲されている。

以下、個別に詳述する。

(1) 溝1

調査区東側で検出された。幅0.5m、現存する深さ5～8mで、南北方向に直線的に伸びる溝である。

出土遺物は第64図43から47である。43は瓦器棺で、底部は糸切り後断面方形のしっかりした高台を付ける。体部はやや内湾しながら立ち上がり、丁寧なナデが施される。44から46は土師器碗で、44には底部に糸切りの痕跡と体部内面のミガキが認められる。

これらは、12世紀後半代に位置づけられる。

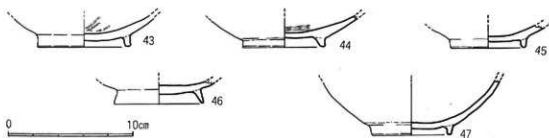
(2) 溝2

調査区を南北方向に貫く溝。幅は1.6～2.0m、深さは20cmほどで、底面レベルは北が高く南に行くにしたがって低くなる。調査区南側では1度掘りなおしの痕跡が認められる。堆積状況から水路であると考えられる。

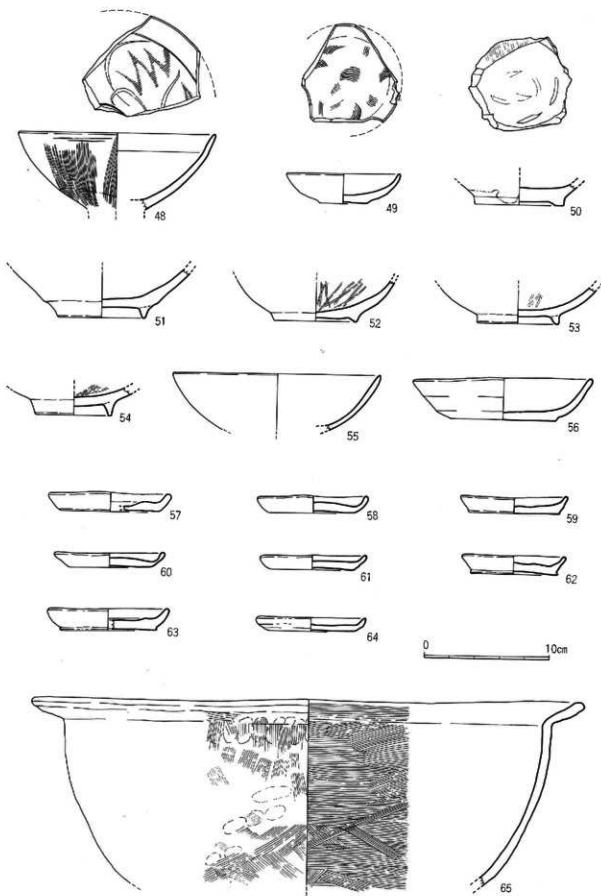
なお、この位置では施儀かなずれはあるものの、基本的に現代まで水路の位置が踏襲されており、断面で大きく2回の水路の掘削が認められる。いわゆる桑里の土駐時の位置に相当する。

溝出土遺物は第65図48から65である。48は同安窯系青磁碗で、内面には一条の沈線を廻らせ、その下位に櫛描文を施す。外面は轆轤を有する。49は青磁の皿、内湾して立ち上がる体部内面に櫛描文を施す。50は白磁碗で、幅広で低い高台を簡らだしている。内面には櫛描文が施されている。51と52は瓦器碗で、比較的しっかりとした高台が付される。53から55は土師器碗で、53と54には内面にヘラミガキが施されている。56は土師器坏、57から64は土師器小皿で口径は8.4cmから9.6cmで、やや内湾しながら立ち上がる体部を有する。65は土師質の土鍋である。

これらは、12世紀後半代に位置づけられる。



第64図 八坂本庄遺跡A区溝1出土土器



第65图 八坂本庄遺跡A区溝2出土土器

5. 水田跡

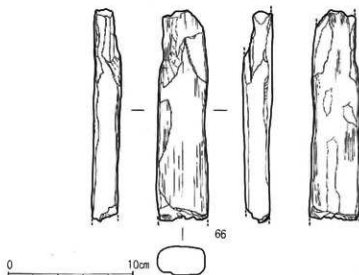
調査区南側の低地部には水田層が広がっている。このうち、明確な水田の立ち上がりを確認したのは調査区南東部で、人間や牛の足跡が明瞭に残されていた。遺物がなく時期は不明であるが、溝1を切っていることから、12世紀以降であることは確実である。

II. その他の遺物

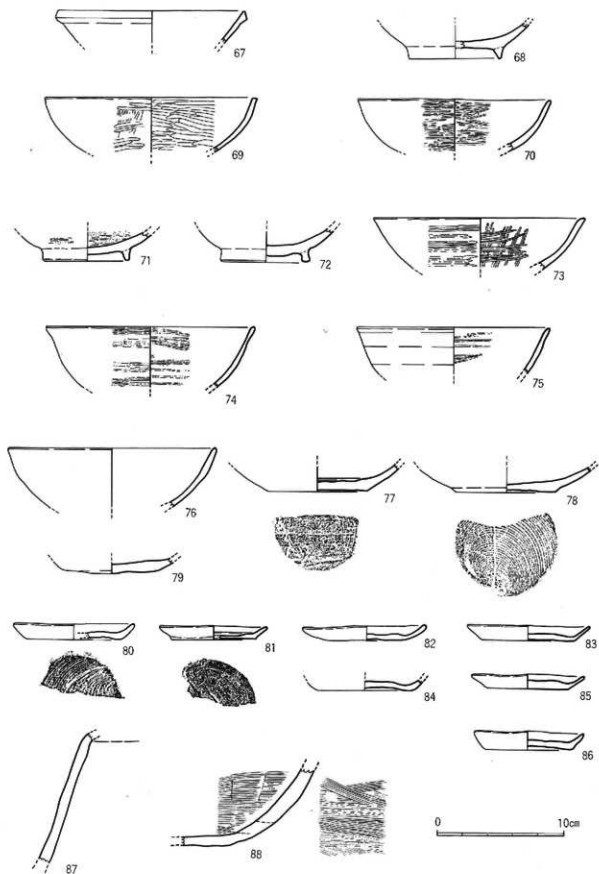
ここでは、建物を構成しないピットや包含層（旧表上）出土、および表面採集の遺物を紹介する。

第66-68図66から94はピット出土のもの。67は玉緑11緑の白磁碗である。68は瀬戸美濃系の碗で、内面体部に緑色の釉薬がかかる。外面露胎。69、70は内黒土器の碗。内外面ともヘラミガキが施される。71から76は土師器碗。71はしっかりした高い高台が付き、丁寧なヘラミガキが施される。76を除きヘラミガキが施される。77から79は土師器坏、80から86は土師器小皿である。87から91は土師質土器の雑器類。92は瓦質火鉢。底部近くで貼り付け突起が一条廻る。93はワイゴの羽目。94は製坯土器で、外面には指頭汗痕、内面には布目痕が残る。66は結晶片岩製の砥石。

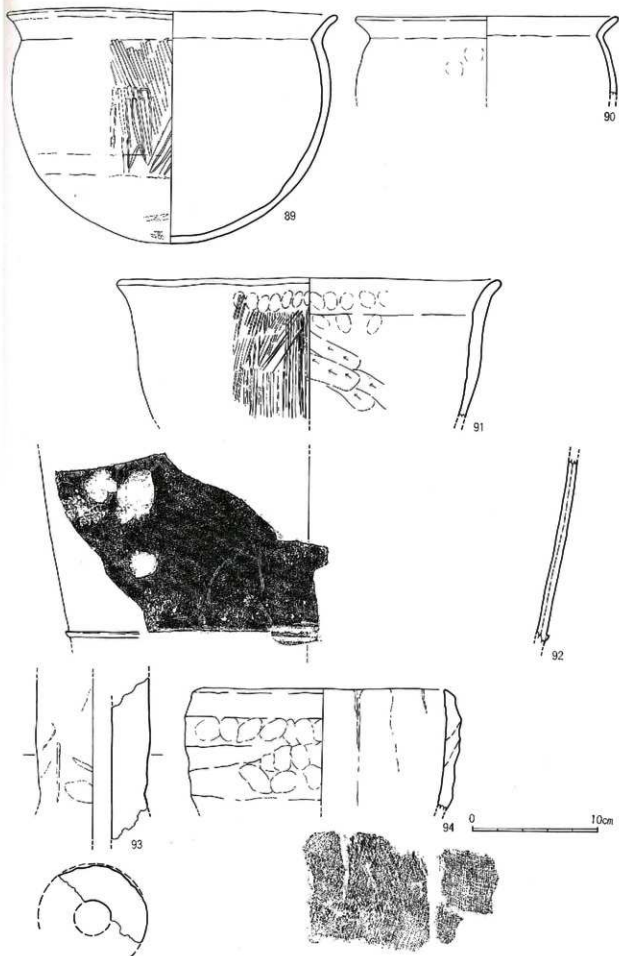
第69・70図95から131は包含層及び表採の資料である。95と96は白磁碗。幅広の低平な高台。内面に一条の沈線が廻る。97から99は瓦器碗。その内97と98は畿内系のもので、口縁部内側にヘラ状工具による沈線が一条廻る。内外面とも横方向の丁寧なヘラミガキが施される。99は断面三角形の高台が付く。100から107までは内黒土器。100は内外面に、102から106までは内面にヘラミガキが施される。108から118は土師器碗。119から122は土師器坏。123から128は土師器小皿。129は須恵器のこね鉢。130は同じく鉢の底部。131は素焼きの上鉢。縦方向に縄懸けの切込みがある。余体に指で押さえて成形した痕跡が残る。



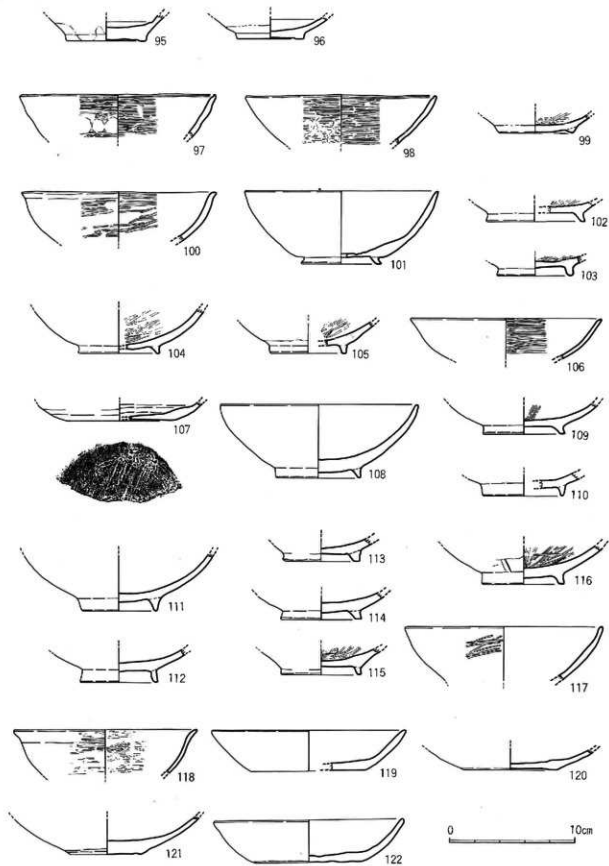
第66図 八坂本庄遺跡A区柱穴出土遺物(1)



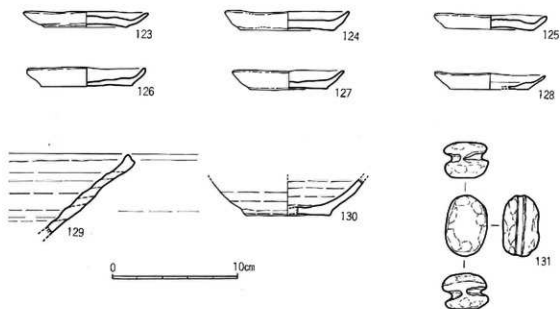
第67回 八坂本庄遺跡A区柱穴出土遺物(2)



第68图 八板本庄遺跡A区柱穴出土土器(3)



第69团 八坂本庄遺跡A区表探(1)



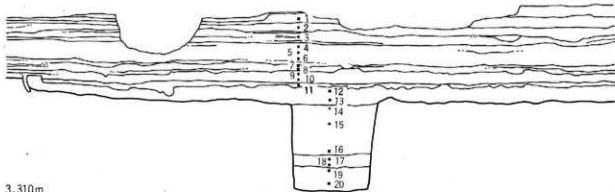
第70図 八坂本庄遺跡A区表探(2)

Ⅲ. まとめ

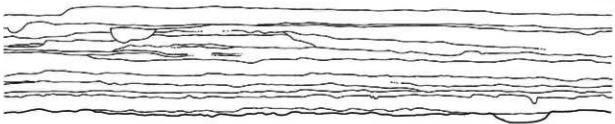
A調査区は八坂川改修工事に係わる発掘調査のうち、最も早くに調査を行った地区である。そのため、遺跡の調査方法について試行錯誤の連続であった。すなわち、当時大分県内においては水田遺跡の本格的な調査が少なかったこと、中世集落遺跡についても建物部分の調査のみで終了している調査がほとんどであったことなどから、大規模な開発行為に対応するには、若下の意識の変革が必要であったのである。

そのため当初に、水田を確認し面を調査することと、建物の無い部分も連続的に調査すること、の2点を確認し、調査に入ったのである。A区はその中でも建物が密集して検出され、その部分の調査に追われた関係から、南側半分に展開した水田について十分な調査が出来たとは言い難い結果になったことは、反省すべき点である。この点については、翌年度以降調査を行ったB区において実現しており、水田域の調査の成果についてはB区を参照願いたい。

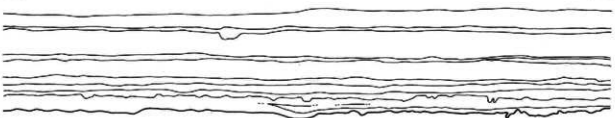
3.310m



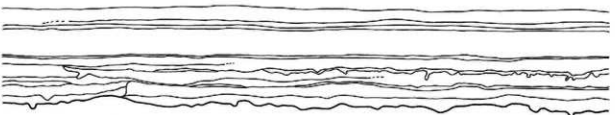
3.310m



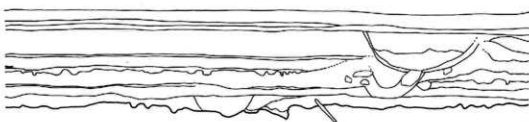
3.310m



3.310m



3.310m



0 2 m

第71图 八坂本庄遗址A区土层断面图

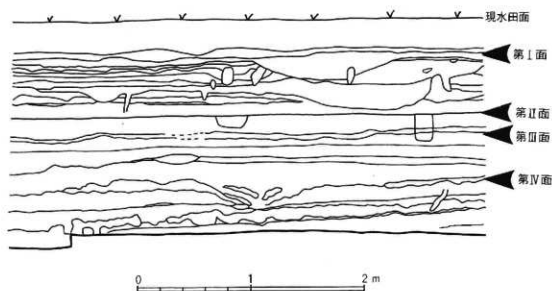
第3章 B区の調査

調査面積は約20,000㎡にも及ぶもので、平成9年8月～平成10年7月にかけて調査を行った。多くの遺構・遺物が確認された(付図1、付図2)が、なかには小区圃水田など数面にわたる水田遺構も含まれている。このようなまとまった水田遺構の調査は、この時点では大分県下初例である。

調査区の位置する地区は現在全面的に水田化されている。上層断面をみると幾層にも重なる水田層が確認でき、多い部分では、約2mの深さの間に20面ほどの水田面を認めることができる。この間には、一時的に集落が営まれる時期もある。集落は12世紀前半を中心とする比較的短い期間に形成されたもので、規模的にはかなり大規模なものである。このように集落が一時的に進出してくる段階もあるが、本遺跡に残された遺構の大部分を占めるのは水田遺構である。本遺跡を調査するということは、本地区の水田の変遷を調査するということにはかならない。

調査では、時間的な関係から幾層にも堆積する水田層などについて、トレンチによる上層調査のみの層と、面的に広げる層ということに分け調査を行った。前者の調査では、調査区の要所にトレンチを配し、全体的な水田層の変遷をとらえた。このトレンチ調査を先行的に行うことが、面的に広げる層の決定に大きな参考となった。一方、面的な調査は大きく4面で行われた(第72図)。第Ⅰ面は近世の面で、条里水田と近世村の広瀬村の状況を探る目的である。第Ⅱ面は11世紀後半～12世紀前半の大規模集落が進出してくる段階である。この遺跡において、唯一大集落が形成された時期で、当時の集落と水田面をいっしょに確認することができた。第Ⅲ面は古代の段階の条里水田であるが、面的には小範囲の検出にとどまった。第Ⅳ面は本遺跡における最古の水田層である。

以下、各遺構面の遺構・遺物の概要を述べる。



第72図 八坂本庄遺跡土層図と各遺構調査面

I 第I面の調査

第I面は、基本的に現在の水田層下である。現在、調査区の周辺は、戦前に行われた耕地整理事業のため古い地割が失われている。八坂川が大きく蛇行するこの付近の両岸には、条里地割が明瞭に残存していた。現在でも、八坂川右岸の新庄地区には条里地割が約20町ほどみられ、その方位はMN17°Wである。八坂本庄遺跡のある八坂川左岸は、八坂川沿いをのぞき全面的に耕地整理が行われており、往時の条里水田の姿をしのぶことはできない(第66図)。しかし、耕地整理事業前の旧字図(第74図)をみると、八坂川左岸側における条里地割の状況がよく分かる。方位は八坂川右岸の条里方位とほぼ同じで、両岸の条里地割が同一の地割計画のもとに整備されたことを物語っている。しかし、現在みる水田や旧字図にみる水田は、古代の水田そのものではないことは明らかで、これらが古代の条里地割といかなる関係をもつものかは興味ある問題である。幸い、本遺跡では八坂川の洪水により古い水田が良好な状態で埋没しており、層位的に遡り条里水田との関係をつかむことも可能であろう。

また、近世段階に本地区に存在したという広瀬村についての手がかりも、この遺構面の調査で得られるものと期待した。

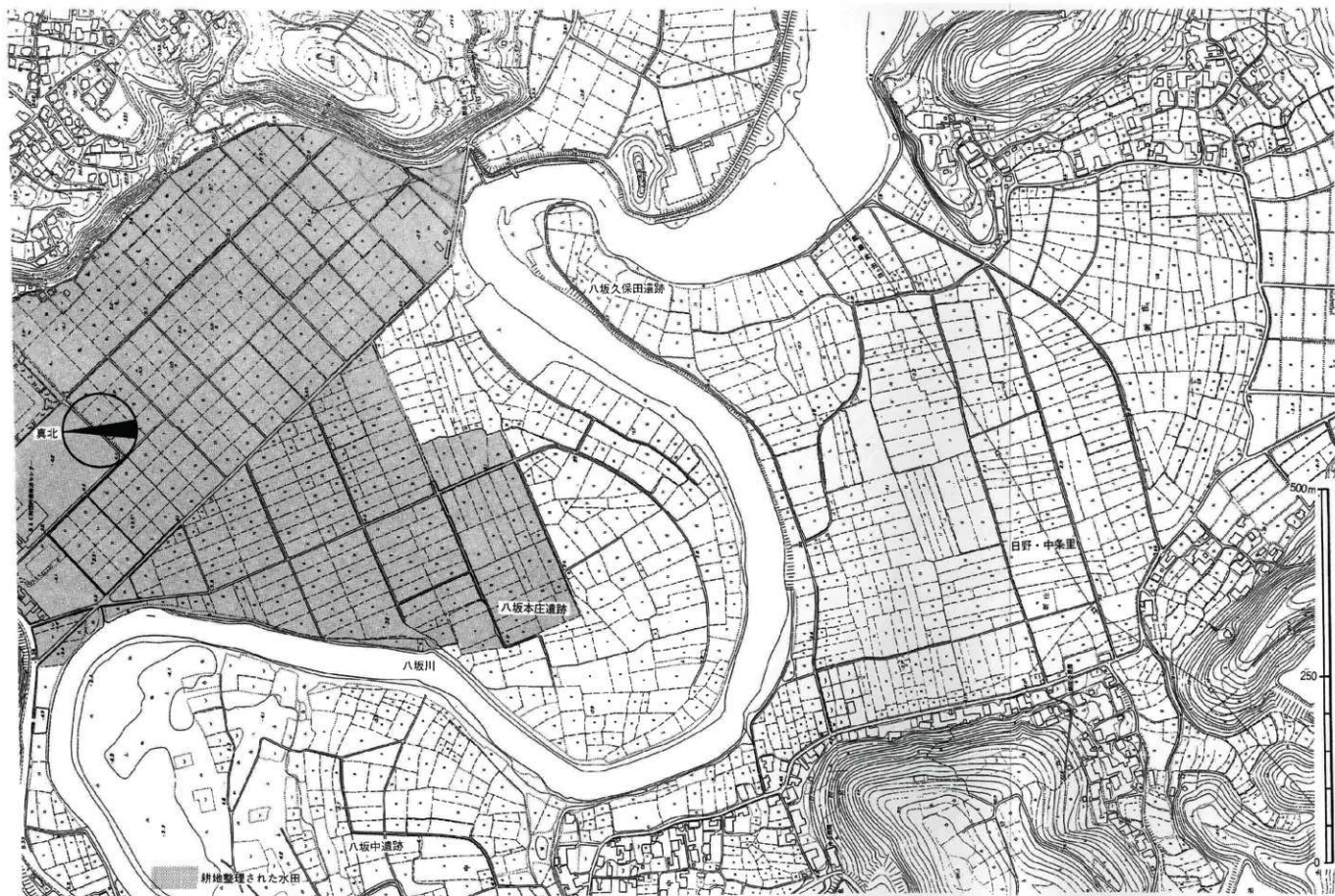
1 溝と条里地割

第I遺構面においては、溝3～溝9までの6本の溝を確認した(付図1)。

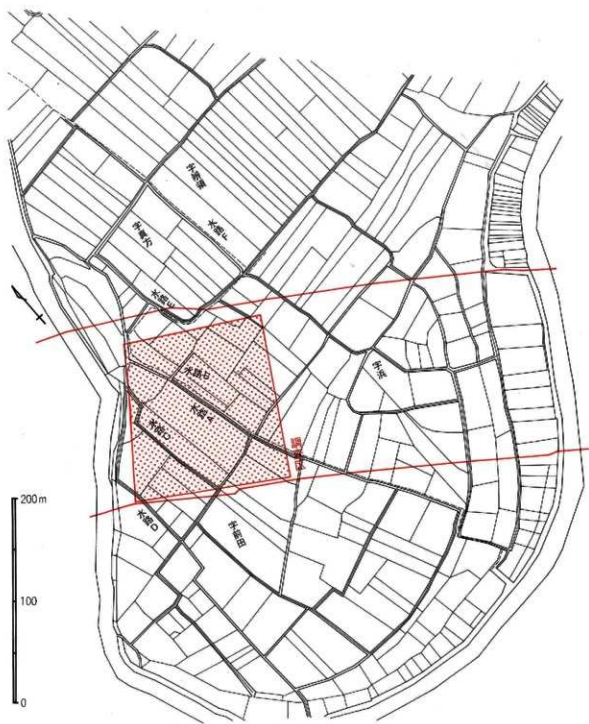
溝3は、調査区の北から南に向けて直線的にのびるもので、溝の方位は磁北から約15°西に振る。幅は0.8～2.5mを測り、ほぼ何位置における何度かの掘り直しが認められる。本溝は旧字図(第74図)における、字浜や宇前田の堺をなすライン上に位置する幹線水路Aに相当と思われる。条里地割は字貫方、宇瀬領までは比較的明瞭に残っているが、字浜や宇前田になると地割の乱れが目立ちはじめ、さらに南の八坂川沿いに近づくとも条里地割の面影はない。溝3の方位も、条里地割の方位のMN17°Wと大きく異なる。土層図(第75図)をみると、大きく2度の掘り直しが認められ、溝3a、溝3b、溝3cの順で新しくなる。溝3cが埋没したのは、戦前の耕地整理の際であるが、各々の溝の掘削時期については、溝内部の掘り下げを部分的に留めたことなどもあり明確にできなかった。ただ、土層でも明らかのように、溝3は少なくとも12世紀前半を中心とする集落の廃絶以降に築かれたことは明確である。ちなみに、12世紀前半の集落以前には、溝3と同じ位置に溝は確認することはできない。よって、溝3の初源は中世と考えられる。土層からみると、12世紀前半の遺物包含層から現地表面までは0.7～1.0mを測る。この間に水田層は少なくとも5～8枚がみられ、中世以降も八坂川の活発な河川活動により堆積が進み、そのつど水田が作り直されたことが分かる。溝についても同様な状況で作り直されたことが、先の土層図でもあきらかである。重要なことは、時に水田が埋没するような大洪水被害を被りながら、主要幹線水路の溝3はその位置を変えなかったことである。このことから、12世紀後半以降の約850年間については、大きな地割の変更はなかったものと理解できる。ただし、小規模な畦畔については、上層と下層で位置が異なったりすることが上層図から確認されており、細かな地割については時代により異同があったものと思われる。とは言え、旧字図にみる地形の主要な地割が、中世まで遡ることが確かめられたことは重要である。

溝4は、溝3から直角に北東方向に折れ、25m程続いたところで消滅する。幅0.5～1.4mで、直線的にのびる。規模的には溝3に比べやや劣る感もある。溝3から直角に分かれる部分には、杭跡などが認められ、水を分流するための堰上の施設があったものと思われる。この溝4は、旧字図にある水路Aから分かれる支線水路Bに相当するものであろう。

溝5は、溝3の西方に位置する。北東～南西に走った後に、一転して流れを変え南方向に直線的に続く。溝の方向は溝3とほぼ同じである。溝の幅は0.8～3.0mを測り、規模的には溝3に匹敵する。部分的な掘り下げに留まったが、溝3同様何度かの掘り直しがあったようである。溝5から分かれるものとして、溝の北端から南西方向に5mほど走るものがある。これは長く続かず、すぐに消滅する。溝5は旧字図にみられる水路Cに比定さ



第73図 八坂川周辺の桑里地割



第74図 八板本住遺跡周辺旧字図と調査区

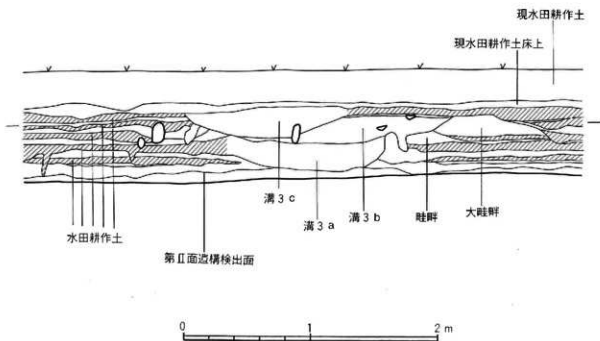
れるものと思われる。水路Cは水路Aの西側を走る幹線水路で、字前田の中を折れ曲がりながら南進する。溝5の北端から短く分かれる溝も、旧字図の水田地割に符号しており、幹線水路から水田に向かい分かれた支線であると思われる。溝5については、土層図を記録として残していないが、溝3と同様な状況が観察できることから、溝3と同じように中世まで通りうる溝であると理解される。

溝6は、溝5から直交方向に分かれるものである。約25m東進した後に消滅する。溝6は溝5から分かれるわけであるが、分岐点の状況をよくみると、溝6を溝5が切っている。溝5は坡度の掘り直しがあり、溝5の最も新しい段階には溝6が伴わず、その前段階の溝5に伴っていたものと理解される。旧字図をみてみても水路Cの東側の水田は南北に長いものとなっている。よって、旧字図以前に、水路C東側の水田が水路により2枚に分けられていた段階があったことが分かる。

溝7は、溝5の西側を南北方向に走るものであるが、溝5とは方向が異なる。溝の規模としては溝6にちかく、支線の水路であったと思われる。旧字図によれば、溝7に相当する位置には水路Cから八坂川にいたる広い水田がみられる。溝7から考えれば、旧字図以前に、この水田がいくつかに分けられていた段階があったものと思われる。

溝8、溝9は溝7のさらに西方にある。溝8は、東西方向にのびたものが、直角に折れ南進する。また、溝9は溝5などと同様な方位をとり、南北方向にのびる。2本の溝は切り合っており、溝9が溝8を切る。溝9の西側には溝と並ぶように畦畔と思われるものがみられる。溝9は、旧字図の水路Dに相当するものと思われる。しかし、溝8に相当する位置には水路はみられない。溝8は溝9よりも古いことが確認されており、旧字図以前の段階には、字図と異なる水路の流れがあったことが分かる。

以上まとめると、①字派や字前田には、宇真方や字術領でみられるような整然とした条里地割は及ばない。②調査区内の大枠の地割は12世紀前半の中世に成立したもので、以後基本的に踏襲され、戦前の耕地整理が行われるまで維持される。③内部の細かな地割は時代により変化したものと思われる。



第75図 八坂本庄遺跡B区溝3土層図

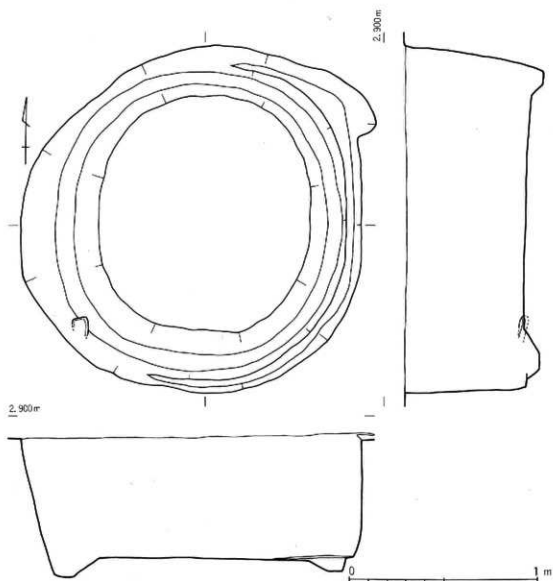
2 土 壙

(1) 土 壙24

土壙24(第76図)は、溝4に沿った位置にある。溝4のすぐ南側に位置し、その間はわずか0.8mである。また、溝4と溝5の分岐点からは約6mである。

土壙は平面プラン円形を呈し、径約1.8m、深さ0.65-0.75mを測る。床面の壁際は輪状に深くなっており、その痕跡は残らないが、木枠が据えてあったものと想定される。木枠は、径約1.5mほどの円形を呈するものであったと思われる。土壙内からの遺物がないため、時期は不明であるが近世以降の所産であろう。

土壙の周辺に同時代の屋敷遺構などがまったく存在しないことから、本土壙は水田に伴う遊構であると考えられる。その特徴として、以下のような点があげられる。①水路と思われる溝に近い位置にある。②木枠が置かれていたことから、何かを溜める施設であった可能性が高い。このような特徴を有する土壙は、段丘上や自然堤防上など、本来的に水との縁が薄く長距離の水路による灌漑が行われている水田でみることができる(後藤一重「農業用井戸について―農業用灌漑施設の一例―」『垣尾条里遺跡』安岐町教育委員会 2001)。これらのなかには、



第76図 八坂本庄遺跡B区土壙24

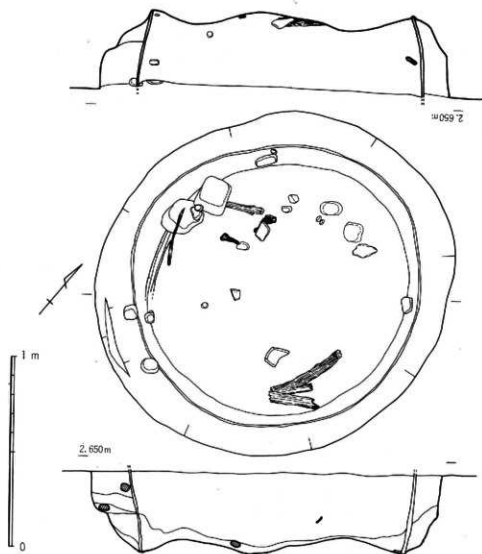
確實に溝とつながるものもあり、水田灌溉用水と密接に係わるものであることが分かる。また、井戸状を呈するもの、水が自噴するほどの深さをもたず、むしろ溜める機能が主体となる溜め井的なものと推定される。土壌24についても農業用灌溉施設で、水路灌溉を補完する溜め井であった可能性が高い。

(2) 土 壌25

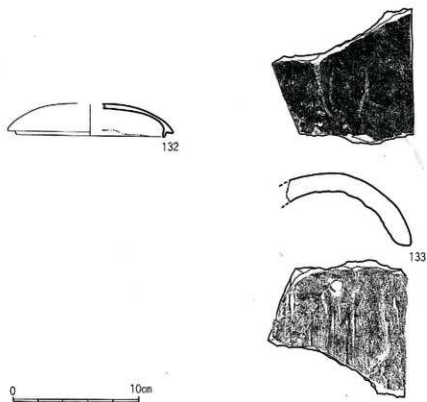
土壌25(第77図)は、溝4が溝3から直角に折れ東進する部分の、溝4とは反対側に位置する。溝3からは約2m離れる。土壌は円形プランを呈するもので、径1.8~1.9mを測る。深さは0.3~0.4mで、床面は平坦ではない。また、床面の壁際は輪状に深くなる。土壌内には、壁際の深い部分に対応するように木杵が残存していた。木杵は円形にまわり、その径は1.4~1.5mである。厚さは1、2cmを測り、床面から検出面まで直立するのを、かろうじて確認することができる。しかし、床面には板の痕跡がなく、底板はなかったものと思われる。本土壌の性格は土壌24と同じく、農業用灌溉施設であろう。

・出土遺物

出土遺物(第78図)のうち、132は肥前磁器の蓋である。端部を除き内外面に白色釉が施釉される。18世紀以降のものであろう。133は丸瓦である。外面は銀灰色を呈する。近世以降のものであろう。



第77図 八坂本庄遺跡B区土壌25



第78図 八坂本庄遺跡B区土坑25出土土器

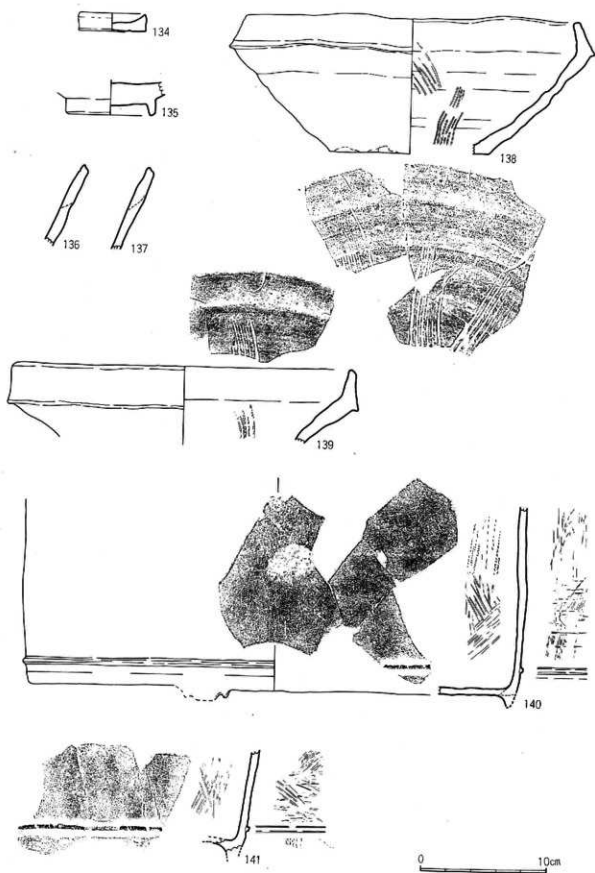
(3) 土 坑26

土坑26(第80図)は、溝4が途切れる位置にある。

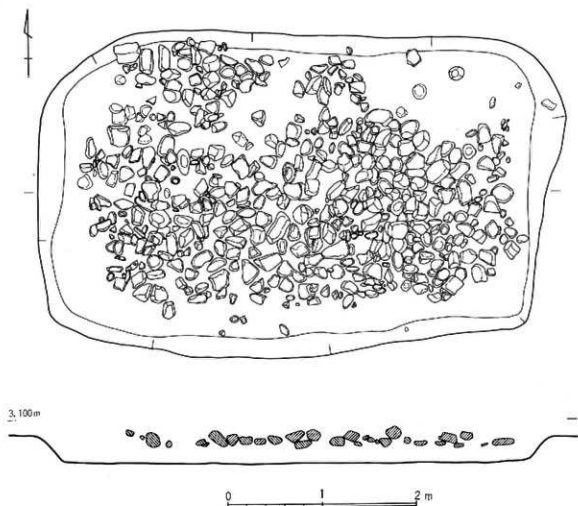
土坑は長方形を呈し、東西方向に長い。その規模は長さ5.2~5.6m、幅3.1~3.4mである。かなり大型のものであるが、土坑内には0.05~0.3mの礫が多数みられる。しかし、礫は土坑の上面ばかりに集中しており、堆積がある程度進行した状況で一括廃棄されたものであろう。土坑内の遺物から、時期は15~16世紀に比定される。土坑の北側には柱穴がみられる。柱穴自体の時期は不明であるが、この柱穴が土坑と同時期ならば、本土坑が塚敷に伴うものである可能性が高くなる。しかし、土坑の方向をみると溝4と同様な方位をとっており、溝と密接な関係があったとすることもできる。後者の立場に立った場合、溝4との位置関係などから農業灌溉用の水溜め施設と考えられる。水路からの余り水や雨水を溜めたものであろう。先の土坑24や土坑25とは、基本的に同じ機能を有するものと理解できるが、本遺構は形状から溜池と呼称する。

・出土遺物

出土遺物(第79図)のうち、134は土師質土器小皿である。体部は底部から垂直に短く引き上げる。15、16世紀のものか、135は青磁碗底部である。厚みをもつもので、15、16世紀にみられるタイプである。136、137は土



第79图 八坂本庄遗址B区土壕26出土土器

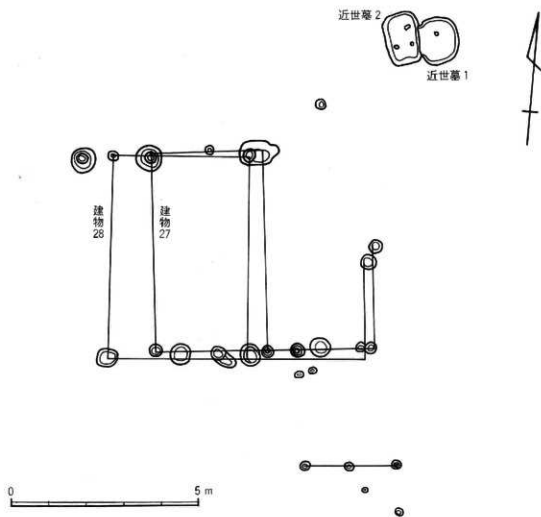


第80図 八坂本庄遺跡B区土壇26

跡である。ともに丸底気味の底部形態をなすものと思われる。外面にはヘラケズリがみられず、少なくとも16世紀には下らない。138、139は備前焼掃鉢である。138は口縁部が内傾するもので、外面に凹線などはみられない。また、口縁部上面は内傾しない。摺目は6本単位である。139は口縁直立するものであるが、端部が丸くおさまられ、口縁外面には凹線などはみられない。摺目は6本単位か、両者とも15世紀代に比定できるものである。140、141は瓦質土器火鉢である。底部には、切り込みのはいった脚が付される。

3 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、溝6の南約30mで2棟が確認された。2棟の建物はほぼ同位置で建て替えの関係にあり、1時期には1棟のみが存在したものと思われる。近世段階には、本遺跡が位置する八坂川左岸に広瀬村があったと云う。現在、この周辺に宅地はまったくみられないが、八坂川に近い位置に近世墓地が営まれていることから村が存在したことは確実である。しかし、洪水常習地であるこの場所は、屋敷地の立地条件としては必ずしも良好とは言えない。今回検出された建物は小規模であるため、屋敷に係わるものではなく、出作り小庵的なものかとも考えた。だが、近接して墓も形成されていることから、完結したひとつの屋敷地であるとした方が良さそうである。その場合、本屋敷のもつ特徴は以下の通りである。①建物が小規模で、かつ1棟のみからなっている。②



第81図 八坂本庄遺跡B区第1面検出建物と近世墓

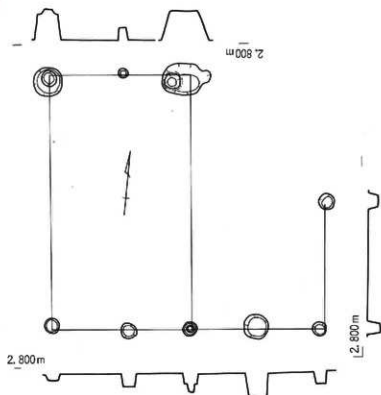
屋敷の区画施設をもたない。③井戸をもたない。④墓についても墓碑を立てない。⑤出土遺物が少ない。このような点から、本屋敷の主は村内でも、最も低い階層の人であった可能性が高い。また、存続時期については建物が1度建て替えられただけであることから、20～30年の極めて短期間であったと思われる。

(1) 建物27

建物27(第82F④)はN6°Wに主軸方位をもつもので、付近を走る幹線水路である溝3、溝4、溝5などとおむね近似する方位である。これは、本建物が周辺的地割に強く影響を受け建てられたことを物語っている。

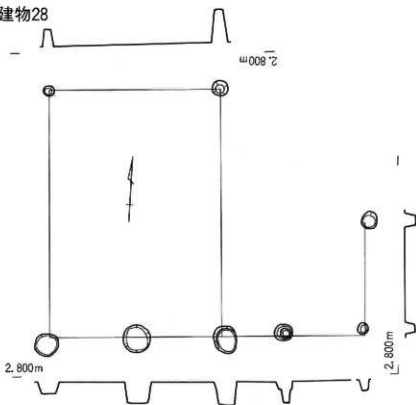
建物の柱穴配置を見ると、南北に長い長方形部分の東側にL字状に柱穴が配置された状況である。長方形の部分だけ考えると、梁行2間、桁行1間で、その面積は15.9㎡を測る。平均的な建物から比べると、かなり小規模である。上層構造はともかくとして、東側に付くL字状の部分の面積は7.28㎡しかなく、あわせても平均には及ばない。本建物は柱穴配置だけから見ると、通常あまりみられないものである。近世の屋敷を構成する建物は、多くの場合複数からなる。それは居住用、倉庫、肥料小屋など、各々が各用途に応じたものとなる。本屋敷では建物が1棟しかないことから、長方形部分が居住部分、L字状部分が倉庫などの機能をもつものであったことも考えられる。

建物27



第82図 八坂本庄遺跡B区建物27

建物28



第83図 八坂本庄遺跡B区建物28

(2) 建物28

建物28(第83回)は、位置をやや西に移動するものの、建物27に重なるように建てられる。建物の主軸方位もN5°Wと、建物27とほぼ同じである。建物を構成する柱穴のうち、柱穴1が建物27の同じ位置の柱穴を切っており、建物28の方が新しいことが分かる。

建物の柱穴配置は、建物27とまったく同じである。長方形の部分は梁行2間、桁行1間であるが、北側の梁行は中間の柱穴がない、その面積は18.72㎡で、建物27に比べて若干規模が大きくなっているが、平均的な建物と比べるとかなり劣る。また、東側に付くL字状の部分の面積は7.2㎡で、建物27とほぼ同じである。

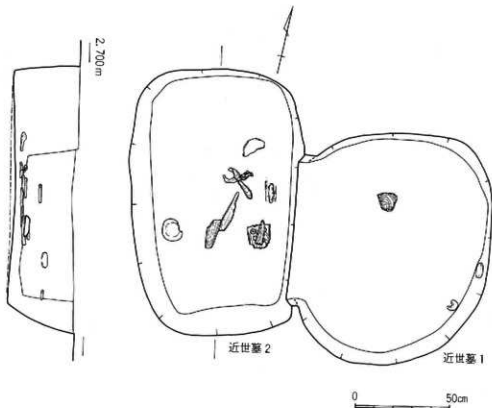
4 墓

(1) 近世墓1

近世墓1(第84回)は、建物27、建物28から北東に数mのところの位置する。近世墓1と近世墓2が接するように芯ぶが、近世墓1が近世墓2をわずかに切る。

墓の平面形は円形を呈し、径1.1~1.2mを測る。深さは検出面から0.3mである。墓内に人骨は残存しておらず、墓としての確証に欠けるが、確實に墓と認定できる近世墓2と隣接していることから墓と考えた。近世墓1はわずかに近世墓2を切るが、基本的に近世墓2の位置を意識して至近距離に並べて営まれている。石製の墓碑ではなく、木製の墓標を立てられていたものであろう。

墓内の掘り下げは、土層観察を行いながら慎重に行ったが、木棺などの痕跡は確認できなかった。また、鉄釘なども検出されていない。副葬品と思われるものとして、赤漆片が検出された。漆器碗などが納められていたものと思われるが、ほとんど原形をとどめないものであった。



第84回 八坂本庄遺跡B区近世墓1 近世墓2

(2) 近世墓 2

近世墓 2 (第84図) は、近世墓 1 の西隣に位置する。わずかに近世墓 1 に切られるが、並立するように造営されている。

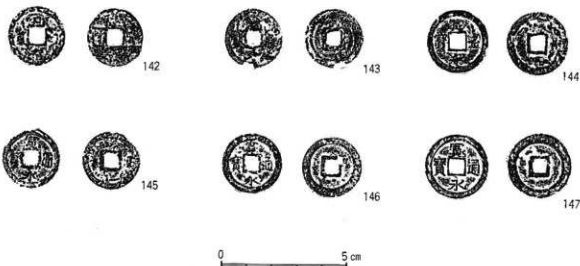
墓の平面形は長方形で、凹形を呈する近世墓 1 とは大きく異なる。長軸を南北にとるもので、長さ 1.4m、幅 0.95m を測る。深さは検出面から 0.35m で、床面は平坦である。墓内には人骨の一部がかりうじて残存していたが、その状態は良くない。頭骨の一部及び歯が、中央やや北寄りの位置から検出された。これから、頸位を北にもつものであることが分かる。他の骨については断片的で、部位などは不明である。ただ、全体の位置関係から、体を強く折り曲げた体位であったことが想像される。

副葬品としては、中央からやや南の東壁近くに六道銭と木製の数珠玉が検出された。六道銭と思われるものは銭貨 6 枚で、いずれも「寛永通寶」である。木製数珠玉は 1 個のみ確認できた。銭に接するようであったこの 1 個体のみ残存し、他は残らなかったものか。また、これらとは反対の西側の壁近くからは漆器柄が検出された。残存状態は良くなく、赤漆の皮膜がかりうじて残るのみであった。

以上のほか、人骨や副葬品の下から板材がわずかに検出された。これらはその状況から、木棺材と推定される。しかし、鉄釘はまったく確認されていないことから、釘を使用しない棺であったと思われる。

・出土遺物

142~147 (第85図) は「寛永通寶」である。このうち 143 は寛永 13 年 (1636) - 万治 2 年 (1659) の間に鑄造された古寛永と思われる。また、144~147 は元禄 10 年 (1697) 以降に鑄造された新寛永である。142 については、残存状態が悪くどちらか区別ができない。148 (第86図) は、木製数珠である。平面形は楕円形を呈し、径 0.55~0.8cm、厚さ 0.45cm を測る。



第85図 八坂本庄遺跡B区近世墓2出土銭貨



第86図 八坂本庄遺跡B区近世墓2出土木製数珠

II 第Ⅱ面の調査

本遺跡では水田層の厚い堆積がみられるが、そのなかにおいて、唯一広範囲から柱穴などの集落遺構が確認された面である。現地表面から1m内外の深さに、茶褐色七層がみられる。この層には12世紀前半前後の遺物が包含されており、層厚は数～20cmを測る。この層の下面が遺構検出面で、遺構はほぼ調査区全域に広がっていた。

調査では、調査区全域をこの層まで下げて遺構検出を行った。その結果、多くの建物や溝など検出するとともに、当時の微地形も明らかにすることができた(付図2)。現在、本遺跡のある周辺はほぼ平坦で、顕著な凹凸はみられない。しかし、第Ⅱ面では調査区の北から南にむけてかなり下がる状況が確認できた。調査区の南部は広い意味での山河道で、その埋積がそれほど進行しておらず、現在見るよりも凹凸がはっきりしている。北側の高い部分には集落が展開し、南側の低い部分では水田が広がることが確認された。このように、一時期における集落と水田を一体となって検出することができたのは大きな成果である。

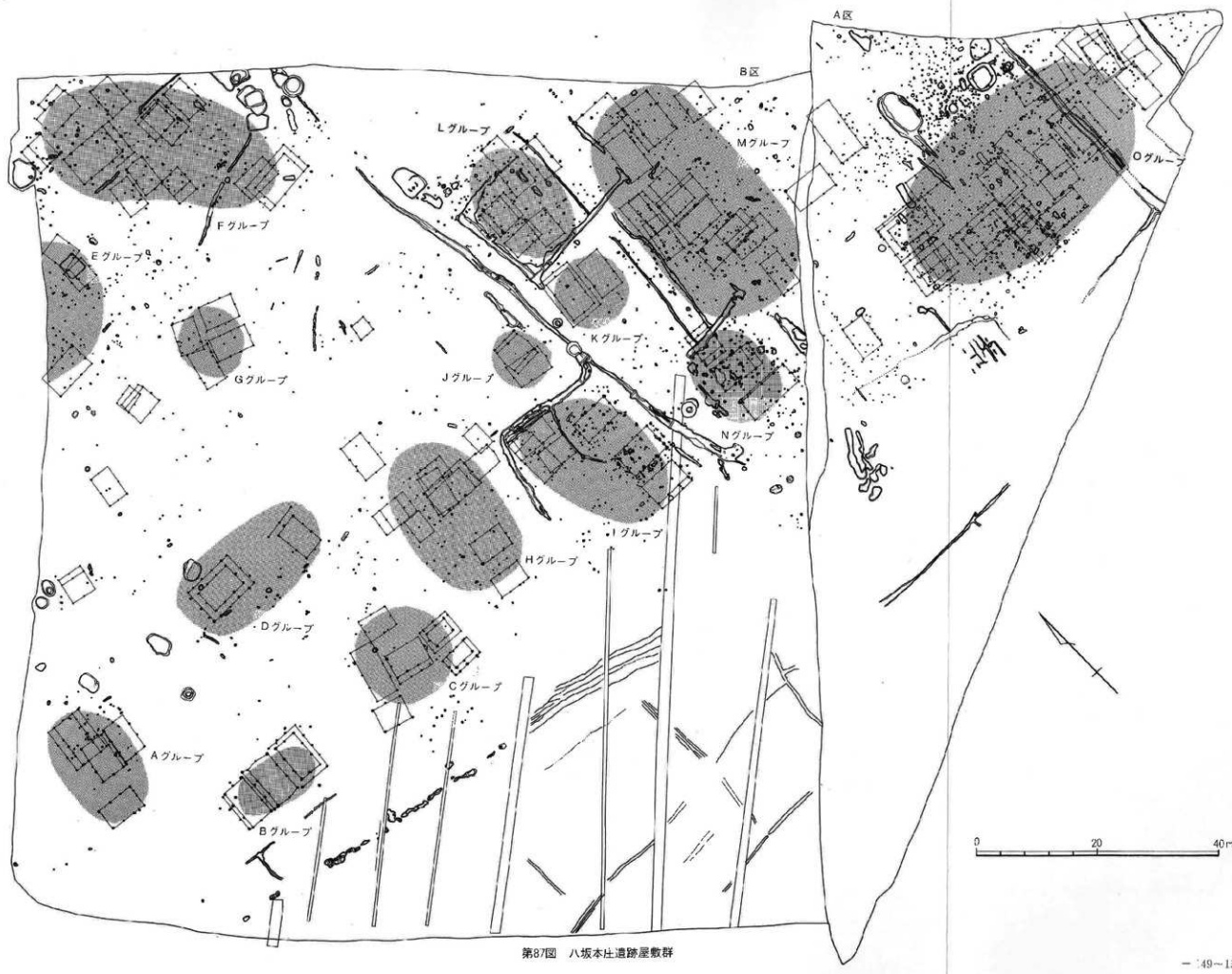
集落についても、①水田として利用されてきた土地に、何故突然に大規模な集落が現れるのか。②そして、その集落が比較的短い期間で姿を消し、どうして再び水田化するのか。といった問題点がみえてくる。これらは、本地域の歴史を解明するうえに重要なポイントになるであろうと考え、調査に入った。

1 掘立柱建物跡

第Ⅱ面において掘立柱建物跡は、A区で26棟、B区で83棟の併せて109棟が確認された。これらは調査区の北半に展開しているが、建物規模や広がりからみて、いわゆる一般的な集落よりも上位に位置付けることができる。集落の広がりについて確認すると、南側は低くなり水田が展開することから、集落の南の限界は明らかである。東側は試掘調査で低湿地が広がることが確かめられており、ほぼ調査区の端が集落の東端を示しているものと思われる。西側は、調査区から30mで現在の八取川にいたる。安全対策からのこの間は調査を行っておらず、実態は不明であるが、地形的にみて川近くまでは集落がのびていた可能性は高い。北側については圏場整備事業に伴い杵築市教育委員会の調査が実施されている。それによれば、調査区に隣接する部分では柱穴など遺構が確認されるが、その状況は北に行くにつれ急速に変化をとげる。すなわち、北側にしばらく行くと、青灰色粘土層の堆積がみられるようになり、集落がのる微高地がおわる。よって、北側への集落の広がりは、最大でも調査区からあと30、30mである。以上から、第Ⅱ面の集落の範囲はおおよそ南北80～120m、東西250mほどと考えられる。このうち7～8割は今回の調査区内にはいっており、集落の大半の状況は押さえられたことになる。

以上のように広い範囲に集落はみられるが、細かくみると建物が溝により区画されたり、明らかに数棟のグループを構成するなど、いくつかの単位があることが読み取れる。これらの単位は、非常に明瞭なものや漠然としたものなどがあるが、庶敷と称しても差し支えないと考えられる。後述するように、時間的にも12世紀前半を中心とする比較的短い期間のものであることから、ほぼ1時期における屋敷群の集合体である集落が明らかになったことになる。

建物群の単位については、やや漠然としたものまで含めて15グループほどを数える(第87図)。これらを屋敷地の区画でみていくと、溝による区画をもつもの、部分的な溝による区画をもつもの、区画施設をまったくもないもの、などの違いがある。建物でみると、庇付きなどの大型建物が主体となり構成されるもの、庇付きの建物を含むもの、庇付きの建物を含まないものなどに分けられる。さらに、付随的な要素でみてみると、屋敷庭と云えそうな築を屋敷の近辺にもつものもたないものがある。以上のように各々の単位は、内容的にさらなる検討が必要であるし、細分も考えられるが、ここでは先のグループにそって掘立柱建物の説明を行う。



第87回 八坂本址遺跡屋敷群

表1 八坂本庄遺跡掘立建物跡計測表

建物	主軸方位	梁行(m)	桁行(m)	身舎面積(m ²)
建物1	N85° W	東側 3.5 西側 1.7+1.8(北から)	北側 2.0+1.9+2.0(西から) 南側 2.0+1.9+2.0(西から)	20.65
建物2	N8° E	北側 1.7+1.7(西から) 南側 1.7+1.8(西から)	東側 1.6+1.8+2.1+1.9+1.7(北から) 西側 1.5+2.0+2.1+1.9+1.6(北から)	30.94
建物3	N87° W	東側 2.1+1.8(北から) 南側 2.1+1.8(北から) 東側内側 1.2+2.0+1.5(北から) 東側内側 1.2+2.1+1.8+1.2(北から) 西側内側 1.8+3.4(北から) 西側内側 1.5+2.1+1.7+1.3(北から)	北側 2.3+2.0+2.4(西から) 南側 2.3+2.2+2.2(西から) 北側内側 1.3+2.3+2.1+2.4(西から) 北側内側 1.4+2.4+2.0+2.2+1.9(西から) 南側内側 1.5+2.3+2.0+2.3+1.4(西から)	26.13
建物4	N87° W	東側 1.9+2.1(北から) 西側 2.0+2.0(北から) 西側底 1.1+2.0+2.0+1.2(北から) 南側底 2.1+3.0(北から)	北側 2.1+2.2+1.8(西から) 南側 2.2+1.9+2.1(西から) 北側底 1.5+4.1+2.1+1.8(西から) 南側底 1.2+2.1+2.0+1.5(西から)	24.8
建物5	N88° E	東側 1.7+1.8(北から) 西側 1.8+1.7(北から) 東側底 1.4+1.8+1.7+1.2(北から) 西側底 1.3+1.3+2.0+1.1(北から)	北側 2.5+2.3+2.4(西から) 南側 2.1+2.7+2.4(西から) 北側底 1.4+2.3+2.3+2.3+1.4(西から) 南側底 1.3+2.5+2.4+2.3+1.3(西から)	29.2
建物6	N88° E	東側 1.9+1.9(北から) 西側 1.9+1.8(北から) 東側底 --+1.9+1.9+1.3(北から) 西側底 2.0+1.8+1.4(北から)	北側 2.4+2.5+2.5(西から) 南側 2.6+2.4+2.4(西から) 北側底 --+1.5+2.5+2.5+--(西から) 南側底 1.8+2.7+2.2+2.4+1.3(西から)	28.12
建物7	N5° W	北側 0.7(底)+1.8+1.8(西から) 南側 0.6(底)+1.7+1.0(西から) 南側底 1.7+2.0(西から)	東側 2.3+2.5+2.3+0.7(底)(北から) 西側 2.3+2.5+2.3+0.7(底)(北から)	26.27
建物8	N25° W	北側 1.9+1.8(西から) 南側 2.0+1.7(西から)	東側 2.2+1.9(北から) 西側 2.2+1.9(北から)	15.17
建物9	N2° W	北側 1.9+2.1(西から) 南側 1.9+2.1(西から)	東側 2.2+2.0+2.2(北から) 西側 2.4+1.9+2.1(北から)	25.6
建物10	N89.5° E	東側 2.2+2.3(北から) 西側 4.4	北側 1.8+1.7+2.0+2.2(西から) 南側 3.7+3.0+2.0(西から)	33.88
建物11	N1° E	北側 2.0+2.1(西から) 南側 2.4+1.7(西から) 南側底 1.5+3.5+1.3(西から)	東側 1.4+2.1+2.1(北から) 西側 1.6+2.1+2.1(北から) 東側底 2.1+4.2+2.2+0.7(北から)	22.96
建物12	N8° W	北側 3.0 南側 3.0	東側 2.4+2.5+2.6+2.2(北から) 西側 2.4+2.3+2.5+2.5(北から)	29.1
建物13	N88° W	東側 1.9+1.9(北から) 西側 1.8+2.0(北から)	北側 1.8+1.8+2.0(西から) 南側 1.9+1.6+2.0(西から)	21.28
建物14	N1° E	北側 1.8+2.1(西から) 南側 2.1+1.9(西から)	東側 1.9+2.0+1.8(北から) 西側 3.7+2.4(北から)	22.8
建物15	N3.5° W	北側 1.5(底)+1.7+1.7(西から) 南側 1.4(底)+1.7+2.0(西から)	東側 (2.2)+2.4+2.2(北から) 西側 2.2+2.3+2.2(北から) 南側底 1.9+2.3+2.4(北から)	25.16
建物16	N2.5° W	北側 2.0+1.9(西から) 南側 2.1+1.8(西から) 北側底 1.4+3.5+1.0(西から) 南側底 1.0+1.9+1.8+1.0(西から)	東側 2.3+2.1+2.2(北から) 西側 2.3+2.1+2.3(北から) 東側底 1.3+2.2+2.2+2.0(北から) 西側底 1.4+2.4+2.2+2.2(北から)	25.74
建物17	N81° W	東側 3.6 西側 1.9+1.7(北から) 東側底 1.7+2.7(北から)	北側 1.8+4.2+2.3+1.5(底)(西から) 南側 1.8+2.0+2.3+2.2(西から) 南側底 --+2.0+2.2+2.2+1.8(西から)	29.88
建物18	N88.5° W	東側 1.8+2.1(北から) 西側 2.2+1.7(北から)	北側 1.7+1.9+1.9+1.7(西から) 南側 2.2+1.8+1.9+1.8(西から)	28.08
建物19	N9° E	北側 3.9 南側 3.9	東側 2.4+2.6+2.2(北から) 西側 2.7+2.7+2.8(北から)	31.2
建物20	N4° E	北側 2.2+1.9(西から) 南側 4.1	東側 2.3+2.3+2.4(北から) 西側 2.3+2.2+2.5(北から)	28.7
建物21	N10° E	東側 4.5	東側 --+2.4+2.6(北から) 西側 --+2.3+2.5+2.6(北から)	
建物22	N1° W	北側 3.5 南側 1.7+1.8(西から)	東側 1.4+3.9+2.8(北から) 西側 1.8+3.5+2.8(北から)	27.65
建物23	N2° W	北側 1.7+1.9(西から) 南側 1.8+1.9(西から)	東側 3.0+2.3(北から) 西側 3.1+2.8(北から)	21.24
建物24	N1° W	北側 3.9 南側 3.6	東側 2.8+2.3+2.1(北から) 西側 2.6+2.2+2.2(北から)	28.08

建物	主軸方位	梁行(m)	桁行(m)	身舎面積(m ²)
建物25	N5.5° E	北側 2.0+1.8(西から) 南側 1.8+2.1(西から)	東側 1.4+2.2+2.3+2.3+2.2(北から) 西側 1.4+2.2+2.3+2.2+2.2(北から)	40.56
建物26	N4° E	北側 2.3+2.3(西から) 南側 2.3+2.2(西から)	東側 2.2+2.3+2.4+2.3(北から) 西側 2.4+2.3+2.2+2.4(北から)	34.04
建物29	N2° E	北側 1.2(西)+1.8+1.9+1.2(西から) 南側 1.3(西)+1.7+1.3(西から)	東側 2.5+2.6+2.6(北から) 西側 2.4+2.6+2.6(北から) 西側底 2.5+2.6+2.5(北から)	28.49
建物30	N5.5° E	北側 2.3+1.8+0.8(西から) 南側 2.1+2.0+0.8(西から)	東側 2.0+2.0+2.4(北から) 西側 2.2+2.1+2.1(北から) 西側底 1.8+2.1+2.4(北から)	26.24
建物31	N4° E	北側 2.1+2.1(西から) 南側 2.2+2.0(西から)	東側 2.1+2.3+2.3(北から) 西側 2.1+2.1+2.1(北から)	28.56
建物32	N86.5° W	東側 1.9+2.0(北から) 西側 3.1(北から)	北側 2.4+2.1+2.2(西から) 南側 2.2+2.2+2.1(西から)	25.35
建物33	N0.5° W	北側 1.9+2.0(西から) 南側 0.7(西)+1.7+2.2(西から)	東側 2.4+2.6+2.4(北から) 西側 2.4+2.6+2.2(北から) 西側底 …+2.4+2.1(北から)	28.08
建物34	N	北側 1.0(西)+2.0+2.2(西から) 南側 1.8(西)+2.3+2.0(西から)	東側 2.4+2.4+2.7(北から) 西側 2.4+2.7+2.5(北から) 西側底 2.9+2.6+2.8(北から)	31.92
建物35	N2° E	北側 1.9+2.0(西から) 南側 1.9+2.0(西から) 北側底 1.8+1.9+2.1(西から) 南側底 2.4+3.0(西から)	東側 2.1+2.4+2.3(北から) 西側 2.3+2.4+2.1(北から) 西側底 2.1+2.2+2.0+2.3(北から)	26.52
建物36	N79° W	東側 4.2 西側 4.2	北側 2.4+2.7(西から) 南側 2.5+2.8(西から)	21.42
建物37	N11° E	北側 4.0 南側 4.0	東側 1.6+2.5+2.4(北から) 西側 1.6+2.6+2.3(北から)	26
建物38	N.80° W	東側 1.9+2.0(北から) 西側 1.9+2.0+1.2(西から)	北側 2.0+2.1+2.2(西から) 南側 2.0+2.0+2.3(西から) 南側底 2.3+2.0+…(西から)	24.57
建物39	N87° E	東側 2.5 西側 2.5 東側底 3.4 西側底 2.4+0.9(北から)	北側 0.9(西)+3.9+0.9(西から) 南側 1.7+2.1(西から) 南側底 1.0+1.7+2.0+0.7(西から)	9.5
建物40	N90°	東側 2.5 西側 1.2+1.5(北から) 東側底 0.6+3.5+…(北から) 西側底 4.0+…(北から)	北側 2.0+1.0(西から) 南側 1.9+1.0(西から) 北側底 0.3+2.1+1.7+0.8(西から)	9.5
建物41	N78° W	東側 1.8+1.7(北から) 西側 2.0+2.0(北から)	北側 2.3+2.7(西から) 南側 2.7+2.5(西から)	20
建物42	N8° W	北側 1.8+2.1(西から) 南側 2.0+1.6(西から) 北側底 2.0+3.1(西から)	東側 2.0+1.9+2.1(北から) 西側 2.0+1.9+2.1(北から)	23.4
建物43	N87° E	東側 2.0+2.0(北から) 西側 2.0+2.0(北から) 東側底 3.0+2.0+1.2+(北から) 西側底 3.3+2.0+1.0(北から)	北側 2.2+2.1+2.1(西から) 南側 2.1+2.1+2.2(西から) 北側底 1.1+2.0+2.2+2.2+1.3(西から) 南側底 1.5+2.1+2.0+2.2+1.2(西から)	25.6
建物44	N83° W	東側 1.1(西)+1.3(北から) 西側 1.0+3.5(北から)	北側 2.1+2.0(西から) 南側 2.2+(2.1)(西から) 北側底 2.0+2.2(西から)	15.05
建物45	N5° E	北側 1.5+2.0(西から) 南側 1.7+1.8(西から)	東側 2.0+2.4(北から) 西側 2.8+2.4(北から)	18.2
建物46	N84° E	東側 0.9(西)+1.7+1.8(北から) 西側 1.0(西)+1.7+1.8(北から)	北側 2.3+2.4(西から) 南側 2.4+2.5(西から) 北側底 7.3+2.0(西から)	17.15
建物47	N78° E	東側 2.5 西側 2.5	北側 1.7+1.8(西から) 南側 1.7+1.8(西から)	8.75
建物48	N85° E	東側 1.3+1.5+1.4(北から) 西側 4.2)	北側 2.5+2.4+2.5(西から) 南側 2.5+2.4+2.5(西から)	31.08
建物49	N3° W	北側 1.0(西)+2.0(西から) 南側 1.2(西)+2.7(西から)	東側 1.9+1.8(北から) 西側 1.8+1.8(北から) 西側底 1.5+1.3(北から)	10.36
建物50	N14° W	北側 3.8 南側 3.8	東側 2.3+2.1(北から) 西側 2.8+2.1(北から)	17.86
建物51	N3.5° W	北側 1.4+2.8(西から) 南側 1.5+2.8(西から)	東側 4.7 西側 2.4+2.3(北から)	13.18
建物52	N84° E	東側 1.4(西)+1.8+1.8(北から) 西側 2.0+2.1(北から)	北側 2.0+2.2+2.3(西から) 南側 2.2+2.2+2.3(西から) 南側底 2.2+2.1(西から)	24.05
建物53	N2° W	北側 3.8 南側 2.1+2.0(西から)	東側 2.1+1.8+1.7(北から) 西側 2.2+1.7+1.7(北から)	22.96
建物54	N90°	東側 1.4+2.0+1.9(北から) 西側 1.5+3.8(北から) 東側底 1.4+1.9+2.0+1.3(北から)	北側 1.5+2.4+2.1+2.2+1.5(西から) 南側 1.6+2.3+2.1+2.3(西から) 南側底 …+2.3+1.4(西から)	43.99
建物55	N84° E	東側 0.8(西)+1.9+2.1(北から) 西側 0.9(西)+1.4(北から)	北側 2.5+2.0(西から) 南側 2.4+2.3(西から) 北側底 2.4+2.4(西から)	18.8
建物56	N6.5° W	北側 2.0+2.0(西から) 南側 1.9+2.1(西から)	東側 1.9+2.6+2.1(北から) 西側 2.2+2.5+2.3(北から)	27.8
建物57	N5.5° W	東側 2.0+2.0+2.0(北から) 西側 1.9+1.9+2.0(北から)	北側 1.9+1.8(西から) 南側 2.3+1.8(西から)	22.04

建物	主軸方位	梁行(m)	桁行(m)	身舎面積(m ²)
建物58	N1° E	北側 3.8 南側 3.7	東側 1.8+1.0+1.1(北から) 西側 1.9+1.9+1.8(北から)	21.09
建物59	N90° E	東側 1.7+1.3+1.8(北から) 西側 1.5+1.5+1.8(北から)	北側 1.8+1.7(西から) 南側 3.7	17.02
建物60	N1° E	北側 1.8+1.8(西から) 南側 1.8+1.8(西から)	東側 2.6+2.5(北から) 西側 2.6+2.5(北から)	18.36
建物61	N88.5° E	東側 1.9+2.0(北から) 西側 1.9+2.0(北から)	北側 2.0+2.2+2.2(西から) 南側 1.9+2.2+2.0(西から)	24.96
建物62	N25° E	北側 1.8+1.8(西から) 南側 1.9+1.9(西から)	東側 3.2+2.4(北から) 西側 3.1+2.4(北から)	20.9
建物63	N62° E	東側 2.2+2.2(北から) 西側 2.2+2.2(北から) 南側底 3.2+2.2(北から) 西側底 3.2+2.2(北から)	北側 2.4+2.4+2.5(西から) 南側 1.5(底)+2.5+4.8+1.1(底)(西から) 北側底 3.8+2.2+3.7(西から)	32.12
建物64	N73° W	東側 1.9+2.0(北から) 西側 3.9	北側 1.8+2.0+2.1(西から) 南側 1.8+1.9+2.1(西から)	23.01
建物65	N8° E	東側 2.3+2.0+2.1(北から) 西側 2.2+2.2+2.2(北から)	北側 1.9+2.0(西から) 南側 1.7+1.9(西から)	23.04
建物66	N74° W	東側 1.8+1.1(北から) 西側 2.0+1.7(北から)	北側 2.0+2.0+2.4(西から) 南側 2.2+1.9+2.3(西から)	23.68
建物67	N0.5° E	北側 1.2+1.3(西から) 南側 1.3+1.4(西から)	東側 1.3+0.8(北から) 西側 0.8+1.3(北から)	5.25
建物68	N1° E	北側 2.1+2.0(西から) 南側 2.1+2.0(西から)	東側 2.2+2.3+2.0(北から) 西側 2.1+2.4+2.0(北から)	26.65
建物69	N86° W	東側 1.9+1.8(北から) 西側 1.9+1.8(北から)	北側 1.5+1.6+1.8+1.8(西から) 南側 1.5+1.9+1.8+1.5(西から)	24.7
建物70	N0.5° E	北側 1.2+1.3(西から) 南側 1.3	東側 2.2+1.1(北から) 西側 2.1+1.9(北から)	12.4
建物71	N7° E	北側 1.8+2.0(西から) 南側 1.8+2.0(西から)	東側 1.8+2.4+2.3(北から) 西側 2.5+2.2+2.3(北から)	25.46
建物72	N88° W	東側 3.3 西側 3.3	北側 2.1+2.5(西から) 南側 2.4+2.6(西から)	16.5
建物73	N90° W	東側 1.9+2.1(北から) 西側 0.80+1.8+2.2(北から) 南側底 0.9+1.9+2.3(北から)	北側 2.1+2.0+2.2(西から) 南側 2.2+2.8+2.2+1.2(底)(西から) 北側底 1.8+3.0+3.4(西から)	26.8
建物74	N88° W	東側 1.5+1.9(北から) 西側 1.5+1.9(北から)	北側 2.3+2.3(西から) 南側 2.4+2.2(西から)	17.48
建物75	N9° W	北側 1.5+1.4(西から) 南側 1.2+1.7(西から)	東側 4.1 西側 2.1+2.0(北から)	11.89
建物76	N83.5° W	東側 1.9+2.1(北から) 西側 2.0+2.0(北から)	北側 4.1+1.9(西から) 南側 2.1+2.1+1.8(西から)	24
建物77	N85° W	東側 3.3 西側 3.3	北側 1.9+1.9+1.8(西から) 南側 1.9+1.9+1.8(西から)	18.48
建物78	N87° E	東側 1.8+2.0+0.8(底)(北から) 西側 1.9+1.9+1.0(底)(北から)	北側 2.2+2.4+2.1(西から) 南側 2.3+2.3+2.1(西から) 南側底 2.2+2.4+2.1	25.46
建物79	N86° E	東側 3.2+1.4(北から) 西側 3.3+1.3(北から)	北側 2.3+2.6+2.3(西から) 南側 1.8+2.1+2.4(西から)	33.12
建物80	N87° E	東側 1.8+2.1(北から) 西側 1.8+2.1(北から)	北側 2.2+2.6+2.1(西から) 南側 2.3+2.2+2.4(西から)	25.53
建物81	N88.5° W	東側 3.8 西側 3.7	北側 2.8+2.5(西から) 南側 2.8+2.4(西から)	19.08
建物82	N4.5° W	東側 1.4+3.4+2.0(北から) 西側 1.4+5.4(北から)	北側 4.3 南側 1.7+1.6(西から)	29.24
建物83	N88° W	東側 0.9(底)+3.4(北から) 西側 3.4 西側底 1.2+1.3+1.1(北から)	北側 2.1+1.9+2.1(西から) 南側 2.0+1.8+2.5(西から) 北側底 0.7+2.1+2.1+1.9(西から)	20.74
建物84	N82° W	東側 2.1+2.0(北から) 西側 2.1+2.1(北から)	北側 2.1+2.2+2.0(西から) 南側 2.0+2.3+1.8(西から)	25.83
建物85	N84.5° E	東側 0.7(底)+2.1+1.6+0.8(底)(北から) 西側 0.8(底)+2.1+1.3+0.8(底)(北から)	北側 2.4+2.1(西から) 南側 2.4+2.2(西から) 北側底 2.3+2.1(西から) 南側底 2.4+2.3(西から)	24.42
建物86	N2° E	北側 2.1+2.2(西から) 南側 2.2+2.2(西から) 北側底 2.9+2.9(西から) 南側底 3.0+2.8(西から)	東側 (2.3)+2.6+2.4(北から) 西側 2.2+2.6+2.3(北から) 東側底 3.1+2.6+2.3(北から) 西側底 3.0+2.3(北から)	31.39
建物87	N3° E	北側 4.2 南側 2.1+2.1	東側 2.3+2.3+2.3(北から) 西側 2.2+2.3+2.4(北から)	28.98
建物88	N2° E	北側 3.8 南側 3.8	東側 1.8+1.7+1.8(北から) 西側 (1.8)+1.8+1.7(北から)	20.14
建物89	N87° E	東側 1.5+1.8(北から) 西側 1.5+1.8(北から)	北側 1.9+1.8+1.7(西から) 南側 1.9+3.5(西から)	16.74
建物90	N2° W	北側 1.0(底)+1.8+1.3+0.8(底)(西から) 南側 0.8(底)+2.5+0.8(底)(西から)	東側 2.4+2.5(北から) 西側 2.4+2.5(北から) 東側底 2.2+2.5(北から) 西側底 2.3+2.5(北から)	17.15
建物91	N2° E	北側 4.2 南側 4.2	東側 1.4+1.7+1.1(北から) 西側 1.4+1.7+1.1(北から)	20.16
建物92	N2° W	北側 1.9+1.8(西から) 南側 1.6+1.9(西から)	東側 4.7 西側 4.7	16.45
建物93	N	北側 1.5+1.7(西から) 南側 1.7+1.7(西から)	東側 2.0+2.2+2.3(北から) 西側 2.1+2.2+2.2(北から)	20.8

建物	主軸方位	梁行(m)	桁行(m)	身舎面積(m ²)
建物94	N89° E	東側 4.8 西側 4.8	北側 2.1+2.8+3.6(西から) 南側 2.7+2.1+2.7(西から)	36
建物95	N15° E	北側 1.1(東)+4.9(西から) 南側 1.1(東)+1.3+3.4(西から)	東側 2.7+2.7+2.6(北から) 西側 2.7+2.6+2.7(北から) 西側庇 2.7+2.6+2.7(北から)	39.2
建物96	N88.5° E	東側 1.7+2.4(北から) 西側 1.9+2.5(北から)	北側 2.4+2.5+2.4(西から) 南側 2.2+2.5+2.4(西から)	29.93
建物97	N3° E	北側 1.9+2.4(西から) 南側 2.3+2.6(西から)	東側 3.4) 西側 1.5+2.1+1.8(北から)	23.22
建物98	N2° W	北側 2.1+1.9(西から) 南側 1.8+2.2(西から)	東側 2.3+2.2+2.3(北から) 西側 2.4+2.4+2.2(北から)	28
建物99	N3° W	北側 3.0 南側 3.0	東側 2.3+2.3+2.1(北から) 西側 2.3+2.2+2.2(北から)	20.1
建物100	N2.5° W	北側 2.0+2.1(西から) 南側 2.1+2.1(西から)	東側 2.1+2.3+2.4(北から) 西側 2.3+2.2+2.1(北から)	28.56
建物101	N5° E	北側 3(庇) 南側 3.6	東側 1.2(3)+2.4+2.3(北から) 西側 2.3+2.4+2.3(北から)	25.2
建物102	N89° E	東側 0.7(庇)+1.5+2.4(北から) 西側 0.8(庇)+3.9(北から)	北側 2.5+2.4+2.5(西から) 南側 2.6+1.8+3.0(西から) 北側庇 2.4+2.5+2.4(西から)	28.86
建物103	N2.5° E	北側 2.0+2.4(西から) 南側 1.7+2.1(西から)	東側 2.5+2.6+2.5(北から) 西側 2.6+2.5+2.5(北から)	33.44
建物104	N86.5° E	東側 1.8+2.3(北から) 西側 2.0+2.0(北から)	北側 2.2+2.6+2.3+2.0(西から) 南側 2.3+2.5+2.2+2.1(西から)	36.4
建物105	N87° E	東側 3.9 西側 3.9	北側 1.5+2.3+1.8(西から) 南側 1.7+1.9(西から)	21.84
建物106	N89° E	北側 2.0+1.9(北から) 西側 2.0+1.9(北から)	北側 2.4+2.9+2.2(西から) 南側 2.3)+2.8+2.2(西から)	29.25
建物107	N2.5° E	北側 1.7+1.8(西から) 南側 1.7+1.8(西から)	東側 2.0+2.0+2.3(北から) 西側 1.9+2.0+2.4(北から)	22.05
建物108	N87° W	東側 2.1+2.1(東から) 西側 4.2	北側 2.0+2.1+2.2+1.3(西から) 南側 2.1+2.2+2.0+1.3(西から)	31.92
建物109	N90° W	東側 1.9+1.9(北から) 西側 1.9+1.9(北から)	北側 2.4+2.5+2.8+2.1(西から) 南側 2.2+2.5+2.7+2.2(西から)	36.48
建物110	N88° W	東側 1.0(庇)+2.4+1.3+1.9(庇)(北から) 西側 0.8(庇)+2.4+1.3+1.9(庇)(北から)	北側 2.0+2.0(西から) 南側 1.9+2.1(西から) 北側庇 2.0+1.9(西から) 南側庇 1.8+2.2(西から)	14.8
建物111	N86° W	東側 2.2+2.1(北から) 西側 2.1+2.2(北から)	北側 7.2 南側 (2.2)+2.6+2.4(西から)	30.96

(1) 建物29

建物29(第89図)は、調査区南西隅のAグループに属する。Aグループは4棟からなるが、このうち建物30と重複する。建物は南北方向に主軸をもつもので、主軸方位は $N 2^{\circ} E$ である。建物方位的には、建物29の南約8mに位置する建物32とちかい。本建物の身舎の東側桁行延長線上に建物32の東側梁行があり、強い計画性をうかがうことができ、両建物は同時存在した可能性が高い。構造的にみると、本建物は東側と西側の両面に庇をもつ。身舎部分の面積は28.49 m^2 である。

(2) 建物30

建物30(第90図)もAグループに属する。本建物は建物29、建物31と重複しており、グループ内で少なくとも2段階以上の変遷があったことが分かる。

建物は梁行2間、桁行3間の規模をもち、南北方向に主軸を有する。主軸方位は $N 5.5^{\circ} E$ を測る。東側には庇が付されており、身舎と庇の柱穴列は0.8m離れる。身舎部分の面積は26.24 m^2 で、本グループ内の他の建物と同規模である。

建物を構成する柱穴からの出土遺物(第88図)として、149の須恵器甕がある。胴部の破片と思われる、外面には比較的細かな格子目タタキが施される。産地、時期とも不明である。



第88図 八坂本庄遺跡B区建物30出土遺物

(3) 建物31

建物31(第91図)は、Aグループに属するもので、建物30の庇部分と重複する。

建物は平面長方形を呈するもので、南北方向に主軸をもつ。主軸方位は $N 4^{\circ} E$ で、建物規模は梁行2間、桁行3間である。建物方位的には建物30にちかいが、同じグループ内に属する建物29や建物32とは方位を異にする。また、身舎面積は28.56 m^2 で、建物29の身舎部分とはほぼ同じ規模をもつ。しかし、本建物は庇が付かず、東西両面に庇を有する建物29とは何らかの差をもつものであろうか。

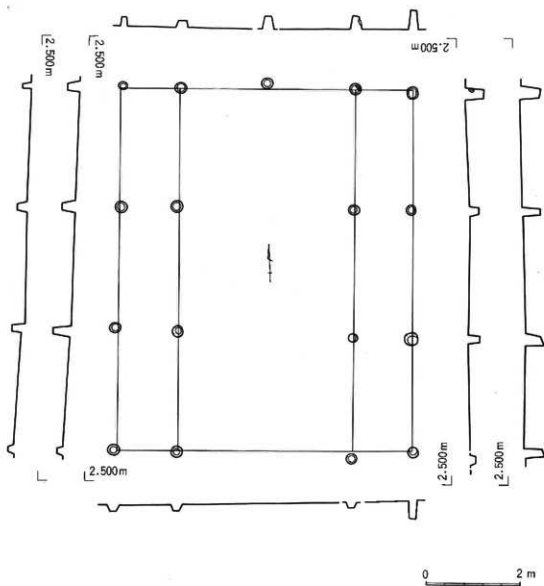
(4) 建物32

建物32(第91図)は、Aグループ4棟のうち3棟が重複したり比較的近接するのは異なり、1棟のみやや離れた位置にある。

建物は平面長方形を呈するもので、東西方向に主軸をもつ。主軸方位は $N 86.5^{\circ} W$ で、建物規模は梁行2間、桁行3間である。このうち西側梁行については、中央の柱穴を欠く。身舎面積は25.35 m^2 で、本グループのなかでは最も小型の建物であるが、大きな差はない。

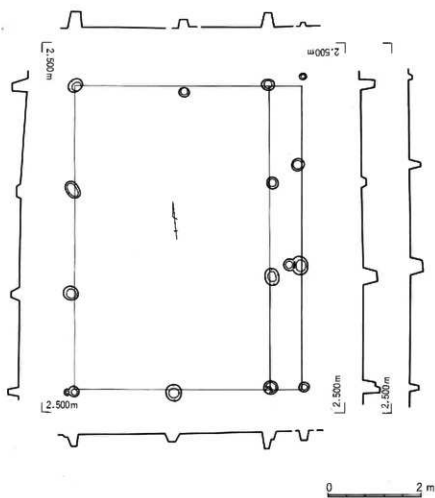
本建物は建物29と約8m離れるが、建物29の身舎の東側桁行延長線上に本建物の東側梁行があることから、両建物が同時存在した可能性が高い。

建物29



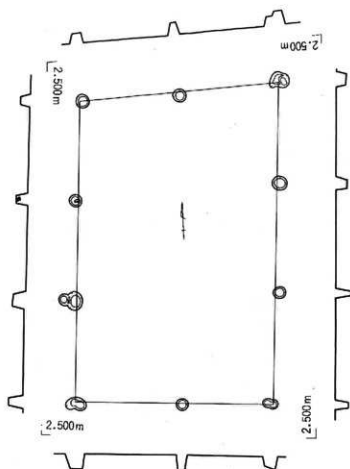
第89図 八坂本庄遺跡B区掘立柱建物跡(1)

建物30

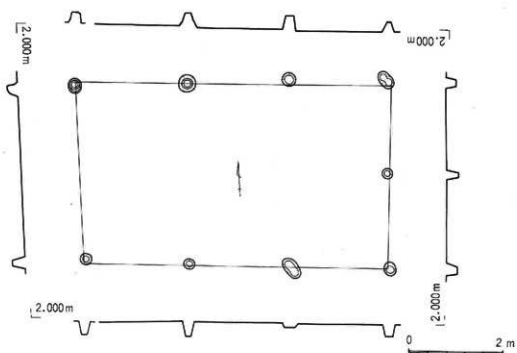


第90図 八坂本庄遺跡B区掘立柱建物跡(2)

建物31



建物32



第91図 八坂本庄遺跡B区掘立柱建物跡(3)

(5) 建物33

建物33(第92図)は、Bグループに属する。BグループはAグループの南東約16mにあり、南北方向に主軸をもつ建物が3棟並ぶ。

南北方向に主軸をもつ本建物は、平面プランは長方形を呈する。主軸方位は $N0.5^{\circ}W$ で、主軸をほぼ磁北方向にとる。建物規模は梁行2間、桁行3間で、西側に庇を配する。庇列は身舎から0.7mはなれる。身舎面積は28.08 m^2 である。

(6) 建物34

建物34(第93図)もBグループに属する。3棟は近接して並列しているが、本建物はその中央に位置している。

建物は東西方向に主軸をもつもので、主軸方位は南北方向にのる。建物規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は31.92 m^2 である。やはり西側に庇をもつ。建物を構成する柱穴のうち特徴的なことは、向梁行の中央の柱穴が梁行ライン外側に位置する点である。他にも数棟の建物がこのような柱穴配置がみられるが、数的には少ない。上屋構造に何らかの違いをもつものか検討の必要があろう。

(7) 建物35

建物35(第94図)は、3棟が並列するBグループのなかの最も東側に位置する。主軸方位は $N2^{\circ}W$ を測るもので、南北方向に主軸をもつ。建物規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は26.52 m^2 を測る。本建物には、西側を除く3面に庇が付される。本グループの3棟には重複がみられず、主軸方位もちかい。しかし、非常に近接した位置にあり3棟が同時存在したかは即断できない。このなかで、建物35の庇が、建物34がある西側だけないことを考えると、相互の建物を意識した配置であることがうかがえ、同時存在した可能性も高い。

(8) 建物36

建物36(第95図)は、Cグループに属する。CグループはBグループの東側10m余にあり、6棟の建物からなる。

建物は東西方向に主軸をもつもので、主軸方位は $N79^{\circ}W$ である。建物規模は、梁行1間、桁行2間で、身舎面積は21.42 m^2 を測る。本建物の北側には建物37が位置するが、建物37の東側桁行のライン上に本建物の東側梁行のラインがのる。向建物は同時に存在した可能性が高い。

(9) 建物37

建物37(第95図)は、Cグループのなかで最も規模の大きなものである。

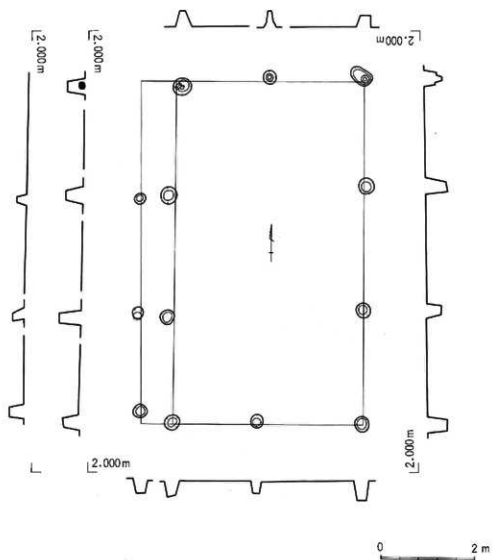
平面形が長方形を呈するもので、梁行に対し桁行が長く、長大な感を呈するものである。建物規模は梁行1間、桁行4間で、主軸方位は $N11^{\circ}E$ である。身舎面積も30 m^2 をこえるもので、本遺跡のなかでも人型に属する。柱穴配置をみると、向桁行とも、北端の1間が他の柱間よりも短い特徴をもつ。本建物の南側にある建物36とは、建物方位を同じくし、本建物の東側桁行のラインが建物36の東側梁行ラインに一致する。

(10) 建物38

建物38(第96図)は、Cグループの中央に位置する。

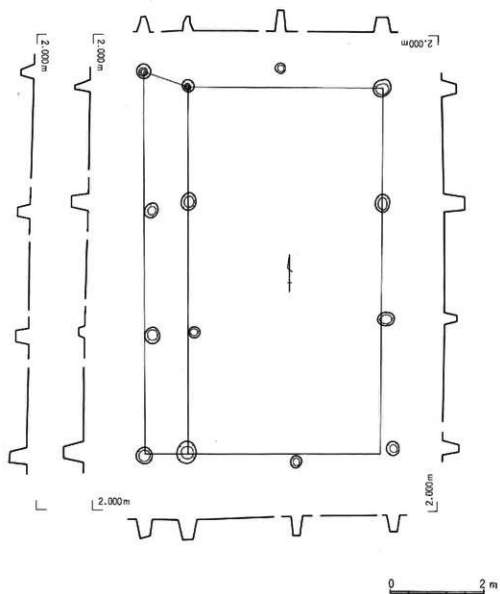
建物の平面形プランは長方形を呈するもので、東西方向に主軸をもつ。主軸方位は $N80^{\circ}W$ で、西側に隣接する建物36、建物37や北側に位置する建物41とはほぼ同じ建物方位をとる。建物規模は、身舎部分で梁行2間、桁行3間で、身舎面積は24.57 m^2 を測る。また、南側には庇が付される。グループ内では、建物の主軸方向がちかいものと同時存在した可能性が高い。しかし、建物37と建物41は重複しており、すべてが同時存在したわけではないことを示している。

建物33



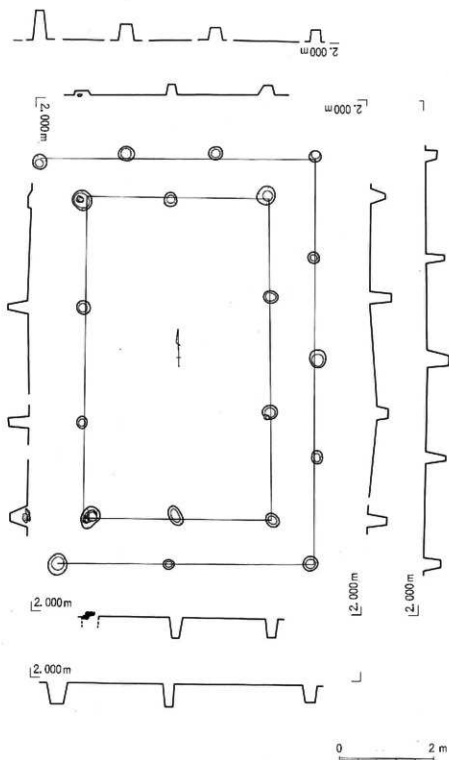
第92图 八坂本庄遺跡B区掘立柱建物跡(4)

建物34



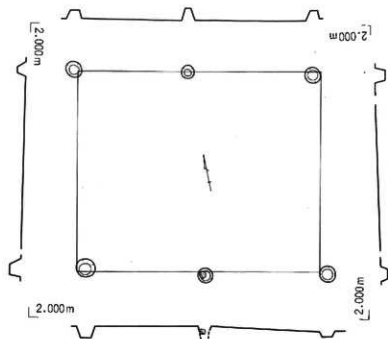
第93図 八坂本庄遺跡B区掘立柱建物跡(5)

建物35

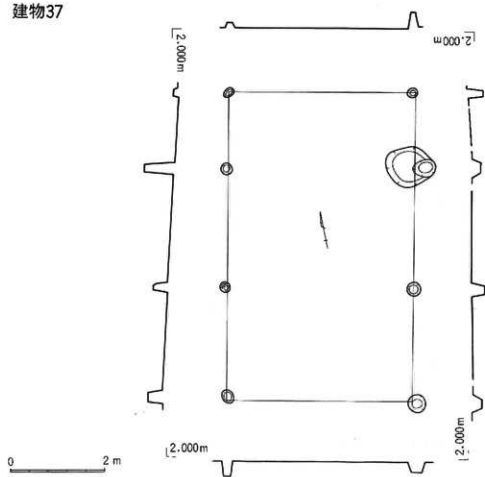


第94回 八坂本庄遺跡B区掘立柱建物跡(6)

建物36

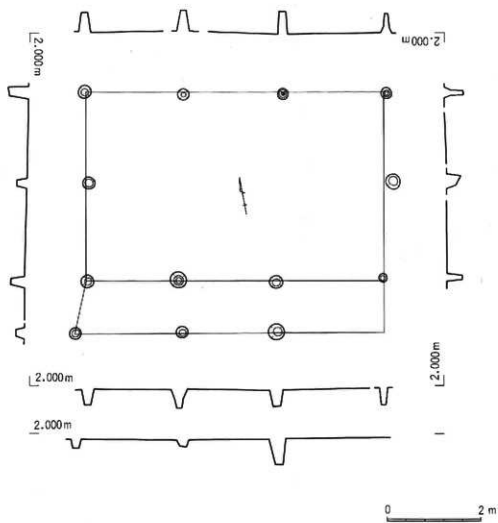


建物37



第95図 八坂本庄遺跡B区掘立柱建物跡(7)

建物38



第96回 八坂本庄遺跡B区掘立柱建物跡(8)

(11) 建物39

建物39(第97図)は、Cグループの東端に位置し、建物40と並ぶようにみられる。

平面プラン長方形を呈するもので、東西方向に主軸をもつ。主軸方位は $N87^{\circ}E$ で、Cグループのなかでは北側に隣接する建物40とちかい。建物規模は梁行1間、桁行2間で、身舎面積は $9.5m^2$ である。また、建物の北側を除く3面に庇が付されている。北側の建物40とは、身舎の両梁行のラインと東西向側の庇ラインが一致するなど、両建物配置の強い計画性がうかがわれ、同時存在したものと思われる。

(12) 建物40

建物40(第97図)は、Cグループ内にあり、建物39の北側に位置する。

建物は東西方向に長軸をもつ長方形プランを呈する。建物の主軸方位は、 $N90^{\circ}E$ で、南側に隣接する建物39と方位的にはちかい。建物規模は梁行1間、桁行2間で、身舎面積は $9.5m^2$ である。身舎は小規模であるが、4面に庇をもつ。南側に隣接する建物39とは同時存在したものと思われるが、身舎及び庇も含めてはほぼ同形同大ののである。

(13) 建物41

建物41(第98図)は、Cグループ内の最も北側にあります。

建物の平面形は長方形で、東西方向に主軸をもつ。建物規模は梁行2間、桁行2間で、身舎面積は $22m^2$ である。主軸方位は $N78^{\circ}W$ で、Cグループ内西半に位置する建物36、建物37、建物38とちかい建物方位をもつことが分かる。本建物は建物37と重複しており、これらについても、すべてが同時存在したわけではないようである。

(14) 建物42

建物42(第98図)は、Dグループ内にある。Dグループは、Bグループ及びCグループの北方に位置する。2棟から構成されるが、A-Cグループにみられたような明確な集中は認められず、建物の方位も異なることから、このグルーピングの良否の検討も必要であろう。

建物の規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は $23.4m^2$ を測る。主軸方位は $N8^{\circ}W$ である。建物の北 $1.2m$ には建物と方向を同じくする柱穴列がみられる。これが庇なのか、欄列なのかは判断がつかぬ。

(15) 建物43

建物43(第99図)は、Dグループ内にあり、建物42の西側約 $8m$ に位置する。

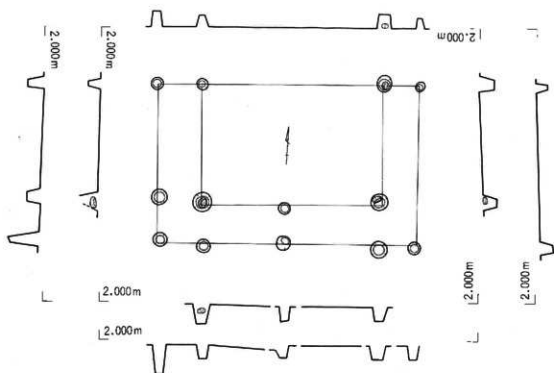
建物は東西方向に主軸をもつもので、平面形は長方形を呈する。身舎部分の規模は梁行2間、桁行3間で、主軸方位は $N87^{\circ}E$ である。身舎部分の面積は $25.6m^2$ で、4面に庇をもつ。本建物は柱穴の配置をみても整然とし、4面に庇をもった堂々たる構えである。しかし、身舎部分だけをみると、その規模は他とはほぼ同じである。庇としたものが、どのような構造になっていたのか気になるところである。

(16) 建物44

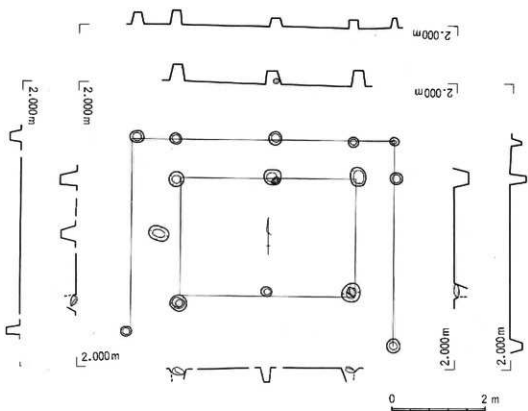
建物44(第100図)は、AグループとDグループの北方に散在して展開する建物のひとつである。これらの共通点として、平均よりも規模が小さい建物であることがあげられる。

建物44は北側に庇を有する建物で、身舎部分は東西方向に長軸をもつ長方形プランを呈する。その規模は梁行1間、桁行2間で、身舎面積は $15.05m^2$ を測る。北側に付される庇は、身舎部分から $1.0\sim 1.1m$ のところにある。

建物39

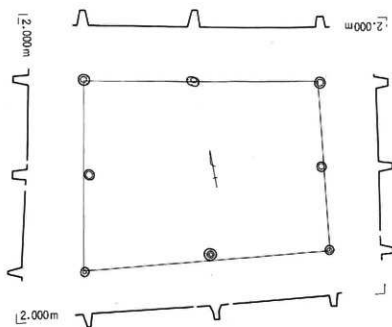


建物40

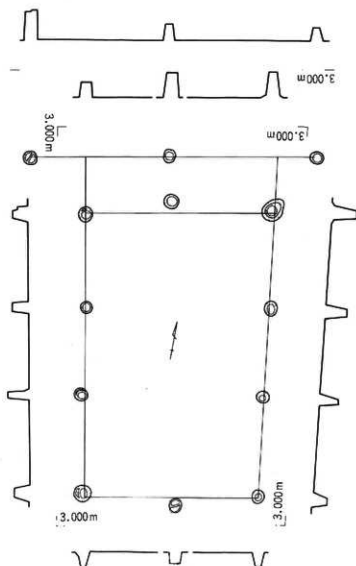


第97図 八坂本庄遺跡B区掘立柱建物跡(9)

建物41



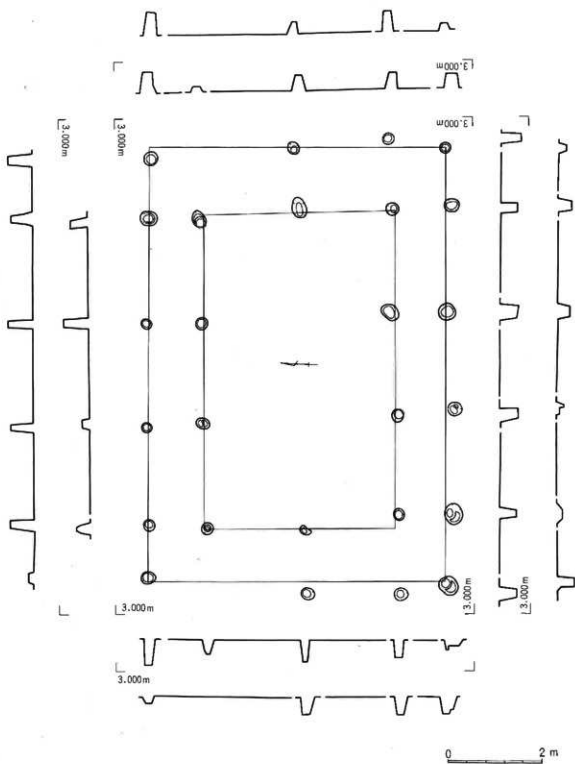
建物42



0 2 m

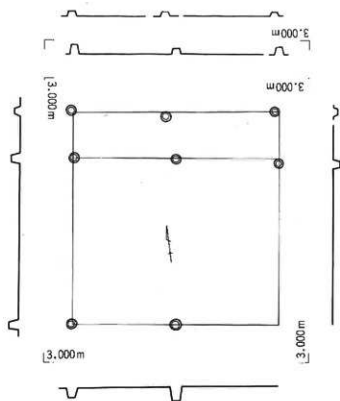
第98図 八坂本庄遺跡B区掘立柱建物跡(10)

建物43

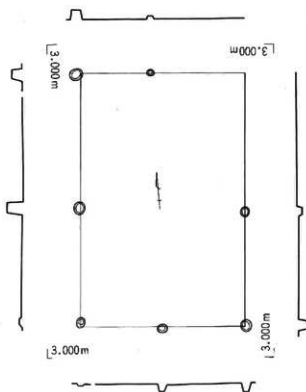


第99図 八坂本庄遺跡B区獨立柱建物跡(11)

建物44



建物45



第100図 八坂本庄遺跡B区掘立柱建物跡(12)

(17) 建物45

建物45(第100図)は、Dグループの建物43の北方約20mに位置する。1棟だけ独立してみられ、最も近い建物まで約10mを測る。

建物は長方形プランを呈するもので、東西方向に主軸をもつ。その規模は梁行2間、桁行2間の規模で、身舎面積は18.2㎡である。

主軸方位は、 $N5^{\circ}W$ を測る。

(18) 建物46

建物46(第101図)は、Gグループの西側約8mに位置するもので、建物47と重複する。これらの建物は、EグループやCグループに属する可能性もある。

建物は北側に庇を持つものである。身舎部分は長方形プランを呈し、東西方向に主軸をもつ。身舎部分の規模は梁行2間、桁行2間で、身舎面積は17.15㎡を測る

主軸方位は $N84^{\circ}E$ である。

(19) 建物47

建物47(第101図)は、建物36と重複した位置にある。

建物は東西方向に主軸をもつ長方形プランを呈するものである。建物の規模は梁行1間、桁行2間で、身舎面積は8.75㎡である。

本建物は身舎面積が10㎡にも満たないものである。遺跡のなかにおいても、最も規模の小さなクラスにはいる。これらは、倉庫的な機能をもつものであろう。

(20) 建物48

建物48(第102図)は、調査区北西部に位置するEグループに属する。このグループの主体は、調査区外にあると思われる。

建物は長方形プランを呈するもので、東西方向に主軸をもつ。建物の規模は梁行3間、桁行3間である。北西隅の柱穴が調査区外に及ぶものの、身舎面積は31.08㎡と推定することができる。また、柱穴配置について、東側梁行が3間であるのに対し、西側梁行は中間の柱穴がなく1間である。

(21) 建物49

建物49(第102図)は、Eグループの東端に位置するものと思われる。本建物は、堅穴1と重複するが、その前後関係は不明である。

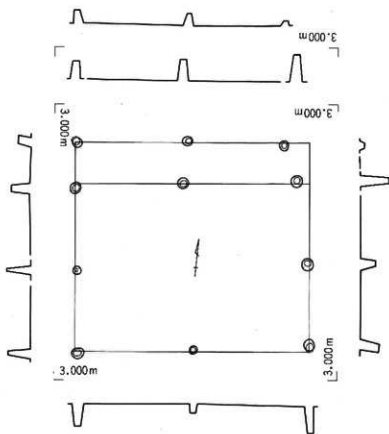
建物は西側に庇をもつもので、身舎部分は南北方向に主軸をもつ長方形を呈する。主軸方位は $N3^{\circ}W$ である。建物の規模は梁行1間、桁行2間で、身舎面積は10.36㎡である。身舎部分だけをみると、規模的には本遺跡においては最小規模クラスである。

(22) 建物50

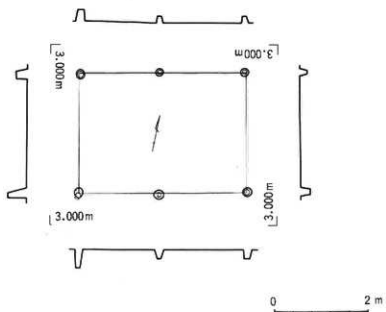
建物50(第103図)は、やはりEグループの東端に位置するものと思われる。本建物も堅穴1と重複するが、その前後関係は不明である。

建物は、南北方向に主軸をもつ長方形のプランを呈する。建物の規模は梁行1間、桁行2間で、身舎面積は17.86㎡である。主軸方位は $N14^{\circ}W$ で、南側に隣接する建物49とは大きく方位を異にする。両者は同時存在したのではないであろう。

建物46



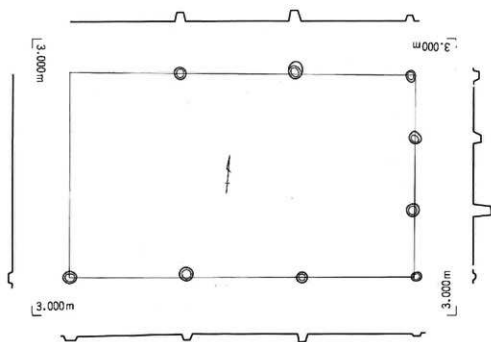
建物47



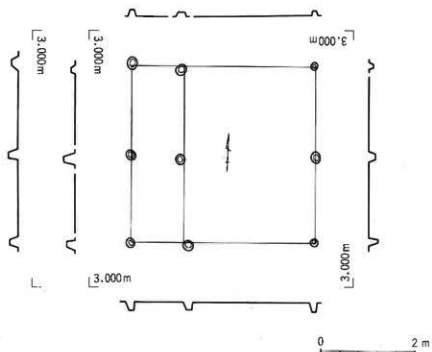
0 2 m

第101図 八坂本庄遺跡B区掘立柱建物跡(13)

建物48

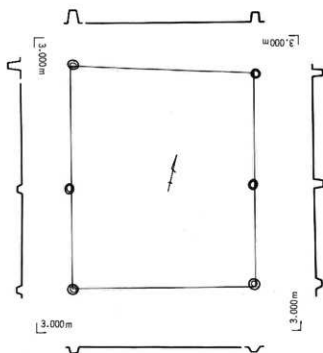


建物49

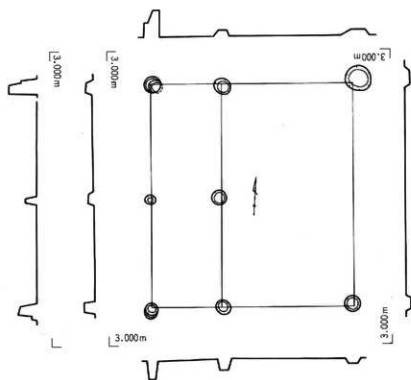


第102図 八坂本庄遺跡B区掘立柱建物跡(14)

建物50



建物51



0 2 m

第103図 八坂本庄遺跡B区獨立柱建物跡(15)

(23) 建物51

建物51(第103図)は、調査区北東隅に位置するFグループに属する。Fグループは調査区外にも及ぶものと思われる。

建物西側に庇を付したものである。身舎部分は南北方向に主軸をもつ長方形を呈し、梁行1間、桁行2間の規模をもつ。身舎面積は13.16㎡を測る。

主軸方位は、N3.5° Wである。

(24) 建物52

建物52(第105図)は、Fグループに属し、建物51の北東側に位置する。

建物は北側に庇をもつものである。身舎部分は南北方向に主軸をもつ長方形プランを呈し、主軸方位はN84° Eである。身舎部分の規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は24.05㎡を測る。建物の柱穴配置で気づく点として、東側梁行の中央の柱穴が梁行ラインよりも外側にあることである。このような梁行の中央の柱穴がやや外側に位置するものは、本遺跡において少数ながらも確認することができる。

(25) 建物53

建物53(第105図)は、Fグループに属し、建物52の南東側に位置する。

建物は南北方向に主軸をとる長方形プランを呈する。建物規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は22.96㎡である。主軸方位はN2° Wを測る。柱穴から出土した土器から建物は14世紀後半に比定される。周辺の建物との関係を見ると、本建物の南側梁行ラインが建物54の北側桁行ラインと一致したり、本建物の西側桁行ラインが建物60の東側桁行ライン及び建物59の西側桁行ラインと一致するなど、強い計画性が感じられる。これらは全体として同時存在の可能性が高い。

建物を構成する柱穴から土質土器小皿(第104図150)が検出された。14世紀前半のものか。



第104図 八坂本庄遺跡B区建物53出土遺物

(26) 建物54

建物54(第106図)は、Fグループに属し、建物53の南西側に位置する。

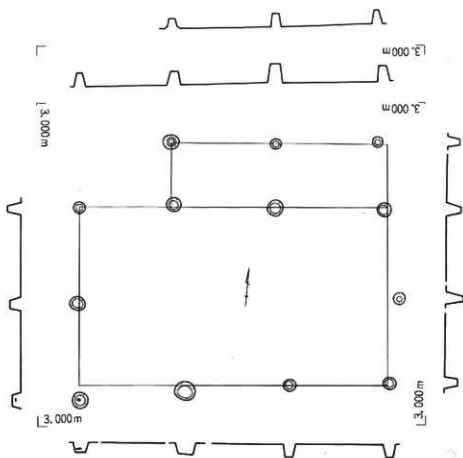
建物は東側及び南側の一部に庇を有するものである。身舎部分は東西方向に主軸をもつ長方形プランを呈する。建物規模は梁行3間、桁行4間で、身舎面積は43.99㎡を測る。建物の柱間の数や身舎面積については、本遺跡でも最大規模クラスである。主軸方位はN90° Wで、建物53や建物59、建物60などちかい方位をもつ。周辺の建物との関係を見ると、本建物の北側桁行ラインが建物53の南側梁行ラインと一致し、本建物の西側梁行ラインが建物51の東側桁行ライン一致する。これらから、建物54と建物53、建物51が同時存在する可能性が高いと思われる。

(27) 建物55

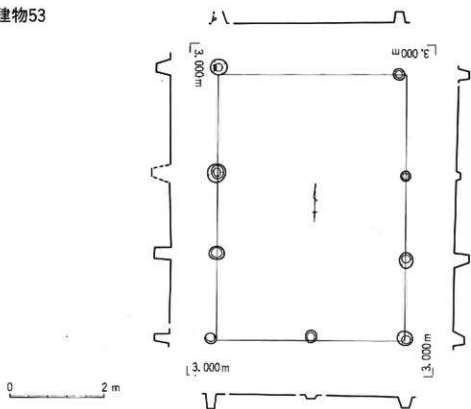
建物55(第107図)は、Fグループに属する。しかし、建物56、建物57などととも北側を溝で囲われたり、他のFグループと建物方位が若干異なるなど、この3棟については時期が異なる可能性が高い。出土土器から、本建物の時期は、12世紀前半と考えられる。建物は北側に庇をもつもので、身舎部分は梁行2間、桁行2間の規模をもつ。身舎面積は18.8㎡で、主軸方位はN84° Eである。

建物を構成する建物から土鍋(第108図151)が検出された。12世紀中頃以降に比定されるものか。

建物52



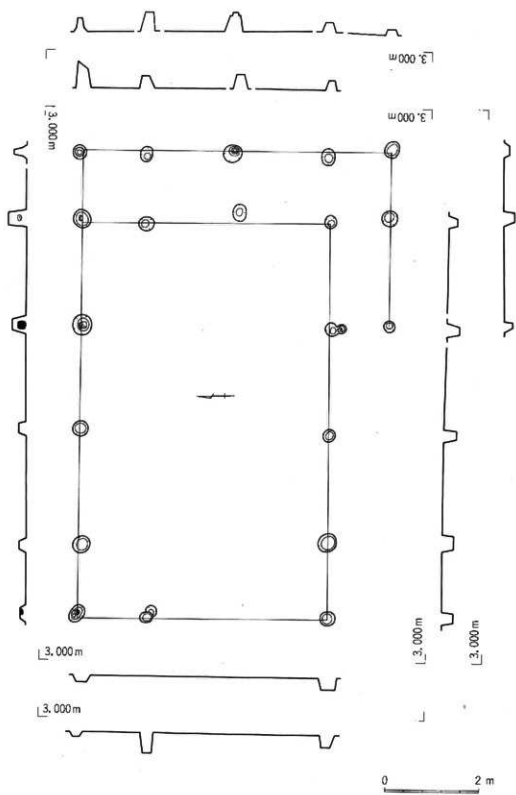
建物53



0 2 m

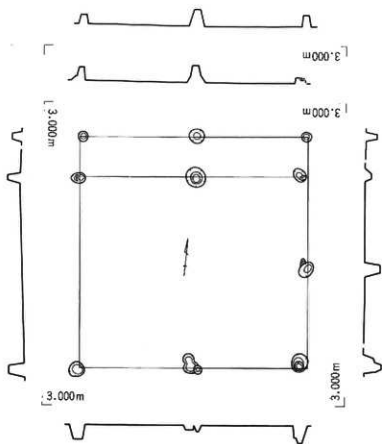
第105図 八坂本庄遺跡B区掘立柱建物跡(16)

建物54

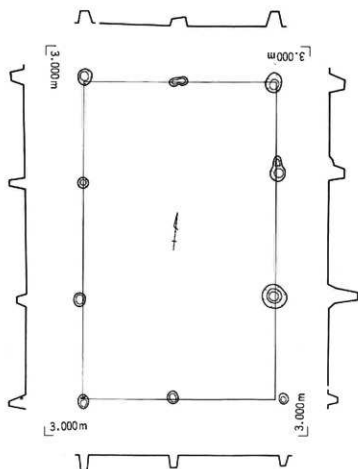


第106图 八坂本庄遺跡B区掘立柱建物跡(17)

建物55

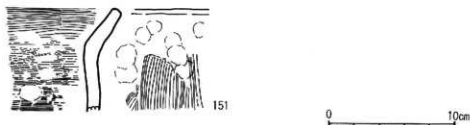


建物56



0 2 m

第107図 八坂本庄遺跡B区掘立柱建物跡(18)



第108図 八坂本庄遺跡B区建物55出土遺物

(28) 建物56

建物56(第107図)は、Fグループの位置にあるが、建物55、建物57とともに他のFグループの建物よりも古い12世紀前半に比定されるものと思われる。

建物は平面プラン長方形を呈するもので、その規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は27.6㎡である。また、主軸方位は $N6.5^{\circ}W$ を測る。東側に隣接する建物57の北側梁行のラインが、本建物の北側梁行ラインと一致することから、両建物が同時存在したものと考えられる。

(29) 建物57

建物57(第110図)はFグループの位置にあるが、建物55、建物56と同様に、他のFグループの建物よりも古い12世紀前半に比定される。

建物は南北方向に主軸をもつ長方形プランを有するもので、主軸方位は $N5.5^{\circ}W$ である。規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は22.04㎡である。本建物と建物56の北側には、建物に平行するように溝が走っている。溝は建物を区画する施設の一部であると考えられる。

(30) 建物58

建物58(第110図)は、Fグループの最も南側に位置する。

建物の主軸方位は $N1^{\circ}E$ で、南北方向に主軸をもつものである。規模は梁行1間、桁行3間で、身舎面積は21.09㎡である。

本建物の建物方位をみると、建物54、建物59、建物60にちかいため、これらの建物と同時期のものである可能性が高い。

(31) 建物59

建物59(第111図)は、Fグループの南に位置する。

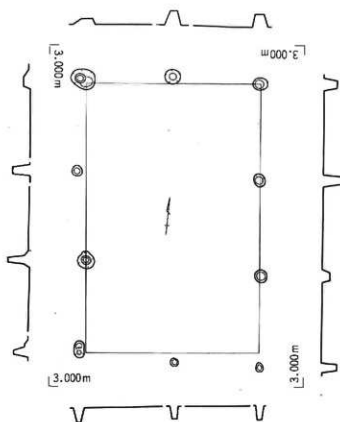
建物は南北方向に主軸をもつもので、主軸方位は総北に向く。規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は17.02㎡である。本遺跡のなかでは、建物規模が小さいものにはいる。建物の西側桁行ラインが、建物60の東側桁行ラインと建物53の西側桁行ラインと一致することから、これら建物との強い関係がうかがえる。

建物を構成する柱穴から土師器輪の破片が検出された(第109図152)。12世紀に比定されるものである。

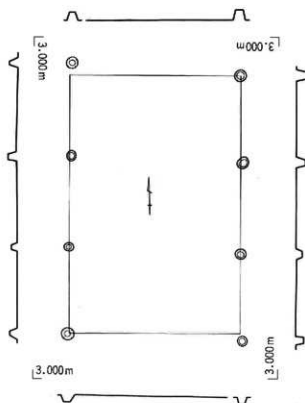


第109図 八坂本庄遺跡B区建物59出土遺物

建物57

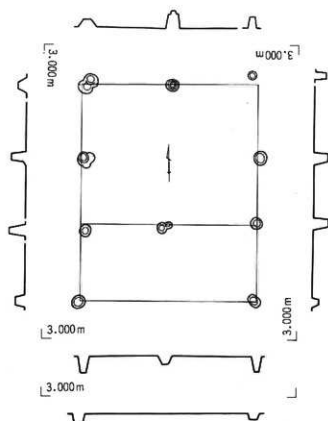


建物58

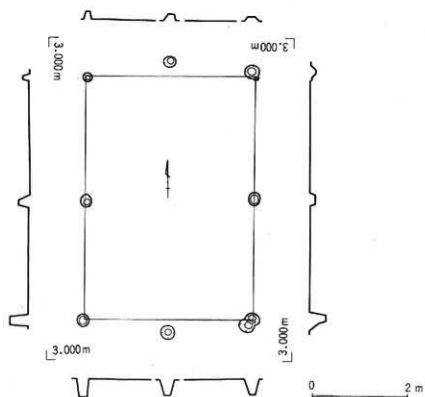


第110图 八坂本庄遺跡B区掘立柱建物跡(19)

建物59



建物60



第111図 八坂本庄遺跡B区掘立柱建物跡(20)

(32) 建物60

建物60(第111図)は、建物59の北西側に位置する。

建物の主軸方位は $N1^{\circ}E$ で、南北方向に主軸をもつものである。平面プランは長方形を呈し、その規模は梁行2間、桁行2間である。身舎面積は $18.36m^2$ を測る。建物の柱穴配置をみると、南北両梁行の中央の柱穴が梁行ラインよりもやや外側に位置する。

本建物は、建物のラインが建物59や建物53と一致するため、これら建物と強い関係があるものと思われる。

(33) 建物61

建物61(第114図)は、Fグループの南端のやや離れた位置にある。

建物の主軸方位は $N88.5^{\circ}E$ で、東西方向に主軸をもつものである。規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は $24.96m^2$ である。

Fグループのなかでもやや離れた位置にあるため、他の建物との関係がわかりにくい。出土遺物もなく時期も不明だが、建物方位だけで見るとFグループ内の14世紀後半の建物にちかい。

(34) 建物62

建物62(第114図)は、Gグループに属する。Gグループは4種からなるもので、建物62は建物65と重複する。

建物は平面プラン長方形を呈するもので、南北方向に長軸をもつ。建物規模は梁行2間、桁行2間で、中央にも柱穴をもつことから総柱的な状況を示す。主軸方位は $N25^{\circ}E$ で、Gグループのなかでは建物64、建物66にちかい。また、身舎面積は $20.9m^2$ で、平均的なものよりやや小型である。

建物を構成する柱穴から土師質土器碗(第112図153)が検出された。碗は口縁部がやや肥厚気味に反外するものである。体部は磨減が著しく、ミガキなどの状況は不明である。12世紀初め前後のものであろう。



第112図 八坂本庄遺跡建物62出土遺物

(35) 建物63

建物63(第115図)は、Fグループの南端のやや離れた位置にあり、建物61と重複する。

南側を除く3面に庇が付くもので、身舎の平面形は長方形を呈し、東西方向に主軸をもつ。建物の主軸方位は $N82^{\circ}E$ で、重複する建物61とは方位をやや異にする。身舎部分の規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は $32.12m^2$ である。柱穴配置をみると、身舎部分東側桁行の北から2番目の柱穴を欠く。

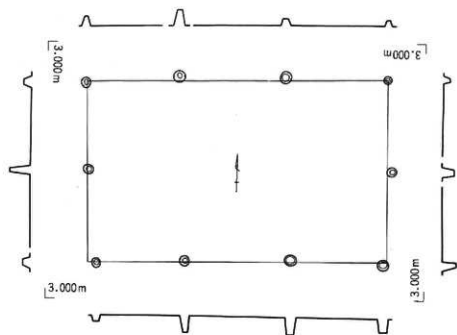
建物の方位からみると、建物55、建物56、建物57などとちかく、同様な時期である可能性が高い。

建物を構成する柱穴から土師質土器杯(第113図154)が検出された。復元口径 $15.0cm$ を測るもので、体部の立ち上がりは緩やかさうである。12世紀代に比定される。

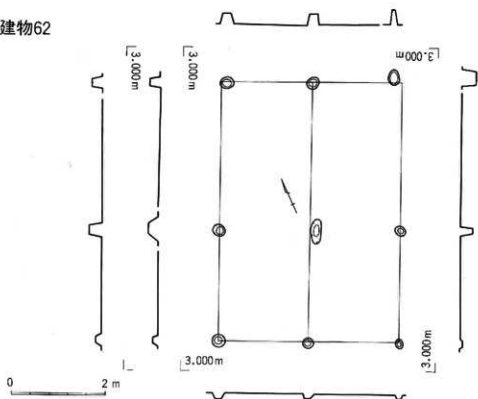


第113図 八坂本庄遺跡建物63出土遺物

建物61

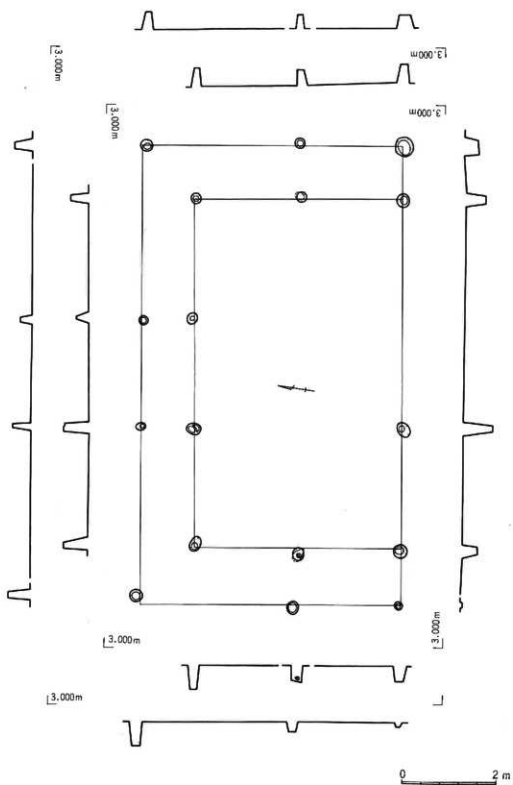


建物62



第114図 八坂本庄遺跡B区獨立柱建物跡(21)

建物63



第115図 八坂本庄遺跡B区掘立柱建物跡(22)

(36) 建物64

建物64 (第116図) は、Gグループに属する。

建物の平面プランは長方形で、東西方向に主軸をもつ。主軸方位は $N73^{\circ}W$ で、Gグループ内では建物62、建物66とちかい方位を示す。建物規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は $23.01m^2$ である。西側梁行の中央の柱穴がみられない。

南側に隣接する建物66とは、配座的にみて同時期の可能性が考えられる。

(37) 建物65

建物65 (第116図) は、Gグループに属する。

建物は南北方向に主軸をもつ長方形プランを呈するものである。主軸方位は $N8^{\circ}E$ で、Gグループの他の建物とは若干方位が異なる。規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は $23.04m^2$ を測る。

建物の柱穴配置をみると、南側梁行の中央の柱穴が梁行のラインより外側に位置する。同様な柱穴配置は、隣接する建物66にもみられる。

(38) 建物66

建物66 (第117図) は、Gグループに属する。

建物の主軸方位は $N74^{\circ}W$ で、東西方向に主軸をもつものである。平面プランは長方形を呈し、その規模は梁行2間、桁行3間である。身舎面積は $23.68m^2$ を測る。

本建物は建物64の南側に位置するが、両建物とも東西方向に長軸をもつもので、梁行がおおむね揃うように配置されている。同時存在した可能性が高い。

(39) 建物67

建物67 (第117図) は、どのグループにも属さず1棟のみ単独でみられる。位置的には、Gグループの東南約 $15m$ である。

建物の平面プランはほぼ長方形で、主軸方位は $N0.5^{\circ}E$ を測る。建物の規模は2間×2間で、身舎面積は $5.25m^2$ である。建物規模としては、本遺跡のなかで最小である。

1棟のみ単独であり、遺物も検出されなかったことから、時期などは不明である。

(40) 建物68

建物68 (第118図) は、Fグループに属する。Fグループは溝10からL字状に分かれた溝13の西側に位置する。南北に長く展開するため、さらに細かく分かれる可能性をもつ。

建物の平面プランは長方形で、東西方向に主軸をもつものである。建物の規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は $26.65m^2$ を測る。主軸方位は $N1^{\circ}E$ であるが、Fグループにはこの方位にちかい建物群と、やや東に軸を振る建物群がみられる。各々の建物群のなかで重複がみられるため単純には考えられないが、これらが時期の違いを表している可能性が高い。

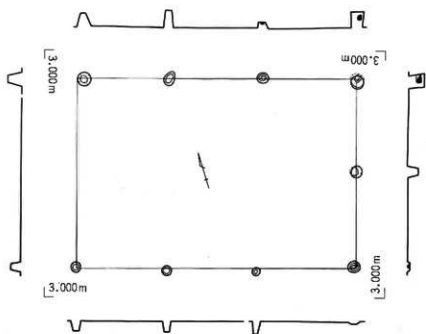
(41) 建物69

建物69 (第118図) はFグループに属するもので、建物68の約 $5m$ 南側に位置する。

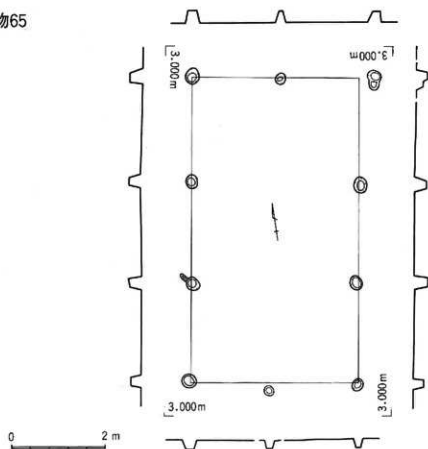
建物は東西方向に主軸をもつもので、平面プランは長方形を呈する。建物の主軸方位は、 $N88^{\circ}W$ を測る。建物の規模は梁行2間、桁行4間で、身舎面積は $24.7m^2$ である。

柱穴の配置をみると、両梁行の中央の柱穴を結ぶライン上に柱穴が配される。しかし、中央部のみ柱穴がみられない。上屋構造が他と異なるものが注目される。

建物64

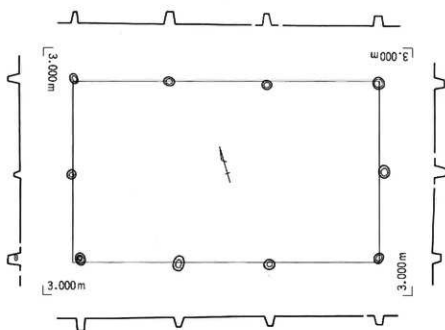


建物65

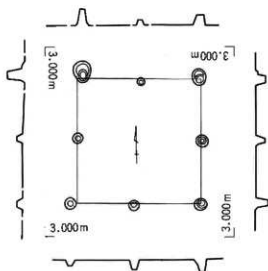


第116团 八坂本庄遺跡B区掘立柱建物跡(23)

建物66

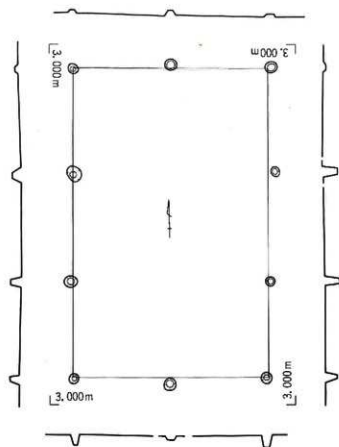


建物67

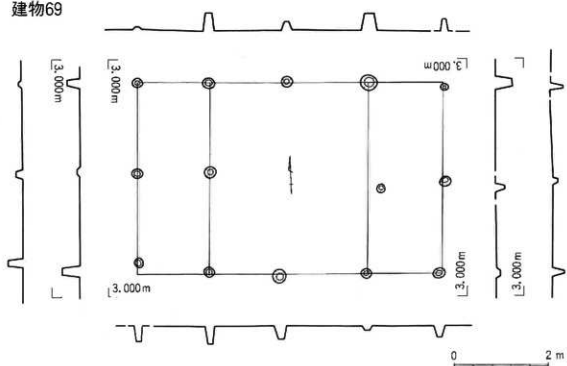


第117図 八坂本庄遺跡B区掘立柱建物跡(24)

建物68



建物69



第118図 八坂本庄遺跡B区掘立柱建物跡(25)

(42) 建物70

建物70(第120図)はFグループに属するもので、建物69の南側に位置する。

建物の平面プランは長方形で、南北方向に主軸をもつものである。主軸方位は、 $N0.5^{\circ}E$ を測り、規模は梁行2間、桁行3間である。身舎面積は $12.4m^2$ で、本遺跡のなかでも小規模である。

本建物は、北側に隣接する建物69の建物ラインと接するように位置しており、両建物が同時存在した可能性は低い。建物方位的には、建物68、建物73、建物74などと同様な方位をもつ。

(43) 建物71

建物71(第120図)はFグループに属するもので、建物69、建物70の東側に位置する。

建物は南北方向に主軸をもつもので、平面形が長方形を呈する。建物の規模は、梁行2間、桁行3間である。身舎面積 $25.46m^2$ を測り、主軸方位は、 $N7^{\circ}E$ である。

Fグループにおいて、本建物と同様な方位をもつものは建物76、建物77で、同時存在した可能性が高い。本建物の時期は12世紀代と思われる。

建物を構成する柱穴から検出された遺物(第119図)のうち、155、156は上輝質土器小皿である。155は口縁部のみであるが、復元口径 $10.2cm$ を測る。156は、体部が底部から斜方向にのびる。端部は丸みを有する。復元口径 $8.8cm$ を測る。157は土師器碗である。高台は断面三角形で、体部内外面にはヘラミダキがみられる。全体として12世紀中頃のものが。



第119図 八坂本庄遺跡建物71出土遺物

(44) 建物72

建物72(第121図)はFグループに属するもので、建物71、建物73と重複する。

建物の平面形は長方形で、東西方向に主軸をもつ。 $N88^{\circ}W$ である。規模は、梁行1間、桁行2間で、身舎面積は $16.5m^2$ を測る。

Fグループにおいて、本建物と同様な方位をもつものは建物71、建物76、建物77である。このうち建物71とは重複するが、全体として同じ時期のものと思われる。

(45) 建物73

建物73(第121図)もFグループに属するもので、建物71、建物72と重複する。

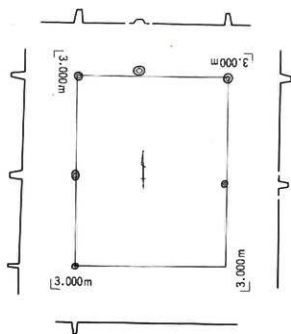
本建物は、北側と東側の2面に庇が付される。身舎部分の平面プランは長方形で、東西方向に主軸をもつ。主軸方位は、磁北をむく。身舎の規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は $28.8m^2$ である。

Fグループにおいて、本建物と同様な方位をもつものは建物68、建物69、建物70、建物74などである。これらのうち、いくつかは互いに重複しているためすべてが同時に存在したものではないが、強い関係があるものと思われる。

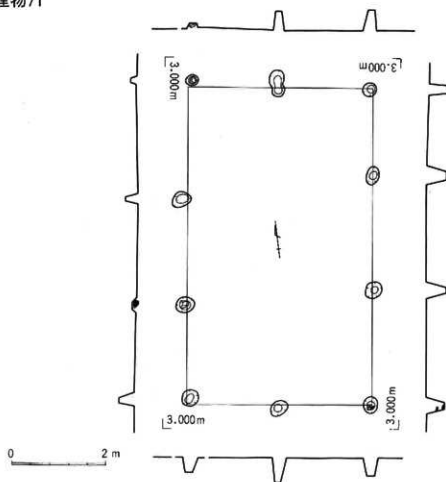
本建物は出土遺物から、12世紀代に比定される。

建物を構成する柱穴から検出された遺物(第122図)のうち、158は内黒土器碗である。高台は断面方形で、あまり高くない。159、160は土鍋で、体部はまだ深めである。3点とも12世紀初め前後のものであろう。

建物70

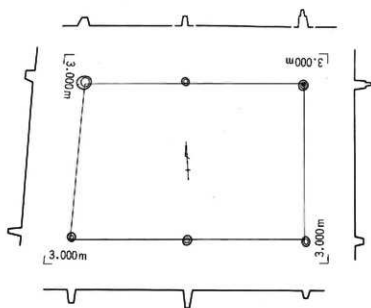


建物71

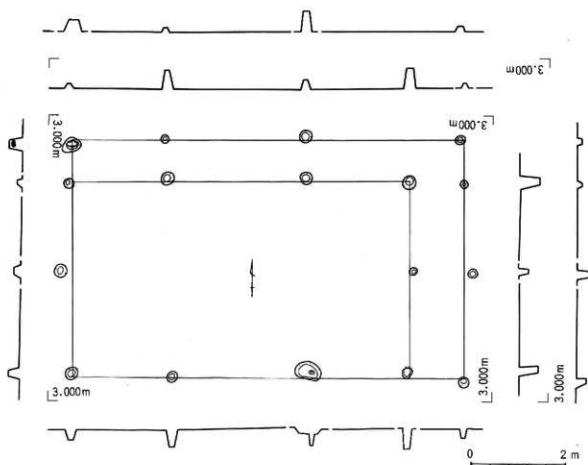


第120図 八坂本庄遺跡B区掘立柱建物跡(26)

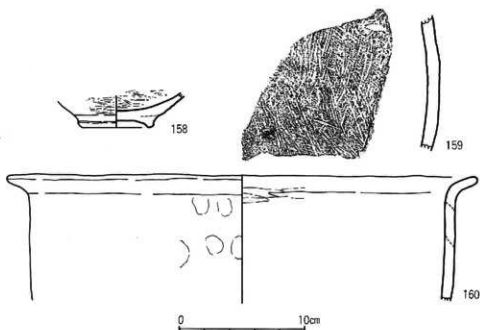
建物72



建物73



第121図 八坂本庄遺跡B区掘立柱建物跡(27)



第122図 八坂本庄遺跡B区建物73出土遺物

(46) 建物74

建物74(第123図)は、Fグループに属する。

建物の平面形は長方形で、東西方向に主軸をもつ。建物の主軸方位は、 $N88^{\circ}W$ である。規模は、梁行2間、桁行2間で、身舎面積は $17.18m^2$ を測る。

本建物の柱穴配置で特徴的な点は、両梁行の中央の柱穴が梁行ラインの外側に位置することである。本遺跡においても、少数ながら類例がみられる。

(47) 建物75

建物75(第123図)は、居館3の北東隅に近い建物47、建物48の東側に位置する

建物の平面形は本来長方形であると思われるが、やや平行四辺形気味を呈する。南北方向に主軸をもつ建物で、建物の主軸方位は、 $N9^{\circ}W$ である。規模は、梁行2間、桁行2間で、身舎面積は $11.89m^2$ である。建物規模としては、本遺跡でも小規模な方に位置付けられる。建物を構成する柱穴のうち、東側桁行の中央の柱穴がみられない。

本建物の方位は、Fグループのなかでも建物68、建物69、建物70、建物73、建物74にちかい。これらと強い関係をもつものであろう。

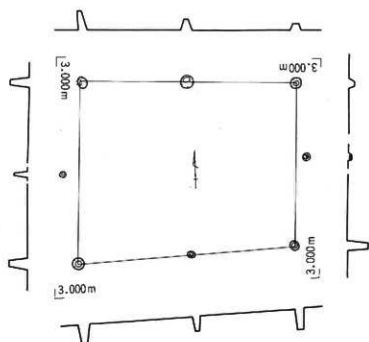
(48) 建物76

建物76(第124図)は、Fグループの南に位置する。

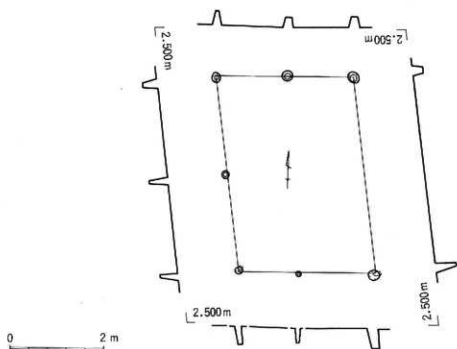
平面プラン長方形を呈し、南北方向に主軸をもつ。主軸方位は、 $N83.5^{\circ}W$ である。建物の規模は、梁行2間、桁行3間で、建物面積は $24.0m^2$ を測る。建物を構成する柱穴の配置をみると、北側桁行の西から2番目の柱穴がみられない。

Fグループでは、建物方位からみて大きく2グループに分けられる。ひとつは磁北方向に建物の主軸をもつもの、もうひとつは磁北から 7° ほど東に振るものである。両方のグループとも12世紀に位置付けられるもので、建物76は後者のグループに属する。

建物74

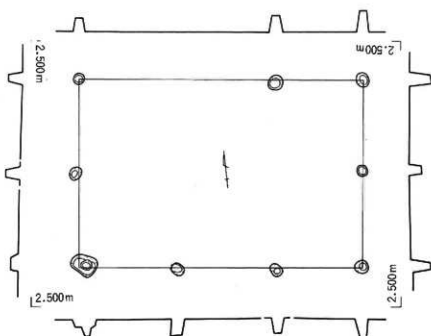


建物75

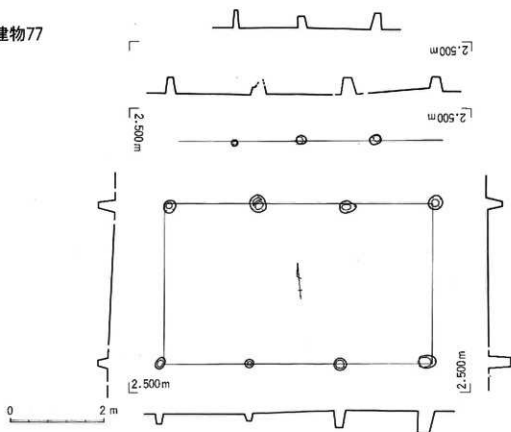


第123図 八坂本庄遺跡B区掘立柱建物跡(28)

建物76



建物77



第124図 八坂木庄遺跡B区掘立柱建物跡(29)

(49) 建物77

建物77(第124図)は、Fグループの南端に位置する。

平面プランは長方形を呈し、南北方向に主軸をもつ。主軸方位は $N85^{\circ}W$ で、建物の規模は梁行1間、桁行3間である。身舎面積は $18.48m^2$ を測る。

本建物は、Fグループのうち建物方位が偏北から 7° ほど東に振る一帯に属する。一部は互いに重複するが、これら建物が同時存在した可能性は高い。

(50) 建物78

建物78(第127図)は、Iグループに属する。Iグループは、溝10から分かれL字状に折れる溝13により画される一帯である。建物78は、そのIグループの最も南に位置する。

南側に庇をもつもので、建物身舎部分の平面プランは長方形を呈し、東西方向に主軸をもつ。建物の規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は $25.46m^2$ である。主軸方位は $N87^{\circ}E$ を測る。建物の時期は12世紀代と考えられる。

建物を構成する柱穴から出土した遺物(第125図)のうち、161は瓦器碗である。九州産のものと思われ、内外面にヘラミガキがある。162は土師質土器碗で、高台は断面三角形である。両者とも12世紀前～中頃か。



第125図 八坂本庄遺跡B区建物78出土遺物

(51) 建物79

建物79(第127図)は、Iグループに属し、建物78の北側に位置する。

平面プランは長方形を呈し、東西方向に主軸をもつ。主軸方位は $N86^{\circ}E$ で、建物の規模は梁行2間、桁行3間である。身舎面積は $33.12m^2$ を測り、本遺跡のなかではやや大型に属する。

建物の柱穴配置を見ると、両梁行の中央の柱穴が南に寄るという特徴をもつ。建物の時期は、柱穴から検出された遺物から12世紀代に位置付けられる。

建物を構成する柱穴から検出された遺物(第126図)のうち、163、164はともに土師器碗である。164はI縁部が外反する。両者とも12世紀に比定される。



第126図 八坂本庄遺跡B区建物79出土遺物

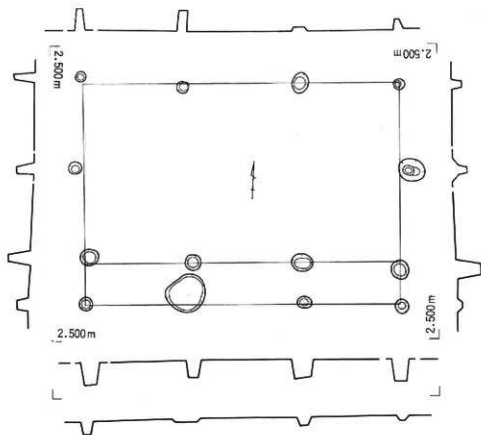
(52) 建物80

建物80(第128図)は、Iグループに属する。

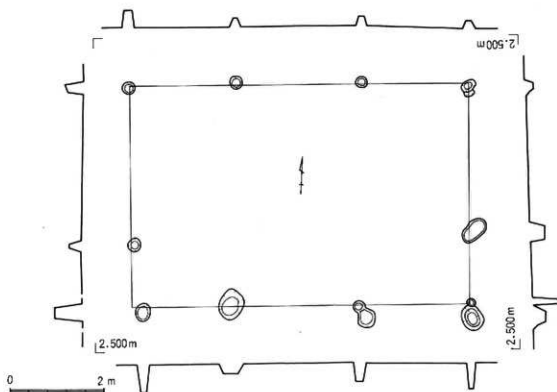
長方形の平面形をなし、東西方向に主軸をもつ。主軸方位は $N87^{\circ}E$ で、溝10や溝13とほぼ方位を同じくするようである。

規模は梁行2間、桁行3間である。柱穴の配置を見ると、両梁行とも両側の柱間の長さが長い特徴を有する。身舎面積は $25.53m^2$ である。

建物78

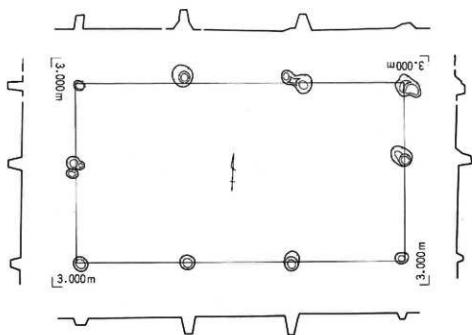


建物79

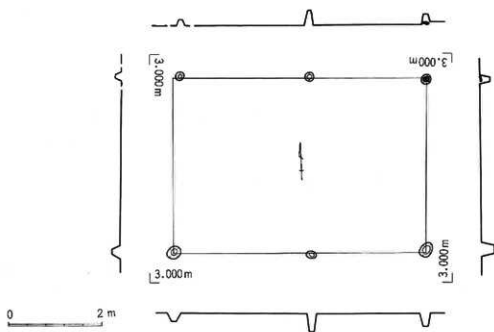


第127图 八坂本庄遺跡B区掘立柱建物跡(30)

建物80



建物81



第128図 八坂本庄遺跡B区掘立柱建物跡(31)

(53) 建物81

建物81(第128図)は、Jグループに属する。

建物は長方形プランを呈するもので、東西方向に主軸をもつ。主軸方位は $N88.5^{\circ}W$ で、L字状を呈する溝13と方位的にはちがいない関係にある。

規模は梁行1間、桁行2間で、身舎面積は $19.08m^2$ である。本建物の北側桁行ラインが、東側に位置する建物80の北側桁行ラインと一致することから、両者は同時存在した可能性が高い。

(54) 建物82

Jグループに属し、建物81、建物83と重複するのが建物82(第129図)である。

南北方向に主軸をもつ、平面プラン長方形を呈するもので、主軸方位は $N4.5^{\circ}W$ である。L字状を呈する溝13とは微妙に方位を異にする。

建物規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は $29.24m^2$ を測る。柱穴配置をみると、西側桁行は、南から2番目の柱穴がみられない。また、東側桁行は中央の柱間が両側に比べ広い。

(55) 建物83

溝13がL字状に折れるコーナー部に位置するのが、建物83(第129図)である。

建物の北側と西側に庇をもつものである。身舎部分の平面プランは長方形を呈し、東西方向に主軸をもつ。主軸方位は $N88^{\circ}W$ である。

身舎の規模は梁行1間、桁行3間で、身舎面積は $20.74m^2$ を測る。Jグループはいずれも同様な建物方位を示すが、場合によっては、さらにグループが細分される可能性をもつ。

(56) 建物84

建物84(第130図)は、溝10から分かれL字状に折れる溝13の北側に位置するJグループに属するものである。

長方形プランを呈し、東西方向に主軸をもつ。主軸方位は $N82^{\circ}W$ である。規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は $25.83m^2$ を測る。

建物の柱穴配置をみると、東側梁行の中央の柱穴が梁行ラインよりも外側に出る特徴をもつ。

(57) 建物85

建物85(第130図)は、Jグループに属するもので、建物84と重複する。

建物の北側と南側に庇が付されるもので、身舎部分の平面形は方形にちがいない長方形である。身舎は東西方向に主軸をもつもので、主軸方位は $N84.5^{\circ}E$ である。身舎の規模は梁行2間、桁行2間で、身舎面積は $24.42m^2$ を測る。

本建物の柱穴配置をみると、両梁行の中央の柱穴が梁行ラインよりも外側に出る特徴をもつ。このような特徴は、重複する建物84にもみられる。

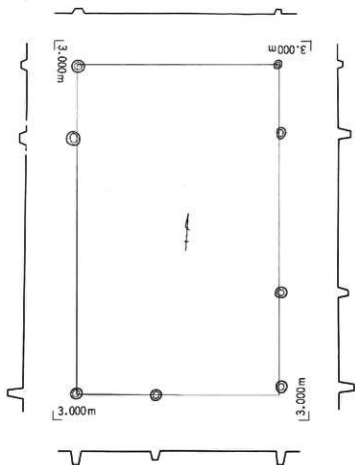
(58) 建物86

建物86(第131図)は、Kグループに属する。Kグループは2棟から構成され、溝10をはさみJグループと反対の位置にある。

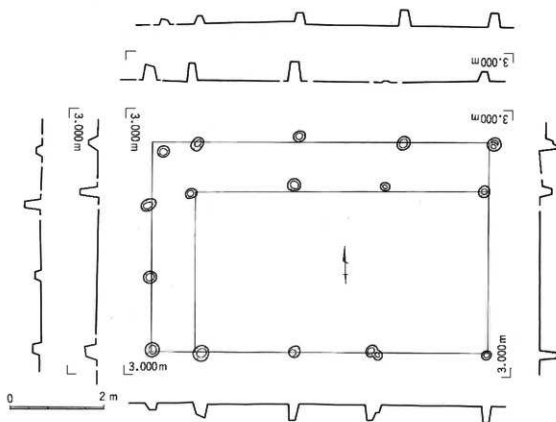
建物は4面に庇を配するものである。建物の主軸方位は $N2^{\circ}E$ で、南北方向に主軸をもつ。身舎は平面プラン長方形を呈し、規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は $31.39m^2$ を測る。

建物の柱穴配置は、身舎から庇にかけてきちんと柱筋が通る整然としたものである。しかし、身舎部分の北東側の柱穴が確認されていない。

建物82

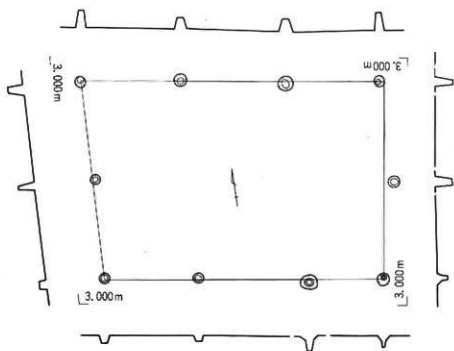


建物83

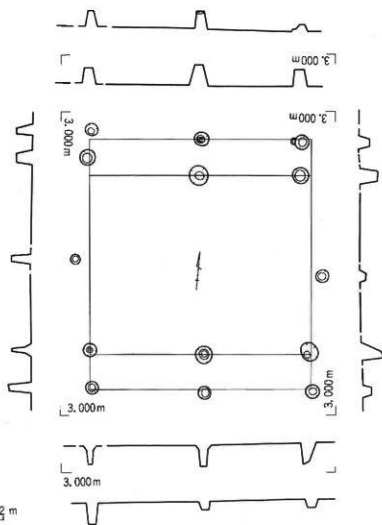


第129図 八坂本庄遺跡B区掘立柱建物跡(32)

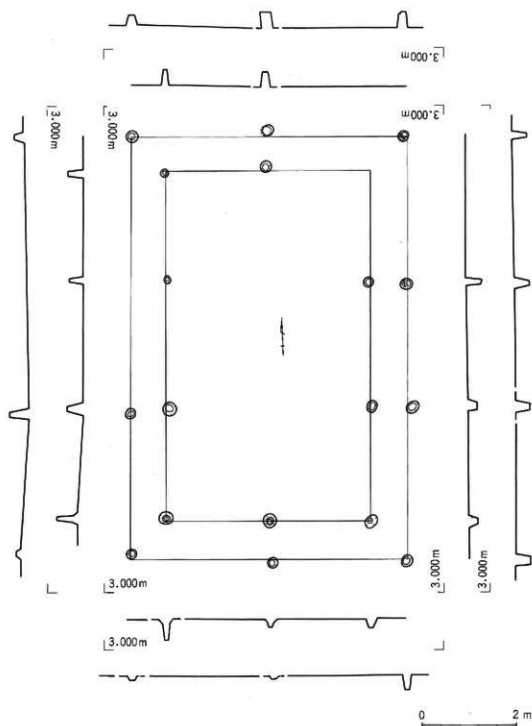
建物84



建物85



第130图 八坂本庄遺跡B区獨立柱建物跡(33)



第131図 八坂本庄遺跡B区掘立柱建物跡(34)

建物を構成する柱穴から土師質土器小皿（第132図165）が出土した。復元口径8.6cmを測るもので、短い部分が緩やかに立ち上がる。12世紀代のものであろう。



第132図 八坂本庄遺跡B区建物86出土遺物

(59) 建物87

建物87（第134図）は、Kグループに属する。

建物の平面形は長方形を呈し、南北方向に主軸をもつ。建物の主軸方位はN3°Eで、西側に隣接する建物86とはほぼ同じである。建物の規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は28.98㎡と推定される。柱穴配置をみると、北側梁行の中央の柱穴がみられない。

建物86と方位をほぼ同じくし、整然と並ぶことから同時存在したものと思われる。

(60) 建物88

建物88（第134図）は、Lグループに属する。Lグループは、溝10の東側で、方形に巡る溝11により囲まれた中に展開する。

建物は南北方向に主軸をもつもので、主軸方位はN2°Eである。建物規模は梁行1間、桁行3間で、身舎面積は20.14㎡を測る。

建物89と重複する。

(61) 建物89

建物89（第135図）は、Lグループに属する。方形に巡る溝11内部の南西部に位置する。

建物は東西北方向に主軸をもつもので、主軸方位はN87°Eである。建物規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は16.74㎡を測る。建物の柱穴配置をみると、南側桁行の東から2番目の柱穴がみられない。

本建物の北側には建物90が位置する。本建物の両梁形ラインをのばすと、建物90の東西の両庇ラインにあたることから、建物90と本建物は同時存在するものと思われる。

166（第136図）は建物を構成する柱穴から出土した土師器椀で、12世紀代のものである。



第133図 八坂本庄遺跡B区建物89出土遺物

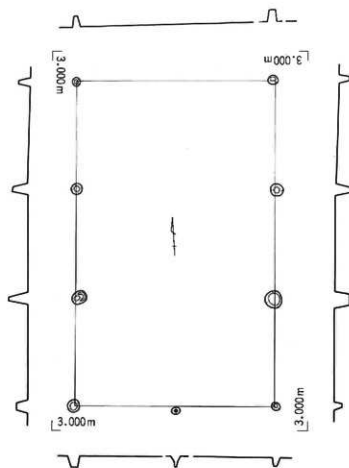
(62) 建物90

建物90（第135図）はLグループに属するもので、方形に巡る溝11の北西部に位置する。

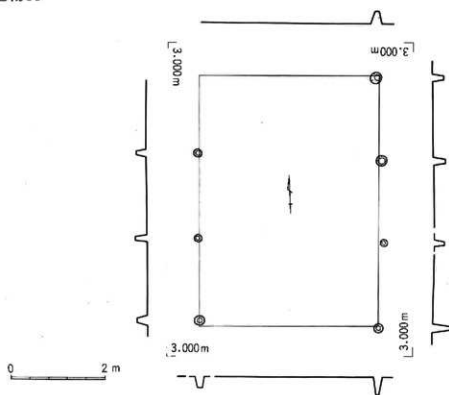
建物は東西両側に庇をもつものである。身舎部分は平面プラン長方形を呈するもので、南北方向に主軸をもつものである。主軸方位はN2°Wで、南側に位置する建物89とはほぼ同じである。身舎部分の規模は梁行2間、桁行2間で、身舎面積は17.15㎡を測る。柱穴配置をみると、南側梁行の中央の柱穴がみられない。

建物89と同時存在するものと思われる。

建物87

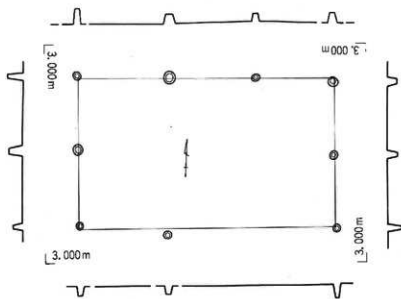


建物88

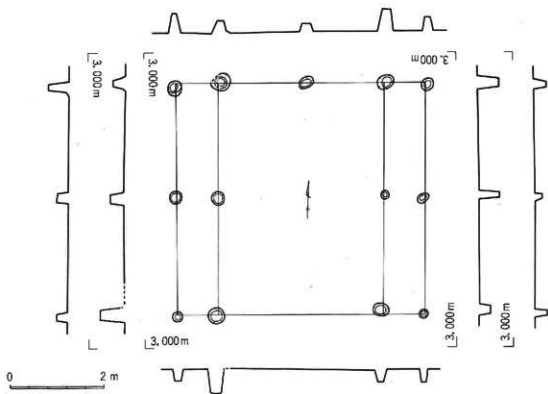


第134図 八坂本庄遺跡B区掘立柱建物跡(35)

建物89



建物90



第135图 八坂本庄遺跡B区獨立柱建物跡(36)

(63) 建物91

建物91(第137図)はLグループに属するもので、方形に遡る溝11の中央北側に位置する。

建物の主軸方位は $N2^{\circ}E$ で、南北方向に長軸をもつ長方形プランを呈するものである。建物の規模は梁行1間、桁行2間で、身舎面積は $20.16m^2$ である。

建物の方位は、建物群を囲む溝11の方位とやや異なる。建物の北側は溝11が途切れているが、建物91の北側梁行が溝の内側ラインの延長上にくる。

(64) 建物92

建物92(第137図)はLグループに属するが、溝11により区画された部分の外にあり、溝11に伴わないものと思われる。このように、Lグループには溝11に伴うものと伴わないものがあるようである。本建物と同時存在した可能性のある建物は、建物88と建物93である。

建物は南北方向に主軸をもつもので、主軸方位は $N2^{\circ}W$ である。規模は梁行2間、桁行1間で、身舎面積は $16.45m^2$ を測る。

(65) 建物93

建物93(第138図)はLグループに属するもので、方形に遡る溝11の中央北側に位置する。

建物の主軸方位は磁北にとり、南北方向に長い建物である。建物の規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は $20.18m^2$ を測る。本建物の北側についても溝11は途切れている。建物の北側梁行ラインは、溝の内側ラインの延長上にくる。よって、建物については、溝11に伴う可能性と、建物92などのように溝に伴わないものである可能性を併せもつ。

(66) 建物94

建物94(第138図)は、Mグループに属する。Mグループは、溝11の東側から南東側にかけて南北に長く展開するものであるが、さらに細かくグルーピングできるとと思われる。

建物は東西方向に主軸をもつもので、主軸方位は $N89^{\circ}E$ である。建物規模は梁行1間、桁行3間で、身舎面積は $36m^2$ を測る。

溝11と位置的に重複することから、溝11とは同時存在しないものと推定される。

南側桁行の西から2番目の柱穴から検出された土師質土器小皿(第136図167)はほぼ完形で、建物祭祀などに係わる埋納土器である可能性が高い。12世紀前半のものである。



第136図 八坂本庄遺跡B区建物94出土遺物

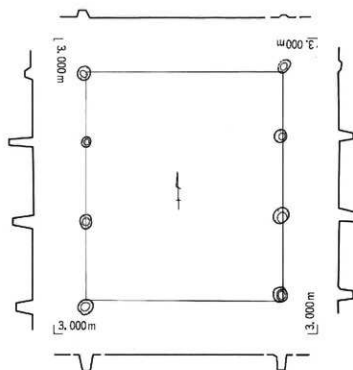
(67) 建物95

建物95(第139図)は、Mグループに属し建物94と重複する。

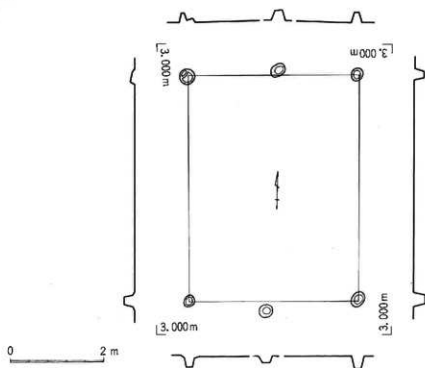
建物の西側には庇が付される。身舎部分の平面プランは長方形で、南北方向に長軸をもつものである。主軸方位は $N1.5^{\circ}E$ である。

身舎の規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は $39.2m^2$ を測る。建物規模としては、本遺跡では人規模のものとされる。柱穴配置をみると北側梁行は1間であるが、南側は2間である。しかし、南側梁行の中央の柱穴は西側の柱穴に近く、やや変則的である。

建物91

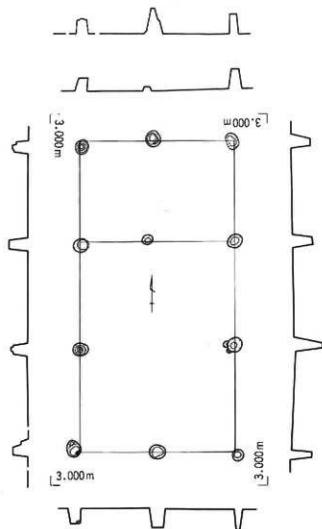


建物92

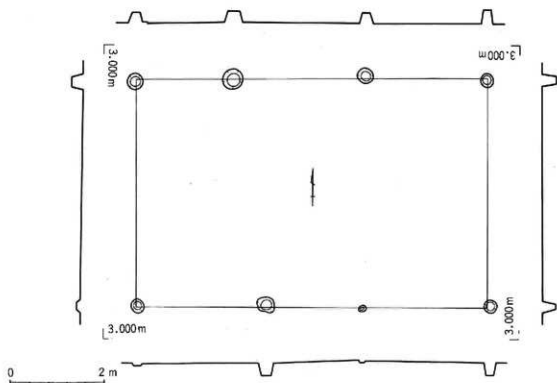


第137図 八坂本庄遺跡B区掘立柱建物跡(37)

建物93

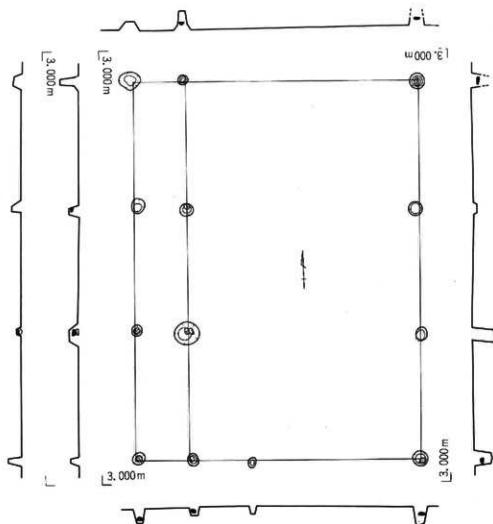


建物94

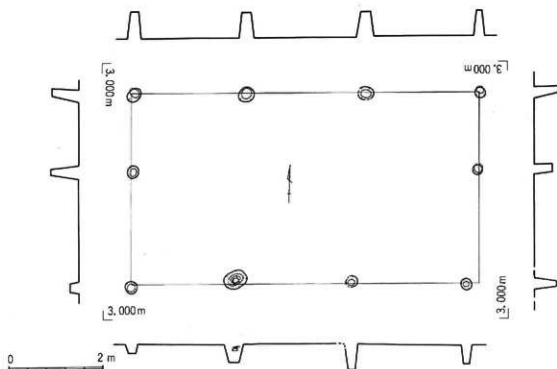


第138图 八坂本庄遺跡B区掘立柱建物跡(38)

建物95



建物96



第139図 八坂本庄遺跡B区掘立柱建物跡(39)

(68) 建物96

建物96(第139図)は、Mグループに係し建物102と重複する。

建物は平面プラン長方形で、東西方向に長軸をもつものである。主軸方位は $N88.5^{\circ} E$ を測る。建物規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は $29.93m^2$ を測る。柱穴配置をみると、両梁行の中央の柱が中央からやや北に立った位置にみられる。本建物の北西側に位置する建物99の東側桁行ラインが、本建物の西側梁行ラインと一致することから、同時存在の可能性が高い。

(69) 建物97

建物97(第140図)は、Mグループの東北端に位置する。建物の東北部が調査区外に及び、全形が分からないものの、以下のように復元した。

建物は平面プラン長方形を呈するもので、南北方向に長軸をもつ。建物の規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は $23.22m^2$ と推定される。

主軸方位は $N3^{\circ} E$ である

(70) 建物98

建物98(第140図)は、Mグループの中央付近に位置する。

建物は長方形プランを呈し、南北方向に主軸をもつ。主軸方位は $N2^{\circ} W$ で、建物の規模は、規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は $28m^2$ を測る。主軸方位は $N2^{\circ} W$ である。

本建物の東北側には建物103がある。建物103の西側桁行ラインが、本建物の東側桁行ラインに一致することから、同時存在した可能性が高い。

(71) 建物99

建物99(第141図)は、Mグループの中央付近に位置し、建物98、建物101と重複する。

建物は平面プラン長方形を呈し、南北方向に長軸をもつ。建物規模は梁行1間、桁行3間で、身舎面積は $20.1m^2$ を測る。梁行に比し桁行が長く、長細く感じる。主軸方位は $N3^{\circ} W$ である。本建物の南側梁行のラインは、東側に位置する建物100の西側梁行ラインに一致する。また、本建物の東側桁行ラインは、南西側に位置する建物96の西側梁行ラインに一致することから、これら3棟が同時存在する可能性が高い。

(72) 建物100

建物100(第141図)は、Mグループの中央付近に位置し建物102と重複する。

建物は平面プラン長方形を呈し、南北方向に長軸をもつものである。主軸方位は $N2^{\circ} W$ で、隣接する建物99や建物96と同様な方位を示す。建物規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は $28.38m^2$ を測る。

本建物の北側と南側の梁行は、西側に隣接する建物99の南北梁行ラインに一致することから、両建物は同時存在したと考えられる。

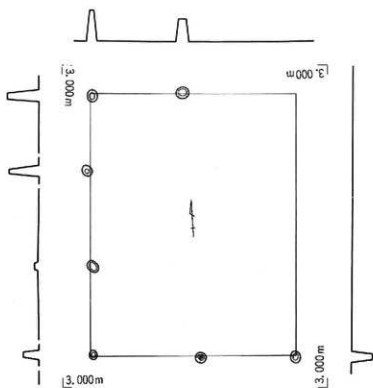
(73) 建物101

建物101(第142図)は、Mグループの中央付近に位置する。

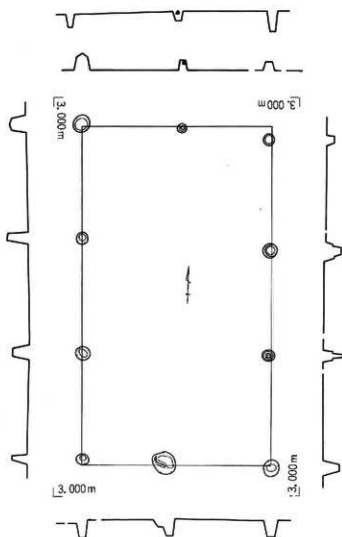
平面形は長方形を呈し、南北方向に長軸をもつ。建物規模は梁行1間、桁行3間で、身舎面積は $25.2m^2$ を測る。梁行に比し桁行が長く、やや細長く感じる。

本建物の主軸方位は $N5^{\circ} E$ で、周辺の建物とは若干方位が異なる。Mグループのなかでは、グループの最も南側に位置する建物107が比較的近い方位を示す。しかし、両建物は約13mも離れており、同一層敷の建物とするにはやや無理があると思われる。

建物97



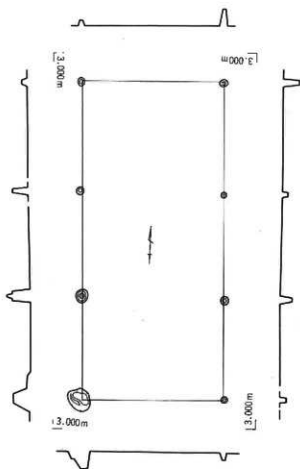
建物98



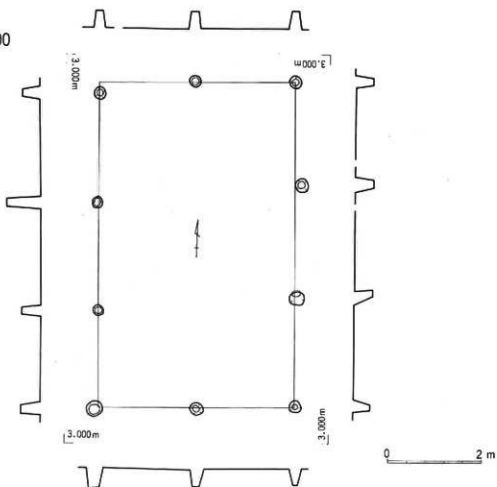
0 2 m

第140图 八坂本庄遺跡B区掘立柱建物跡(40)

建物99

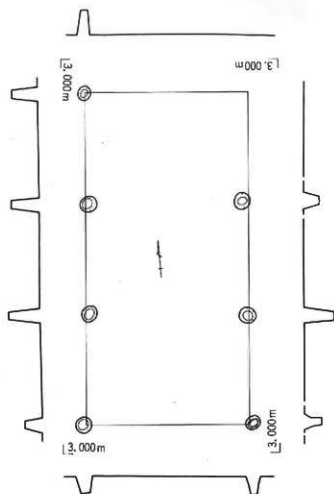


建物100

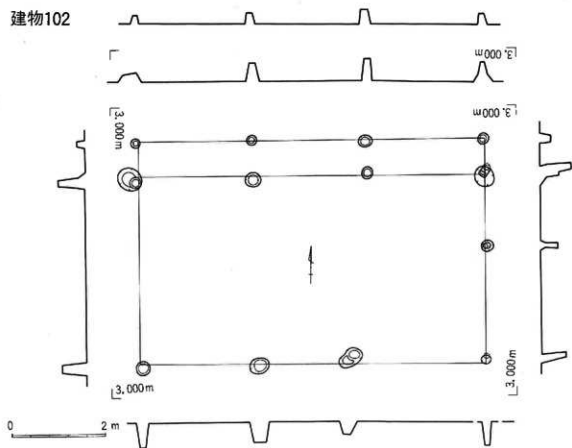


第141図 八坂本庄遺跡B区掘立柱建物跡(41)

建物101



建物102



第142図 八坂本庄遺跡B区掘立柱建物跡(42)

(74) 建物102

建物102(第142図)は、Mグループ中央付近に位置する。

建物は北側に庇をもつものである。身舎部分の平面形は長方形で、東西方向に長軸をもつ。主軸方位は $N89^{\circ}E$ である。身舎の規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は $18.96m^2$ を測る。

建物の柱穴配置をみると、西側梁行の中央の柱穴がみられない。また、東側梁行の中央の柱穴はやや北に寄った位置にみられる。

(75) 建物103

建物103(第145図)は、Mグループの北寄りの位置にある。

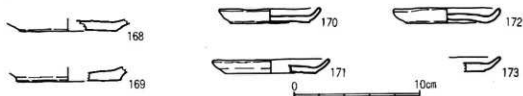
平面プランは長方形を呈し、南北方向に主軸をもつ。建物規模は梁行3間、桁行2間で、身舎面積は $33.44m^2$ を測る。主軸方位は $N2.5^{\circ}E$ である。

本建物の西側桁行ラインは、本建物の南西側に位置する建物98東側桁行ラインと一致することから、同時存在した可能性が強い。

建物を構成する柱穴から遺物が検出された(第143図)。

168、169は上師質土器坏底部である。両者とも糸切りで、体部が斜方向に立ち上がるようである。

170~173は土師質土器小皿である。このうち172はほぼ完形品で、西北側の柱穴から検出された。建物に係わる祭祀に伴い埋納されたものと思われる。小皿の口径は $8.0\sim 9.1cm$ を測り、いずれも底部糸切りで、体部が丸みをもち立ち上がる。以上は12世紀代のものか。



第143図 八坂本庄遺跡B区建物103出土遺物

(76) 建物104

建物104(第145図)は、Mグループの中央やや南寄りに位置する。

平面プランはやや長方形で、東西方向に主軸をもつ。規模は梁行2間、桁行4間で、身舎面積は $36.4m^2$ を測る。梁行に比し桁行が長く、細長い感じを受ける。

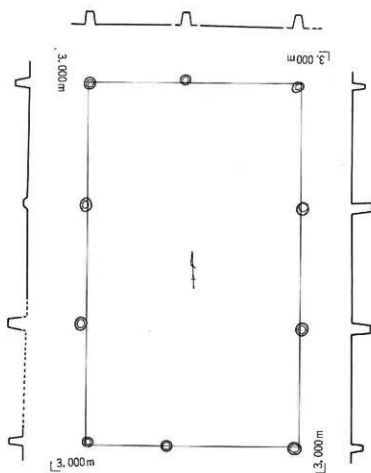
主軸方位は $N86.5^{\circ}E$ を測る。本建物と周辺の建物との関係を試みると、本建物の西側梁行が、北側に位置する建物96の西側梁行ラインと一致する。この両建物の梁行ラインをさらに北にのびすと、建物99の東側桁行ラインと重なってくる。この建物99南北梁行ラインは、建物99の東側にある建物100に南北両梁行ラインと一致する。以上から建物99、建物100、建物96、建物104は、同時存在した可能性が強い。

建物を構成する柱穴から白磁碗が検出された(第144図174)。白磁碗は中国製で、口縁部が外方にむけ短く折れる。12世紀中頃以降か。

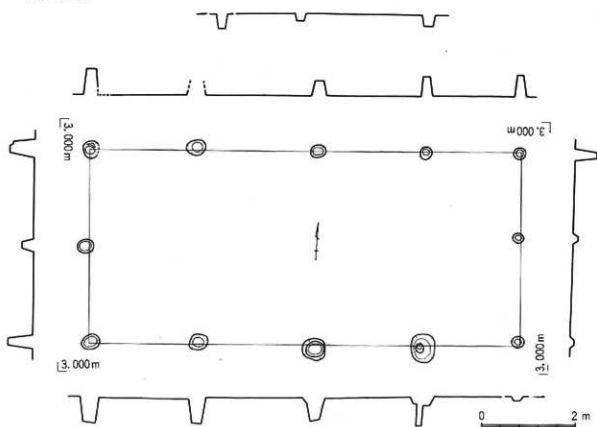


第144図 八坂本庄遺跡B区建物104出土遺物

建物103



建物104



第145図 八坂本庄遺跡B区掘立柱建物跡(43)

(77) 建物105

建物105(第147図)は、Mグループに属し、建物104、建物106と重複する。

建物は長方形プランを呈するもので、東西方向に長軸をもつ。建物規模は、梁行1間、桁行3間で、身舎面積は21.84㎡を測る。建物の柱穴配置の状況を見ると、南側桁行のうち西から2番目の柱穴がみられない。また、北側の梁行では、西端の柱間が他に比べ短い。

主軸方位はN87° Eで、重複している建物104とほぼ同じである。

(78) 建物106

建物106(第147図)は、Mグループの南寄りに位置する。

建物の平面プランは長方形で、東西方向に長軸をもつ。建物の規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は29.25㎡を測る。建物の柱穴配置をみても、南北両桁行とも中央の柱間の長さが、両端の柱間よりもやや長い状況が分かる。

主軸方位はN89° Eである。

(79) 建物107

建物107(第148図)は、Mグループの南端に位置する。

建物は、南北方向に長軸をもつもので、平面プラン長方形を呈する。建物規模は、梁行2間、桁行3間で、身舎面積は22.05㎡である。建物の柱穴配置をみても、南北両梁行の中央の柱穴が他に比べ極端に小さい。補助的な細い柱穴を立てたものであろうか。

建物方位はN2.5° Eである。

(80) 建物108

建物108(第148図)は、Nグループに属する。Nグループは、主として溝12の南側に展開する。

建物は東西方向に長軸をもつもので、平面プラン長方形である。建物規模は、梁行2間、桁行4間で、身舎面積は31.92㎡を測る。建物の柱穴配置をみても、西側梁行の中央の柱穴がみられない。また、両桁行では最も東側の柱間の長さが短い特徴をもつ。

主軸方位はN87° Wである。

建物を構成する柱穴から土器が検出された(第146図)。175は京都系のもので守状皿である。11世紀末～12世紀初のものであろう。176、177は土師器碗である。



第146図 八坂本庄遺跡B区建物108出土遺物

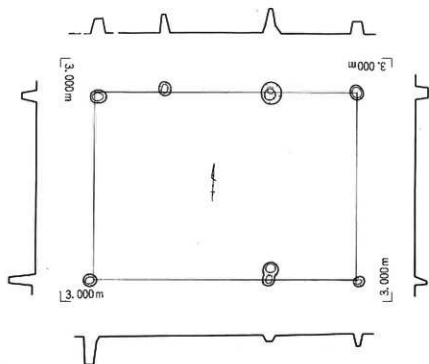
(81) 建物109

建物109(第149図)は、Nグループに属する。

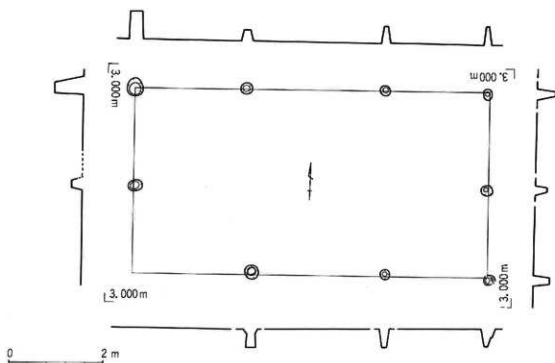
建物の平面プランは長方形を呈し、東西方向に長軸をもつ。建物の規模は、梁行2間、桁行4間で、身舎面積は36.48㎡を測る。建物規模的には、本遺跡の中では大型のうちにはいる。梁行に比し桁行が長いので、細長い感じを受ける。

主軸方位はN90° Wである。

建物105

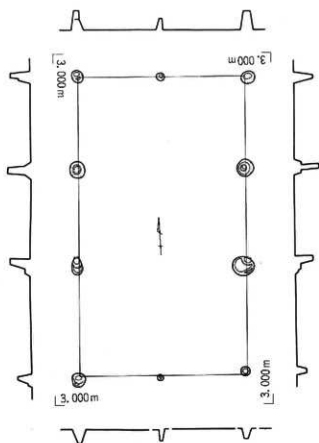


建物106

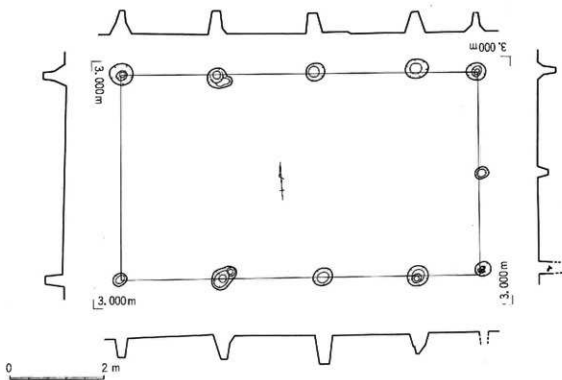


第147图 八坂本庄遺跡B区孤立柱建物跡(44)

建物107

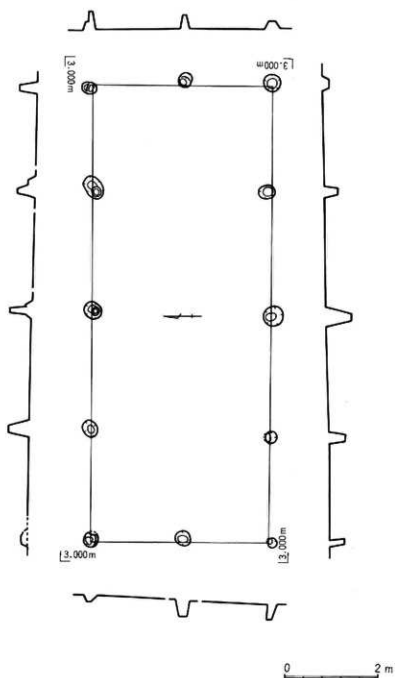


建物108



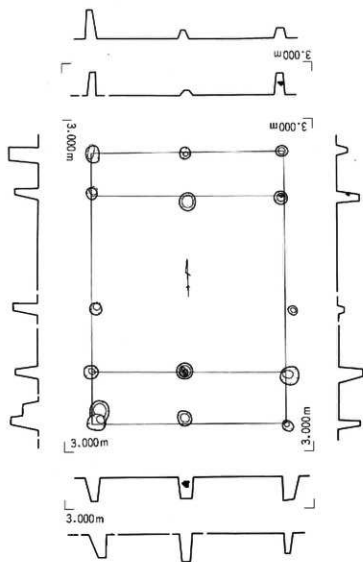
第148図 八坂本庄遺跡B区掘立柱建物跡(45)

建物109

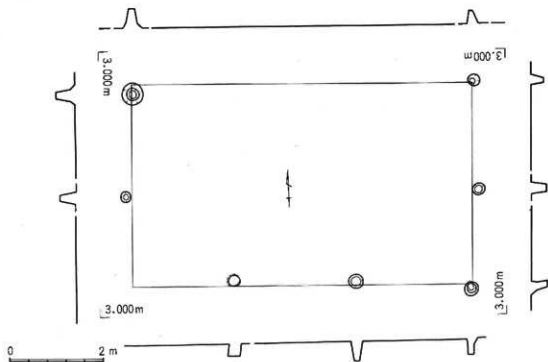


第149図 八坂本庄遺跡B区掘立柱建物跡(46)

建物110



建物111



第150图 八坂本庄遺跡B区据立柱建物跡(47)

(82) 建 物110

建物110(第150回)は、Nグループの最も北に位置する。

建物は北側と南側の2面に庇をもつ。平面プランは方形プランにちかいが、わずかに東西方向に長い。主軸方位は $N88^{\circ}W$ である。身舎部分の規模は梁行2間、桁行2間で、身舎面積は $14.8m^2$ を測る。

本建物の南側には建物108が位置するが、本建物の最も西側の柱列が、建物108の西側梁行ラインと一致しており、同時存在したものと思われる。

また、本建物は溝12をまたぐ状況にある。本遺跡では溝がかなりみられるが、多くの場合建物は溝をまたいだり、切り合い関係にあったりはしない。これは建物が、溝を意識して、あるいは溝に規制され建てられたためと考えられる。

(83) 建 物111

建物111(第150回)は、A区とB区にまたがって位置する。A区の建物群は、全体として大きなまとまりとして捉えることができる。本建物はA区の建物群と、Mグループの間にあることになる。

建物は、A区とB区の境部分に若干の未調査部分が生じたため全容は不明であるが、長方形プランを呈するものと考えられる。建物の規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は $30.96m^2$ と推定される。

主軸方位は $N88^{\circ}W$ である。

(84) 小 結

B区内の建物について各グループに沿って述べてきたが、簡単にまとめると以下ようになる。

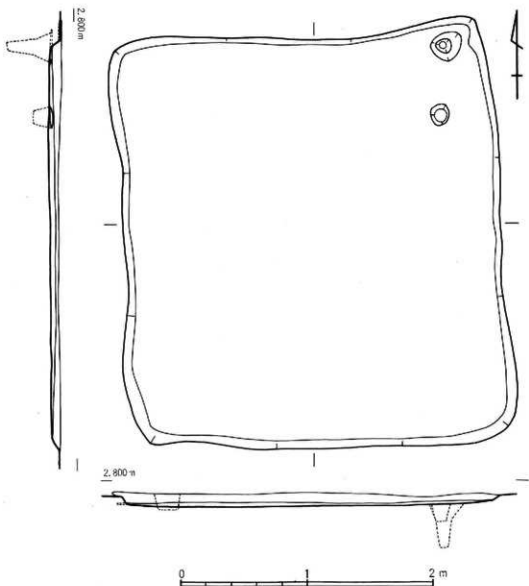
- ① B区内の建物のうち、Fグループに14世紀前半と思われる一群(建物51、建物53、建物54、建物58、建物59、建物60)が認められるが、それ以外については11-12世紀代のものと思われる。
- ② B区内の11-12世紀代の建物群は、現状においてA-Nグループのまとまりとしてとらえられる。これらのうちF、II、I、Mグループは、各グループ内でさらに細かいまとまりに分けられる。
- ③ 各グループ内においても、建物間に重複があったり、方位が異なったりするので、建物群に少なくとも2段階の変遷があったものと思われる。
- ④ 各グループの建物群は、基本的に2、3棟を1単位とする場合が多いが、Mグループなどではそれよりも多い建物群が1単位になりそうなものもある。
- ⑤ 1単位の建物構成をみると、建物規模がそれほど顕著に違わないものが多い。
- ⑥ 各単位の建物規模をみると、緩やかではあるがその差を認めることができる。
- ⑦ 建物が溝が重複したり、切り合ったりする例はほとんどないため、溝を意識したり規制され建物群が展開しているものと思われる。各グループは、溝により区画されるもの(Lグループ)、一部を溝により区画されるもの(F、I、Nグループ)、溝による区画をもたないものに分けられる。
- ⑧ 溝10は、集落内のある意味の区画と考えられる。溝10の東側には、一部または全体を溝で区画されたり、やや大型の建物のみで構成されるのがみられるなど、溝10を境に緩やかな差が認められる。

2 竪穴

本調査区で竪穴としたものは1基のみである。平面プランが方形など定型化し、やや大型なものを竪穴とした。しかし、形態的には土壌のなかにも竪穴にちかいいものもある。基本的に、土層があるものを竪穴、土層がないものを土填とした。

(1) 竪穴1

竪穴1（第151図）は、B区の西北隅ちかくに位置する。本竪穴は、Bグループに属する建物49、建物50と重複しており、両建物より後出する。竪穴の平面形は方形にちかいが、わずかに南北が長い。その規模は東西3.0m、南北3.3mで、主軸方位はN4°Wである。深さは検出面から0.05～0.1mと浅く、床面は平坦である。床面には、東北隅に柱穴が2本みられるのみであるが、本竪穴に伴うかは不明である。出土遺物は認められない。



第151図 八坂本庄遺跡B区竪穴1

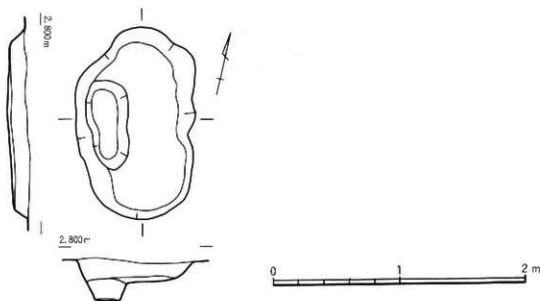
3 土 塙

B区では、数十基の土塙が確認された。形態にバリエーションが認められ、性格的にも農業用灌漑井戸や廃棄土塙と思われるものなど様々なものがある。以下では、そのうち主要なものについて概要を述べる。

(1) 土 塙27

土塙27(第152図)は、B区西北隅付近に位置する。土塙の西側約6mには、Eグループの建物である建物49と建物50や竪穴1がみられる。

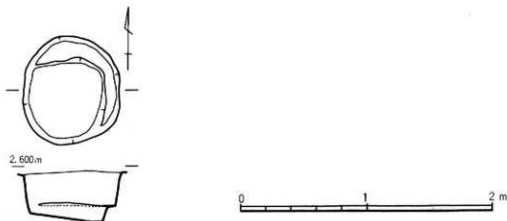
土塙は楕円形基調を呈するもの、遺構ラインは乱れ気味である。南北方向に長いもので、長径1.5m、短径0.95mを測る。床面の西壁が高いは、さらに一段深くなる。目立った出土遺物はなく、時期は不明である。



第152図 八坂本庄遺跡B区土塙27

(2) 土 塙28

土塙28(第153図)は、建物のE、F、Gグループの間に位置する。

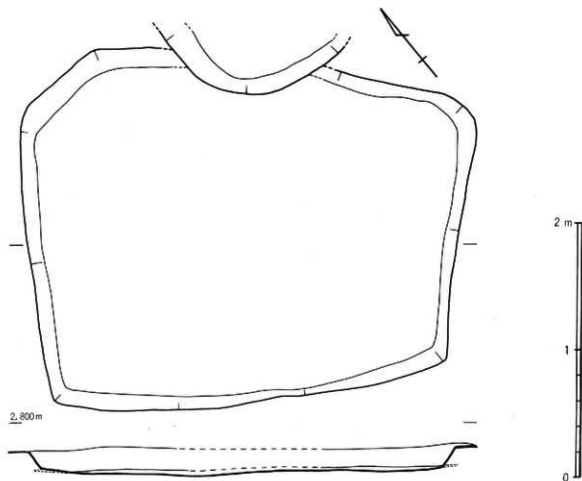


第153図 八坂本庄遺跡B区土塙28

土塙は円形基調を呈するもので、径0.75～0.85mを測る。土塙内の北から東にかけては段がつく。深さは検出面から0.3～0.4mで、目立った出土遺物はなく時期は不明である。

(3) 土 塙29

土塙29(第154図)は、建物のFグループ東側に位置する。本土塙の周辺には土塙の密集がみられる。なお、隣接する土塙30に切られる。土塙は長方形基調を呈するもの、台形気味で整然さに欠ける。規模は長さ3.4m、幅2.0～2.8mである。深さは検出面から約0.2mで、床面はほぼ平坦である。土塙内には、柱穴などの遺構はみられない。また、目立った出土遺物もなく、時期は不明である。形態的には、整然さを欠くものの堅穴にちかいことから、堅穴の範疇で考えた方がよいかもしれない。



第154図 八坂本庄遺跡B区土塙29

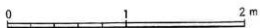
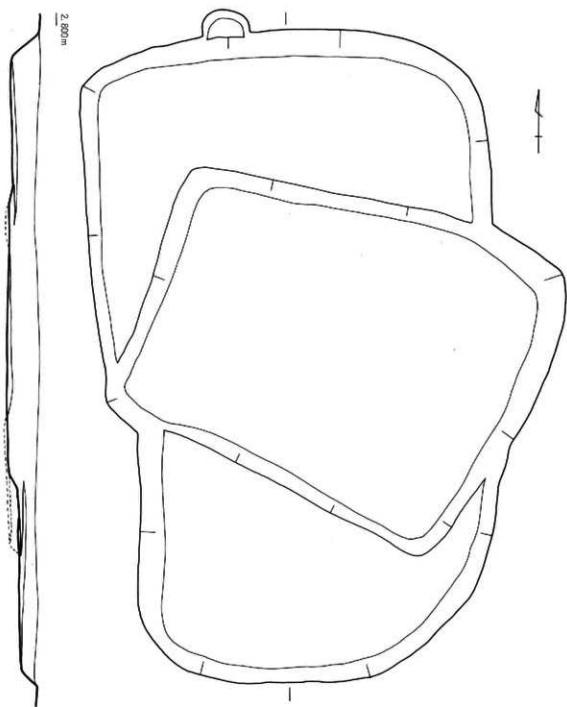
(4) 土 塙30

土塙30(第155図)は、土塙28の北側に展開する。本土塙は長方形基調の土塙が3基切り合うもので、中央のものが北側及び南側の土塙を切る。中央の土塙は台形気味の長方形で、長さ3.2m、幅2.0～2.5mの規模をもつ。中央に切られた北側と南側のものも同様な規模と推定されるが、南側のものはやや不整形気味である。出土遺物から、全体として12世紀前半に比定される。本土塙群も土塙29と同じように、その形態から堅穴とした方がよい可能性もある。いずれにしても、同じ形態を呈するものがほぼ同位置で作り替えられていることが分かる。

・出土遺物

本土塙出土遺物(第156図)のうち、178は赤緑1線を有する白磁釉の体部と思われる。11世紀後半から12世紀

前平のもの。179は上鍋で、12世紀中頃以降であろう。このほかに凹石（第223図448）が検出された。



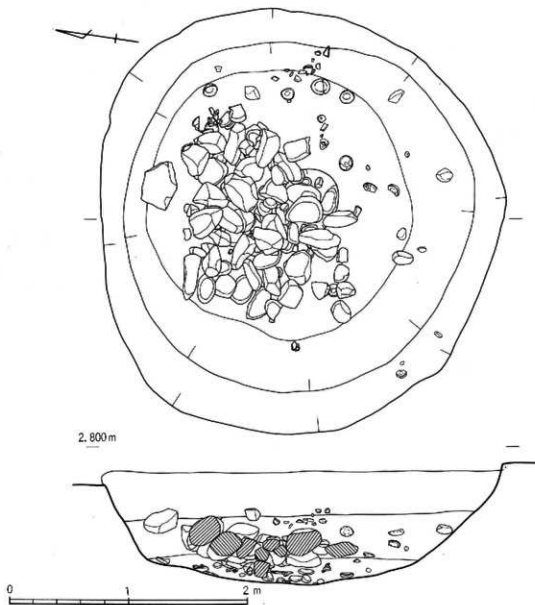
第155図 八坂本庄遺跡B区土溝30



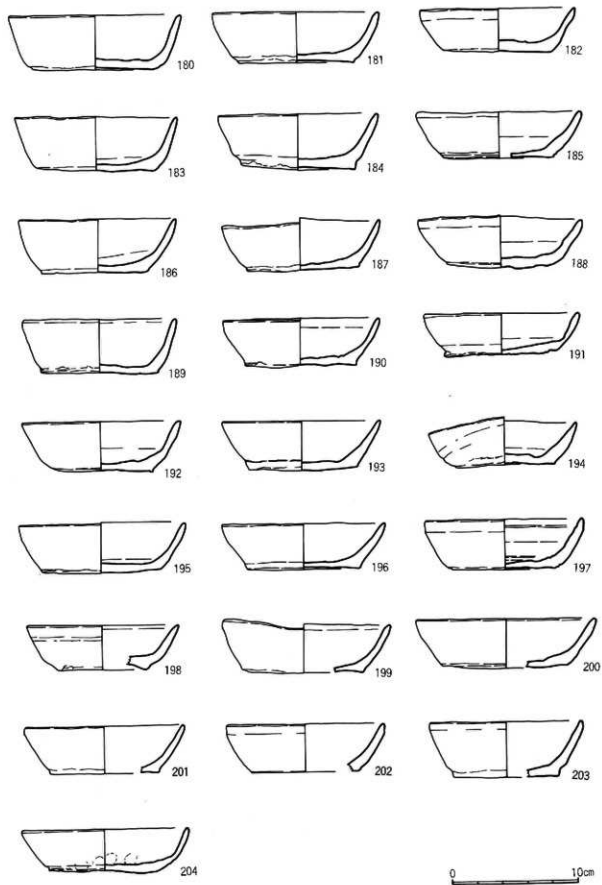
第156図 八坂本庄遺跡B区土壌30出土遺物

(5) 土 坑31

土坑31(第157図)は、土坑30などの東側に位置する。溝10あるいは土坑32と重複するが、これらを切っている。



第157図 八坂本庄遺跡B区土坑31



第158图 八坂本庄遺跡B区土壇31出土土器(1)

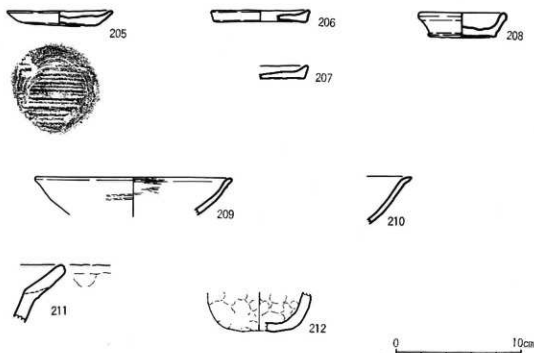
土壇は円形を呈するもので、径は3.4～3.6mを測る。壇の立ち上がりについては、北側から東側にかけて比較的急であるが、他の部分は緩やかに底部にむかう。底部は径約2.3mで、皿状を呈し平坦にならない。土基内には0.1～0.4mを測る多くの礫が投棄された状況で確認された。礫の間などには土師質土器片が多数みられ、そのなかには完形品も多く含まれる。これらは礫とともに意識的にいれられたものと思われ、状況的に土壇を築る際の祭祀に係わる可能性が高い。土器から、本土壇は14世紀前半に築られたと考えられる。

本遺構の位置を旧宇図(第74図)で確認すると、北からのびる水路Eが東に直角に折れる付近にあたる。七塚は、水路Eの南側に水路に沿うようにあったものと想定される。このような状況から、本土壇は、水路灌溉を補完する役割を担う農業用灌漑井であったと思われる。掘削の時期は明らかにできないが、14世紀前半の段階で築める必要が生じたため、祭祀を行なった後に埋め戻されたものであろう。

・出土遺物

土壇から検出された土器(第158、159図)のうち、180～204は土師質土器片である。完形品も多く含まれるが、その大部分の口径は12cm代である。底部は承切りで、体部は直立気味に立ち11線にいたる。体部の立ち上がり部をみると、大きく2タイプの特徴がある。ひとつは、やや丸みをもつもの。もうひとつは、底部からわずかに直立し、そののちに体部が立ち上がるものである。後者の方が優勢である。205～208は土師質土器小皿である。205は口径8.2cmを測るもので、厚い底部から薄い体部が斜方向に引き上げられる。206、207は体部が短く直立する。208は器高が2cmにちかいため、祭りを行なった後に埋め戻されたものであろう。

209は土師器碗、210は白磁碗、211は土鍋で、いずれも12世紀代のものである。212は、口縁部を欠く子狸ねの小型品である。

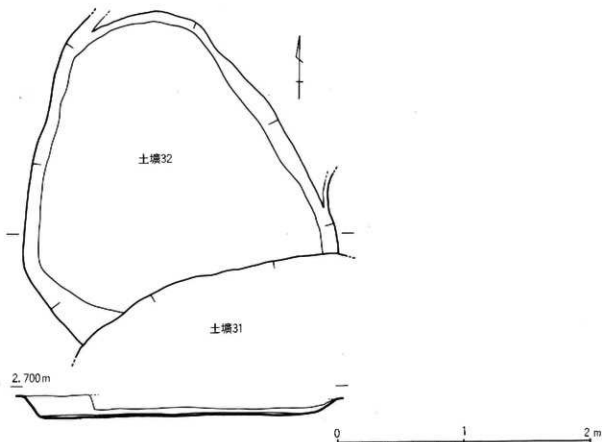


第159図 八坂本庄遺跡B区土壇31出土土器(2)

(6) 土壇32

土壇32(第160図)は土壇31の北側に隣接するもので、土壇31により切られるが、溝10を切っているものと思われる。土壇の全形は不明であるが、やや不整形気味の楕円形を呈するようで、南北方向に長軸をもつ。深さは

検出面から約0.2mと比較的浅い。遺構からは目立った遺物が検出されず、時期は不明である。



第160図 八坂本庄遺跡B区土壙32

(7) 土壙33

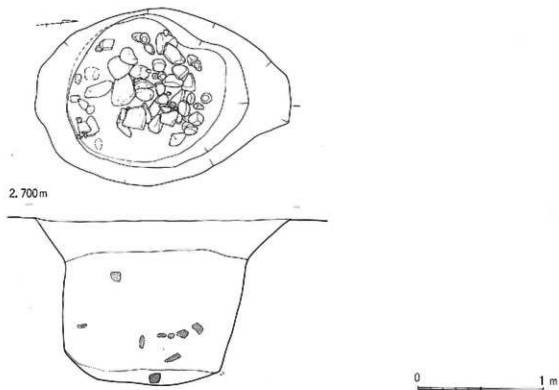
土壙33 (第162図) は、土壙31、土壙32の西側に隣接する。土壙の平面形は、検出面では楕円形を呈する。南北方向に長軸をもつもので、長径2.05m、短径1.4mを測る。底面は径1.2mほどの円形で、深さは検出面から1.3mを測る。壁は風状をなす底面から垂直気味に立ち上がり、上面ちかくにいたり斜めに開く。土壙内には0.05～0.25mの線が多数みられ、いずれも投棄されたものと思われる。本土壙は農業用水路と推定される溝10に隣接した位置にあり、水路灌漑を補完する農業用灌漑井と推定される。時期は12世紀代に比定される。

・出土遺物

土壙から検出された土器 (第161図) は、213の土師器碗である。口縁部を欠くが、やや外反するものと思われる。12世紀初め前後のものか。このほか、凹石 (第223図446、447) も検出された。



第161図 八坂本庄遺跡B区土壙33出土土器

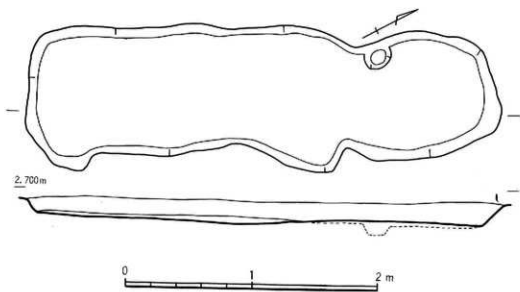


第162図 八坂本庄遺跡B区土壌33

(8) 土 坑34

土坑34（第163図）は、土坑32の南側に位置する。

土坑は細長いもので、長方形基調を呈する。その規模は、長さ3.7m、幅1.1mを測り、深さは検出面から0.2mと比較的浅い。土坑からは目立った遺物が検出されず、時期は不明である。

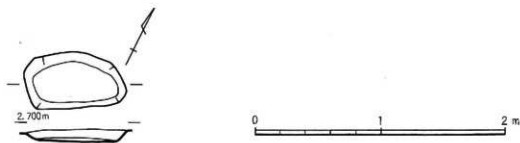


第163図 八坂本庄遺跡B区土坑34

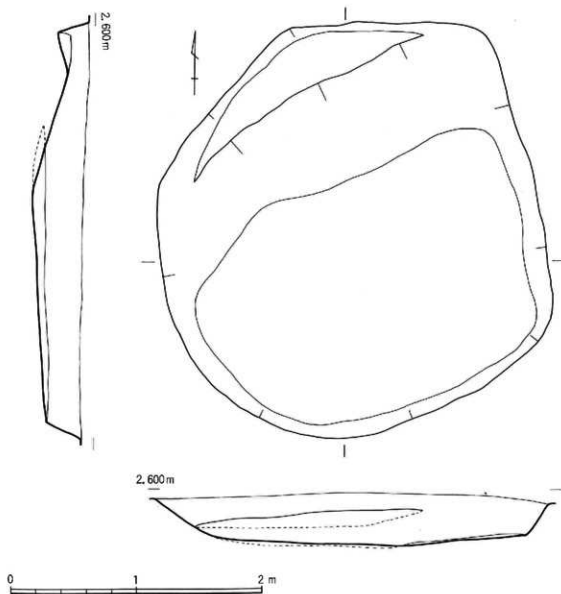
(9) 土 壙35

土壙35 (第164図) は、Fグループの建物群の南端に位置する。

土壙は比較的小規模なもので、楕円形を呈する。その規模は、長径0.8m、短径0.45mを測る。深さは、検出面から0.1mである。土壙からは目立った遺物が検出されず、時期は不明である。



第164図 八坂本庄遺跡B区土壙35



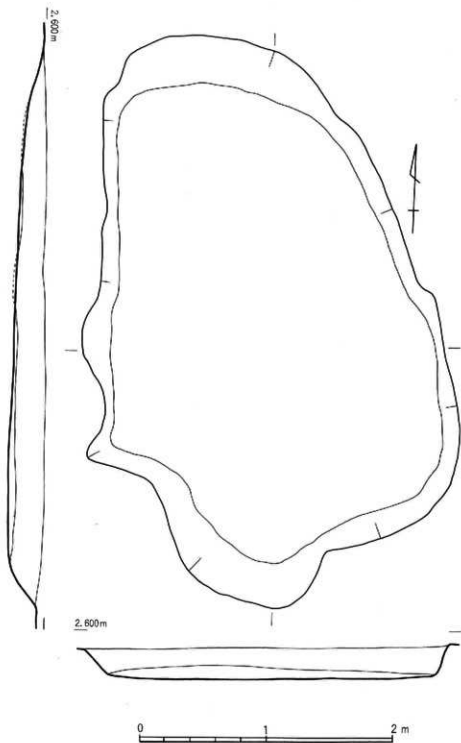
第165図 八坂本庄遺跡B区土壙36

(10) 土 壙36

土壙36 (第165図) は、Dグループの建物である建物43の北側に位置する。

土壙は方形気味の不整形を呈するもので、南北3.2m、東西3.1mを測る。北側の壁は緩やかで、いったんテラスを形成した後に緩やかに下る。深さは検出面から0.4mである。土壙内からは目立った遺物が検出されず、時期は不明である。

DグループからAグループにかけての部分には、本土壙と同様なものがいくつかみられる。



第166図 八坂本庄遺跡B区土壙37

(11) 土 塚37

土塚37（第166図）は、建物のAグループとDグループの中間に位置する。

土塚は不整形気味の楕円形を呈する。規模は長径4.2m、短径2.8mを測り、深さは検出面から0.2mである。土塚からは土器の細片が若干検出された。それらから、土塚の時期は12世紀代に比定される。

・出土遺物

土塚から検出された土器（第167図）のうち、214は土師質土器片で、底部は糸切りである。体部は丸みをもち、斜方向に立ち上がる。215、216は土師器碗で、内外面にヘラミガキがみられる。全体として12世紀の所産である。



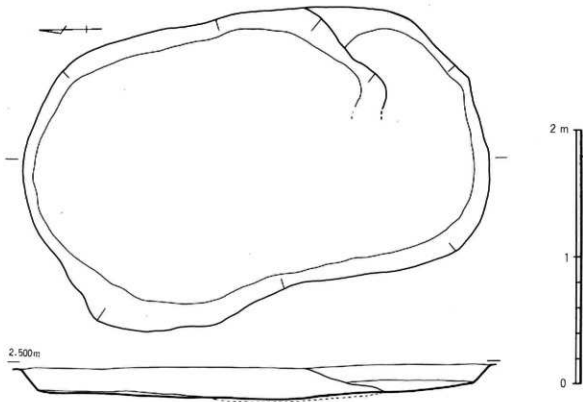
第167図 八坂本庄遺跡B区土塚37出土土器

(12) 土 塚38

土塚38（第168図）は、Aグループの近くに位置する。

土塚はやや不定形気味の楕円形を呈するもので、規模は長径3.6m、短径2.2mを測る。深さは、検出面から0.2～0.25mである。土塚内からは少量の土器片が検出されたのみで、13世紀後半～末に位置付けられる。

・出土遺物



第168図 八坂本庄遺跡B区土塚38

土塚から検出された土器（第169図）のうち、217は瓦器碗底部と思われる。やや生焼け気味で、土師器にちかい。底面は平坦で、底面の端に低い高台が付される。13世紀中頃に比定される。



第169図 八坂本庄遺跡B区土塚38出土土器

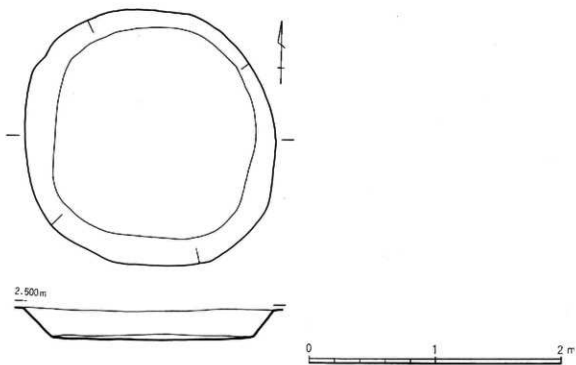
(13) 土塚39

土塚（第170図）は調査区の西端に位置し、土塚40と並ぶようにみられる。

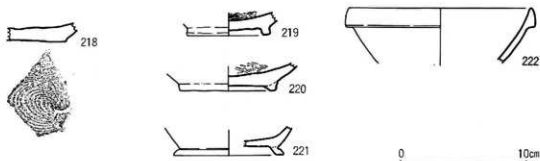
土塚は円形を呈し、その規模は径2.0mを測る。深さは検出面から0.2mで、床面は平坦である。土塚内から検出された遺物により、時期は12世紀前半に位置付けられる。

・出土遺物

土塚から検出された土器（第171図）のうち、218は土師質土器坏である。底部に糸切りが残るもので、体部の



第170図 八坂本庄遺跡B区土塚39

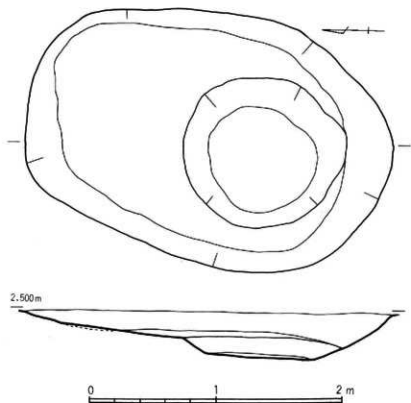


第171図 八坂本庄遺跡B区土塚39出土土器

立ち上がりはシャープである。219～221は土師器碗である。219、220の外底面には糸切り痕がみられ、断面方形で太くやや低めの高台が付される。221は外開き気味の高台が付くものである。これらは、12世紀初め前後のものであろう。222は玉縁1線をもつ白磁碗で、11世紀後半～12世紀前半に位置付けられる。

(14) 土 塚40

土塚40(第172図)は、土塚39とともに調査区西端に位置する。土塚は南北に長い楕円形を呈し、その規模は長径2.9m、短径2.0mを測る。深さ0.2mで床面に達するが、床面には径1.2mほどの円形の土塚がみられる。この土塚は、床面からさらに0.15mの深さである。目立った遺物がなく、土塚の時期は不明である。



第172図 八坂本庄遺跡B区土塚40

(15) 土 塚41

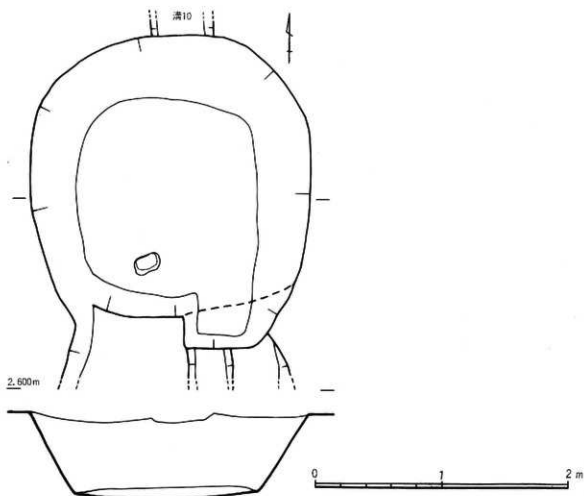
土塚41(第173図)は、溝10から溝13が分かれる付近にあり、溝10を切る。

土塚は円形基溝を呈するもので、径2.2mを測る。深さは検出面から0.6mで、床面は平坦である。土塚内からは土器片が検出されており、これらから、土塚の時期は12世紀中頃～後半と推定される。

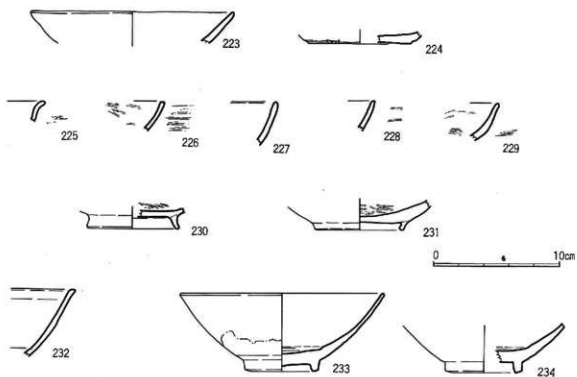
・出土遺物

土塚から検出された土器(第174図)のうち、224は土師器土器平である。底部は糸切りで、復元口径8.2cmを測る。

223、225～230は土師器碗である。このうち223は口縁部で、復元口径16.2cmを測る。体部は斜方向にのび、そのまま口縁部にいたる。内外面ともヘラミガキは認められない。225～229は口縁部であるが、いずれも小破片である。225は1線が外反する。227を除き、内外面にはヘラミガキが残る。230は底部で、比較的高い高台が付く。



第173圖 八坂本庄遺跡B区土壙41



第174圖 八坂本庄遺跡B区土壙41出土土器

231は瓦器碗である。やや高めの高台が付くもので、内外面にヘラミガキがみられる。12世紀中頃～後半か。

232は白磁碗で、口縁端部が外方に引き出される。233、234は白磁碗である。内底面の軸が輪状にかきとられ、外面下岸も露胎である。これらは、12世紀中頃～後半に比定される。

(16) 土 塙42

土塙42(第175図)は、土塙41の北側3mに位置するもので、溝10に接するように溝10の東側にみられる。

土塙は平面プラン円形を呈し、径1.5~1.6mを測る。壁は2段掘り状をなし、いったん検出面から約0.7mの深さまで斜めに下げた後に、垂直に掘り下げ底面にいたる。底面までの深さは、約1.1mである。时期的には、12世紀中頃に位置付けられる。

本土塙はその形態から用水路による灌漑を補完する役割を担う農業用灌溉井戸であると思われる。しかし、井戸と称するものの、常に十分な水が湧くものではなく、むしろ溜め井的性格が強いと考えられる。

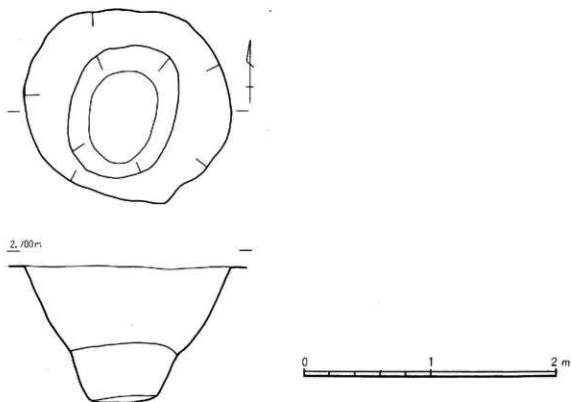
・出土遺物

土塙から検出された土器(第176図)のうち、235、236は土師質土器坏で、235の復元口径は15.0cmである。口径や器形からみて12世紀代のものであろう。

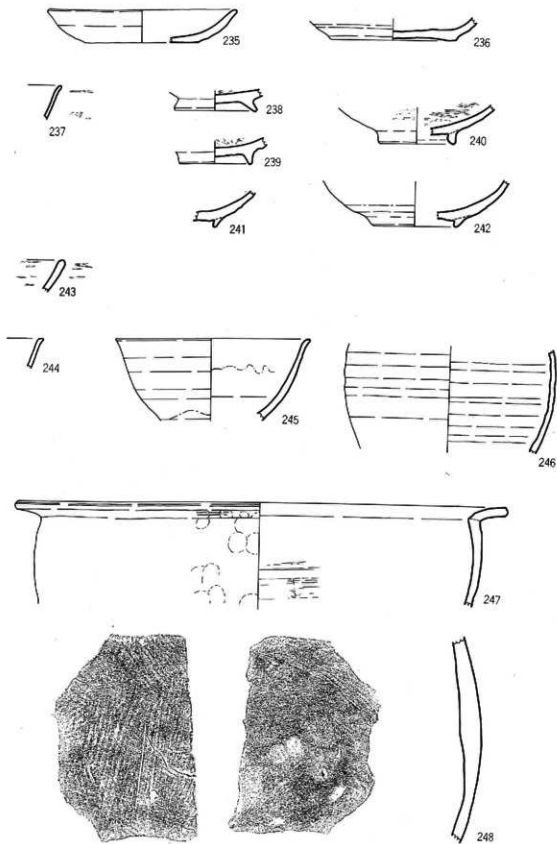
237~242は土師器碗である。237は口縁部で、緩やかに外反する。238~240はやや高めの高台が直立ないしは外開き気味に付される。また、241と242は同一個体と思われるもので、内傾する高台が付く。以上のうち、239、241、242の外底面には糸切り痕が残る。243は内黒土器碗である。241、242が12世紀中頃に下るか。

244、245は白磁碗で、244は口縁端部が外方に引き出される。245はやや丸みをもつもので、体部下半は露胎である。244は12世紀中頃以降、245は12世紀前半までに主体を置くものである。246は壺か、緑色気味の釉がかかる。

247、248は土甗である。247は口縁がL字状に折れる。12世紀の中頃のものか。



第175図 八坂本庄遺跡B区土塙42



0 10cm

第176团 八坂本庄遗址B区土壤42出土土器

(17) 土 塋43

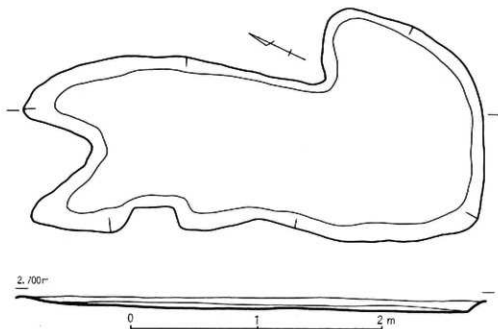
土塋43(第177図)は、方形に近る溝11の北側に位置する。溝11は溝10との間隔を約3mとり、溝10と平行して走る。土塋42は、すぐ北側に位置する土塋43とともに、溝11の延長上を溝10と平行するようにみられる。

土塋は南北に長いもので、不定形を呈する。規模は南北3.65m、東西1.4~1.8mである。本土塋の東側には土塋44、土塋45が並ぶように位置しており、本来は土塋43も加えて、溝10と溝11と方位を同じくする1字状の溝であった可能性も考えられる。

時期は、12世紀前半か。

・出土遺物

土塋から検出された土器(第178図)のうち、249は内黒土器碗である。底部は水平で、やや細めの高台が付く。内面にはヘラミガキがみられる。11世紀後半か。



第177図 八坂本庄遺跡B区土塋43

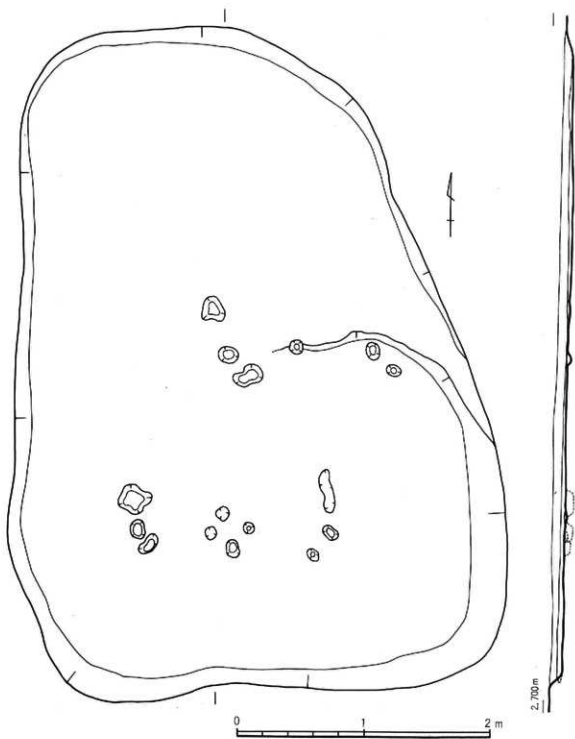


第178図 八坂本庄遺跡B区土塋43出土土器

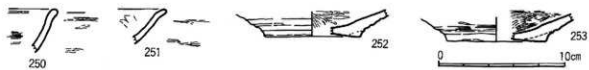
(18) 土 塋44

土塋44(第179図)は、土塋42の北側に位置する。

大型の土塋で、台形気味の平面形を呈する。南北方向に長く、その規模は長さ5.2m、幅3.95~2.9mである。深さは検出面から約0.1mと浅く、床面は平坦であるが、若干の段落ちが認められる。床面中央部からやや南側には、浅い小穴がみられる。規模的にみて、堅穴などの可能性も考えられるが、平面形に整然さがみられず、ここでは土塋としてとらえておく。土塋内からは土器などが検出されたが、いずれも小片で、遺構の大きさに比し量的に少ない。時期は11世紀後半~末か。



第179图 八坂本庄遺跡B区土壕44



第180图 八坂本庄遺跡B区土壕44出土土器

・出土遺物

土壌から検出された土器（第180図）のうち、250、251は内黒土器柄の口縁部である。両者とも小破片であるが、わずかに外反する。252、253は内黒土器碗の底部である。いずれも円盤状高台を呈し、252の底部には糸切り痕が残る。11世紀後半～末のものか。

(19) 土 壌45

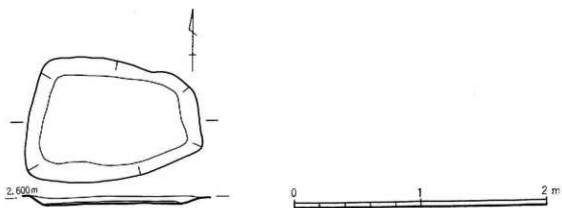
土壌45（第181図）は、方形を呈する溝11の北側に位置する。土壌は、土壌43、土壌44などと併せて、一連の溝であった可能性もある。原横は東西1.4m、南北1.1mを測り、深さは0.05mと非常に浅い。土壌内から目立った遺物は確認されず、時期は不明である。



第181図 八坂本庄遺跡B区土壌45

(20) 土 壌46

土壌46（第182図）は、方形を呈する溝11の北側に土壌43、土壌45と併せL字状に並ぶ。土壌は長方形基調を呈し、長さ1.4m、幅0.7～0.9mを測る。やはり深さは、0.05mと非常に浅い。土壌内から目立った遺物は確認されず、時期は不明である。

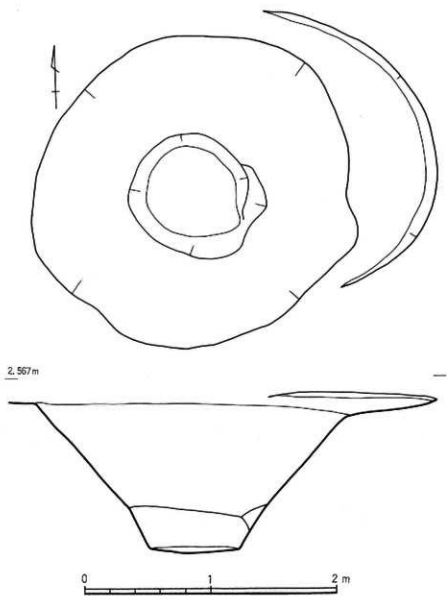


第182図 八坂本庄遺跡B区土壌46

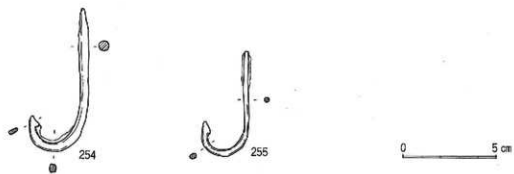
(21) 土 壌47

土壌47（第183図）は、溝10が調査区の南端近くで途切れる付近に所在する。溝10の約1.5m東に位置し、土壌の東側には部分的に溝により区画されたNグループの遺物がある。

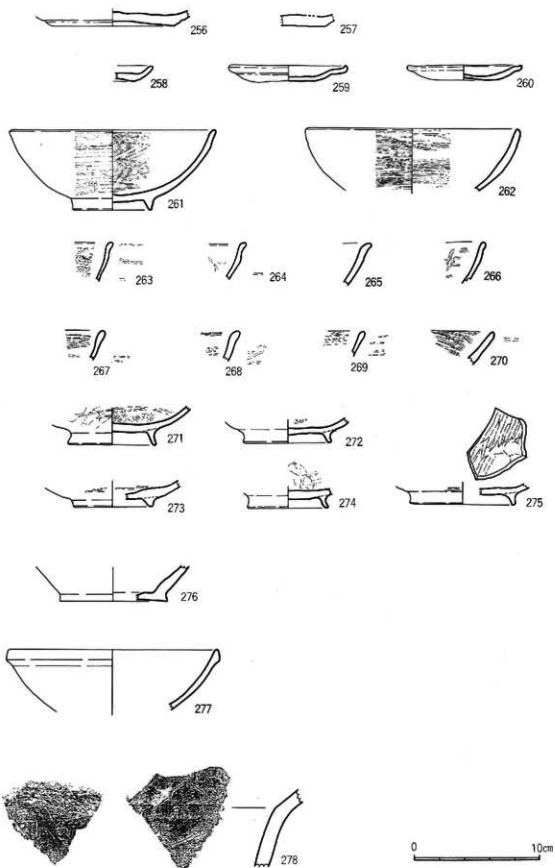
土坑は平面プラン門形を呈するもので、径約2.5mを測る。壁は斜方向に緩やかに下り、深さ0.8m付近からやや傾斜をきつくして底面にいたる。底面は径0.7mの円形で、上面に比べると極端に狭い。底面までの深さは、



第183図 八坂本庄遺跡B区土坑47



第184図 八坂本庄遺跡B区土坑47出土金属製品



第185図 八坂木庄遺跡B区土壌47出土土器

検出面から1.25mである。時期的には12世紀初め前後に位置付けられる。

本土壇は、その形態から農業用灌漑井戸と思われる。しかし、井戸と称しながら常に水が十分に湧くものではなく、基本的には用水路の余り水や雨水を溜める溜め井的役割をもつものであろう。

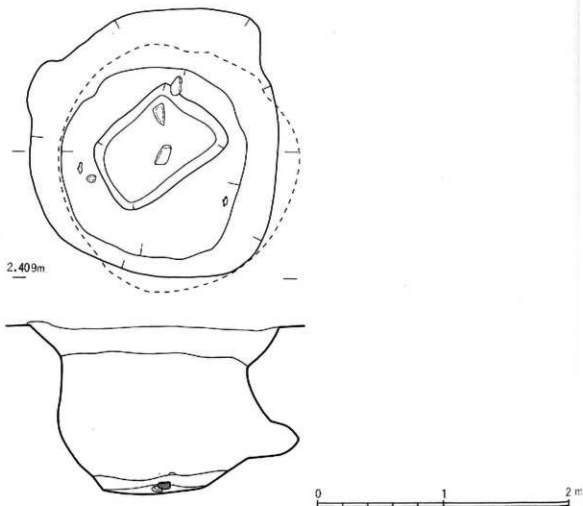
・出土遺物

土壇から検出された遺物には、金属製品（第184図）と土器（第185図）がある。254、255は鉄製の釣り針で、両者とも大型である。断面は基本的に丸いが、先端部についてはかえりを打ち出したためか扁平である。

256、257は土師質土器杯である。256は復元口径9.6cmを測る。258～260は土師質土器小皿である。このうち、259と260は京都系のもので字状皿である。両者とも口径9.2cmと小型化が進行しており、11世紀末から12世紀初めの製品と思われる。261～275は土師器碗である。口縁部には、わずかに外反するものとしないものがある。体部内外面にはていねいなヘラミガキがみられる。このうち261は、底部が押し出しで吉備系土師器と考えられる。高台は273を除き、比較的高い。また、261、272、273の外底面には糸切り痕がみられる。大部分は12世紀初前後のものか。276は須恵器碗の底部で、外底面には糸切りが残る。高台は付かず、東播系の製品か。277は白磁碗で、やや小型の玉縁がつく。278は土鍋で、頸部からくの字状に折れ口縁にむかう。

(22) 土壇48

土壇48（第186図）は、建物のAグループ、Bグループ、Dグループの中間に位置する。

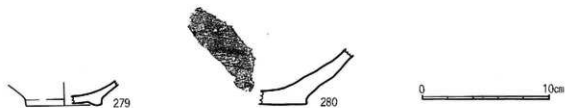


第186図 八坂本庄遺跡B区土壇48

上層の平面形はやや不整形気味で、径2.0～2.1mを測る。壁はいったん斜方向に緩やかに下り、深さ0.2～0.3mで傾斜を変えて直立気味になる。現状で、ややオーバーハングした部分も認められる。最終的に底面は長さ1.0m、幅0.7mの長方形を呈し、底面までの深さは1.3mを測る。上層から検出された土器は少なく、いずれも小破片であるが、時期的には12世紀前半に位置付けられる。本上層は、その形状から農業用灌漑井戸と思われる。

・出土遺物

上層から検出された土器（第187図）のうち、279は白磁碗の底部である。口縁が玉縁をなすもので、11世紀後半から12世紀前半のものである。280は須恵器釜底部である。



第187図 八坂本庄遺跡B区土壌48出土土器

(23) 土 塘49

土塘49（第189図）は、土塘29、土塘30の北側に位置する。しかし、一部は調査区外に及ぶため、全形は定かではない。

土塘の平面形は、東西に長い楕円形基調を呈していたものと推定される。その規模は、東西3.5m、南北2.4mを測る。土塘内の壁について、東側は階段状に、そのほかはそのままほぼ直立気味に深さ1.2～1.3mまで及ぶ。そこでいったん傾斜を変え、再び下り下がる。底面は径0.8～1.0mの円形を呈し、深さは1.65mにも達する。土塘内からは京側から大小の礫が投棄された状態で検出されたほかは、若干の遺物がみられるのみである。本土塘が掘削された時期は明らかにすることができないが、埋没の時期は、遺物から11世紀後半に位置付けられるものと思われる。

本土塘は農業用灌漑井戸と考えられる。しかし、井戸と称しながら常に十分な水は湧かない。調査時でも雨天直後は湧水となるが、しだいに水はひき、通常は底の方のみ水がわずかに溜まるのみである。また、井戸枠などがみられず、土掘りである点共通する。以上から、飲料用の井戸ではなく、雨水や余り水を溜める溜め井の性格の井戸と推定される。位置的には、本土塘の敷地東を幹線水路と思われる溝10が走っている。他遺跡では、幹線水路である溝と井戸が小溝で結ばれた例も確認されており、本遺跡でも場合によっては水路と井戸がつながることも想定される。本遺構は、水路灌漑を補完するための補助的な農業用灌漑施設で、本遺構が主体となり灌漑したものではない。

・出土遺物

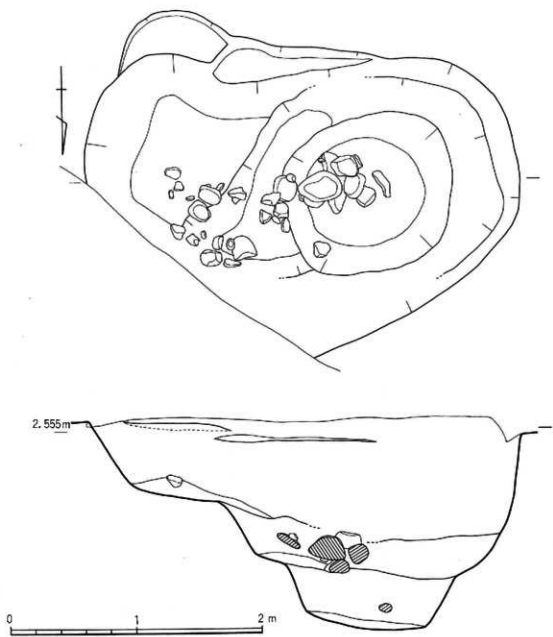
土塘からは若干の上器（第188図）が検出されたが、いずれも内黒土器碗である。

281は口縁部で、端部は丸くおさめられる。282、283は底部資料である。両者とも高台はやや高く、外開き気味である。283の外底部には糸切り痕が明瞭に残る。

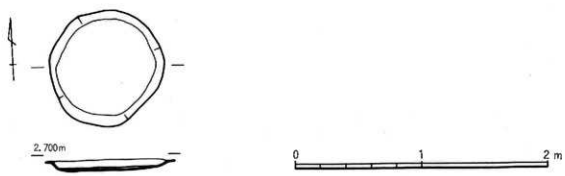
以上は11世紀後半のものか。



第188図 八坂本庄遺跡B区土壌49出土土器



第189図 八坂本庄遺跡B区土壕49



第190図 八坂本庄遺跡B区土壕50

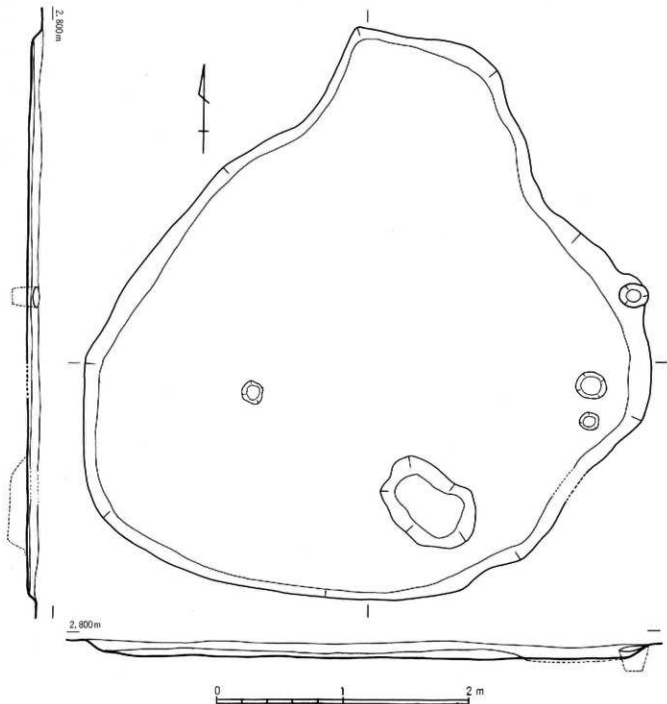
(24) 土 壙50

土壙50（第190図）は、建物のDグループの中に位置する。

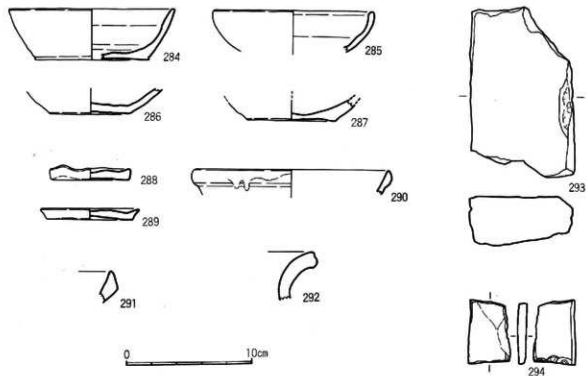
平面プラン円形を呈し、径は0.9mを測る。深さは検出面から0.1mで、比較的浅いものである。遺構からは目立った遺物は検出されず、時期は不詳である。

(25) 土 壙51

土壙51（第191図）は、調査区の西北隅近くに位置する。この付近には、建物のFグループが展開しているが、このうち建物51、建物53、建物54、建物59、建物60などは14世紀前半に位置付けられ、他は12世紀代と思われる。



第191図 八坂本庄遺跡B区土壙51



第192図 八坂本庄遺跡B区土壌51出土遺物

土壌は不定形を呈し、東西4.5m、南北4.5mを測る。深さは検出面から0.1mと浅いが、床面は平坦である。床面には若干の土層と柱穴がみられるが、本土壌に伴うものかは不明である。

土壌内からは比較的多くの遺物が検出されたが、その多くは細片であった。

・出土遺物

土壌から検出された遺物（第192図）のうち、284～287は十師賀土器環である。284は復元口径13.2cmを測るもので、体部は直立気味である。285は体部内湾気味である。286は底部から斜方向に立ち上がるものである。284は14世紀前半に位置付けられる。

287は瓦器碗で、底部は平底である。東国東型瓦器碗とされるもので、13世紀の後半段階には、本土器と同様な平底形態となっている。しかし、これ以後の動きが現状では明らかになっておらず、この平底の瓦器碗が13世紀後半代の泥ざり込みか、時期的に下るものか他遺跡の例などを見極める必要がある。

288、289は十師賀土器小皿である。288は短い体部が上方に引き上げられる。289の体部は短く斜方向にのびる。

290は玉縁口縁の白磁碗である。12世紀前半までに主体を置くものである。

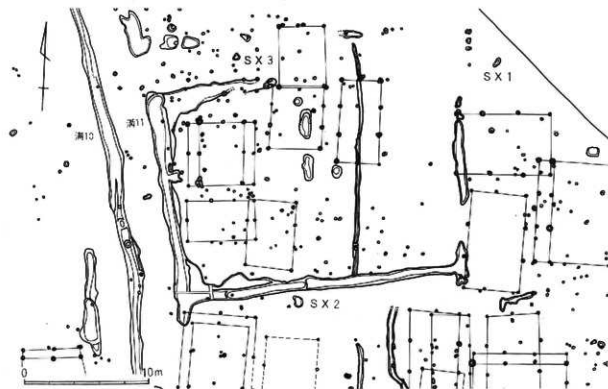
291は須恵器こね鉢で、東播系の製品である。292は瓦質の甕である。

293、294は砥石で、いずれも欠損品である。

4 埋納遺構

土器などを意識的に埋納したと思われる遺構が2基(SX1、SX2)確認された(第193図)。いずれも方形に巡る溝11の周辺に位置する。溝11は建物のLグループを長方形に囲むものである。これらは、地鏡などの祭祀行為に係わるものと思われる。

このほかに、前段で取り上げた建物のなかにも、建物94や建物103のように建物を構成する柱穴から完形の土器が確認されている。これらについても、建物の祭祀に係わるものであると推定される。

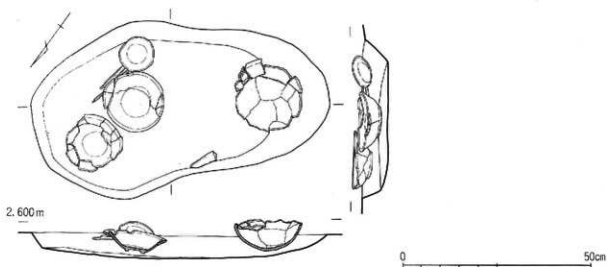


第193図 八坂本庄遺跡B区SX1・SX2・SX3位置図

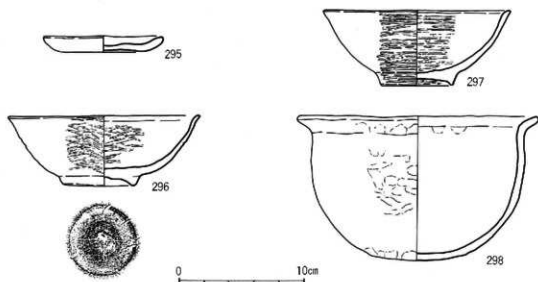
(1) SX1

SX1(第194図)は、おおむね長方形に巡る溝11の北東方向に位置する。溝11は建物のLグループを囲むもので、東西23m、南北17mの規模をもつ。溝は、北東コーナー部から北辺の東半分が途切れることを除いてはほぼ全周する。本遺跡では、建物がいくつかグルーピングされるが(第87図)、これら建物群は数棟から構成される屋敷であると考えられる。これら建物群は、溝による区画をもつもの、部分的な区画をもつもの、区画をもたないものなどがある。これらの違いは、屋敷側の階層差などを表す可能性が高い。SX1は、Lグループの建物群を囲む溝11の北東に位置するとともに、Mグループの建物群の北側に位置する。両者からの距離はともに4mほどである。仮に、屋敷に係わる祭祀であったとしても、どちらの屋敷に伴うかは完かではない。このほか、本遺構が集落の北限に近い位置にあることから、屋敷ではなく集落全体の祭祀である可能性も考えられる。

本遺構は、やや不整形気味の楕円形を呈する土壇に、土器や鉄製品を埋納したものである。土壇は長径約0.8m、短径0.4mを測る。土器はいずれも完形であったと思われるが、バックホーによる遺構検出の際に口縁部などを欠失した。土壇内の土器はいずれも上向きで、ほぼ床面上に置かれていた。土壇の端に惣と離れて土鍋が1個体置かれ、反対側に内黒土器碗2個体と土師貫土器小皿1個体が連なるようにみられる。加えて、内黒土器柄と上



第194図 八坂本庄遺跡B区SX1

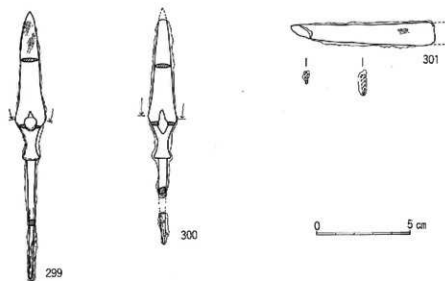


第195図 八坂本庄遺跡B区SX1出土土器

師質土器小皿の下には鉄鏝が2本置かれる。その状況から、柄に着装された状態ではなく、鉄鏝のみであったものと思われる。また、土鍋と内黒土器碗などの中間に刀子が見られる。刀子については、基部をもともと欠いていたようである。時期的には、12世紀初め前後と考えられる。

・出土遺物

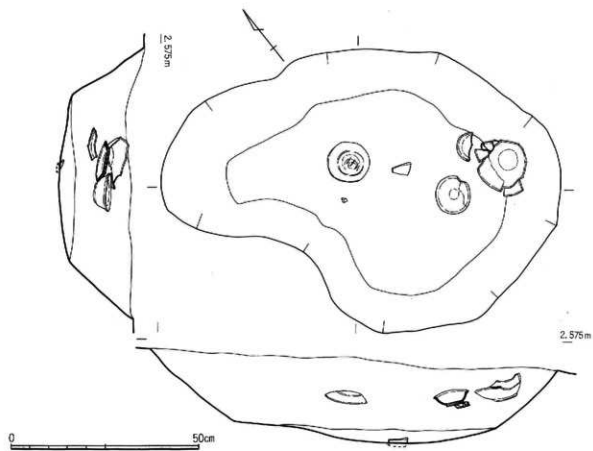
土層内からは土器(第195図)と鉄製品(第196図)が検出された。295は土師質土器小皿である。底部糸切りで、体部が斜方向にのびる。口径は9.6cmを測る。296、297は内黒土器碗である。両者とも、体部下半に丸みをもち、口縁部がやや外反する。高台は太く、断面三角形を呈する。体部内外面にはヘラミガキが施される。296の外底面には、十字状のヘラ掻きが見られる。298は小型の土鍋である。口縁は短くくの字状に折れ、底部は丸底である。以上は、いずれも12世紀初め前後に比定される。299、300は同形態の鉄鏝である。刃部が長く尖るもので、刃部の基部付近に透かし穴が見られる。301は基部を欠き、刃部だけの刀子である。現状で7.6cmを測る。



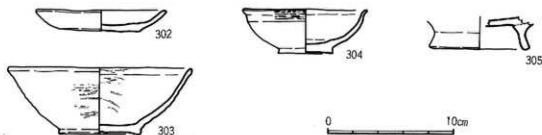
第196図 八坂本庄遺跡B区SX1出土鉄製品

(2) SX2

SX2 (第197図) は、長方形に巡る溝11南辺の外側に位置する。溝11の南側には2棟の建物からなるKグループがみられるが、これから見ると建物群の北側にあたる。



第197図 八坂本庄遺跡B区SX2



第198図 八坂本庄遺跡B区S X 2出土土器

本遺構は、不整形の土壇に土器が散かれたものである。土壇の規模は、長径1.05m、短径0.75mを測る。土器はいずれも、土壇が半は埋まった状況で置かれている。上師質土器小皿、内黒土器碗、土師器碗が各々1個体ずつみられるもので、土師質土器小皿が中央付近で裏返しに、残りの土師器碗などがやや離れて上向きにみられる。これらのほかに、土師器碗の底部片がみられる。时期的にはS X 1よりもやや古く、11世紀後半のものか。

・出土遺物

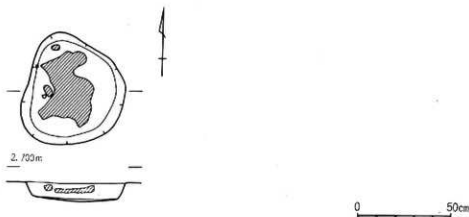
出土した土器（第198図）のうち、302は土師質土器小皿である。糸切りの底部から、やや内湾気味の体部が長めにのび、口径は10.2cmを測る。303は内黒土器碗で、口縁部はわずかに外反する。底部は円盤状高台を呈し、外底面には糸切り痕がみられる。体部内外面にはヘラミガキが施されるが、磨滅のため明確ではない。304は小型の土師器碗で、口径9.8cmを測る。底部は円盤状高台を呈し、外底面には糸切り痕が残る。口縁部は外反し、外面口縁下には、ヘラミガキがみられる。305は土師器碗底部で、高い高台が付される。外底面には糸切りの痕跡がある。305はやや古相であるが、他は11世紀後半に位置付けられる。

5 鍛冶関連遺構

鍛冶関連の遺構は、S X 3が1基のみ確認された（第199図）。

(1) S X 3

S X 3（第199図）は、建物のLグループを長方形に囲む溝11の北側に位置する。遺構の平面形は円形基調を呈し、径0.55～0.6mを測る。深さは検出面から0.1mで、床面よりやや浮いた状態で鉄滓が検出された。鉄滓は厚さ数cmで、廃棄されたものが再結合したものである。時期は不明である。



第199図 八坂本庄遺跡B区S X 3

6 溝

集落が展開する微高地部分から、掘立柱建物跡や土塼などとともに関連する溝を検出した(付図2)。

以下では、検出された溝のうち主要なものについて述べる。溝には大きく分けて、水田用水路と思われるものと屋敷に係わるものがある。前者は溝10、溝13、溝14、溝15などで、集落が進出する直前までの水田に伴うものであろう。また後者は、水田経営が何らかの理由で維持できなくなり、集落が進出した後に閑散区画としての機能をもつものである。後者に属するものは、溝11、溝16、溝17、溝18などである。

(1) 溝10

溝10(付図2)は、調査区の中央付近を北から南に向け、ほぼ直線的にのびるものである。溝の方位は、おおむねN10°W前後である。

溝の幅は2.0~1.8mで、場所により大きく異なる。深さは現状で0.05~0.15mを測り、全体としてはそれほど深いものではない。また、調査区北端近くでは、いったん途切れる部分もある。これは本来的に途切れていたものではなく、後世の削平などによりこのような状況になったものと思われる。南側については、微高地から低地にむけ急激に下がる付近で途切れる。もともとは、さらに南下していたものと推定されるが、集落形成時における低地部の水田造成などのためか、これより南では溝を検出することができなかった。

溝10は土塼30、土塼31、土塼40など時期が下るものにより切られるが、掘立柱建物跡や建物と同時期の土塼などとは基本的に重複しない。これは、微高地上に進出してきた集落がこの溝を意識し、かつ溝に規制されていたからだと思われる。溝10の性格等についてまとめると以下ようになる。

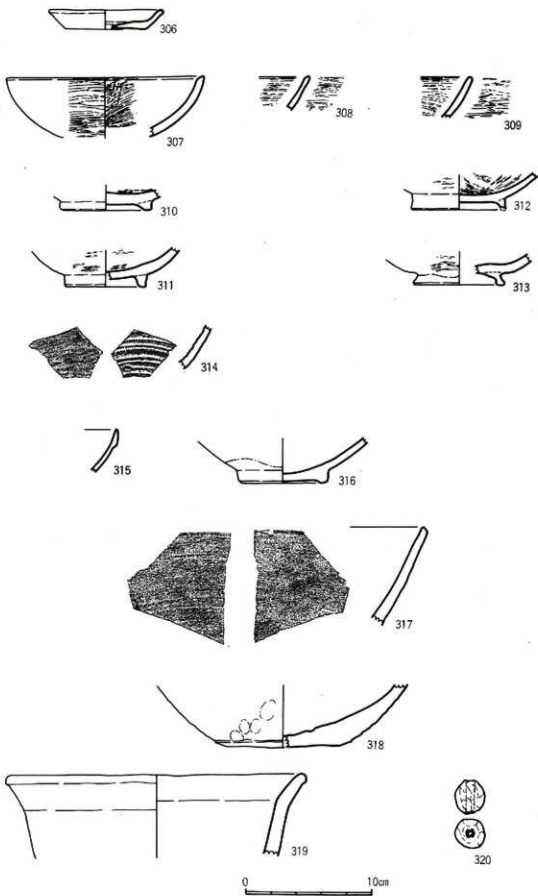
- ① 溝は、その規模から水田灌漑に伴う幹線用水路と考えられる。途中で、溝13が西方に向かい直交方向に分かれる。溝10は奈良地割にのるもので、旧字図にある水路E(第74図)が東に曲がらず、そのまま南にのびた位置にあたる。
- ② 溝の近辺には、水路灌漑を補完する農業用灌漑井戸である土塼33、土塼47がみられる。これら土塼は、井戸と言いつつも溜め井の性格が強いものである。
- ③ 何らかの理由で微高地上の水田が維持できなくなり、微高地には集落が進出するが、溝は集落内の何らかの区画としての役割を担っていたようである。
- ④ 溝の埋没は12世紀前半である。

・出土遺物

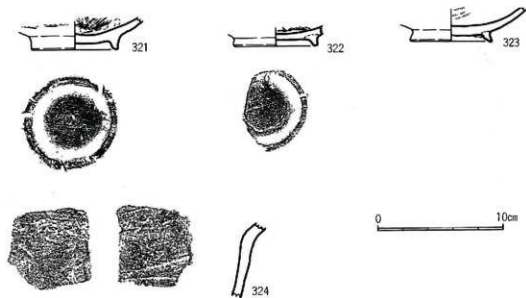
溝10出土遺物(第200図)のうち、306は土師質土器小皿で、底部は糸切りである。口径は9.1cmを測る。307、310~312は土師器碗である。基本的に体部内外面はヘラミガキが施されるが、磨滅のため鮮明なものもある。このうち310は黄白色を呈し、防長系土師器碗とされるものに近似する。308、309、313は瓦器碗である。このうち308は畿内の和泉産と思われる。また、残りは九州産と考えられ、初期の瓦器碗として注目される。314は須恵質の碗と思われる。315、316は白磁碗である。317は東播系のこね鉢と思われる、口径部の発達がまったくみられない初期のものである。318は須恵質で、こね鉢底部か。319は上鍋である。以上は、全体として11世紀末~12世紀前半に比定できる。

溝10と土塼41のどちらかに帰属する土器(第201図)のうち、321~323は土師器碗である。321には外底部にヘラ掃き、また322には糸切りが残る。324は上鍋である。

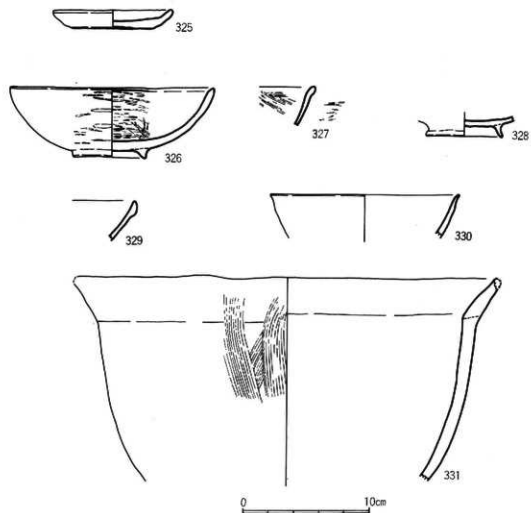
溝10と溝13の分岐点出土土器(第202図)のうち、325は土師質土器小皿で、底部は糸切りである。口径は9.4cmを測る。326~328は土師器碗で、体部内外面にはヘラミガキがみられる。329、330は白磁碗である。このうち330は1線部がわずかに外反する。331は上鍋である。以上は、全体として12世紀前半に比定できる。



第200团 八坂本庄遺跡B区溝10出土土器



第201図 八坂本庄遺跡B区溝10及び土壌41のどちらかに帰属する土器



第202図 八坂本庄遺跡B区溝10と溝13の分岐点出土土器

(2) 溝11

溝11（第203図）は溝10の東側に位置するもので、屋敷を区画する溝である。

溝は一部途切れるものの、長方形に巡る。長方形区画は東西に長く、その規模は溝の内側で東西22m、南北15mである。区画の西辺は、溝10と3mの間隔をもち平行してみられる。溝10を強く意識した状況が読み取れる。溝の幅は0.5～2.0mで、場所により大きく異なる。区画の形態自体はかなり整然としたものであるが、溝はやや整然さを欠く。

区画の内部には、建物のLグループが展開する。重複が認められるため、1時期には2、3棟の建物が存在したと思われる。溝の時期は11世紀末～12世紀前半と考えられる。

・出土遺物

溝から出土した土器（第204図）のうち、器形が復元できるものは332の土師質土器小皿である。底部糸切りで、体部が短く立つ。立ち上がり部はやや丸みをもつ。復元口径は9.0cmを測る。11世紀末～12世紀前半のものか。



第203図 八坂本庄遺跡B区溝11



332



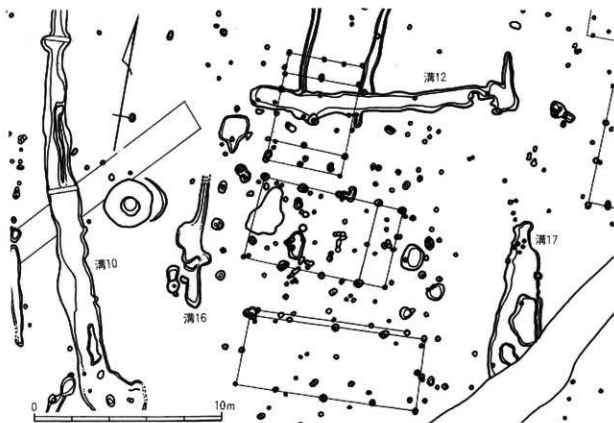
第204図 八坂本庄遺跡B区溝11出土土器

(3) 溝12、溝16、溝17

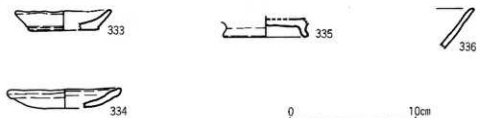
溝12、溝16、溝17は、調査区の南端近くに位置する。各々の溝はつながることなく単独で見られるが、三者をあわせると方形の区画となる(第205図)。溝12が北側に、溝16が西側に、そして溝17が東側に位置し、三方を区画する。西側にある溝16が、溝11と同じように溝10と5mの間隔をもち平行するようにみられる。これらにより区画された区画規模は、東西16m、南北15m以上である。各溝は、幅や形状が各々でやや異なり、全体として整然さを欠く。区画内には、建物のNグループが展開する。このうち建物110は、位置的に溝12と重複しており、本区画に伴うものではない。溝の時期は11世紀末～12世紀前半と考えられる。

・出土遺物

溝12から土器が検出された(第206図)。333は上師質土器小皿である。底部糸切りで、やや高めの体部が斜方向にのびる。334は京都系のもので字状皿である。復元口径が9cmと縮小化が進み、口縁部の作りも雑であることから、12世紀代にはいると思われる。335は土師器椀である。336は瓦器碗で、畿内の和泉産か。以上、溝12の土器は全体として11世紀末～12世紀前半に比定される。



第205図 八坂本庄遺跡B区溝12・溝16・溝17



第206図 八坂本庄遺跡B区溝12出土土器

(4) 溝13

溝13(付図2)は溝10から分岐し、西方にのびるもので、本来的には農業用の灌漑用水路であると推定される。

溝は、溝10の西側に分かれた後に2mほど平行して走る。その後、方向を大きく西方に転じ約18m直線的にのびる。その間に、溝15が南方に向けて分かれたり、溝15から分かれた溝14が平行して走る。溝13は再び方向を転じ、南に向け直角に折れる。その後、15mほど直進したところで途切れるが、本来はさらに南進していたものと思われる。

溝の周辺には独立柱建物が見られるが、いずれも溝13と重複しておらず、溝を意識した状況で配置されたことが分かる。溝の北側には、Jグループの建物が見られる。Jグループは、溝10及び溝10から分かれた溝13によりL字状に区画された位置にある。2棟が確認されているが、重複しているのでJ時期には1棟のみで構成されていたことが分かる。Iグループは溝13の南側に展開するものである。これらは、溝10、溝13、溝15に区画された部分にあるもの、及び溝13と溝15に囲まれた部分にあるものに分けられる。各々が区画区画と考えられる。

以上のように、溝13は農業用灌漑用水路であったが、集落が進出した後は尾敷区画としての役割を担っていたようである。溝の埋没の時期は11世紀末～12世紀前半である。

・出土遺物

溝13からは、石製品(第207図)や土器(第208図)が検出された。337は門石で、約半分が欠損する。

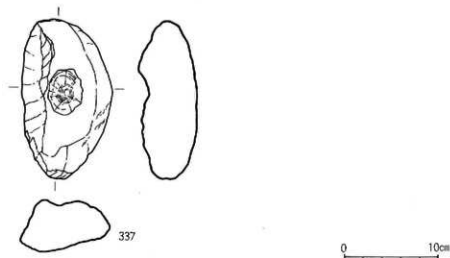
338～342は土師質土器小皿である。このうち338～341は底部が糸切りである。いずれも体部は斜方向に立ち上がり、直線的にのびる。口径は、341がやや大きく10.4cmに復元されるが、他は8.5～9.0cmほどである。342は古備系土師器とされるものと思われる。底部へう切りで、口径は9.4cmを測る。色調も他の小皿と明らかに異なり、白色系を呈する。

343～350は土師器碗である。いずれも白色ないしは灰色系の色調を呈する。体部内外面にはヘラミガキが施され、口縁部はやや外植気味のもや、丸みをもつものなどがある。底部高台にはバリエーションが見られるが、比較的高めである。外底面には、切り離しの痕跡は残らずナデにより仕上げられる。

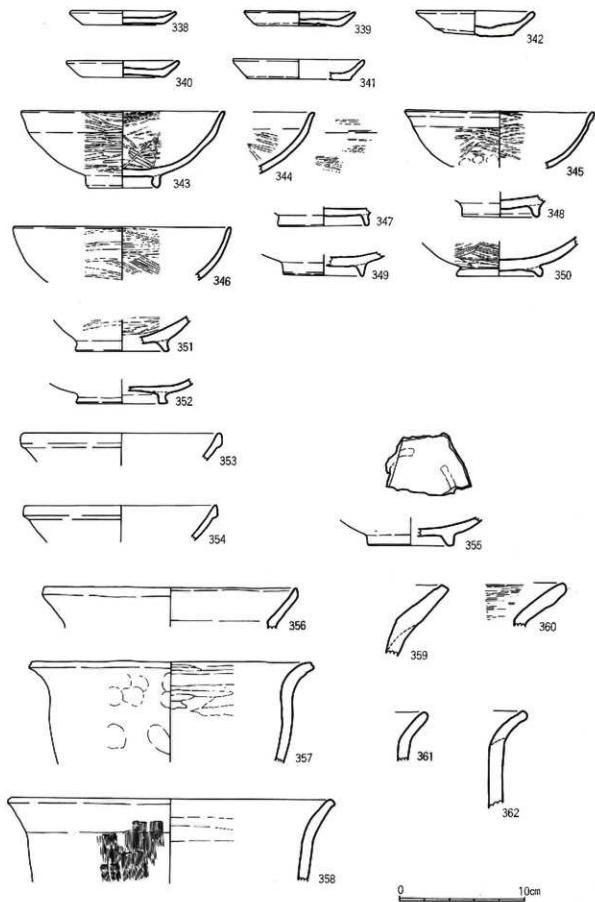
351、352は底部で、前者が白黒土器、後者が黒色土器である。

353～355は中国製陶磁器である。353、354は白磁碗で口縁部に玉線を有する。355は越州窯青磁碗と思われる。蓋付けの軸は抜き取られ、見込み部に目跡が残る。356～362は土鍋である。

以上の土器については、一部古相のものも含むが、全体として11世紀末～12世紀前半に比定される。



第207図 八坂本庄遺跡B区溝13出土石製品



第208図 八坂本庄遺跡B区溝13出土土器

(5) 溝14

溝14(付図2)は、溝15から分岐して溝13と平行して走るものである。

溝は幅0.5mほどのもので、整然さに欠く。幹線用水路に想定される溝10や溝13に比べると小規模である。溝13と溝15に囲まれたコの字状の部分には1グループの建物が展開しており、このうち建物83は位置的に溝14と重複する。溝の埋没時期は12世紀中頃まで下る。

・出土遺物

溝14から検出された遺物(第209図)のうち、363と364は土師質土器小皿である。底部は両者とも糸切りで、体部の立ち上がりは比較的シャープである。365は中国製白磁碗で、外面下半は露胎である。木白磁は12世紀中頃以降出現するものである。



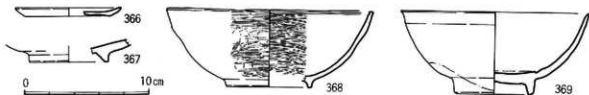
第209図 八坂本庄遺跡B区溝14出土土器

(6) 溝15

溝15(付図2)は、溝13から南方向に分岐するものである。分岐した後は、やや弓状に10m余り続き途切れる。溝の周辺には1グループの建物がみられるが、これらの建物は溝15をはじめとし、溝10、溝13などにより区画される。これらの区画は屋敷地と理解される。溝の埋没時期は12世紀前半であろう。

・出土遺物

溝13から検出された土器(第210図)のうち、366は土師質土器小皿である。底部糸切りで、体部が斜方向にのびる。器高は比較的低く、口径は8.4cmを測る。367は内黒土器碗である。368は畿内の楠葉産瓦器碗である。口縁端部内側に沈線がみられ、体部内外面にはミガキが施される。楠葉型I期に相当するもので、11世紀末に比定される。369は中国製白磁碗である。12世紀前半までに主体を置くものか。



第210図 八坂本庄遺跡B区溝15出土土器

7 水田遺構

本遺跡の第Ⅱ面は現地表面から1mほど下で確認されるが、調査区の北から中央にかけての部分に比べ南側が0.5mほど低い。調査区の北から中央にかけての部分は八坂川の河川活動により形成された微高地で、南側の部分は古い段階の河道と思われる。第Ⅱ面の微高地上で検出された遺構の大部分は12世紀前半代を中心とするもので、この段階では現状に比べ、まだ土地の微起伏が顕著であったことが分かる。微高地と旧河道はともに東西方向に細長くのび、旧河道部分には微高地上に展開する集落に伴う水田とその関連遺構がみられる。集落が進出する前は、微高地と旧河道部分を併せ全面的に水田化されていたが（「3 第Ⅱ面の調査」参照）、何らかの事情で全面的な水田の維持が困難になり、水田の範囲は低地部分のみに縮小し、微高地には大規模な集落が突然出現する。

(1) 水田遺構

集落が展開する微高地の南側に広がる低地は、古い段階の河道にその起源をもつものである。微高地に展開する集落に伴う水田は3面が確認された（第212図）。このなかで最も古い水田面はⅡ-1面で、Ⅱ-2面、Ⅱ-3面と新しくなるにつれ、集落のある北方向に水田が拡張する。その拡張は5～8mにも及ぶが、これは水田が含まれる旧河道の埋積が著しく進行したことにもよる。すなわち、Ⅱ-1面の上面からⅡ-3面の上面までで約0.4mを測り、この間に数10cm単位の土砂堆積を残す洪水被害を少なくとも2度受けたことが分かる。各水田面は、いずれも低地に移る肩に溝を設け、溝の南側に水田が展開する。3面の水田のうち、Ⅱ-2面は面的に広げ畦畔などを確認した。

・Ⅱ-2面の水田

Ⅱ-2面の水田（第212図）に伴う畦畔などは、Ⅱ-2面水田の床上層上面において確認した。Ⅱ-2面水田の畦畔は、本来、床上の上層である耕作土層上面の起伏として認められるものである。洪水に伴う土砂堆積により水田が覆われた場合、その堆積が引ければ洪水後に復旧された水田の耕作が下層まで及ばず、洪水に埋もれた水田上面はそのまま保存される。よって、畦畔や水路など水田に伴う諸遺構はそのまま残り、発掘調査においてそれらを顕わにすることは可能である。しかし、洪水時の土砂堆積が厚ければ、洪水の後に復旧された水田の耕作により洪水前の地表面は失われるため、洪水に埋もれた水田畦畔などはそのままの形としては残らない。Ⅱ-2面水田は後者の状況で、土層断面の観察では畦畔などを確認することができなかった。そのため、耕作土部分、畦畔、水路など上層における水田施設の違いが、下層の床上上層に残影としてみられることを利用して水田諸施設を検出していった。

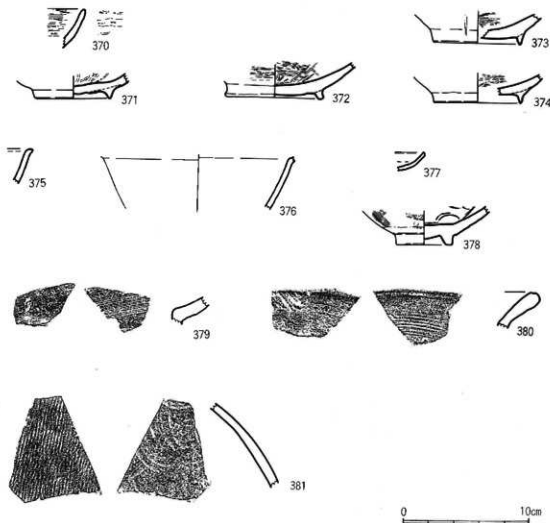
確認された畦畔と水路の方向はN10°W前後を測る。この方位は、微高地上に集落が進出する前の水田用水路と考えられる溝10の方位にちかく、微高地上の水田が衰退した後にも前代の方位を踏襲していることが分かる。水田4面のうち、水田イは低地のはじまる肩を走る溝に沿うように帯状にみられる。幅は8mほどで、南側に隣接する水田ハとの境は明確な畦畔ではなく段落ちがある。水田イと水田ハは、洲面標高の差を他の水田間よりも大きくもちながら隣接していたものと思われる。畦畔aと畦畔bがそのまま北にのびていたとすれば、水田イの面積は約250㎡である。水田ハは東西に長い長方形を呈する。その規模は東西32m、南北16～22mで、面積は約700㎡を測る。Ⅱ-2面水田において、水田面積が明らかになったうちでは最も規模の大きいものであるが、1反にも及ばない面積である。水田ハの東隣には水田ニがある。水田ニは東西20m、南北15mほどで、面積は300㎡ほどと推定される。水田ハと水田ニの間を南北に走る畦畔aは、畦畔の中央を水路が流れる。おそらく、低地のはじまる肩部を走る水路から分かれたものとみられ、南側の水田への水供給を担ったものか。同様な構造を有する畦畔として、畦畔cがある。途中で不明確になるものの、西から東へと水を流す水路を伴っていたようである。このほか、水田規模が推定できるものとして水田トがある。水田トは約250㎡で、北側に隣接する水田ニよりもわずかに小規模である。水田トへと水田トに南側には畦畔dが走るが、畦畔aと交わりと推定される位置で途切れる。

この部分は、駐跡の中央にみられた水路からの水口と理解される。水田りは部分的に確認されたのみであるが、これまでみた水田よりも規模が大きいことが推定される。すなわち、水田イー水田トは微高地から低地部に移った傾斜地にあたるため、地形に制約を受け広い面積の水田が作れなかったと思われる。最も傾斜のきつい部分では、水田イのように等高線に沿うような带状に長い水田になっている。これに対し、水田リ付近からは比較的水平になるため、やや広めの水田の造成が可能となる。下層のⅡ-3面水田は面的な調査を行わなかったが、Ⅱ-2面よりも厚積が進んでいないため傾斜がきつくと推定される。そのため、Ⅱ-2面の水田よりも小規模な水田が多かった可能性が高い。

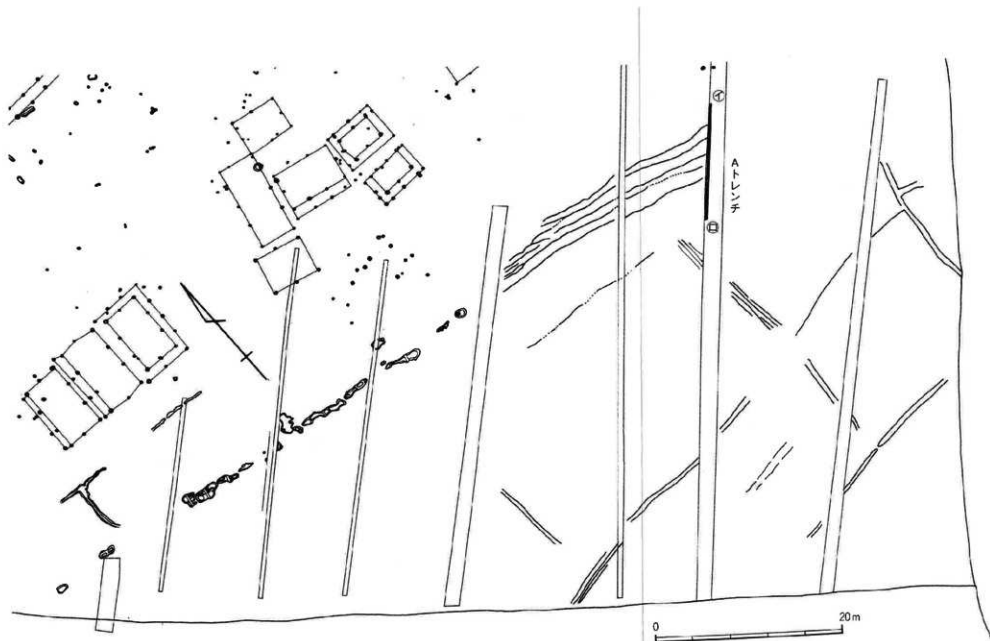
・Ⅱ-3面の水田

最上層のⅡ-3面では、さらに埋積が進行し、微起伏の解消が進む。水田も微高地側に拡張する。低地がはじまる肩部に溝を走らせ、その南側一体に水田を展開させる点では前段階と同じである。駐跡などの検出は行わなかったが、Ⅱ-2面に比べ個々の水田もやや規模が大きくなっていることが想定される。

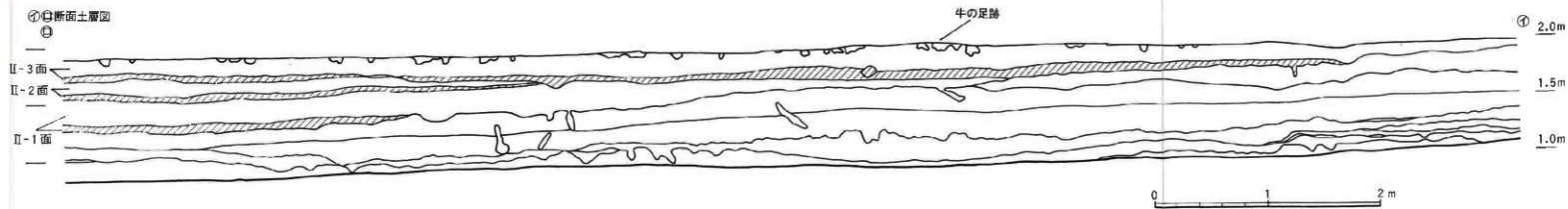
Ⅱ-3面の耕作土上面では牛や人の足跡が多数確認された。足跡には砂が堆積しており、洪水によりいっきに埋没したものと考えられる。10m四方ほどの面積について、足跡をすべて掘りあげた。足跡は、深いものや浅いものを含めて、足の踏み場のないほど検出された。足跡のほとんどは牛のもので、一部に人の可能性をもつものもみられたが、明確ではなかった。牛の足跡については、一定の規則的な動きを伝えるものではなく、入り乱れた感じであった。



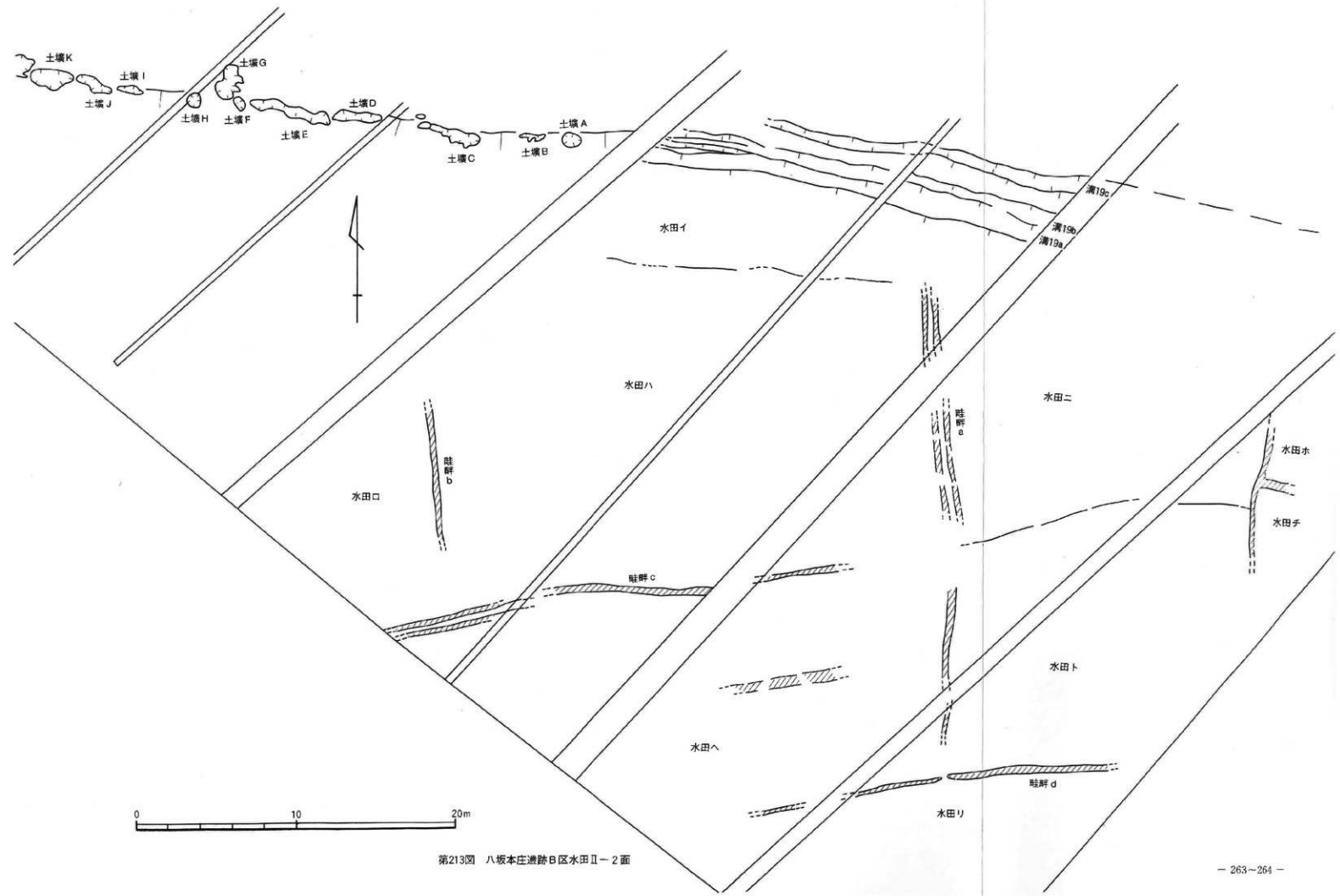
第211図 八坂本庄遺跡B区Ⅱ-3面水田を覆う層から検出された遺物



④ 断面土層図



第212図 八坂本庄遺跡B区水田II-1、II-2、II-3面土層図



第213図 八坂本庄遺跡B区水田Ⅱ-2面

この水田面を覆う層から遺物が検出されているが、それらは12世紀後半に位置付けられるもので、この段階には完全に埋没していることが分かる。

・Ⅱ-3面の水田を覆う層から検出された遺物

検出された遺物(第211図)のうち、370、373、374は瓦器碗である。370は口縁部で、内外面にはヘラミガキがみられる。373、374は底部破片で、断面三角形の細くやや高い高台が付く。これらは12世紀後半代のものか。

371は土師器碗である。断面三角形の高台が付く底部で、内面にヘラミガキがみられる。372は内黒土器碗底部で、低い高台が付く、内外面にはヘラミガキが施される。

375-378は中国製輸入陶磁器である。375と376は白磁碗である。いずれも口縁端部が外方に折れる。377は青磁皿で、体部中程で屈曲する。外面体部下半は露胎である。378は同安窯系青磁碗である。以上は、12世紀中頃以降のものである。

379、380は上銅で、口縁部がくの字状に折れる。内面にはハケメがみられる。

381は須恵器製の刷部片で、外面に平行タキがみられる。

(2) 水路遺構

微高地南側の旧河道に起源をもつ低地に、水田Ⅱ-1面、Ⅱ-2面、Ⅱ-3面がみられる。水田は、微高地に沿うよう東西方向に長く展開するもので、各水田面とも水田がはじまる低地の肩部に水路と思われる浅い溝が伴う(第213図)。溝は水田の拡張とともに北に移動することが確認され、水田Ⅱ-1面に伴うものが溝19a、Ⅱ-2面に伴うものが溝19b、Ⅱ-3面に伴うものが溝19cである。これらの溝をすべて平面的に確認したのは長さ20m余のみであるが、水田拡張などのため溝19aや溝19bについては全体として残存状況が良くなかった。溝の幅は場所により異なるが、0.5m前後の部分が多い。深さは現状で0.1-0.2mほどである。

以上のうち溝19aについては、平面的に検出した部分の西側で、楕円形ないしは円形基調をなす土壌が点々と連なる状況が確認された。面的にやや下げすぎたため溝の全体的な平面プランは不明であるが、溝19aの延長上に土壌A-Nがみられることから、溝19a内に意識的に設けられたものと理解される。深さは最も深いもので、検出面から0.5mほどである。溝は水路機能をもつもので、基本的に西から東へ向かい流れる。溝内に土壌があると水の流れに支障をきたし、大きな障害になると思われる。しかし、あえてこの溝内に土壌を設けたということは、それなりの意味があったものと考えざるをえない。考えられる役割は、土壌が水路の水供給を助ける機能を有していたであろうということである。水田Ⅱ-1面の成立する前段階までは、集落が展開する微高地にも合めこの地域全体に水田が展開していたと想定される。しかし、何らかの事情で全面的な水田維持が困難になり、微高地上は水田から集落に変わり、水田は低地部分のみになるという大きな変化が生じた。この原因として、用水の確保・維持が困難になったことがあげられる。異常気象などに伴う河床低下などが原因と考えられ、用水系統の末端や本来的に水との縁が薄かった微高地上の水田では、これまでのような水田耕作ができなくなる場合が多かったものと思われる。Ⅱ-1面などの展開する場所は、旧河道に起源をもつ低地であるため、微高地などに比べると水田の維持に容易な面があったのであろう。溝19aは、低地の水田へ水を供給する水路と想定される。この溝19aがどこからの水を引いてきたものか、大きく三つの考え方がある。①堰の改修や付け替えなどあったものの従来の水路系統によるもので、用水系統を若干変更し水田の西から水を掛けていった。②新たに堰を設け、微高地の南端だけに水を掛けた。③八坂川からの取水をやめて、天水などにたよった。以上のどの方法によったかは現時点では断定はできないが、水の確保にはことさら神経を使ったものと考えられる。このようななかで土壌A-Nの役割を考えると、水路の水供給を補完する井戸的な役割が想定される。深さがそれほどないため十分に水が湧出したとは考えにくいので、雨水や余り水を蓄える溜め井戸的機能をもつものであったと想像される。先に紹介した土壌のなかに、同様な役割を想定した農業用灌漑井戸がある。農業用灌漑井戸と土壌A-Nの違いは、それ自身が水路の中にあるかどうかである。土壌A-Nの場合、農業用灌漑井戸よりも井戸的な機能が高いことも考えられる。このような土壌を伴う水路を、溜め井戸用水路と呼称する。

水田が拡張し、溝19bや溝19cになると溜め井併用水路と称した溝19aの状況とは大きく異なってくる。溝19bの延長に上堰が1基みられるのみで、溝19cの延長上にはまったく確認することはできない。このあたりの事情は、単に水供給の状況が改善したととられるのか、あるいは水の供給システムの変更とした方が良いかは明確でない。ただ、水路の中に上堰を設けるということ自体通常の水路灌溉のなかでは考えにくいことなので、溝19aの段階における水供給システムが、通常の水路灌溉とは異なるものであったのかもしれない。

・溝19出土遺物

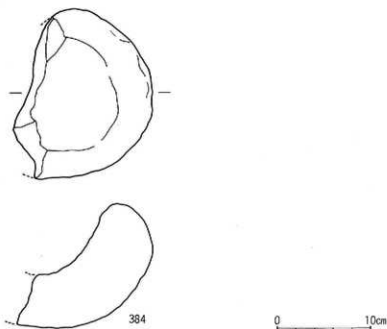
溝19出土遺物（第214、215図）のうち、382は瓦器碗である。小破片であるが、口縁内面に沈線をもつ。その特徴から、畿内の楠楽産と思われる。磨滅のため、内外面のミガキは明確ではないが、11世紀末のものであろう。

383は東播磨系の須恵質こね鉢である。

384は凹石である。半部を欠くが、片面の中央に大きく凹みを設けている。凹みはかなり深く、7cm以上を測る。



第214図 八坂本庄遺跡溝19C出土土器



第215図 八坂本庄遺跡溝19a土壇M出土石製品

8 その他の出土遺物

第Ⅱ面の遺物のうち、建物に復元されなかった柱穴からのもの、及び遺構検出作業中などに検出されたものを紹介する。

(1) 柱穴出土土器

建物に復元されなかった柱穴出土土器(第216～218図)のうち、385～394は十師貫土器小皿である。このうち385は、底部切り離しがヘラ切りである。復元口径7.8cmを測り、体部はやや直立気味である。底部ヘラ切りについては、宇佐市の宇佐宮跡跡寺の調査で11世紀までしか残らないことが確認されている。このことから、本品は11世紀以前のもと思われる。386～394は、底部切り離しが糸切りのものである。形態的には、体部があまり立ち上がらずそのまま斜方向にのびるもの(386)、バリエーションはあるものの立ち上がり部が丸みをもつもの(387～393)、底部に比べ体部が薄く外反ないしは直線的に口径にいたるもの(394)などが認められる。復元口径はいずれも9～10cmを測ることから、11、12世紀のものであろう。

395～399は十師貫土器杯である。このうち、395については形態的に9世紀代のもと思われる。破片資料であることと、磨減が著しいことから底部の切り離しは不明であるが、おそらくはヘラ切りであろう。そのほかのうち、398を除いては底部糸切りである。397は口径17cmにも及ぶもので、体部は丸みをもち緩やかに体上がる。396、398も含め、12世紀前半以前に位置付けられる。399は体部が直立気味に立つもので、復元口径は12.2cmである。14世紀前半のものか。

400～403は土師器碗である。400は端部が緩やかに外反する口縁部で、内外面にヘラミガキがみられる。401～402は底部である。このうち402は、円盤状高台を呈する。401は外開き気味に高台が付される。403は横付部を欠くが、比較的高めの高台が付くものと思われる。以上のうち、402は11世紀代後半に遡る可能性が高いが、他はおおむね11世紀末12世紀前半に位置付けられよう。

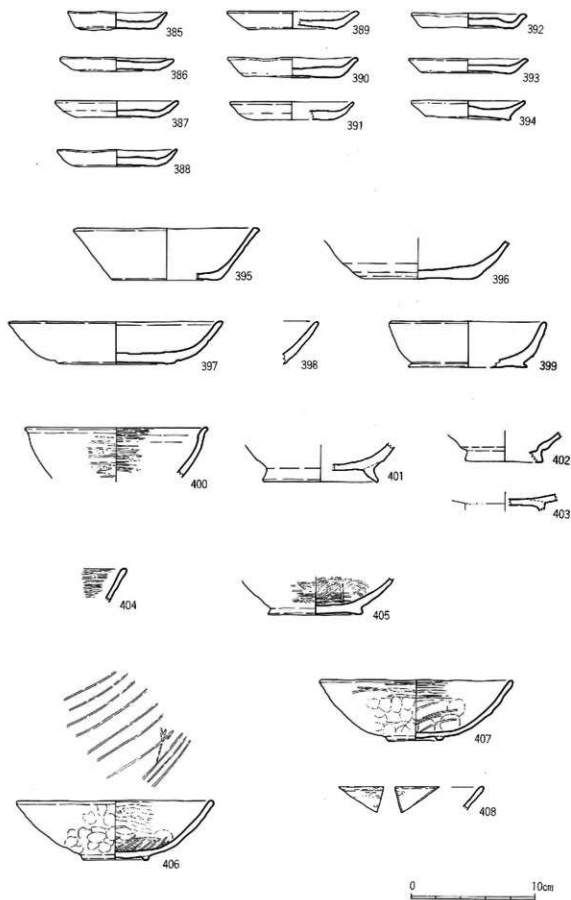
404、405は内黒土器碗である。このうち405は円盤状高台の底部で、外底面には糸切り痕が残る。内外面にはヘラミガキがみられ、内面については内底面と体部を分けて磨く。内底面はジグザグ状のミガキがみられる。時期については、405が11世紀代に遡る可能性を有し、404は11、12世紀のものとしてとらえておく。

406～408は瓦器碗で、いずれも畿内の和泉産と思われる。406は復元口径15.8cmを測るもので、器高の扁平化傾向がうかがえる。口縁部周辺のヨコナデの範囲はそれほど広くなく、体部外面の中程から下半にかけてはオサエヤナデの痕跡が明瞭に残る。外面のミガキは口縁部下のみに散発的にみられる。内面は見込み部に平行線状のミガキが施され、体部にも比較的密にミガキが残る。底部は断面方形の低い高台が付される。407は、器形的及び法定的には406と同様な特徴をもつ。しかし、高台については縮小化がみられ、406に比べやや雑な感を受ける。408は11世紀部の破片資料で、内外面にミガキがみられる。406、407は和泉型瓦器碗のⅢ-1期に相当すると思われ、13世紀後半に比定される。和泉型瓦器碗が、西日本各地で比較的多く確認される時期である。

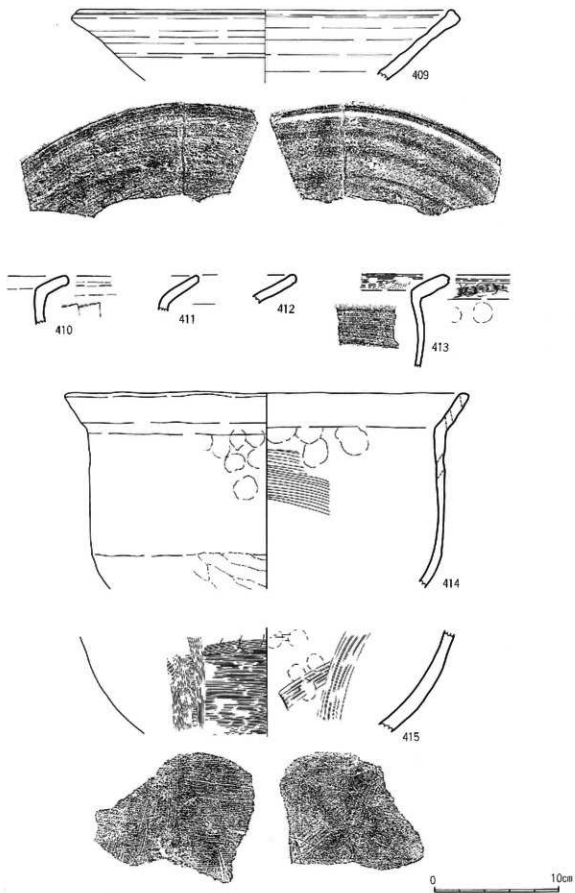
409は東播磨の須志貫こね鉢である。口縁端部がそれほど発達しないことから、12世紀前半以前のもと思われる。

410～415は土鍋である。414は口縁部が外反するが、その屈曲は他に比べるときつくない。また、口縁部はわずかに内反り気味である。体部は全体としてやや深めで、下部において屈曲し丸底の底部に移行する。410～413は破片資料のため全形は不明である。しかし、口縁部は414に比べると、強くくの字状に折れる。時期については、414が12世紀初め前後と思われ、他についてはそれよりも下るものであろう。413などは12世紀後半以降の特徴を有する。

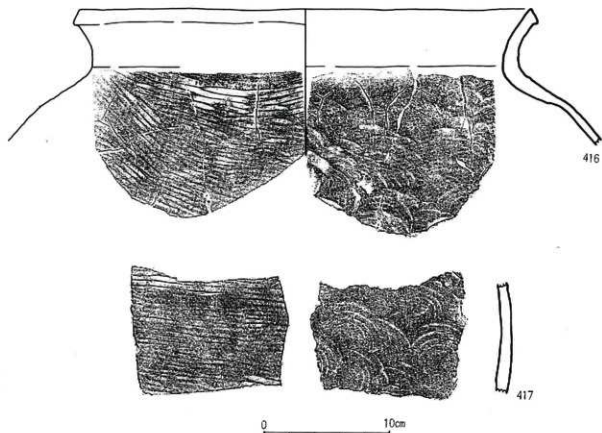
416、417は須志貫土器である。両者とも胴部外面に平行クタクキがみられ、内面に同心円状の当て具痕が残る。



第216图 八坂本庄遺跡B区柱穴出土土器(1)



第217图 八坂本庄遗址B区柱穴出土土器(2)



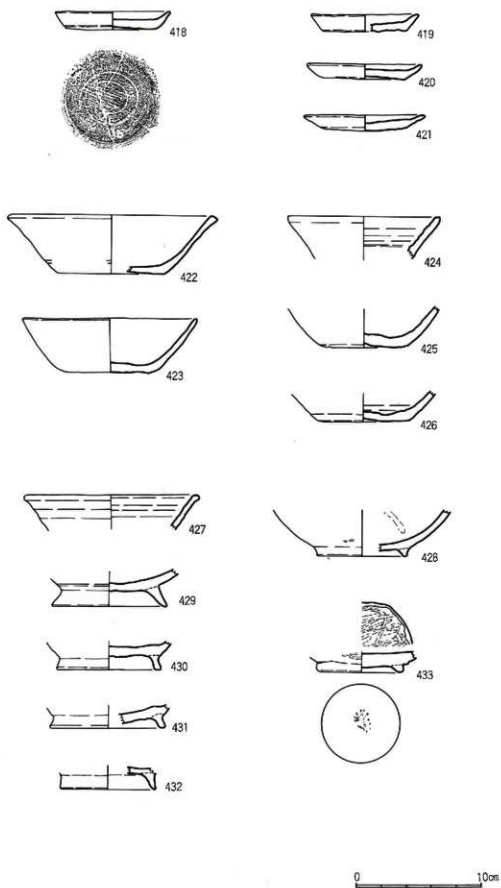
第218図 八坂本庄遺跡B区柱穴出土土器(3)

(2) その他の古代・中世土器

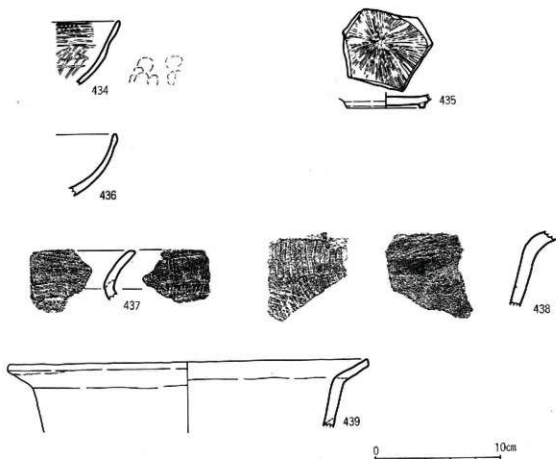
B区第II面の遺構検出作業中、あるいは土層観察用のトレンチなどから検出された古代・中世土器(第219～221図)である。

418～421は土師質土器小皿である。このうち418は底部ヘラ切りである。復元口径9.0cmを測るもので、体部は丸みをもち立ち上がり、端部はやや尖り欠味である。大分県内では、12世紀代にはほぼ完全に糸切りに変換していることから、本資料は11世紀以前と思われる。419～421は底部糸切りのものである。復元口径は419が8.4cmで、他は9cm以上である。体部の立ち上がりも、419がほかにくらべてやや急な立ち上りをみせる。420、421は12世紀前半代に比定され、419は12世紀後半以降のものか。

422～426のうち、422、423、425、426は9世紀代の坏である。これらの底部はヘラ切りである。422は体部が外反気味のびるもので、端部がやや肥厚する。423は422よりもひとまわり小振りのものである。体部は直線的にのびる。425、426は底部資料であるが、体部の体上がり状況などが423に類似する。424は土師質土器坏である。底部は欠くが、口径に比し器高が高いものと推定される。内面には、ヘラ状工具を利用したロクロ痕がみられる。国東半島地域では、器高の高い坏が15世紀後半以降出現する。これらの土器は、これまで安岐町、国東町、杵々地町などで確認されているが、微妙に器形などが異なるため、将来的には时期的及び地域的な細分がなされるものと思われる。しかし、これらの土器の共通する特徴としてロクロ痕をもたないことがあげられ、府内から臼杵、大野郡にかけみられるロクロ痕を残す土器と対比されていた。国東半島は田原氏が勢力をもつ地域で、先のロクロ痕をもたない土器は田原氏の土器と考えられていた。424は、器形的には国東半島の坏にちかいが、内面にロクロ痕を残すという点では大友氏の土器である府内の土器との折衷的な様相をもつ。本遺跡の所在する杵築市



第219図 八坂本庄遺跡B区その他の出土遺物(1)



第220図 八坂本庄遺跡B区その他の出土土器(2)

は、木付氏が支配する地域であった。424の土器からみると、木付氏が隣接する田原氏とは一線を画した独自の立場にあったことがうかがえる。

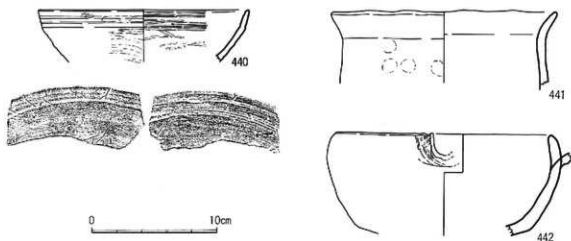
427～433、440は土師器碗である。底部形態をみるとバリエーションがみられ、11世紀～12世紀中頃にいたる時期のものを含むことが分かる。440は口縁部周辺に強いナデが施されており、円縁状のヨコナデ振がみられる。

434は瓦器碗、435は黒色土器碗である。435は底部で、断面方形の比較的低い高台が付される。全体としてやや薄手の作りである。見込み部には、細いヘラによる放射状のミガキが施される。

436は中国製白磁碗で、口縁部には小さめの玉縁がつく。11～12世紀に比定されるものである。

437～439、441は土絹である。いずれも口縁が外に折れるが、それほどきついものではない。また、全形が不明なもの、やや深い器形が予想される。11世紀後半～12世紀前半のものか。

442は土師質の鉢である。体部は内湾気味に口縁にいたるもので、口縁は片口状を呈する。

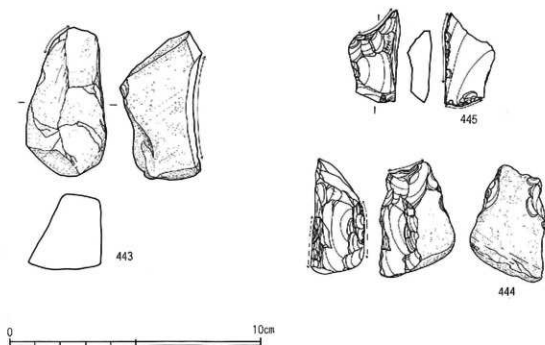


第221図 八坂本庄遺跡B区その他の出土遺物(3)

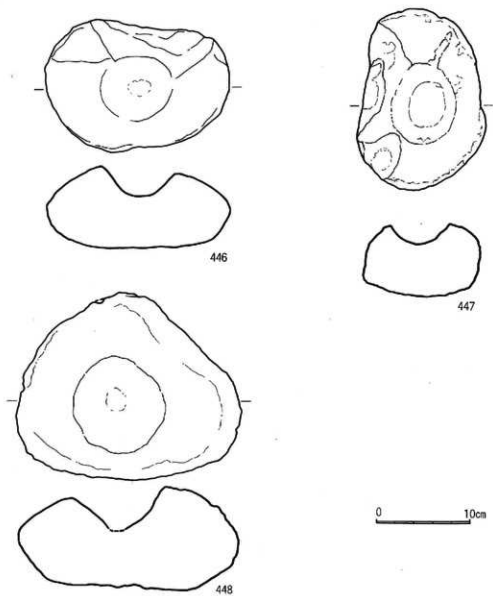
(3) 燧石

燧(火打ち)石とみられる石器が数点出土している(第222図)。

443、444は、溝3の南西区から出土した近世のものである。443は珩質岩の自然礫(角礫)を利用したもので、一部を大きく剝離した後のその新しい稜部分に剝離痕がのこされている。石材は珩化木に近い不透明な黄褐色をなす。長さ5.8cm、幅3.2cm、厚さ3.3cm、重さ64.8g。444は443に近い石材の礫を大きく打ち欠いたものである。新しい稜である先端部と上下両端部に細かい剝離面がみられ、火打ち作業によるものとみられる。石質は443よりも良質緻密な感をうける。長さ4.5cm、幅2.0cm、厚さ2.1cm、重さ26.9g。445は、玉髄とみられる良質のメノウ質の石材の剥片を利用したもので、一見台形石器状をなす。側辺の一部を除き、火打ち作業によるとみられ



第222図 八坂本庄遺跡B区出土燧石



第223図 八坂中遺跡B区その他の石製品

層相な気候痕が観察される。出土した遺物は14世紀後半とされる土器51である。長さ3.2cm、幅2.0cm、厚さ0.9cm、重さ7.4g。

八坂本庄遺跡B区から出土した焼石とされるものは、3点に過ぎなく、近世2、中世1と時代が異なるものが出土している。中世のものは1点のみであるが、良質のメノウ質の割片であり、遠方よりもたらされたものとみられる。近世の2点はいずれも自然礫をそのまま利用し、大きく打ち欠いた後の稜で火打ち作業を行った形跡が認められる。石材も砥石本に近い硅質岩という点で共通している。産地は県北地方のいずれかの河川であると推定される。

焼石は、近代（明治8年以降）のマッチ製造までは発火具として貴重な生活必需品であった。八坂本庄遺跡B区においてそうした遺物が発見されたことは、中・近世の集落の生活を復元するうえで、意義深いことと思われる。

（4）その他の石製品

その他の石製品として四石（第223図）がある。このうち、448は土壘30、446と447は土壘33から検出されたものである。

446は長さ19.4cm、幅13.8cm、厚さ8.6cmの円礫片面に凹みを設ける。凹みの深さは、約3cmである。447は長さ19.1cm、幅12.0cm、厚さ7.2cmの円礫を利用し、片面に凹みがみられる。凹みの深さは、446よりも浅く、約2cmを測る。以上は、土壘33に伴出する土器から12世紀初め前後に位置付けられる。

448は長さ23.8cm、幅19.7cm、厚さ10.8cmの円礫の片面に凹みがみられる。凹みは深さ約4cmである。本品も土壘30に伴う土器から12世紀中頃以降に比定される。

（5）弥生時代の土器

古代・中世の遺物に混じて検出された土器（第224図）を紹介する。

449は二重口縁状に口縁が立ち上がるもので、外面に櫛播波状文がみられる。加えて、棒状の貼り付けも付される。内外面には赤色顔料が塗布されている。器台、高坏の可能性が考えられるもので、弥生時代後期終末前後のものであろう。



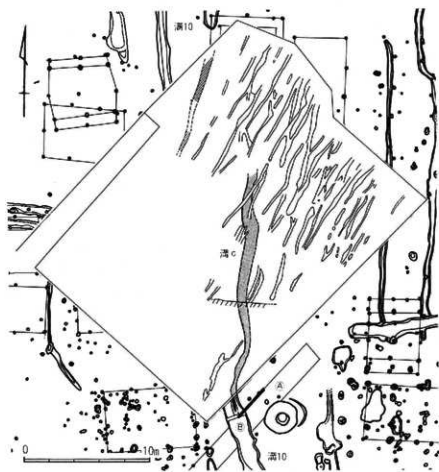
449



第224図 八坂本庄遺跡B区弥生土器

Ⅲ 第Ⅲ面の調査

微高地上に集落が展開する面を第Ⅱ面とし、集落とその南側の低地に広がる水田を含めて全面調査した。第Ⅱ面のさらに下層では、微高地及び低地に係わらず水田層の堆積が確認できた。そのため、集落南下層の水田を第Ⅲ面として調査を行った。第Ⅲ面の調査は、水田を面にとらえて水田の時期、規模、性格などを明らかにすることを目的とした。しかし、時間の関係から、調査区は20×30mという小面積しか設定できなかった。以下、その概要を述べる。



第225図 八坂本庄遺跡B区第Ⅲ面水田遺構調査区位置図

1 水田遺構

第Ⅲ面の調査区は、土層観察用のAトレンチに隣接するように、微高地上に設定した(第226図)。調査区の位置は集落進出以前の幹線用水路と推定される溝10周辺にあたり、溝10を基軸とした地割が、前代の水田地割とどのように関係にあるかをみるためである。

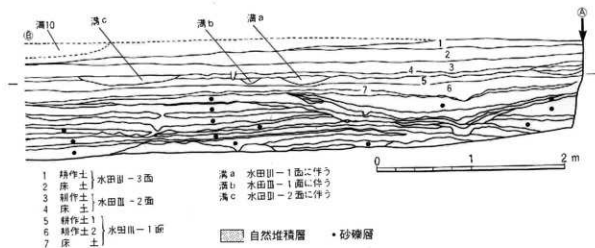
(1) 土層からみた水田遺構

調査区に隣接するAトレンチの上層(第226図)をみると、集落検出面の下に3面の水田層があることが分かる。これら水田層は、下層から水田Ⅲ-1面、水田Ⅲ-2面、水田Ⅲ-3面とする。

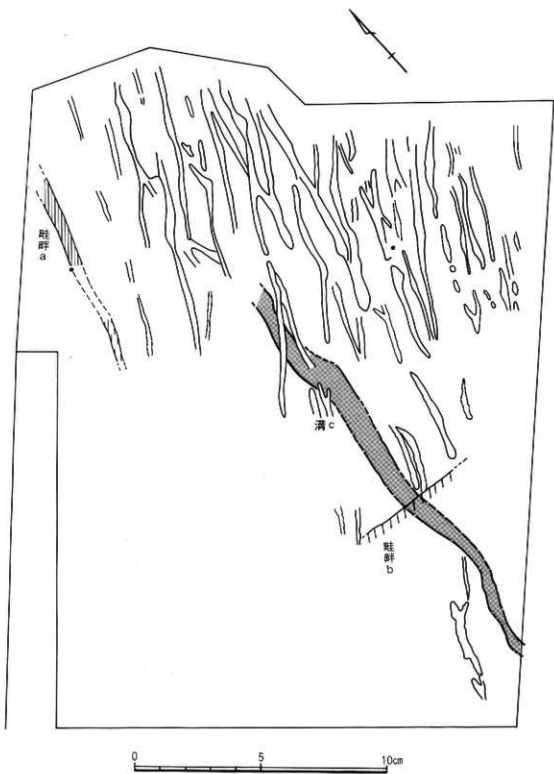
水田Ⅲ-1面については、集落検出面から0.4mでその上層に達する。この面では耕作土と思われる層が2層認められることから、洪水などに伴い若干のかき上げがあったものと推定される。Ⅲ-1面は層厚0.2~0.3mで、その下層は自然堆積層である。自然堆積層は、層厚0.05~0.1mの砂礫土と灰色粘質土が互層になり堆積する。砂礫土と灰色粘質土のセットが、1回の洪水による堆積を示している。すなわち、洪水時にはより重たい砂礫土がいち早く堆積し、その後細かい粒子の軽い灰色粘質土が堆積したものである。よって、1回の洪水で0.1~0.2mの堆積があったことが分かり、このような洪水が何度も繰り返されることにより、この微高地が形成されたものである。土層で観察できる範囲では、1回に0.5m以上堆積するような洪水はみられず、この付近が地形的にかなり落ち着いた状況にあったことが分かる。本水田に伴う遺構のうち畦畔については、水田を覆う洪水堆積が薄いため次の耕作により削平され、その遺構は立体的には残存しない。従って、土層において畦畔を認めるのは困難である。溝については、溝aと溝bがⅢ-1面に伴う。これらの溝については、半面プランが確認されていないため方向は不明だが、条里地割にのると思われる溝10と2mほどしか離れておらず、ほぼ同位置で踏張された可能性が高い。よって、本水田面も条里地割にのるものであると推定される。

水田Ⅲ-2面は、集落検出面から0.2mでその上面に達する。耕作土は0.1m、床土にあたる層は砂質土層で0.05mの厚さをもつ。本水田に伴う遺構として、溝cがある。溝cは上層面で幅1mを測るもので、溝10とおおむね同様な方向に走る事が確認された。土層図では明確でないが、平面的に影げた際には畝状の溝が多数検出された。これら畝状溝は溝cを切るもので、方向的には溝cとやや方位を異にする。水田Ⅲ-2面の段階では、当初溝cが機能したが埋没し、畦畔aと畦畔bに区画された中を中心に畝状溝残される。

水田Ⅲ-3面は集落が進出する直前の水田である。耕作土の上面が遺構の検出面にあたり、柱穴や土痕などが確認された。何らかの事情でⅢ-3面の水田維持が困難になり、その面に集落が進出したものである。集落の開



第226図 八坂本庄遺跡B区A(③)開土層図



第227图 八坂本庄遺跡B区水田Ⅲ-2面

始は12世紀初頃前後と思われるので、水田Ⅲ-3面の時期はそれ以前ということになる。本水田には溝10が伴うと考えられるが、上層を固化した時点にはすでに地下げを行っており、上層図には記入されていない。溝10は前段で詳述したように、Ⅲ-3面の幹線水路と推定されている。Ⅲ-1面、Ⅲ-2面と水田が作り替えられていくなか、溝10とほぼ同様な位置に溝aや溝bがあることが注目される。溝10は若干方位や位置がことなるものの、ほぼ前代の溝を踏襲しており、地割や水路系統を引き継ぎながら水田の復旧がなされたことが分かる。

(2) 水田Ⅲ-2面の遺構

3枚の水田面のうち、水田Ⅲ-2面について面的に広げた。小範囲の調査であったが、集落が進出する以前の水田を知る有力な手がかりをいくつも得ることができた。

畦畔としては、畦畔aと畦畔bの2本を確認した。いずれも立体的に残存するのではなく、Ⅲ-2面の床土上面に残影として残ったものである。畦畔aは南北方向にのびるものである。Ⅲ-3面の溝や土壌に切られるため一部しか確認できなかったが、ほぼ直線的に続く。幅は0.3~0.5mで、方位はN15°Eである。一方、畦畔bは東西方向にのびるものであるが、部分的な検出にとどまった。方位はN85°Wである。両畦畔は、検出されたものが一部であるためか、やや方位にズレが大きい。

このほかでは、畝状に平行した小溝が多数検出された。溝の方向をみると、畦畔aに平行するものと畦畔bに平行するものがあるが、大部分は畦畔aに平行するものである。しかし、いずれも南北方向に掘られることは共通しており、東西方向のものは1本もない。溝は、検出した床土面からいずれも0.1m以下の浅いものであるが、Ⅲ-2面の耕作土上面からすでに確認できる状況であったことを考えると、深さは少なくとも0.2mはあったことが分かる。畝状溝は畦畔aと畦畔bにより十字状に区画された部分から集中的に確認されており、畝状溝については水田区画ごとにそのあり方が異なる可能性が高い。すなわち、すべての水田区画でみられるのではなく、あるものもないものが明確に分かれており、水田区画の利用状況に違いがありそうである。畝状遺構が耕作と強い関係があるとすれば、畑地として利用する区画とそうでない区画があったことになる。本地区は用水系統の末端に位置していることから、用水の供給が十分でなかったことが想定され、すべての水田区画において水稲耕作が行われたのではなく、区画においては畑地として使用することが多かったことも考えられる。一方、もうひとつの考え方として、水稲の裏作としての畑作がすべての水田区画で行われたのではなく、限られた区画のみで行われたとも考えられる。いずれにしても、具体的水田利用を考えるうえには興味ある資料である。

Ⅲ-2面上層の調査後に掘り下げを行い、水田Ⅲ-2面下層に伴う溝cが検出された。溝は遺構検出のみに留めたが、幅0.5~1.0mの溝がやや蛇行しながら南北方向にのびる様子が見られる。Ⅲ-2面上層の畝状溝のうち深いものは、溝cにも切り込む。溝cの方位はN5°Eである。方位的にはやや異なるが、水田Ⅲ-3面の幹線水路と思われる溝10とは位置的に一部は重なり、離れても数mのところにある。上層図のところで述べたように、Ⅲ-1面に伴う溝aや溝bも同様な位置にある。各水田面において溝や畦畔の方位は若干異なるが、水路である溝は基本的に位置を踏襲されたことが分かる。

(3) 水田の時期

以上の水田の時期であるが、それらを明確にする資料は得ることができなかった。Ⅲ-3面水田の耕作放棄後集落が進出するのが12世紀初頃前後なので、3面の水田の下限は知る事ができる。しかし、Ⅲ-1面の開始時期について判断する資料がないのは残念なことである。低地を含めた水田の変遷については後段(4 第IV面の調査)で詳述するが、微高地上に形成される初めての水田がⅢ-1面であり、断片的な資料であるがおおむね桑里地割にのりものであることが分かった。すなわち、地形的な微起伏を克服し初めて全面に展開する水田が完成した時期であり、水城地の開発史のなかにおいては重要な画期となるものである。第IV面の調査で確認された低地部最下層の小区画水田が9世紀代であることから、Ⅲ-1面の成立時期については9~11世紀の間である。

IV 第四面の調査

低地から微高地にかけ全面的に水田化される以前の段階で、微高地の市側に広がる低地のみ水田が展開する。現在、比較的平坦に見える本地域であるが、低地部の埋積が進行していない状況では微起伏がまだ著しい。そのため水田の開発は、旧河道に起源をもつ低地部に限られる。よって、調査は低地部の水田遺構に焦点を絞って行った。土層観察用のAトレンチを設け、微地形と水田開発の関係をつかむとともに、最下層の水田については的的にその広がりを追った。

1 水田遺構

低地から微高地に展開する第三面の水田開発以前には、低地部に最低2枚の水田が確認される。下層から水田Ⅳ-1面、水田Ⅳ-2面とする。

(1) 土層からみた微地形と水田遺構

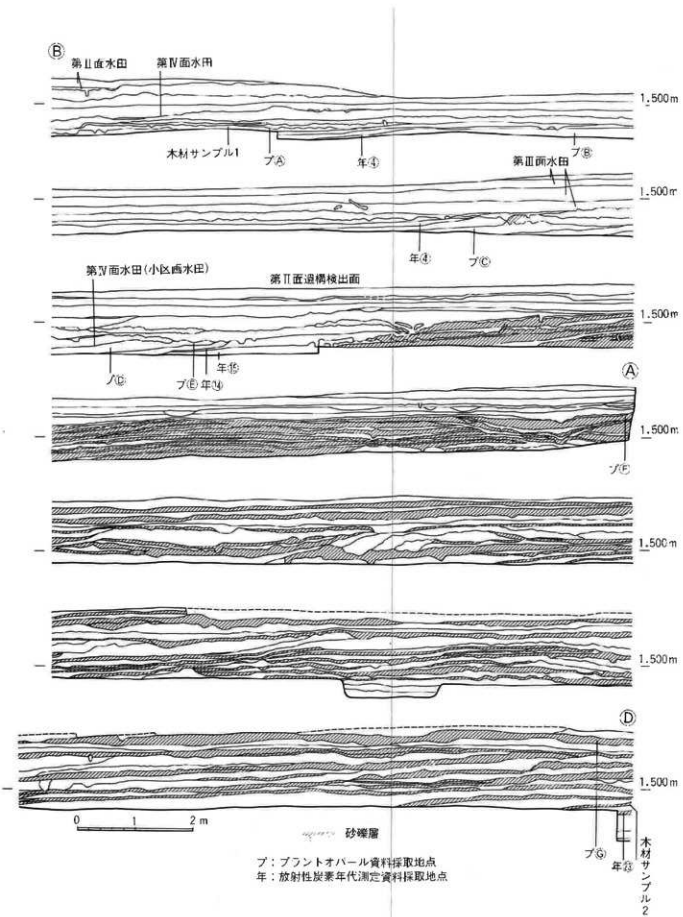
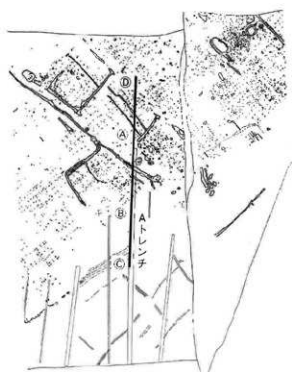
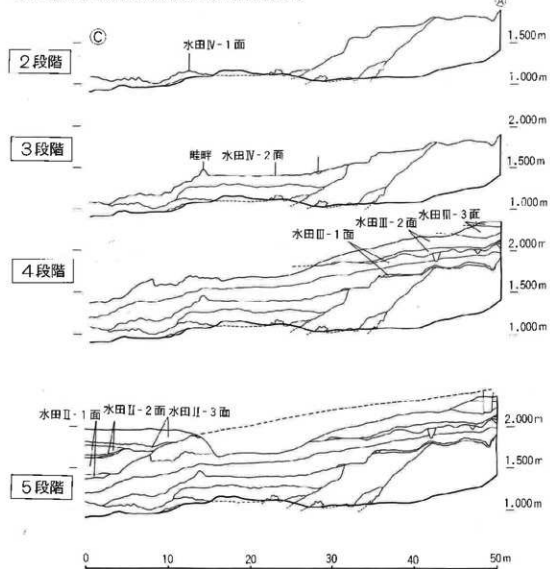
調査区の低地部から微高地にかけ地形を横断するように設定したAトレンチの成果から、微地形の形成と水田開発をみていく(第228図)。なお、水田開発については第Ⅱ面の段階まで言及する。

・第1段階

水田形成以前の段階である。第Ⅱ面の集落検出面から下に1m余まで下げたが、その大部分は灰色粘質土層と砂礫層の互層になっている。これら両層のセットが、1回の洪水による堆積を示している。すなわち、洪水時にはより重たい砂礫土がいち早く堆積し、その後細かい粒子の軽い灰色粘質土が堆積したものである。各層はいずれも5~10cmほどであるが、時として20cmに及ぶものもみられる。層厚の厚いものが下の層にあるといったことは認められないが、微高地の中央に近づくほど厚い層が多いことが分かる。砂礫層については下層に行くほど、また微高地の中央によるほど礫が相対的に大きくなる傾向が読み取れる。礫の大きさは径2cm未満であるが、ポイント③から15m中央寄りの地点の下層では、2、3cmのやや粒の大きい砂礫層が確認されている。土層図を記録した面からではないが、近接する地点の本砂礫層に相当する層から古墳時代前半と思われる土器片が採取されているので、本砂礫層の堆積年代をおおまかに想定することができる。当然のことながら上層は微高地中央部から縁辺部に向かい傾斜しており、洪水堆積により微高地が高く、そして広がっていく様子が読み取れる。河川活動に伴う微高地の形成をみると、その中央には核となる大型の堆積物があるという。ポイント③から30m中央寄りの下層では、5~10cmの礫層層が認められ、本微高地形成の中核となる堆積物の可能性もある。この層の標高は、0.7mである。

微地形形成の時期を探るため、土層に含まれる炭化物や木材を資料として、放射性炭素年代測定法による測定を行った。その結果、ポイント③から30m中央寄り確認された礫層の30cm上の層では、A.D.390年。さらにその上層20cmにあった木材では、A.D.440年であった。それらから、本微高地の形成が古墳時代前半には活発に行われていたことが分かる。この年代は、ポイント③から15m中央寄りの地点の下層で検出された土器とも近いものである。その後、10~20cmほどの堆積をともなう洪水が繰り返され、微高地がさらに拡大したものである。第2段階の小区画水田が9世紀代と考えられることから、約400年間で高さにして1m、片方の幅で50mの微高地が形成されたことになる。この間、20cmを越える大量の土砂堆積がほとんどみられず、多くの場合は10~20cmの小~中規模な堆積である。これは、洪水破壊部との位置関係や大規模な破壊を伴う洪水であったかにもよると思われるが、12世紀の集落西から現代までの約900年間に0.8~1mの堆積があったことと比べると、倍以上の速さで堆積が進んでいることが分かる。しかし、50cmを越えるような大規模な堆積がみられないことから、古墳時代前半以降の八坂本店遺跡周辺では、極端な地形変化を伴わないやや安定した河川活動の段階に

○八坂本庄遺跡Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ面土層変遷図



第228回 八坂本庄遺跡B区Aトレンチ土層図



第229图 八坂本住遺跡B区第Ⅳ面調査区位置图

あったと言える。だが、頻繁に小・中規模の洪水堆積が広い範囲でみられることから、集落はもろんのこと水田経営にも適さない地域であったものと思われる。

・第2段階

おおむね微高地の形成活動が終了し、地形的に安定期にはいる。第1段階で頻繁であった小・中規模の洪水被害の回数は少なくなる。この段階にいたり、微高地南側の低地に水田Ⅳ-1面が形成される。水田Ⅳ-1面は後段で詳述するように小区画水田(第230図)であるが、低地部全域に広がるものではなく、微高地の縁辺部のみを展開する。これは、低地部が全面的に安定した状態であったものではなかったためと思われる。この段階以降の河川活動による堆積活動は、微高地上への堆積よりも低地部の埋積にウエイトが移る。すなわち、微高地上にも堆積をもたらすが、それにも増して低地部への堆積活動が著しい。

水田Ⅳ-1面は、低地部に堆積する黒色ないしは灰色の粘質土をベースにしている。粘質土には木質などの有機物を多く含んでおり、地下水位が高かったものと思われる。水田に用水を供給する水路が検出されていないことから、天水のみで水田を維持する初源的な形態であったと思われる。水田面の標高は1.0~1.2mである。

水田の年代を決定する方法として、放射性炭素年代測定法を試みた。採取した資料は、耕作上下の黒色粘質土層の土壌である。土層には微細な炭化物を含んでおり、測定の結果A.D.370年の値を得た。また、耕作上中から採取された木片サンプルでは、A.D.790年の数値がでている。耕作上面から検出された土器の時期が9世紀代と推定されることから、放射性炭素年代測定法の年代とほぼ符号する。以上から、第2段階の水田はほぼ9世紀代のものと思われ、9世紀中には埋没していた可能性が高い。

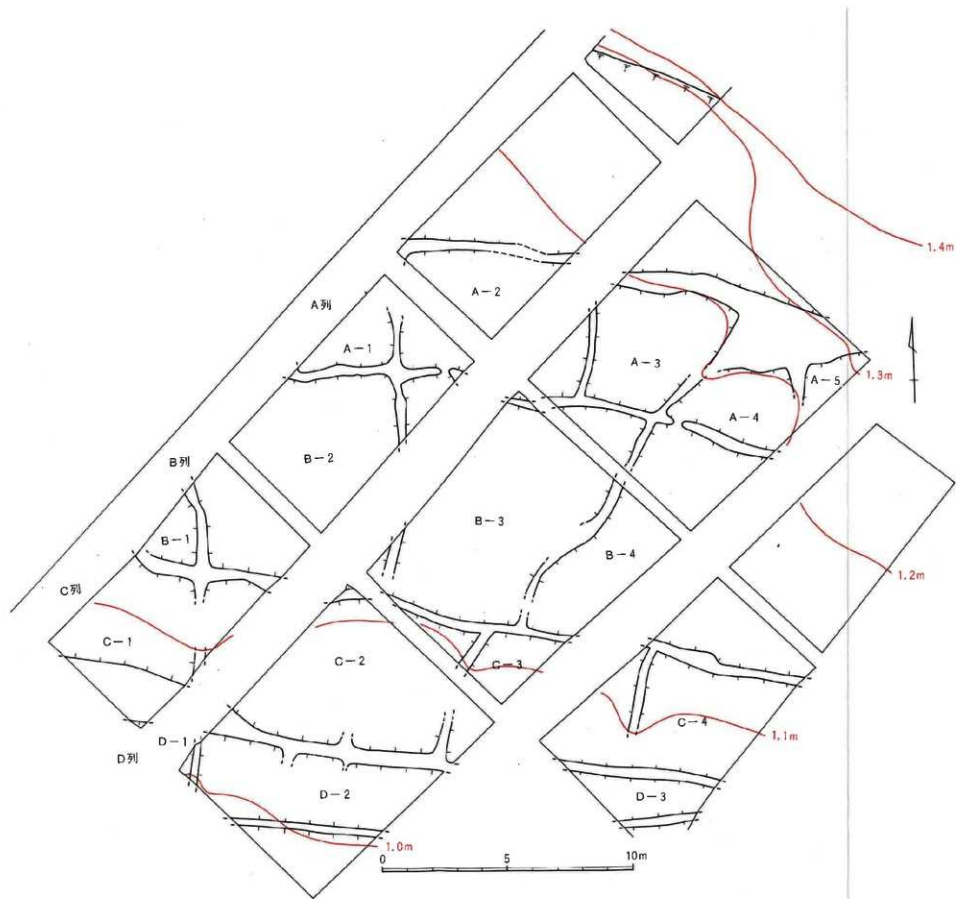
・第3段階

水田はまだ微高地上に及ばず、低地のみを展開する。第2段階の小区画水田は、厚さ20~40cmの灰色砂質土層で覆われる。この層は主として低地のみにもみられ、後世の削平などもあると思われるが微高地上にはほとんど及んでない。第3段階の水田Ⅳ-2面は、この灰色砂質土層が耕作土となり、粘質がやや強くなる。この段階の水田は第2段階に比べ、微高地側に約12m、低地側に約6m広がっている。洪水被害を受けるものの、それを乗り越え低地部内の水田開発が順調に進んでいる様子が見える。

この水田Ⅳ-2面については面的な調査を行っていないが、水田に伴う遺構として扁平な石を基にいたれた畦畔が断面で確認できる。そこから微高地側に向かい標高1.4m前後の水田面が約20m続く。このことから、本水田は第2段階でみられた小区画水田ではなく、大区画の水田であったことが想定される。これの背景として、低地部の堆積が進行したことがあげられ、低地内でより広い平地を確保できるようになったことが考えられる。加えて、大区画の水田維持には天水だけでは難しく、用水の確保が欠くことのできない条件であると思われる。水田への用水路の可能性をもつものとして、低地部へ落ち始める肩部に溝がみられる。溝は幅40cmで、断面皿状を呈するものである。おそらく八取川に堰を設け、溝へ導水したものであろう。第2段階の水田が洪水に頼る小区画水田であったことを考えると、本段階の水田は確実な飛躍が認められる。しかし、微起伏を克服し平野全体に展開するまでにはいならず、微高地間の低地部の開発が重点を極めた段階である。

・第4段階

この段階にいたり、初めて微高地上に水田が進出する。すなわち、平野内の微起伏を克服し、平野全体に水田が展開する。水田は、「第Ⅷ面の調査」で詳述した水田Ⅲ-1面、水田Ⅲ-2面、水田Ⅲ-3面である。これらの水田のうち、最も新しい水田Ⅲ-3面に伴う溝10は、旧字図にみられる条里地割の方向にのることから、水田Ⅲ-3面は平野全体に展開する条里水田であったと思われる。水田Ⅲ-3面の下層にあたる水田Ⅲ-1面、水田Ⅲ-2面からも、溝10と同様な位置で溝を確認することができる。よって、下層の水田も条里水田であった可能性が高い。しかし、下層水田の溝や畦畔の方向をみると、水田Ⅲ-3面の溝10とはやや異なっている。この方位の乱れについては、本地区が条里地区の縁辺部にあるため生じたものと理解され、溝を同様な位置で踏襲していることを重視すれば、この段階の当初から平野全体を一定の規模のもとに地割した条里水田であったと考えることができる。



第230图 八坂本庄通跡B区第IV面小区画水田

この段階は、第3段階で平野に散在していた水田を統合したもので、水路系統の変更や新設、加えて統一的な地籍設定など、極めて計画的な大規模事業であったことが想定される。時期的には、9世紀から11世紀の間に位置付けられる。このような事業の推進は、律令体制のような強力推進母体の後押し不可欠で、土木技術的な発展と併せ可能となったものであろう。しかし、地理学的な側面からみれば、低地の埋積進行があったからこそ大規模な水田の造成も行うことができたのであり、様々な条件がこの段階にいたり整った結果であると言える。

・第5段階

第4段階で平野全体に展開した水田のうち、微高地部からはいったん水田が退き、水田は再び低地部のみに限られる。水田が退いた微高地には、多数の屋敷地が連なる大規模な集落が進出してくる。屋敷のなかには溝により区画されたものや、庇を付した大規模な建物からなり屋敷器を伴うものなど、上位階層に位置付けられると思われるものもある。微高地上から水田が退く理由として、異常気象などに伴う河床低下などからくる用水不足などが考えられる。

水田については「第Ⅱ面の調査」で詳述したが、低地部に水田Ⅱ-1面、Ⅱ-2面、Ⅱ-3面の3枚が認められる。いずれも微高地から低地に落ちる層部に用水路と思われる溝が伴う。川掛かりと推定されるが、前代の水路系統を中途より変更し引き込んだものか、あるいは新たに堰を設けたものかは判断できない。いずれにしても用水供給に不安があったようで、水田Ⅱ-1面では溜め井併用水路が付けられている。この段階はおおむね12世紀代を中心とした時期と考えられ、平野部の水田の再開発・再整備がなされたものである。

(2) 水田遺構

第Ⅳ面の調査で検出された2枚の水田のうち、下層の水田Ⅳ-1面を面的に広げた(第230図)。この水田は、本遺跡で最も古い水田である。

水田Ⅳ-1面は洪水堆積層である灰色砂質土層に厚く覆われるもので、調査では砂質土層を丁寧に除去していった。その結果、微高地に沿うように小区画水田が確認された。水田は微高地側からA列、B列、C列、D列の4列にわたりみられ、D列より南側には水田は及ばない。水田の南北方向の幅は各列により異なり、A列が約5m、B列が8~9m、C列が4~6m、D列が約2.5mである。これは、水田が展開する低地内の微地形に規制されたものと思われ、幅の広い水田がみられるC列では傾斜が緩やかになっている。各列の水田はさらに5~10mの長さで区切られるが、B列は方形基調に、その他の列は長方形基調の平面形を呈する。水田の全形がほぼ分かるもの水田面積をみると、A列ではA-2が37.5㎡、A-3が20㎡、B列ではB-2が56㎡、B-3が67.5㎡、B-4が80㎡以上、C列ではC-2が50㎡、C-3が30㎡である。以上の水田は、低地内の微細地形も十分に克服できずに水田を展開する段階ではあるが、極端な小区画ではなく、水田によってはかなりの面積を有するものもある。畦畔の大部分は幅0.3~0.5mであるが、部分的に幅2mにも及ぶ場所もみられる。これらの水田に対する用水施設と思われるような溝は、まったく確認されていない。水田耕作土となっている層が木質などを多量に含んでおり、本業的に地下水水位がかなり高かったものと推定される。よって、本水田は天水掛かりであったと考えられる。本水田面上から7器が検出された(第231図150)。底部ヘラ切りと思われる、体部下半には強い回転ナデに伴う凹凸がみられる。類例が乏しいが9世紀代のものと思われる。



第231図 八坂本庄遺跡B区水田Ⅳ-1面

第4章 まとめ

八坂本庄遺跡は調査の結果、水田や集落の面を段階的に確認することができた。本章では、これらを段階的に整理し、まとめに代える。

第Ⅰ段階

本調査区内において、最古の水田が形成される以前の段階である。活発な河川活動により、微高地が形成される状況が確認できる。1回の洪水堆積層の多くは10~20cmの厚さで、層厚50cmを越えるような大規模な堆積がみられない。よって、八坂本庄遺跡周辺では、極端な地形変化を伴わないやや安定した河川活動の段階にあったと言える。しかし、朝霧に小・中規模の洪水堆積が広い範囲で見られることから微高地はまだ形成途上で、集落の立地には不適であったものと考えられる。また、周辺の低地部についても不安定な状況で、水田経営にも適さない地域であったものと思われる。

第Ⅱ段階

本地区最古の水田である水田Ⅳ-1面が形成される段階で、9世紀代と推定される。この段階はおおむね微高地の形成活動が終了し、地形的にはやや安定期に入るものと思われる。第Ⅰ段階で顕著であった小・中規模の洪水被害の回数も少なくなる。水田Ⅳ-1面は小区画水田であるが、低地部が全面的に安定した状態でなかったためか、微高地の縁辺部のみを展開する。水田の標高は1.0~1.2mで、低地部に堆積する黒色ないしは灰色の粘質土をベースにしている。粘質土には木質などの有機物を多く含んでおり、地下水位が高かったものと思われる。水田に用水を供給する水路が検出されていないことから、天水のみで水田を維持する初歩的な形態であったと思われる。集落については、水田に隣接する微高地地上には形成されない。おそらく、弥生・古墳時代以来集落地として利用されている段丘上などの安定した場所にあるものと考えられる。

第Ⅲ段階

水田Ⅳ-2面の段階で、水田ははまだ微高地地上に及ばず、低地部のみを展開する。しかし、水田は第Ⅱ段階でみられた小区画水田ではなく、大区画の水田であったと思われる。低地部の埋積が進行したこともあり、水田は微高地方向へも大きく拡大する。低地へ落ち始める層部に用水路と考えられる溝がみられることから、天水のみで頼るのではなく、八坂川に堰を設け川からも用水を導いた可能性が高い。第Ⅱ段階の水田が天水に頼る小区画水田であったことを考えると、本段階の水田は確実な飛躍が認められる。しかし、微起伏を克服し平野全体に展開するまでにはいたらず、微高地間の低地部のみを開発に留まる段階である。遺跡周辺の平野部では、微高地と低地部の微起伏が交互に続いたと思われるが、水田開発は低地部のみで、平野全体からみれば露状に水田と非水田地が続く景観であったと思われる。

第Ⅳ段階

平野内の微起伏を克服し、平野全体に水田が展開する段階である。この段階の水田は水田Ⅲ-1面、水田Ⅲ-2面、水田Ⅲ-3面で、これらはおおむね奈良地割の方向にのる。よって、現在八坂川の両岸に広く展開する日野・中奈良は、この段階に成立したものと考えられる。成立の時期は明確にできないが、第Ⅱ段階の9世紀代から、第Ⅳ段階開始の11世紀末前後の間に位置付けられる。本段階の条里水田は、第Ⅲ段階の平野において露状に散在していた水田を統合したもので、水路系統の変更や新設、加えて統一的な地割設定など、極めて計画的な大規模事業である。このような事業の推進は、強力な推進母体と一定の土木技術が揃うことにより可能となるものであるが、忘れてならないのが、低地部の西移進行という地理学的な側面である。これらの条件が整い、初めて本段階のような開発が実現するものと思われる。

水田開発史的に言えば、この段階で平野部の開発はピークをむかえる。しかし、本来的に水との縁が薄い微高地上の水田では、用水の安定的確保に不安が伴う場合がしばしばあったと思われる。水田Ⅲ-2面で確認された畝状の遺構は、そのあたりの不安定さを物語るもので、嵩としての利用もあったことが分かる。このような浅性的な用水不足を補うものとして、土壌32や土壌46のような農業用施設井戸が設けられる。井戸は用水路に沿いみられるもので、自ら水を湧出する深さはなく、むしろ溜め井的な性格が強いものである。水田の面的な開発が終了した後も、それらを維持するための様々な方策がなされていたことが分かる。

第V段階

第IV段階で平野全体に展開した条里水田のうち、微高地部からいったん水田が退く段階である。水田は再び低地部だけに限られ、水田が退いた微高地上には大規模な集落が進出してくる。時間的には、11世紀末-12世紀後半までの間である。

微高地から水田が撤退することについては、何らかの理由により水田の維持が困難になったためと考えられる。その要因として、異常気象に伴う河床低下などからくる用水不足が考えられる。調査区付近は用水系統の本端部に位置しており、農業用施設井戸などが併設されるほど用水確保には不安がきまとう場所であった。そのため、用水系統に異常が生じた場合、最も打撃を受けやすかったものと思われる。

水田の撤退した微高地に進出した集落は、層敷地が連なる大規模なものである。層敷地のなかには溝により区画されたものや、庇を付した大規模な建物からなり屋敷幕を伴うものなど、上位階層に位置付けられると思われるものもある。これまで微高地上に集落が形成されたことはなく、このような大規模な集落が進出するのは極めて突然の感を受ける。遺物を見ると、供膳土器に畿内の桶粟型丸器碗や京都系土師貫土器に加え吉備系土師器碗などもみられ、一般の農業集落の範疇では考えにくいものである。本地域の集落は、洪水被害を避ける意味もあり、伝統的に段丘などに形成されていたと思われる。そのような状況のなかで、あえて八坂川に近い平野部に上位階層の層敷地も含め進出するのは、大きく衰退した水田再開発の役割を担うということだけでは十分に納得がいかないように思える。洪水の危険を覚悟で平野部進出を行った結果生じる利点のひとつに、八坂川に近づくという点がある。すなわち、川を利用した水上交通網と直結した機能をもつことになる。本遺跡は、物資の集積ステーションの役割も兼ね備えていた可能性が考えられる。このように考えれば、本遺跡は八坂川の支配機構と密接に結びついたものであることになる。しかし、微高地上の集落は12世紀後半以降撤退し、その後現在に至るまで大規模な集落が形成されることはない。よって、物資の集積ステーション的役割を本遺跡が担ったのは、歴史的には短期間であったと言える。

本段階の水田については、微高地の南側に展開する低地部で水田Ⅱ-1西、Ⅱ-2面、Ⅱ-3面の3枚を確認した。いずれも微高地から低地に落ちる部部に用水路と思われる溝が伴う。前代の水路系統を中途より変更し引き込んだものか、あるいは新たに堰を設けたものかは判断できないが、川掛かりと推定される。しかし、用水供給に不安があったようで、水田-1面では水路中に土壌がいくつも掘られる溜め井併用水路が付けられている。

第VI段階

微高地上から集落が撤退し、再び平野部全域が水田化される12世紀後半以降の段階である。旧字図をみると、調査区北側の小字真方、辨領までは整然とした条里地帯が展開している。しかし、調査区の位置する小字浜、前田では、畦畔や水路がおおむね条里方向にのるものの、整然とした地割はみられない。第IV段階の条里水田において南北方向の幹線水路であった溝2と溝10のうち、集落撤退後もほぼ同位置につけられたのは溝2である。溝10は同位置に復元されることなく、約50m西方に移り溝3がその役割を果たすことになる。溝2、溝3とも旧字図の段階まで引き継がれており、旧字図の本道跡周辺における地割の大枠が2世紀後半まで遡ることが確かめられた。しかし、第IV段階でみられた当初の条里地割については、厳密には引き継がれていない。

また、集落については14世紀後半、16世紀代、近世のものが確認されている。いずれも第V段階の集落には逐

く及ばず、小規模なものである。また、遺物の量も少ない。おそらく、水田の中に屋敷地が点在するという状況であったと思われる。現在、調査区周辺に屋敷は全く存在しないが、近世には広瀬村という近世村落がこの地にあったと言う。近世広瀬村の初源は14世紀代まで遡ると考えられる。屋敷地として条件的に著しく劣るこの場所に村落を後発的に形成した階層は、有利な立地条件に屋敷を構えるイエから分出した庶家筋などと思われる。そのような意味において、第V段階の集落とは大きく性格が異なる。

八坂本庄造跡 土曜観察表

第4号 八坂本庄造跡A区土曜1出土土器

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の遺構名
		口径	底径	器高				
1	瓦葺土器火鉢	(39.0)	—	—	角閃石・灰石・赤褐色、明褐色	外面口縁下に2条の突帯とスタンプ文	内面 面輪ココナデ 外面 面輪ココナデ、ナナナデ、2条の三角突帯	八坂Ⅱa区1号土曜
2	瓦葺土器火鉢	(32.5)	—	—	角閃石 砂粒、緑灰色	口縁部内側にわずかに肥厚	内面 ユビナデ 外面 ユビナデ、ココナデ、2条の三角突帯	八坂Ⅱa区1号土曜
3	瓦葺土器火鉢	(34.2)	—	—	角閃石 灰色粒子 砂粒、内・明灰色 (内)淡褐色 (外)淡褐色	口縁下に突帯	内面 ココナデ、ナデ 外面 ココナデ、ユビナデ、2条の三角突帯	八坂Ⅱa区1号土曜
4	土鍋	—	(23.0)	—	角閃石・長石・白色粒子、淡褐色、緑褐色	—	格子目状タタキ	八坂Ⅱa区1号土曜
5	瓦葺土器火鉢	—	—	—	角閃石・長石 (内)黒灰色 (外)淡褐色	外面に、多条の突帯を付す	内面 ココナデ、ココハラミガキ 外面 ココナデ、黒台貼り付け	八坂Ⅱa区1号土曜
6	土師製土器小皿	(5.4)	(5.2)	1.8	茶色粒子・白色粒子・石英・黒粉・緑褐色、明褐色	体部直立意味	内面 ココナデ、ナデ 外面 ココナデ、黒部糸切り	八坂Ⅱa区1号土曜

第6号 八坂本庄造跡A区土曜2出土土器

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の遺構名
		口径	底径	器高				
7	土師製土器	(15.2)	—	—	角閃石 茶色粒子、明褐色	口縁部内側にやや肥厚	内面 ココナデ、ココハラミガキ、ナデ 外面 ココナデ	八坂Ⅱa区2号土曜
8	土鍋	(29.2)	—	—	角閃石・長石・白色粒子・灰色粒子・茶色粒子・石英・淡褐色、緑褐色	口縁部強く外反 体部直立意味	内外面 面輪ココナデ	八坂Ⅱa区2号土曜

第9号 八坂本庄造跡A区土曜3出土土器

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の遺構名
		口径	底径	器高				
9	土師製土器	(16.2)	6.3	4.4	長石・白色粒子・石英、淡灰色	口縁部わずかに外反 外開きの高さはり付け	内面 ココナデ、ナメハラミガキ 外面 面輪ココナデ、ココハラミガキ、ユビナデ	八坂Ⅱa区1号土曜

第10号 八坂本庄造跡A区土曜4出土土器

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の遺構名
		口径	底径	器高				
10	土鍋	—	—	—	角閃石、淡褐色	体部は直線的に口縁へ	内面 ココナデ 外面 ココナデ、黒ユビオサエ	八坂Ⅱa区4号土曜
11	土鍋	—	—	—	角閃石 白色粒子 茶色粒子、(内)淡褐色 (外)淡褐色(漆塗り)	—	内面 ナデ 外面 板状工具によるココナデ	八坂Ⅱa区4号土曜

第12号 八坂本庄造跡A区土曜5出土土器

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の遺構名
		口径	底径	器高				
12	青磁碗	(14.4)	(5.2)	7.7	粉・緑灰色、黄入あり 胎土・緑灰色、明褐色あり	環の痕跡	内外面 輪 脚線非文	八坂Ⅱa区6号土曜

第16号 八坂本庄造跡A区土曜8出土土器

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の遺構名
		口径	底径	器高				
13	土師製土器小皿	8.4	6.6	1.4	茶色粒子・白色粒子、明褐色、淡褐色	体部直立意味 口縁部は尖る	内面 面輪ココナデ、黒部ユビナデ 外面 面輪ココナデ、黒部糸切り、漆塗り	八坂Ⅱa区8号土曜
14	土師製土器	—	(7.0)	—	黄白色	外開き意味の高さはり付け	内面 黒方キ 外面 面輪ココナデ、ユビナデ	八坂Ⅱa区8号土曜
15	土師製土器	—	(6.2)	—	長石・茶色粒子、淡褐色、茶色(内側にすず付粉)	断面三角形の高さはり付け	内面 ナメハラミガキ 外面 面輪ココナデ、ユビナデ、漆塗り	八坂Ⅱa区8号土曜
16	白磁碗	(13.4)	—	—	灰白色の釉、内面に黄入あり	内面に磨き文様あり	内外面 輪、文様入り 外面 黒線	八坂Ⅱa区8号土曜

第21号 八坂本庄造跡A区土曜14出土土器

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の遺構名
		口径	底径	器高				
17	土師製土器小皿	(8.2)	(6.0)	1.7	角閃石・長石、淡褐色	体部のたがり丸みをもつ	内面 面輪ココナデ、ナデ 外面 面輪ココナデ、黒部糸切り、漆塗り	八坂Ⅱa区14号土曜

第26号 八坂本庄造跡A区土曜16出土土器

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の遺構名
		口径	底径	器高				
18	内黒土器碗	—	黒台径(9.0)	—	角閃石 茶色粒子、(内)明灰色 (外)淡褐色	蓋台唇部が内外に肥厚	内面 不方向へらミガキ 外面 ココハラミガキ、へらミガキ	八坂Ⅱa区23号土曜
19	土師製土器	(14.4)	—	—	角閃石・茶色粒子、淡褐色、黒灰色(胎土)	透めの体部	内面 ココナデ、ナメハラミガキ 外面 ココナデ、ココハラミガキ	八坂Ⅱa区17号土曜

第31号 八坂本庄造跡A区土曜22出土土器

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の遺構名
		口径	底径	器高				
20	土師製土器小皿	10.1	6.7	1.7	角閃石・長石・茶色粒子、明褐色	体部のたがり丸みをもつ	内面 面輪ココナデ、ユビナデ 外面 面輪ココナデ、黒部糸切り、へらミガキ	八坂Ⅱa区23号土曜
21	土師製土器	—	(6.4)	—	茶色粒子、淡褐色、黒灰色	断面方形の高さはり付け	内面 ナメハラミガキ 外面 ユビナデ、黒部切り磨し、漆塗り	八坂Ⅱa区25号土曜
22	土師製土器	—	(5.5)	—	長石・茶色粒子	断面方形の高さはり付け	内面 へらミガキ、ユビナデ 外面 ユビナデ	八坂Ⅱa区25号土曜

第35回 八坂本庄遺跡A区23出土土器

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の遺構名
		口径	底径	器高				
23	内黒土器碗	(17.4)	—	—	角閃石・茶色粒子・砂粒、淡灰褐色、黒灰色	口縁部縮やかに外反	内外黒 ヨコヘラミガキ、ヨコナデ	八坂Ⅱa区 (00) 母土層

第36回 八坂本庄遺跡A区土層出土土器

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の遺構名
		口径	底径	器高				
24	土師製土器小皿	(19.6)	—	—	白色粘土、褐色色、灰色(内)	口縁部縮やかに上がる	内面 回転ヨコナデ 外面 回転ヨコナデ、磨崖液状文	八坂Ⅱa区 池田遺構
25	土師製土器小皿	(24.4)	—	—	白色粘土、灰青色、褐色(内)	口縁部縮やかに上がる	内面 回転ヨコナデ 外面 回転ヨコナデ、磨崖液状文	八坂Ⅱa区 池田遺構
26	瓦葺土器土器	—	—	—	角閃石・黒石、淡灰褐色、明褐色	外面に多量の突帯	内面 回転ヨコナデ 外面 回転ヨコナデ、ヘラミガキ	八坂Ⅱa区 池田遺構

第37回 八坂本庄遺跡A区遺跡出土土器

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の遺構名
		口径	底径	器高				
27	土師製土器小皿	—	5.8	—	黒石・茶色粒子、明灰褐色	体部は斜方向にのびる	内面 回転ヨコナデ、ユビナデ 外面 回転ヨコナデ、ユビナデ	八坂Ⅱa区 池田遺構
28	土師製土器小皿	9.8	7.4	1.5	角閃石・黒石・白色粒子・茶色粒子・石炭、淡灰褐色	体部内湾気味	内面 回転ヨコナデ、ユビナデ 外面 回転ヨコナデ、磨崖液状文	八坂Ⅱa区 池田遺構
29	土師製土器小皿	(9.4)	(7.2)	1.1	茶色粒子・茶色粒子、明灰褐色	体部中程にナデで生じた縁が入る	内面 ヨコナデ、ナデ 外面 ヨコナデ、磨崖液状文	八坂Ⅱa区 池田遺構
30	土師製土器小皿	(9.4)	(7.2)	1.1	角閃石・黒石・茶色粒子、明灰褐色、淡灰褐色	体部中程にナデで生じた縁が入る	内面 回転ナデ 外面 ヨコナデ、磨崖液状文	八坂Ⅱa区 池田遺構
31	土師製土器土器	16.0	9.3	3.4	角閃石・黒石・白色粒子・茶色粒子・石炭、淡灰褐色	体部は縮やかに上がり斜方向にのびる	内面 回転ヨコナデ、ユビナデ 外面 回転ヨコナデ、磨崖液状文	八坂Ⅱa区 池田遺構
32	土師製土器土器	(15.3)	8.2	3.5	黒石・茶色粒子、明灰褐色、淡褐色	体部内湾気味で口縁部が突り気味	内面 回転ヨコナデ、ユビナデ 外面 回転ヨコナデ、磨崖液状文	八坂Ⅱa区 池田遺構
33	土師製土器土器	—	8.2	—	角閃石・黒石・白色粒子・茶色粒子、淡灰褐色	体部内湾気味に上がる	内面 回転ヨコナデ、ユビナデ 外面 回転ヨコナデ、磨崖液状文	八坂Ⅱa区 池田遺構
34	内黒土器碗	—	(7.4)	—	角閃石・白色粒子、明灰褐色	やや冴めの高台はり付け	内面 ヨコヘラミガキ 外面 ヨコヘラミガキ、ヨコナデ、ナデ	八坂Ⅱa区 池田遺構
35	内黒土器碗	(15.0)	—	—	角閃石・茶色・茶色粒子、淡褐色、黒色(内) 外面にすず付片	口縁部わずかに外反気味	内外黒 回転ヨコナデ	八坂Ⅱa区 池田遺構
36	白磁碗	(15.0)	(高台径) 13.0	(器高) 11.0	胎灰白色、胎土淡黄色	—	内外黒 磨崖、高台一部磨崖輪	八坂Ⅱa区 池田遺構

第38回 八坂本庄遺跡A区土層1出土土器

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の遺構名
		口径	底径	器高				
37	土師製碗	(15.6)	7.2	5.5	黒石・茶色粒子、明灰褐色	口縁部わずかに外反気味 断面方形の高台を外開き気味に	内面 回転ヨコナデ、ユビナデ 外面 回転ヨコナデ、ユビナデ、磨崖液状文	八坂Ⅱa区 母土層

第39回 八坂本庄遺跡A区方形器層出土土器

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の遺構名
		口径	底径	器高				
39	土師製土器土器	15.0	8.8	3.1	黒石・茶色粒子、明灰褐色	体部内湾気味	内面 回転ヨコナデ、ユビナデ 外面 回転ヨコナデ、磨崖液状文	八坂Ⅱa区 池田遺構
40	土師製土器小皿	9.4	6.6	1.4	黒石・茶色粒子、淡灰褐色	縁部は丸くおさめ体部は外反気味	内面 回転ヨコナデ、ユビナデ 外面 回転ヨコナデ、磨崖液状文	八坂Ⅱa区 池田遺構
41	土師製土器小皿	16.0	7.5	1.6	黒石・茶色粒子、淡灰褐色	縁部は丸くおさめ体部はわずかに外反気味	内面 回転ヨコナデ、ユビナデ 外面 回転ヨコナデ、磨崖液状文	八坂Ⅱa区 池田遺構
42	土師製碗	—	5.8	—	黒石・茶色粒子、淡褐色 胎土黒重砂明褐色	断面長方形の高台はり付け	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデメハラミガキ	八坂Ⅱa区 池田遺構

第40回 八坂本庄遺跡A区溝2出土土器

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の遺構名
		口径	底径	器高				
43	土師製碗	—	(7.2)	—	黒石・茶色粒子、灰白色、黄白色	断面長方形の高台はり付け	内面 回転ヨコナデ 外面 回転ヨコナデ、ユビナデ、磨崖液状文	八坂Ⅱa区 1号溝
44	土師製碗	—	(8.6)	—	黒石・茶色粒子・白色粒子、明灰褐色	外開き気味に高台はり付け	内面 ヨコナデ、磨崖液状文 外面 ヨコナデ、磨崖液状文	八坂Ⅱa区 1号溝
45	土師製碗	—	(8.0)	—	茶色粒子・灰色粒子、灰白色	断面方形の高台はり付け	内面 回転ヨコナデ、ユビナデ 外面 回転ヨコナデ、ユビナデ	八坂Ⅱa区 1号溝
46	土師製碗	—	(7.0)	—	茶色粒子・石炭、黄白色	やや冴めの高台はり付け	内面 回転ナデ、ユビナデ 外面 回転ナデ、ユビナデ	八坂Ⅱa区 1号溝
47	瓦葺碗	—	(6.2)	—	白色粘土・茶色粒子、明灰褐色、淡褐色	断面方形の高台はり付け	内面 回転ヨコナデ、ユビナデ 外面 回転ヨコナデ、ユビナデ、磨崖液状文	八坂Ⅱa区 1号溝

第41回 八坂本庄遺跡A区溝2出土土器

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の遺構名
		口径	底径	器高				
48	青磁碗	(15.4)	—	—	オリブ黄色	内外面に磨崖き文	内外黒 磨崖、磨崖輪	八坂Ⅱa区 2号溝
49	白磁碗	(9.0)	3.6	2.3	胎土オリブ灰色 胎土灰白色	内湾気味の体部	内外黒 磨崖、高台磨崖輪 外面にハケ目文	八坂Ⅱa区 2号溝
50	白磁碗	—	(7.0)	—	胎灰白色	—	内外黒 磨崖、高台磨崖輪	八坂Ⅱa区 2号溝
51	瓦葺碗	—	(7.0)	—	角閃石・黒石・白色粒子、淡灰色、(内) 胎土灰白色	断面三角形の高台はり付け	内面 ヨコナデ 外面 回転ヨコナデ、ユビナデ、磨崖液状文	八坂Ⅱa区 2号溝

52	瓦器様	-	(6.6)	-	長石・白色粗粒・黄灰色 (内)淡黄色・黄褐色 長石・白色粗粒・茶色粗粒・黄白色 黄褐色・黄褐色(内)	断面三角形の蓋台は付け	内面 タテへラミナ 外面 回転コナデ・ユビナデ・底面糸切リ	八坂Ⅱa区 2号溝
53	二脚器様	-	(6.4)	-	長石・白色粗粒・茶色粗粒・黄白色 黄褐色・黄褐色(内)	断面三角に近い蓋台は付け	内面 タテへラミナ 外面 回転コナデ・ユビナデ・ユビナデ・底面糸切リ	八坂Ⅱa区 1号溝
54	土師器様	-	(6.0)	-	黄褐色・長石・茶色粗粒・淡灰褐色 (内)淡褐色	やや凸形の断面三角形を呈する蓋台は付け	内面 タテへラミナ 外面 回転コナデ・ユビナデ・底面糸切リ	八坂Ⅱa区 1号溝
55	土師器様	(16.4)	-	-	黄褐色・長石・淡灰色 淡灰色	内側面隆縁の高ミガキ不明	内外面 回転コナデ	八坂Ⅱa区 1号溝
56	土師質土器片	14.2	6.4	3.3	黄褐色・茶色粗粒・白色粗粒・淡灰褐色	体部内湾気味	内面 回転コナデ・ユビナデ 外面 回転コナデ・ユビナデ	八坂Ⅱa区 1号溝
57	土師質土器小皿	9.6	7.8	1.5	黄褐色・長石・茶色粗粒・淡褐色	体部内湾気味	内面 回転コナデ・ユビナデ 外面 回転コナデ・底面糸切リ	八坂Ⅱa区 1号溝
58	土師質土器小皿	6.0	6.4	1.3	長石・白色粗粒・茶色粗粒・淡褐色	体部内湾気味	内面 回転コナデ・ユビナデ 外面 回転コナデ・底面糸切リ	八坂Ⅱa区 1号溝
59	土師質土器小皿	9.4	7.2	1.2	黄褐色・長石・茶色粗粒・淡褐色・黄褐色	体部直立気味	内面 回転コナデ・ユビナデ 外面 回転コナデ・底面糸切リ	八坂Ⅱa区 1号溝
60	土師質土器小皿	(8.6)	(6.4)	1.1	黄褐色・長石・茶色粗粒・淡灰褐色	体部内湾気味	内面 回転コナデ・ユビナデ 外面 回転コナデ・底面糸切リ	八坂Ⅱa区 1号溝
61	土師質土器小皿	8.3	6.6	1.2	黄褐色・長石・茶色粗粒・淡褐色・黄褐色	体部斜方向にのびる	内面 回転コナデ・ユビナデ 外面 回転コナデ・底面糸切リ	八坂Ⅱa区 1号溝
62	土師質土器小皿	(9.2)	(6.8)	1.5	長石・茶色粗粒・淡褐色	体部のたつちがはシャープ	内面 回転コナデ・ユビナデ 外面 回転コナデ・底面糸切リ	八坂Ⅱa区 1号溝
63	土師質土器小皿	9.6	7.6	1.7	長石・茶色粗粒・石炭・黄褐色・淡褐色	やや内湾気味の体部	内面 回転コナデ・ユビナデ 外面 回転コナデ・底面糸切リ	八坂Ⅱa区 1号溝
64	土師質土器小皿	8.4	6.6	1.1	黄褐色・長石・白色粗粒・茶色粗粒・石炭・黄褐色・淡褐色	蓋高が低く・体部内湾気味	内面 回転コナデ・ユビナデ 外面 回転コナデ・底面糸切リ	八坂Ⅱa区 1号溝
65	土鍋	(4.2)	-	-	黄褐色・長石・白色粗粒・茶色粗粒・石炭・黄褐色(内外面にすずり付着)・明褐色	体部半球状・口縁くの字状に折れる	内面 ヨコナデ・ナメケ 外面 ヨコナデ・ユビナデ・タテハケ目 内面 ヨコナデ・ユビナデ・ナメケ目	八坂Ⅱa区 1号溝

第67図 八坂本住遺跡A区柱穴出土土器(2)

番号	器種	注量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 位置
		口径	底径	高さ				
67	白磁研	(14.6)	-	-	灰白色の釉	口縁玉縁	内外面 磨蝕	八坂Ⅱa区 P-67
68	瀬戸黄瀬戸系	-	7.2	-	薄緑リブ黄色・緑土灰白色	-	内面 高筒 外面 磨蝕・ヨコナデ・底面ユビナデ	八坂Ⅱa区
69	内土器様	(16.3)	-	-	黄褐色・長石・石炭 (内)茶色 黄褐色	口縁縁部がわずかに外反	内面 ヨコへラミナ 外面 ヨコナデ・タテ・ヨコへラミナ	八坂Ⅱa区 P-155
70	内土器器	-	(15.2)	-	黄褐色・茶色粗粒・内湾気味 (外)淡褐色 (内)淡褐色・黄褐色	深い体部で・内湾気味	内面 ヨコナデ・ヨコナメヘラミナ 外面 ヨコへラミナ	八坂Ⅱa区 P-61
71	土師器様	-	6.8	-	黄褐色・長石・淡褐色・淡灰褐色(内)	断面長方形の蓋台は付け	内面 タテ・ヨコへラミナ 外面 回転コナデ・ユビナデ	八坂Ⅱa区 P-157
72	土師器様	-	(7.0)	-	黄褐色・長石・淡黄白色・淡褐色	断面方形の蓋台は付け	内面 回転コナデ・ユビナデ 外面 回転コナデ・ユビナデ	八坂Ⅱa区 P-62
73	土師器様	(16.6)	-	-	長石・茶色粗粒・明褐色	滑らかな体部	内面 タテ・ヨコへラミナ 外面 ヨコへラミナ	八坂Ⅱa区 P-47
74	土師器様	(16.2)	-	-	石炭・分粒・淡黄白色	口縁縁部が丸く膨ら	内面 回転コナデ・ミガキ 外面 ヨコナデ	八坂Ⅱa区 P-74
75	土師器様	(15.2)	-	-	茶色粗粒・長石・淡褐色	-	内面 ヨコナデ・ミガキ 外面 ヨコナデ	八坂Ⅱa区 P-74
76	土師質土器様	(16.4)	-	-	長石・茶色粗粒・淡褐色	-	内外面 回転コナデ	八坂Ⅱa区
77	土師質土器片	-	(7.8)	-	黄褐色・茶色粗粒・石炭・(内)明褐色 (外)黄褐色・淡褐色	体部斜方向にたつち上がる	内面 回転コナデ 外面 ヨコナデ・ユビナデ・底面糸切リ・底面凹	八坂Ⅱa区
78	土師質土器片	-	(7.8)	-	黄褐色・明褐色	体部斜方向にたつち上がる	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ・底面糸切リ・底面凹	八坂Ⅱa区 P-18
79	土師質土器片	-	7.2	-	黄褐色・長石・茶色粗粒・淡褐色・淡黄褐色	-	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ・底面糸切リ・底面凹	八坂Ⅱa区 P-18
80	土師質土器小皿	(9.6)	(6.4)	1.2	黄褐色・茶色粗粒・明褐色	体部のたつちがはやや丸みをもつ	内面 ヨコナデ・ナメケ 外面 ヨコナデ・底面糸切リ	八坂Ⅱa区 P-74
81	土師質土器小皿	(8.4)	(6.8)	1.1	白色粗粒・黄褐色・淡褐色	体部は底面から立つた円筒状にすぼまる	内面 ヨコナデ・底面糸切リ 外面 回転コナデ・ユビナデ	八坂Ⅱa区 P-79
82	土師質土器小皿	9.7	6.2	1.2	黄褐色・茶色粗粒・黄褐色・明褐色	体部は緩やかにたつち上がり口縁へ	内面 回転コナデ・ユビナデ 外面 回転コナデ・底面糸切リ・底面ナメケ	八坂Ⅱa区 P-3
83	土師質土器小皿	(9.4)	(7.2)	1.2	黄褐色・長石・茶色粗粒・白色粗粒・石炭・淡褐色 (外)淡褐色	体部は斜方向に直線的にのびる	内面 回転コナデ・ユビナデ 外面 回転コナデ・底面糸切リ・底面凹	八坂Ⅱa区 P-181
84	瓦器小皿	-	(7.4)	-	黄褐色・茶色粗粒・淡褐色(内)	体部のたつちがは緩やか	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ・底面糸切リ	八坂Ⅱa区 P-24
85	土師質土器小皿	(8.8)	(6.4)	(1.1)	黄褐色・茶色粗粒・白色粗粒・淡褐色	体部斜方向にたつち上がる	内面 回転コナデ・ユビナデ 外面 回転コナデ・底面糸切リ	八坂Ⅱa区 P-158
86	土師質土器小皿	6.0	6.6	1.5	長石・白色粗粒・茶色粗粒・淡褐色	体部斜方向にのびる	内面 回転コナデ・ユビナデ 外面 回転コナデ・底面へラミナ	八坂Ⅱa区 P-10
87	土鍋	-	-	-	黄褐色・長石・茶色粗粒・石炭	口縁くの字状に折れる	内外面 横方向のナデ	八坂Ⅱa区 P-10
88	土鍋	-	-	-	黄褐色・長石・茶色粗粒・白色粗粒・黄褐色・淡褐色	平底気味	内面 ヨコナメ 外面 ヨコナメナメケ	八坂Ⅱa区 P-136

第68図 八坂本住遺跡A区柱穴出土土器(3)

番号	器種	注量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 位置
		口径	底径	高さ				
89	土鍋	(26.6)	-	18.3	黄褐色・長石・茶色粗粒・白色粗粒・黄褐色・淡褐色・明褐色(内外面にすずり付着) 黄褐色・長石・茶色粗粒・石炭	球状の体部 口縁くの字状に折れる	内面 ヨコナデ 外面 タテ・ナメケのへら状工具によるナデ・ヨコナデ	八坂Ⅱa区 P-64
90	土鍋	(20.6)	-	-	黄褐色・長石・茶色粗粒・石炭・黄褐色・淡褐色(内外口縁部に)	半球球形で・口縁部くの字状に折れる	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ・タテ・ナメケ	八坂Ⅱa区 P-38

91	土鍋	(29.8)	-	-	角閃石・長石・金鱗石・石英・白色粒子 黒色・黒褐色・淡灰色	口縁縁やかへ外反	内面 ユビナテ、ユビオサエ、ナ トメラスリ 外面 ユビナテ、ユビオサエ コナテ、タテナメの黒いワ タ	八坂Ⅱa区 お-10 P-45
92	瓦葺土器火鉢	-	-	-	角閃石・褐色粒子 内・淡灰色・黒褐色(すず付 着) 外・淡灰色	-	内面 ナテ 外面 ココハケナテ	八坂中 P-7
93	土師製土器 フコの前二	(外径) 84	(内径) 28	-	長石・白色粒子・茶色粒子 内・明褐色 外・濃褐色	-	手づね ユビオサエ、ユビナテ	八坂Ⅱa区 P-219
94	製塩土器	(19.4)	-	-	角閃石・石英・褐色粒子・ 黄褐色	-	内面 布地唐 外面 ユビオサエ、ココユビナテ	八坂Ⅱa区 お-11 P-204

第95番 八坂本土師A区表層(1)

番号	器種	法量 (cm)			粘土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
95	白磁碗	-	64	-	粘土・灰白色	-	内外面 施釉・高台部へ外反は 無 内底に沈線 底面へラ切り	八坂Ⅱ区 お-7 養福
96	白磁碗	-	54	-	陶灰白色 粘土・白色 白色粒子	-	内面 施釉 外面 施釉、下部へ底面施 釉	八坂Ⅱ区 お-9 H-1
97	横型瓦器鉢	(15.0)	-	-	内・陶灰色 外・陶灰色、灰白色 内・黄ともすず付着	口縁縁部内面に沈線	内面 ユビナテ、ココハラミガキ 外面 ユビナテ、ココハラミガキ ユビオサエ	八坂Ⅱ区 お-9 G-1
98	横型瓦器鉢	(15.0)	-	-	陶灰色・内・外面にすず付着、 胎土灰白色	口縁縁部内面に沈線	内面 ユビナテ、ココハラミガキ 外面 ユビナテ、ココハラミガキ ユビオサエ	八坂Ⅱ区 C-8 D-9
99	瓦器碗	-	(8.0)	-	灰白色・砂粒 灰白色	断面三角形の高台をほり付け	内面 ユビナテ、ココハラミガキ 外面 ユビナテ、ココハラミガキ	八坂Ⅱ区 お-9 G-2
100	黒色土器碗	(15.4)	-	-	内・陶灰色 外・濃褐色	口縁部わずかに外反	内面 ユビナテ、ココハラミガキ 外面 ユビナテ、ココハラミガキ	八坂Ⅱ区 お-9 G-4
101	内黒土器碗	(15.2)	64	52	角閃石・長石・白色粒子・茶色 粒子 内・黒色 外・明赤褐色	断面方形の高台を外開きにはり付 け	内面 陶製コナテ、底面に口の 沈線 外面 陶製コナテ、ナテ、ユビ ナテ、底面切り線、横ナテ	八坂Ⅱ区
102	内黒土器碗	-	(7.0)	-	角閃石・長石 内・陶灰色 外・濃褐色	外開き気味の高台をほり付け	内面 ユビナテ、タテハラミガ キ 外面 ユビナテ、底面を切 り	八坂Ⅱ区 表層
103	内黒土器碗	-	6.0	-	角閃石・褐色粒子 内・陶灰色 外・淡灰褐色	断面長方形の高台をほり付け	内面 不整形のへらうらぎ 外面 高台貼り付け・ユビナ テ、底面を切り継ぎユビナ テ	八坂Ⅱ区 お-9 G-4
104	内黒土器碗	-	(8.4)	-	角閃石 内・陶灰色 外・明赤褐色	断面長方形の高台をほり付け	内面 ユビナテ、高台貼り付 け・ユビナテ、底面ナテ	八坂Ⅱ区 お-9 G-4
105	内黒土器碗	-	(6.0)	-	角閃石 内・陶灰色 外・淡灰褐色	断面長方形の高台をほり付け	内面 ユビナテ、へらうらぎ 外面 ナテ、ユビナテ、高台貼 り付け・ユビナテ、底面ナ テ	八坂Ⅱ区 お-9 G-4
106	内黒土器碗	(15.2)	-	-	角閃石・長石・褐色粒子・白色 粒子 黄褐色	深い体部	内外面 陶製コナテ	八坂Ⅱ区 お-12 表層
107	内黒土器杯	-	(8.0)	-	角閃石・白色粒子 内・黒色 外・淡灰褐色・黒褐色(すず付 着)	体部は緩やかにたち上がり内湾気 味か	内面 ユビナテ 外面 ユビナテ、底面糸切り継 ぎ・底反	八坂Ⅱ区 お-9 H-3
108	土師器碗	(15.6)	66	58	角閃石・長石・褐色粒子・茶色 粒子 淡灰褐色	内湾気味の体部 断面三角形の高台はり付け	内面 陶製コナテ、ユビナテ 外面 陶製コナテ、ユビナテ	八坂Ⅱ区
109	土師器碗	-	8.6	-	積層土 黄白色に近い淡褐色	断面方形の高台をほり付け	内面 陶製コナテ、へらうらぎ 外面 陶製コナテ、ユビナテ	八坂Ⅱ区 お-7 養福
110	土師器碗	-	(6.4)	-	積層土 明赤褐色	断面方形の高台をほり付け	内面 ユビナテ、高台貼り付 け・ユビナテ、底面ナテ	八坂Ⅱ区 お-8 G-5
111	土師器碗	-	6.0	-	褐色粒子・灰褐色粒子・白色粒 子 黄褐色	断面三角形気味の高台はり付け	内面 陶製コナテ、ユビナテ 外面 陶製コナテ、ユビナテ	八坂Ⅱ区 お-10? 養福
112	土師器碗	-	6.2	-	角閃石・褐色粒子 黄白色	断面長方形の高い高台	内面 ナテ 外面 ユビナテ、底面糸切り継 ぎ	八坂Ⅱ区 C-8 O-6
113	土師器碗	-	6.1	-	積層土・褐色粒子 黄白色	断面方形の高台はり付け	内面 ユビナテ 外面 ユビナテ、底面黄褐色	八坂Ⅱ区 お-7 養福
114	土師器碗	-	6.5	-	積層土・白色粒子 黄白色	断面方形の高台はり付け	内面 黄褐色の高平頭 外面 ユビナテ、その他厚さ の不均	八坂Ⅱ区 表層
115	土師器碗	-	6.4	-	積層土 黄白色	断面方形の高台をほり付け	内面 ナテ・ココ・ナメラスリ 外面 陶製コナテ、底面糸切 り	八坂Ⅱ区 C-8? 養福
116	土師器碗	-	6.6	-	長石・褐色粒子 明赤褐色	断面方形の高台はり付け	内面 ナテ・ココハラミガキ 外面 陶製コナテ、底面糸切 り	八坂Ⅱ区 お-9
117	土師器碗	(15.4)	-	-	長石・白色粒子 内・灰褐色 外・黒色(すず付着)	-	内面 陶製コナテ、ココ・ナ メラスリ 外面 陶製コナテ、ココ・ナ メラスリ	八坂Ⅱ区 お-9? 養福
118	土師器碗	(14.4)	-	-	積層土砂粒 黄白色	口縁部外反	内面 ユビナテ・ココハラミガ キ 外面 ユビナテ・ココハラミガ キ	八坂Ⅱ区 お-9 O-7 P-7
119	土師製土器杯	(15.4)	(9.2)	3.2	角閃石・長石・褐色粒子 淡灰褐色	体部斜方向にのびる	内面 陶製コナテ、ユビナテ 外面 陶製コナテ、底面糸切 り	八坂Ⅱ区 お-9 H-3
120	土師製土器杯	-	7.1	-	褐色粒子・砂粒 黄白色に近い淡褐色	体部斜方向にたち上がる	内面 陶製コナテ、ユビナ テ 外面 陶製コナテ、底面糸切 り	八坂Ⅱ区 お-9? 養福
121	土師製土器杯	-	5.6	-	角閃石・長石・褐色粒子・白色 粒子 淡灰褐色	深い体部が斜方向に内湾気味に のびる	内面 ユビナテ 外面 陶製コナテ	八坂Ⅱ区
122	土師製土器杯	(15.0)	(8.6)	3.4	角閃石・長石・褐色粒子 淡灰褐色	やや内湾気味の体部が緩やかにた ち上がる	内面 陶製コナテ、ユビナ テ 外面 陶製コナテ、底面糸切 り・底反	八坂Ⅱ区

第70回 八坂本庄遺跡A区表層②

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の遺構名
		口径	底径	器高				
123	土師貫土器 小皿	(9.8)	8.6	1.3	長石・茶色粒子。 赤灰褐色・胡埴色(外)	体部ややかたまり斜方角に のびる	内面 回転コナナテ、ユビナテ 外面 回転コナナテ、ユビナテ、 裾部糸織り	八坂Ⅱ区 遺構Ⅱ
124	土師貫土器 小皿	9.8	7.6	1.5	長石・白色粒子・茶色粒子、 胡埴色	体部は斜方向に比較的シャープに たまりがえる	内面 回転コナナテ、ユビナテ 外面 回転コナナテ、裾部糸織り	八坂Ⅱ区 遺構Ⅱ
125	土師貫土器 小皿	(9.0)	(7.2)	1.1	角閃石・長石・茶色粒子、 赤灰褐色	体部斜方向にのびる	内面 回転コナナテ、ユビナテ 外面 回転コナナテ、裾部糸織り	八坂Ⅱ区 お-9-1-2
126	土師貫土器 小皿	(9.5)	(7.4)	1.5	長石粒子・石英、 淡胡埴色	内面直線の体部がシャープにたまり 上がる	内面 回転コナナテ、ユビナテ 外面 回転コナナテ、裾部糸織り	八坂Ⅱ区 お-9-4-6
127	土師貫土器 小皿	8.8	8.2	1.3	長石・白色粒子・茶色粒子、 胡埴色	体部斜方向にのびる	内面 回転コナナテ、ユビナテ 外面 回転コナナテ、裾部糸織り 底付残存	八坂Ⅱ区
128	土師貫土器 小皿	(8.8)	(8.2)	1.5	白色粒子・茶色粒子、 胡埴褐色	底部からわずかに重立し、体斜方向 向にのびる	内面 回転コナナテ、ユビナテ 外面 回転コナナテ、裾部糸織り	八坂Ⅱ区
129	須恵器おね鉢	-	-	-	白色粒子・長石、 緑灰色、灰色	コ縁端部は上方にやや肥厚	内外面 回転コナナテ	八坂 け-8 遺構Ⅱ
130	須恵器碗	-	(8.6)	-	白色粒子・砂粒、 灰色	円盤状高台	内面 ヲコナテ、裾部糸織り・ナ テ	八坂Ⅱ区 お-9-1-4

第78回 八坂本庄遺跡B区土層25出土土器

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の遺構名
		口径	底径	器高				
132	肥前産器 白磁蓋	(13.2)	-	2.5	白色釉	-	内外面 蓋輪 縁部 無釉	八坂Ⅱ区 土層2 井戸縁内

第79回 八坂本庄遺跡B区土層24出土土器

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の遺構名
		口径	底径	器高				
134	土師貫土器 小皿	5.2	5.3	1.5	長石・角閃石・石英・灰色粒子、 胡埴色	体部重立し、体部は尖り気味	内面 ヲコナテ 外面 ヲコナテ、裾部糸織り	八坂Ⅱ区 北東区 土層Ⅱ
135	青磁碗	-	(7.2)	-	青釉	深い底鉢	内面 縁輪、足込中央部無釉 外面 縁輪、裾部無釉	八坂Ⅱ区 北東区 土層Ⅱ
136	土鍋	-	-	-	長石・角閃石・白色粒子、 内面胡埴色 (外)淡褐色	体部斜方向にのびる	内面 横方向のナテ、ヨコナテ 外面 ヲコナテ、ユビオサエ後縁 方向のナテ	八坂Ⅱ区 北東区 土層Ⅱ
137	土鍋	-	-	-	長石・角閃石・白色粒子、 胡埴色	体部斜方向にのびる	内面 ヲコナテ、横方向のナテ 外面 ヲコナテ、横方向のナテ	八坂Ⅱ区 北東区 土層Ⅱ
138	備前焼燗鉢	(26.0)	12.8	10.7	灰白色粒子・石英、 黄灰褐色	口縁部内縁 縁目は6本単位	内外面 回転コナナテ 口内面はゆるナテ上げ	八坂Ⅱ区 北東区 土層Ⅱ
139	備前焼燗鉢	(28.6)	-	-	砂粒、 茶褐色	口縁部重立気味	内外面 ヲコナテ	八坂Ⅱ区 北東区 土層Ⅱ
140	瓦質土器火鉢	-	-	-	長石・角閃石・灰色粒子、 胡埴灰色	体部下に突帯1条 縁は付付け	内外面 ミガキ	八坂Ⅱ区 北東区 土層Ⅱ
141	瓦質土器火鉢	-	-	-	長石・角閃石・灰色粒子、 黄灰色(部分的に赤褐色)	体部下に突帯1条 縁は付付け	内面 ミガキ 外面 ミガキ、ナテ	八坂Ⅱ区 北東区 土層Ⅱ

第88回 八坂本庄遺跡B区建物0区出土土器

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の遺構名
		口径	底径	器高				
149	須恵器蓋	-	-	-	石英、 硬黄灰色	-	内面 ヲコナテ 外面 格子目タタキ 胎土積み上げ	八坂Ⅱ区 お-14 P-2

第104回 八坂本庄遺跡B区建物53出土土器

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の遺構名
		口径	底径	器高				
150	土師貫土器 小皿	(7.8)	(7.0)	1.1	長石・角閃石、 (内)淡褐色色 (外)黄白色	体部重立気味 口縁端部は尖る	内面 ヲコナテ、ナテ 外面 ヲコナテ、裾部糸織り	八坂Ⅱ区 お-24 P-3

第108回 八坂本庄遺跡B区建物55出土土器

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の遺構名
		口径	底径	器高				
151	土鍋	-	-	-	長石・角閃石・石英・白色粒子、 (内)淡褐色色 (外)淡褐色	口縁部外方に拵れる	内面 横方向のハケ波・ユビオサエ 外面 ヲコナテ・ユビオサエ後縁 方向のナテ	八坂Ⅱ区 お-23 P-3

第109回 八坂本庄遺跡B区建物59出土土器

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の遺構名
		口径	底径	器高				
152	土師器鉢	-	-	-	長石・角閃石・茶色粒子、 内面灰色 (外)黄白色	口縁部わずかに外反	内外面 ミガキ 口縁部面取り調整	八坂Ⅱ区 お-22 P-1

第112回 八坂本庄遺跡B区建物62出土土器

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の遺構名
		口径	底径	器高				
153	土師器鉢	(14.4)	-	-	長石・角閃石・石英・白色粒子、 白色に濃い胡埴色	口縁部肥厚気味でやや外反	内面 ヲコナテ、ヨコナテ縁ミガキ 外面 ヲコナテ 口内面縁	八坂Ⅱ区 お-20 P-2

第113図 八坂本庄遺跡9区建物63出土遺物

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の遺構名
		口径	底径	器高				
154	土師甕土器片	(15.0)	-	-	長石・角閃石・茶褐色粒子、鉄褐色	口縁縁部丸くおさめる	内外面 回転コナナ	八坂Ⅱb区 跡-1 P-1

第119図 八坂本庄遺跡8区建物71出土遺物

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の遺構名
		口径	底径	器高				
155	土師甕土器小皿	(10.2)	-	-	長石・角閃石、黄白色	体部斜方向に口縁にいたる	内外面 コナナ	八坂Ⅱb区 跡-13 P-4
156	土師甕土器小皿	8.8	6.2	1.2	長石・角閃石、淡褐色	体部斜方向にたも上がる	内面 コナナ、不整ナテ 外面 コナナ	八坂Ⅱb区 跡-13 P-2
157	土師甕器	-	6.4	-	長石・角閃石・茶褐色粒子、鉄褐色	断面三角形の高台は折り付	内面 2方ナテ 外面 3方ナテ、コナナ	八坂Ⅱb区 跡-13 P-2

第122図 八坂本庄遺跡8区建物72出土遺物

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の遺構名
		口径	底径	器高				
158	内黒土器壺	-	9.0	-	長石・角閃石・石英、 内(灰)褐色 外(黄)褐色	断面方形の高台は折り付	内面 丁寧なミガキ 外面 回転コナナ後ミガキ、底 部回転コナナ	八坂Ⅱb区 跡-13 P-5
159	土師	-	-	-	長石・角閃石・石英・茶色粒子 鉄褐色	-	外面 板状工具によるコナナ 外面 板状工具の先端で端方 面にナテ	八坂Ⅱb区 跡-13 P-5
160	土師	(18.0)	-	-	砂粒・灰石・角閃石・石英・金 色粒子・白色粒子、 暗茶褐色	断面直立気味 口縁は強く外方に折れる	内面 コナナ、板状工具による 端方向のナテ 外面 コナナ、ユボオガ工後板 状工具による端方向のナテ	八坂Ⅱb区 跡-14 次調査

第125図 八坂本庄遺跡8区建物78出土遺物

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の遺構名
		口径	底径	器高				
161	瓦輪板	-	-	-	石英・白色粒子、 褐色	縁部丸くおさめる	内外面 丁寧なミガキ	八坂Ⅱb区 跡-11 P-7
162	土師器碗	-	7.8	-	長石・角閃石・茶色粒子・白色 粒子、 内(薄)緑色 外(薄)褐色	断面長方形の高台は折り付	内面 ミガキ 外面 コナナ、西台貼付け	八坂Ⅱb区 跡-11 P-7

第126図 八坂本庄遺跡8区建物78出土遺物

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の遺構名
		口径	底径	器高				
163	土師器碗	-	-	-	長石・角閃石、 淡褐色	縁部尖り気味	内外面 回転コナナ 口縁部取取り	八坂Ⅱb区 跡-11 P-2
164	土師器碗	-	-	-	長石・角閃石、 黄白色	口縁部外皮	内面 3方ナテ 外面 回転コナナ、ミガキ	八坂Ⅱb区 跡-11 P-2

第127図 八坂本庄遺跡8区建物86出土遺物

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の遺構名
		口径	底径	器高				
165	土師甕土器小皿	(8.6)	(6.7)	1.1	長石・角閃石・茶褐色粒子、 内(灰)色、部分的に赤褐色の 化粧土 外(薄)褐色	体部のたも上りには丸みをもち、端 部尖り気味	内面 コナナ、回転コナナ 外面 コナナ、底部丸切り	八坂Ⅱb区 跡-14 P-1

第128図 八坂本庄遺跡8区建物89出土遺物

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の遺構名
		口径	底径	器高				
166	土師器碗	-	-	-	長石・角閃石、 黄白色	-	内外面 コナナ後ミガキ	八坂Ⅱb区 跡-17 P-1

第130図 八坂本庄遺跡8区建物94出土遺物

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の遺構名
		口径	底径	器高				
167	土師甕土器小皿	8.6	6.6	1.1	長石・角閃石・茶褐色粒子、 淡褐色	体部は短く斜方向にのびる	内面 コナナ、不整ナテ 外面 コナナ、底部丸切り	八坂Ⅱb区 跡-17 P-1

第143図 八坂本庄遺跡8区建物103出土遺物

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の遺構名
		口径	底径	器高				
168	土師甕土器片	-	(7.4)	-	長石・角閃石、 黄白色	体部斜方向にたも上がる	内面 回転コナナ 外面 コナナ、底部丸切り	八坂Ⅱb区 跡-16 P-3
169	土師甕土器片	-	(8.4)	-	長石・角閃石・茶色粒子、 内(灰)褐色 外(薄)褐色	体部斜方向にたも上がる	内面 コナナ 外面 コナナ、底部丸切り	八坂Ⅱb区 跡-16 P-1
170	土師甕土器小皿	(8.1)	(6.4)	1.15	長石・角閃石・石英・茶褐色 淡褐色	体部内湾気味	内面 コナナ、宮杖ナテ不整 ナテ 外面 コナナ、底部丸切り	八坂Ⅱb区 跡-16 P-1
171	土師甕土器小皿	8.4	6.7	1.2	長石・角閃石・石英・茶褐色 淡褐色	体部内湾気味	内面 コナナ、不整ナテ 外面 コナナ、底部丸切り	八坂Ⅱb区 跡-16 P-1
172	土師甕土器小皿	(9.1)	(7.2)	1.1	長石・角閃石・茶色粒子、 淡褐色	体部斜方向にのびる	内面 コナナ、ナテ 外面 コナナ、底部丸切り	八坂Ⅱb区 跡-16 P-1
173	土師甕土器小皿	-	-	-	長石・角閃石・茶褐色粒子、 淡褐色	体部のたも上りにはゆるやか	内面 コナナ 外面 コナナ、底部丸切り	八坂Ⅱb区 跡-16 P-3

第144図 八坂本庄遺跡8区建物104出土遺物

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の遺構名
		口径	底径	器高				
174	白磁陶	-	-	-	やや鈍色	口縁縁部が強く外方に折れる	内外面 施釉	八坂Ⅱb区 跡-13 P-1

第146回 八幡本庄遺跡9区遺構(9出土品)

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の遺構名
		口径	底径	器高				
175	京都系土師器 壺	(9.5)	(5.4)	1.1	灰褐色粘土。 淡褐色	平づくね、底をいたての字状口縁	内面ヨコナデ 外面ヨコナデ、上辺オコエ	八幡区b区 土層6
176	土師器 壺	-	-	-	長石・角閃石 黄白色 灰褐色	口縁外反	内面ヨコナデ、縁ミガキ	八幡区b区 土層11
177	土師器 壺	-	-	-	長石・角閃石・石英 灰褐色 淡褐色	口縁外反	内面ヨコナデ 外面ヨコナデ	八幡区b区 土層11

第150回 八幡本庄遺跡9区土層30出土品

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の遺構名
		口径	底径	器高				
178	白磁碗	-	-	-	内外面に黄入り	口縁くの字状に折れる	内面施釉 外面施釉、下縁磨削	八幡区b区 土層8
179	土師 壺	-	-	-	長石・角閃石・石英 内淡褐色 外淡褐色	口縁くの字状に折れる	内面ヨコナデ、横方向のハケ。 縁ヨコナデ、ヨコナデ。 外面ヨコナデ、横方向のナデ。 上辺オコエ	八幡区b区 土層8

第154回 八幡本庄遺跡8区土層31出土品(1)

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の遺構名
		口径	底径	器高				
180	土師質土器 杯	(13.6)	(10)	4.3	長石・角閃石・赤色粘土。 淡褐色	体部直立気味 たし上がりは丸みをもち	内面ヨコナデ、回転ナデ、不整ナデ 外面ヨコナデ、底部糸切り後仕上げ	八幡区b区 土層7
181	土師質土器 杯	(13.2)	(9.2)	4.0	長石・角閃石・赤色粘土。 内淡褐色 外淡褐色	体部直立気味	内面ヨコナデ、回転ナデ、不整方向ナデ 外面ヨコナデ	八幡区b区 土層7
182	土師質土器 杯	(2.2)	0.6	3.5	長石・角閃石・白色粘土・石英 内暗褐色 外淡褐色	体部直立気味	内面ヨコナデ、縁状工具による ヨコナデ 外面ヨコナデ、底部糸切り後仕上げ	八幡区b区 土層7
183	土師質土器 杯	12.8	9.4	4.3	長石・角閃石・赤色粘土・灰色粘土 淡褐色	体部直立気味	内面ヨコナデ、不整方向ナデ 外面ヨコナデ、底部糸切り後仕上げ	八幡区b区 土層7
184	土師質土器 杯	(12.8)	(9.0)	4.4	長石・角閃石・赤色粘土。 淡赤褐色	体部のたし上がり部はシャープで直立気味	内面ヨコナデ、不整ナデ、回転ナデ、不整方向ナデ 外面ヨコナデ、底部糸切り後仕上げ	八幡区b区 土層7
185	土師質土器 杯	(13.0)	(8.8)	3.6	長石・角閃石・赤褐色粘土。 淡褐色	体部はやや斜方向にのびる	内面回転ナデ 外面回転ナデ、底縁糸切り後仕上げ	八幡区b区 土層7
186	土師質土器 杯	(12.4)	(8.4)	4.2	長石・角閃石・赤色粘土。 淡褐色	体部やや内湾気味に直立	内面ヨコナデ、不整方向のナデ 外面ヨコナデ、底部糸切り後仕上げ	八幡区b区 土層7
187	土師質土器 杯	(12.5)	(8.7)	4.1	長石・角閃石・赤色粘土。 淡褐色	体部はシャープにたし上がり直立気味	内面ヨコナデ、不整方向ナデ 外面ヨコナデ、底縁糸切り後仕上げ	八幡区b区 土層7
188	土師質土器 杯	13.0	8.2	4.1	長石・角閃石・石英・赤色粘土。 淡赤褐色	体部のたし上がりは丸みをもち	内面ヨコナデ、不整ナデ、回転ナデ 外面ヨコナデ、底部糸切り後仕上げ	八幡区b区 土層7
189	土師質土器 杯	(12.0)	(9.6)	4.2	長石・角閃石・赤色粘土。 淡褐色	体部直立気味	内面ヨコナデ、不整方向ナデ 外面ヨコナデ、底部糸切り後仕上げ	八幡区b区 土層7
190	土師質土器 杯	(2.4)	0.0	3.7	長石・角閃石・赤色粘土・白色粘土。 淡褐色	体部はシャープにたし上がり直立気味	内面ヨコナデ 外面ヨコナデ、底部糸切り後仕上げ	八幡区b区 土層7
'91	土師質土器 杯	(12.2)	(10.1)	3.3	長石・角閃石・霏母。 淡褐色	体部のたし上がりは断片的に丸みをもち	内面ヨコナデ、不整方向のナデ 外面ヨコナデ、底部糸切り後仕上げ	八幡区b区 土層7
192	土師質土器 杯	12.5	8.1	4.0	長石・角閃石・赤色粘土 淡褐色	体部のたし上がりは断片的に丸みをもち	内面ヨコナデ、不整方向ナデ 外面ヨコナデ、底部糸切り後仕上げ	八幡区b区 土層7
193	土師質土器 杯	(12.5)	(8.4)	(3.9)	長石・角閃石・赤色粘土。 淡褐色	体部はシャープにたし上がり直立気味	内面ヨコナデ、不整方向ナデ 外面ヨコナデ、底部糸切り後仕上げ	八幡区b区 土層7
194	土師質土器 杯	11.7	7.9	3.8	長石・角閃石・赤色粘土。 淡褐色	体部やや内湾気味	内面ヨコナデ、不整方向ナデ 外面ヨコナデ、底部糸切り後仕上げ	八幡区b区 土層7
195	土師質土器 杯	13.2	9.5	4.0	長石・角閃石・赤色粘土・石英 淡赤褐色	体部のたし上がりシャープで直立気味	内面ヨコナデ、不整方向ナデ 外面ヨコナデ、底部糸切り後仕上げ	八幡区b区 土層7
196	土師質土器 杯	(13.0)	(9.0)	(3.6)	長石・角閃石・赤褐色粘土。 黄白色	体部のたし上がりシャープで直立気味	内面回転ナデ、不整ナデ 外面回転ナデ、底縁糸切り後仕上げ	八幡区b区 土層7
197	土師質土器 杯	(12.4)	(8.8)	(3.9)	長石・角閃石・赤色粘土。 淡褐色	体部のたし上がりやや丸みをもち体部直立気味	内面回転ナデ、不整ナデ 外面回転ナデ、底縁糸切り後仕上げ	八幡区b区 土層7
198	土師質土器 杯	(12.0)	(7.0)	(3.5)	長石・角閃石・赤色粘土。 淡褐色	体部ややゆるゆる	内面ヨコナデ、不整ナデ 外面ヨコナデ、底部糸切り後仕上げ	八幡区b区 土層7
199	土師質土器 杯	(13.0)	(9.6)	3.8	長石・角閃石・石英・赤褐色粘土	体部のたし上がりはシャープ	内面ヨコナデ、不整方向ナデ 外面ヨコナデ、底部糸切り後仕上げ	八幡区b区 土層7
200	土師質土器 杯	(14.0)	(10.0)	3.9	長石・角閃石・石英	体部はシャープにたし上がり斜方向にのびる	内面回転ナデ 外面回転ナデ、底縁糸切り後仕上げ	八幡区b区 土層7
201	土師質土器 杯	(10.0)	(7.0)	3.5	長石・角閃石・赤褐色粘土。 内淡褐色 外淡褐色	体部はシャープにたし上がり直立気味	内面ヨコナデ 外面ヨコナデ、底部糸切り後仕上げ	八幡区b区 土層7
202	土師質土器 杯	(12.5)	(8.6)	3.8	長石・角閃石・赤色粘土。 淡褐色	体部直立気味	内面ヨコナデ、不整ナデ 外面ヨコナデ、底部糸切り後仕上げ	八幡区b区 土層7
203	土師質土器 杯	(12.0)	(8.4)	(4.4)	長石・角閃石・赤色粘土。 淡赤褐色	体部はシャープにたし上がり直立気味	内面ヨコナデ、不整方向ナデ 外面ヨコナデ、底部糸切り後仕上げ	八幡区b区 土層7
204	土師質土器 杯	(11.2)	10.0	(3.25)	長石・角閃石・霏母・赤色粘土 灰色粘土。 淡褐色、外淡赤褐色気味	体部のたし上がりは断片的に丸みをもち	内面回転ナデ、不整方向ナデ 外面ヨコナデ、底縁糸切り後仕上げ	八幡区b区 土層7

第159回 八幡本庄遺跡8区土層31出土品(2)

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の遺構名
		口径	底径	器高				
205	土師質土器 小皿	8.2	5.2	1.9	長石・角閃石・石英・灰色粘土 淡褐色	体部は斜方向にのびる	内面ヨコナデ、不整方向ナデ 外面ヨコナデ、底部糸切り後仕上げ	八幡区b区 土層7

239	上脚器輪	-	(5.5)	-	長石・黄閃石・灰色粗平・赤色粗平 (内)黄褐色(すすく付着) (外)黄褐色	断面三角形の裏せはり付け	内面 ミガキ 外面 ナデ、ヨコナデ、底部糸切り	八坂工6区 土庫19
240	上脚器輪	-	(7.0)	-	長石・黄閃石 (内)黄褐色 (外)灰白色	断面方形の裏せはり付け	内面 ミガキ 外面 ミガキ、ヨコナデ	八坂工6区 土庫19
241	二脚器輪	-	-	-	長石・黄閃石・石英・白色粗平 赤褐色	断面三角形の裏せはり付け	内面 ナデ 外面 ケスリ状のナデ、裏台貼付 (内)ナデ、底面糸切り	八坂工6区 土庫19
242	七脚器輪	-	(8.4)	-	長石・黄閃石・石英・白色粗平 (内)黄褐色 (外)黄褐色	断面三角形の裏せはり付け	外面 ナデ、ケスリ状の底面ヨコナデ、ヨコナデ、底部糸切り(金体的に黄褐色)	八坂工6区 土庫19
243	内黒土器鉢	-	-	-	長石・黄閃石 (内)黄褐色 (外)灰白色	-	内外面 全体均一厚壁、所々にミガキ	八坂工6区 土庫19
244	白磁碗	-	-	-	-	口縁部が外方に肥厚	-	八坂工6区 土庫19
245	白磁鉢	(13.6)	-	-	白磁釉	口縁部や外尻	内外面 筋輪、下部底貼	八坂工6区 土庫19
246	甗	-	-	-	粗(内)灰青灰白色、(外)黄褐色	-	外外面 筋輪	八坂工6区 土庫19
247	土鍋	(19.2)	-	-	長石・黄閃石・黄雲母・石英・白色粗平 赤褐色	口縁部扁平状に折れる	内面 ヨコナデ、縁方向のユビツナデ、蓋ナデ 外面 ヨコナデ、ハケ、ユビツナデ	八坂工6区 土庫19
248	土鍋	-	-	-	石英 (内)灰白色(すすく付着) (外)灰白色	-	内面 ユビツナデ、縁方向のナデ 外面 平竹タタキ(一部厚ナデ)	八坂工6区 土庫19

第179号 八坂本庄遺跡6区土庫43出土土器

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 品名
		口径	底径	器高				
249	内黒土器鉢	-	(7.8)	-	長石・黄閃石 (内)黄褐色 (外)黄褐色	断面長方形の裏せはり付け	内面 部分的にミガキ(金体的に厚壁) 外面 ヨコナデ、底部糸切り	八坂工6区 土庫22

第180号 八坂本庄遺跡6区土庫44出土土器

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 品名
		口径	底径	器高				
250	内黒土器鉢	-	-	-	長石・黄閃石・石英 (内)黄褐色 (外)灰白色	口縁部ややかに反	内外面 部分的にミガキ(金体的に厚壁)	八坂工6区 土庫23
251	内黒土器鉢	-	-	-	(内)黄褐色 (外)黄褐色	口縁部外反	内面 ヨコナデ、タテヘラナデ 外面 ヨコナデ、高台貼付(後ナデ、底部糸切り)	八坂工6区 土庫23
252	内黒土器鉢	-	(7.8)	-	黄閃石 (内)黄褐色 (外)黄褐色、灰白色	内面伏裏台	内面 ヨコナデ、タテヘラナデ、ヨコヘラナデ 外面 ミコヘラミガキ、ヨコナデ	八坂工6区 土庫23
253	内黒土器鉢	-	(7.8)	-	長石・黄閃石 (内)黄褐色 (外)黄褐色	内面伏裏台	内面 ミガキ 外面 回転ヨコナデ、底部糸切り	八坂工6区 土庫23

第185号 八坂本庄遺跡6区土庫47出土土器

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 品名
		口径	底径	器高				
256	土師質土器杯	-	-	-	長石・黄閃石・褐色粗平・毛粒粗平 赤褐色	体部斜方向にたち上がる	内面 ヨコナデ、回転ヨコナデ 外面 ヨコナデ、底部糸切り 内外ともに黄褐色	八坂工6区 土庫25
257	土師質土器杯	-	-	-	長石・黄閃石・赤色粗平・赤褐色	体部斜方向にたち上がる	内面 回転ヨコナデ、ヨコナデ 外面 ナデ、底部糸切り	八坂工6区 土庫25
258	土師質土器小皿	-	-	-	長石・黄閃石 赤褐色	体部のたち上がりは緩やか	内面 ヨコナデ、ナデ 外面 ヨコナデ、糸切り後板状厚壁	八坂工6区 土庫26
259	京都瓦土師器皿	9.2	(4.4)	1.2	長石・黄閃石・赤色粗平、赤褐色	手づね 口縁での字状	内面 回転ヨコナデ、縁方向ナデ 外面 回転ヨコナデ、底部ユビツナデ 切り込み内面筋輪	八坂工6区 土庫26
260	京都瓦土師器皿	(9.2)	(5.0)	1.2	長石・黄閃石・赤色粗平、乳赤褐色	手づね 口縁での字状	内面 ヨコナデ、不規則方向ナデ 外面 ヨコナデ、底部ユビツナデ 切り込み筋輪	八坂工6区 土庫26
261	土師器輪	(16.0)	(3.3)	6.25	長石・黄閃石・赤色粗平・白色粗平 灰白色	断面長方形の裏せはり付け	内面 ミガキ 外面 ミガキ、裏台貼付、ヨコナデ、底部糸切り	八坂工6区 土庫26
262	土師器輪	(16.4)	-	-	長石・黄閃石・赤褐色粗平、赤褐色	-	内外面 ナデミガキ	八坂工6区 土庫26
263	土師器輪	-	-	-	長石・黄閃石	口縁部肥厚、外反	内外面 ヨコナデ後ミガキ	八坂工6区 土庫26
264	土師器輪	-	-	-	長石・黄閃石・白色粗平、赤褐色	口縁部肥厚、外反	内外面 ヨコナデ後ミガキ	八坂工6区 土庫26
265	土師器輪	-	-	-	長石・黄閃石・白色粗平、赤褐色	口縁外反	内外面 ヨコナデ(厚壁等しい)	八坂工6区 土庫26
266	土師器輪	-	-	-	長石・黄閃石 赤白灰褐色	口縁外反	内面 ミガキ 外面 ヨコナデ(厚壁等しい)	八坂工6区 土庫26
267	土師器輪	-	-	-	長石・黄閃石・白色粗平、粗工筋輪 灰白色	口縁部丸く肥厚	-	八坂工6区 土庫26
268	土師器輪	-	-	-	長石・黄閃石・石英 赤褐色	口縁部わずかに外反	内外面 ヨコナデ後ミガキ	八坂工6区 土庫26
269	土師器輪	-	-	-	長石・黄閃石、粗工筋輪 灰白色	口縁部肥厚	-	八坂工6区 土庫26
270	土師器輪	-	-	-	長石・黄閃石 赤褐色	-	内外面 ミガキ	八坂工6区 土庫26
271	土師器輪	-	(7.0)	-	長石・黄閃石・石英・赤色粗平 白磁釉	比較的高い裏台が外側に付く	内面 下等なミガキ 外面 ユビツナデ後ミガキ、裏台貼付は、ヨコナデ、底部ナデ 内面 ミガキ(厚壁等しい)	八坂工6区 土庫26
272	土師器輪	-	(7.0)	-	長石・黄閃石・石英・白色粗平 白磁釉	断面長方形の裏せはり付け	内面 ミガキ、ヨコナデ	八坂工6区 土庫26

273	土師器煎	-	(9.4)	-	長石・角閃石・赤色粘土・赤褐色	新築三角形の高台はり付け	内面 ユビナデ、底粘土平後リキ 外面 横方向のナデ後リキ、ユビナデ、底粘土切り	八坂Ⅱb区土層26
274	土師器煎	-	(9.2)	-	長石・角閃石・灰褐色	やや高めの高台が外開きに	内面 ユビナデ上後リキ 外面 ユビナデ、底粘土	八坂Ⅱb区土層26
275	土師器煎	-	(8.4)	-	長石・角閃石・白色粘土・(内)灰色・(外)黄褐色	新築方形の高台はり付け	内面 ユビナデ、底粘土 外面 ユビナデ、底粘土切り	八坂Ⅱb区土層26
276	土師器煎	-	(8.6)	-	長石・角閃石・石英・灰白色	内面凹凸み気味	内面 ユビナデ 外面 ユビナデ、底粘土切り	八坂Ⅱc区土層26
277	白磁碗	(16.6)	-	-	長石	口縁玉縁状	-	八坂Ⅱc区土層26
278	土鍋	-	-	-	長石・角閃石・灰色粘土・石英・黄褐色	口縁部は外方に折れる	内面 ユビナデ 外面 ナデタテハク器壁割	八坂Ⅱb区土層26

第187図 八坂本庄遺跡8区土層4出土土器

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の遺構名
		口径	底径	高さ				
279	白磁碗	-	(6.0)	-	乳白色の白磁釉	-	内面 筋輪 外面 筋輪、高台回転状作り出	八坂Ⅱb区土層27
280	須恵器甕	-	-	-	石英・白色粘土・青灰色の石英の様なもの 黄褐色	-	外内面 ユビナデ 外面 自然焼、底部に赤系の焼痕	八坂Ⅱb区土層27

第188図 八坂本庄遺跡8区土層4出土土器

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の遺構名
		口径	底径	高さ				
281	内裏土器煎	-	-	-	長石・黄閃石・石英・内)黄褐色・(外)黄褐色	-	内面 ミガキ(厚減着しい) 口縁ミガキ	八坂Ⅱb区土層29
282	内裏土器煎	-	(7.0)	-	長石・角閃石・石英・内)黄褐色・(外)黄褐色	高台を外開きにはり付け	内面 ミガキ(厚減着しい) 外面 ユビナデ、底粘土	八坂Ⅱb区土層29
283	内裏土器	-	(7.6)	-	長石・角閃石・石英・内)黄褐色・(外)黄褐色	高台を外開きにはり付け	内面 ミガキ 外面 ナデ(厚減着しい)、ユビナデ、ユビナデ、底粘土切り	八坂Ⅱb区土層29

第192図 八坂本庄遺跡8区土層5出土土器

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の遺構名
		口径	底径	高さ				
284	土師質土器杯	(13.2)	(9.0)	4.0	長石・黄閃石・石英・赤色粘土・内)黄褐色・(外)黄褐色	体部のたち上がりはシャープで体部直立気味	内面 ユビナデ、へう状工具による回転ナデ 外面 ユビナデ、底粘土切り後研	八坂Ⅱb区土層29
285	土師質土器杯	(6.2)	-	-	長石・角閃石・褐色粘土・黄褐色	体部内湾気味	内面 ユビナデ 外面 厚塗	八坂Ⅱb区土層29
286	土師質土器杯	-	(6.2)	-	長石・角閃石・石英・赤褐色粘土・内)黄褐色・(外)黄褐色	体部斜方向にたち上がる	内面 へう状工具による回転ナデ(厚減着しい) 外面 ユビナデ、底粘土切り	八坂Ⅱb区土層29
287	瓦器碗	-	(7.0)	-	褐色色～灰色	底部平底	内面 反ナデ 外面 底粘土切りのち板状三匯	八坂Ⅱb区土層29
288	土師質土器小皿	(6.4)	(6.2)	0.9	長石・角閃石・白色粘土・褐色粘土・黄白色	体部は緩く直立する	内面 ユビナデ 外面 ユビナデ、底粘土切り	八坂Ⅱb区土層29
289	土師質土器小皿	(7.8)	(6.8)	0.8	長石・角閃石・白色粘土・褐色粘土・黄白色	体部は直立気味に立ち口縁部がわずかに外反	内面 ユビナデ 外面 ユビナデ、底粘土切り(厚減着しい)	八坂Ⅱb区土層29
290	白磁碗	(15.4)	-	-	長石	口縁玉縁	内外面 筋輪	八坂Ⅱb区土層29
291	須恵器こね鉢	-	-	-	長石・白色粘土・黄褐色	口縁傾斜が上方に傾斜	内面 ユビナデ、ナデ 外面 ユビナデ、自然焼がかかる	八坂Ⅱb区土層29
292	瓦質土器甕	-	-	-	長石・角閃石・石英・灰色・黄褐色	口縁外反	内外面 ユビナデ	八坂Ⅱb区土層29

第195図 八坂本庄遺跡8区SX1出土土器

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の遺構名
		口径	底径	高さ				
295	土師質土器杯	9.6	6.8	1.2	灰褐色～明褐色	体部は緩やかに斜方向に立つ	内面 ナデ、底粘土切り	八坂Ⅱb区SX-1
296	内裏土器碗	15.2	6.0	5.5	砂粒・黄褐色粘土・内)灰褐色・(外)やや橙黄色の褐色	口縁部緩やかに外反 体部下は丸みをもち残り気味 新築三角形の高台	内面 ナデ、回転ユビナデ厚リキ 外面 回転ユビナデ後ミガキ、底粘土ユビナデ、高台貼付け、底部にへう状痕	八坂Ⅱb区SX-1
297	内裏土器碗	(15.0)	5.8	5.9	砂粒・石英・赤褐色粘土・内)灰褐色・(外)褐色	口縁部を外方に引き上げ気味 新築三角形の高台	内面 回転ユビナデ後ミガキ(厚減着しい) 外面 回転ユビナデ後ミガキ、底粘土貼付け、回転ユビナデ	八坂Ⅱb区SX-1
298	土鍋	10.8	-	11.4	長石・角閃石・石英・内)黄褐色・(外)黄褐色	丸底で球形の体部 口縁はくの字状に折れる	内面 ユビナデ、ユビナデ、板状工具の板ナデ、ユビナデ 外面 ユビナデ、板状工具による横方向のナデ、ユビナデ	八坂Ⅱb区SX-1

第198図 八坂本庄遺跡8区SX2出土土器

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の遺構名
		口径	底径	高さ				
302	土師質土器小皿	10.2	6.5	1.7	長石・角閃石・石英・赤褐色粘土・黄褐色	体部は緩やかにたち上がり斜方向にのびる	内面 ユビナデ、平角方ナデ 外面 ユビナデ、底粘土切り、板状反儀	八坂Ⅱb区SX-2
303	内裏土器碗	(14.4)	(6.4)	5.2	長石・角閃石・石英・内)灰褐色・(外)黄褐色	体部はあまり傾らず直線的に口縁円整気味	内面 ユビナデ、ミガキ(厚減着しい) 外面 ユビナデ、ミガキ、底粘土切り	八坂Ⅱb区SX-2

304	土師器 小皿	9.8	4.4	5.5	長石・角閃石・石英・灰白色	小型の餅、口縁部灰質や黒い茶葉色	内面 短紐ヨコナデ、百粒ナデ、外周 短紐ヨコナデ、ミヨコナデ、横紐ナデによるナメ状のナデ、底縁全面切	八咫玉b底 SK-2
305	土師器 椀	-	(8.0)	-	長石・角閃石・石英・淡緑褐色	深い高さをはり付け	内面 ナメ、外周 ヨコナデ、底縁全面切	八咫玉b底 SK-2

第200回 八幡本庄遺跡B区溝10出土土器

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の器種名
		口径	底径	器高				
306	土師質土器 小皿	(9.1)	(6.3)	1.5	長石・角閃石・赤色粘土・淡緑白色	体部はシャープにたがり縁部斜方角にのびる	内面 ヨコナデ、底縁ナデ、外周 ヨコナデ、底縁全面切	八咫玉b底 溝10
307	土師器 椀	(15.0)	-	-	長石・角閃石・赤色粘土・黄白色	体部内湾気味	内面、底縁ミガキ、外周 ミガキ	八咫玉b底 溝10
308	焼酎瓦製 椀	-	-	-	長石・淡黄灰色	口縁端部内側に凸縁1条	内外面 ミガキ	八咫玉b底 溝10
309	瓦器 椀	-	-	-	石英・緑灰色	-	内外面 T字なミガキ	八咫玉b底 溝10
310	土師器 椀	-	(7.2)	-	長石・角閃石・石英・黄白色	断面方形の高台をはり付け	内面 ミガキ、厚縁美しい、外周 短紐ナメ、底縁全面切	八咫玉b底 溝10
311	土師器 椀	-	(6.4)	-	長石・角閃石・赤褐色粘土・淡黄褐色	断面方形の高台をはり付け	内面 ミガキ、厚縁美しい、外周 ミガキ、厚縁美しい、底縁全面切	八咫玉b底 溝10
312	土師器 椀	-	7.5	-	長石・角閃石・石英・白色粘土・緑灰色	断面方形の高台をはり付け	内面 ナメ、外周 ミガキ、厚縁美しい、底縁全面切	八咫玉b底 溝10
313	瓦器 椀	-	(7.0)	-	長石・石英・灰白色・淡黄褐色	断面長方形の高台をはり付け	内面 ナメ、厚縁美しい、底縁全面切	八咫玉b底 溝10
314	須恵器 椀	-	-	-	白色粘土・灰色	内面へう状工具によるヨコナデ	内面 ナメ、厚縁美しい、底縁全面切	八咫玉b底 溝10
315	白磁 椀	-	-	-	やや暗色がかかった釉、裏入あり	口縁部うす玉縁	内外面 施釉	八咫玉b底 溝10
316	白磁 椀	-	(7.0)	-	乳白色の釉	-	内面 施釉、外周 施釉、下部踏台、高台底縁部に割出し、底縁全面切	八咫玉b底 溝10
317	須恵器 小皿	-	-	-	白色粘土・淡黄褐色	-	内面 ヨコナデ、厚状工具によるヨコナデ、外周 厚状工具によるナメ、底縁全面切	八咫玉b底 溝10
318	須恵器 小皿	-	(10.8)	-	長石・角閃石・透明な灰下、石灰質・淡黄褐色	-	内面 ヨコナデ、厚状工具によるヨコナデ、外周 ナメ、底縁全面切	八咫玉b底 溝10
319	土 鍋	(23.6)	-	-	長石・角閃石・石英・黄褐色・(外)淡緑褐色	口縁部縁やかに折れる	内面 ヨコナデ、厚状工具によるヨコナデ、外周 ナメ	八咫玉b底 溝10

第201回 八幡本庄遺跡B区溝10出土土器41のどちらかに帰属する土器

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の器種名
		口径	底径	器高				
321	土師器 椀	-	(7.0)	-	長石・角閃石・(外)淡褐色・(内)淡緑褐色	断面方形の高台をはり付け	内面 ヨコナデエ縁ミガキ、外周 ミガキ、ヨコナデ、底縁全面切	八咫玉b底 溝11-12
322	土師器 椀	-	(6.6)	-	長石・角閃石・石英・白色粘土	断面方形の高台をはり付け	内面 ミガキ、外周 ヨコナデ、底縁全面切	八咫玉b底 溝11-12
323	土師器 椀	-	(6.6)	-	長石・角閃石・石英・赤褐色粘土・黄褐色・(内)淡緑褐色・(外)淡黄褐色	断面三角形の高台を外周にはり付け	内面 ミガキ、厚縁美しい、外周 ナメ、厚縁美しい、底縁全面切	八咫玉b底 溝11-12
324	土 鍋	-	-	-	長石・角閃石・石英・砂粒、淡黄褐色、黄褐色	口縁部外方に折れる	内外面 厚状工具による横方ナメ	八咫玉b底 溝11-12

第202回 八幡本庄遺跡B区溝10出土土器

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の器種名
		口径	底径	器高				
325	土師質土器 小皿	(9.4)	(6.6)	1.4	長石・角閃石・(内)淡褐色・(外)淡緑褐色	体部は縁やかにたがり斜方向にのびる	内面 ヨコナデ、厚縁全面切、外周 ヨコナデ、底縁全面切、後折縁	八咫玉b底 土師18
326	土師器 椀	(16.0)	5.7	3.4	長石・角閃石・赤色粘土・石英・黄褐色	断面三角形の高台をはり付け	内面 ミガキ、外周 ミガキ、底縁全面切	八咫玉b底 土師18
327	土師器 椀	-	-	-	長石・角閃石・石英・黄褐色	口縁端部丸く肥厚する	内外面 ミガキ(全体的に厚縁)	八咫玉b底 土師18
328	土師器 椀	-	6.0	-	長石・角閃石・石英・灰色粘土	やや高い高台を外周に	内外面 ミガキ、外周 ヨコナデ、底縁ナメ	八咫玉b底 土師18
329	白磁 椀	-	-	-	黄みがかかった滑った白磁釉	口縁玉縁	内外面 施釉	八咫玉b底 土師18
330	白磁 椀	(15.0)	-	-	内外面に裏入あり	口縁わずかに外反気味	内外面 施釉	八咫玉b底 土師18
331	土 鍋	(34.0)	-	-	長石・角閃石・灰色粘土・赤色粘土・(外)淡褐色・(内)淡黄褐色	口縁部外方に折れる	内面 厚状工具によるナメ、ヨコナデ、外周 ヨコナデ、タテハケ	八咫玉b底 土師18

第204回 八幡本庄遺跡B区溝12出土土器

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の器種名
		口径	底径	器高				
332	土師質土器 小皿	(9.0)	(7.6)	1.2	長石・角閃石・灰色粘土・淡黄褐色	体部のたがり縁や斜方向にのびる	内面 短紐ヨコナデ、外周 へう状工具によるヨコナデ、底縁全面切	八咫玉b底 溝4

第206回 八幡本庄遺跡B区溝12出土土器

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の器種名
		口径	底径	器高				
333	土師質土器 小皿	(7.6)	(5.6)	1.5	長石・角閃石・石英・黄白色	体部斜方向にのびる	内面 ヨコナデ、ナメ、外周 ヨコナデ、底縁全面切	八咫玉b底 溝5
334	京都瓦師器 小皿	(9.0)	-	1.5	長石・角閃石・黄白色	手づね、滑化しての字状口縁	内面 ヨコナデ、厚縁美しい、外周 ヨコナデ、厚縁美しい	八咫玉b底 溝5
335	土師器 椀	-	(6.0)	-	長石・角閃石・石英・灰褐色・(内)黄褐色・(外)黄褐色	断面長方形の高台をはり付け	内面 ミガキ、外周 ヨコナデ、底縁ナメ	八咫玉b底 溝5
336	瓦器 椀	-	-	-	長石・角閃石・灰色	-	内外面 ヨコナデ	八咫玉b底 溝5

第208図 八坂本庄遺跡B区溝3出土土器

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の遺構名
		口径	底径	高さ				
338	土師質土器 小皿	(8.5)	(9.2)	1.2	赤色粒子・白色粒子・角閃石	体部斜方向へのびる	内面ヨコナデ、不能方向ナデ 外面ヨコナデ、底部糸切り後横 紋付直	八坂Ⅱb区 溝8
339	土師質土器 小皿	(8.8)	(6.4)	1.2	長石・石英・赤色粒子、 赤赤褐色 内面に黒線あり	体部斜方向へのびる	内面ナデ 外面ナデ、底部糸切り	八坂Ⅱb区 溝8
340	土師質土器 小皿	9.0	8.3	1.3	角閃石・長石・白色粒子、 灰褐色	体部斜方向へのびる	内面ヨコナデ、へう状ナデ、不能 方向ナデ 外面ヨコナデ、底部糸切り、ハ ケ	八坂Ⅱb区 溝8
341	土師質土器 小皿	(10.4)	(8.1)	1.6	角閃石・赤色粒子・胎土雜砂、 淡赤褐色	体部斜方向へのびる	内面ヨコナデ 外面ヨコナデ、底部糸切りナ デ	八坂Ⅱb区 溝8
342	土師質土器 の皿	9.4	5.8	2.0	石英・赤色粒子・砂粒、 乳白色	やや器高が薄く、体部斜反気味な しは輪郭的のびる	内面ヨコナデ、ナデ 外面ヨコナデ、体部へう状ナ デ	八坂Ⅱb区 溝8
343	土師器碗	(16.1)	(5.8)	8.1	角閃石・長石・赤色粒子、 灰白色	口縁上部でいったん縁がつき口縁 にない位急外傾	内面ミガキ、ナデ 外面ヨコナデ、裏面裏内ナ デ	八坂Ⅱb区 溝8
344	土師器碗	-	-	-	長石・角閃石・赤色粒子・砂 粒	2/3と同様な器形	内面ヨコナデ、ナデミガ キ 外面ヨコナデ、ミガキ	八坂Ⅱb区 溝8
345	土師器碗	(19.0)	-	-	角閃石・長石・赤色粒子・石 灰・灰褐色粒子・砂粒、 黄白色	口縁下に軽いヨコナデ	内面 器縁ヨコナデ後ミガキ 外面 器縁ヨコナデ後ミガキ(外 側面裏ミガキナデ)	八坂Ⅱb区 溝8
346	土師器碗	(17.2)	-	-	長石・角閃石・赤色粒子、 灰白色	-	内面ヨコナデ、ナデ 外面 器縁ヨコナデ後ミガキ	八坂Ⅱb区 溝8
347	土師器碗	-	(7.0)	-	長石・角閃石・石英・白色粒 子 黄褐色	断面長方形の高台はり付け	外面 高台貼り付け、ヨコナデ、底 部ナデ	八坂Ⅱb区 溝8
348	土師器碗	-	(8.0)	-	長石・角閃石・白色粒子・石 灰・黄褐色	断面長方形の高台はり付け	外面 高台貼り付け、ヨコナデ、底 部ナデ	八坂Ⅱb区 溝8
349	土師器碗	-	(6.2)	-	長石・角閃石・赤色粒子、 黄褐色	断面三角形の高台はり付け	内面ナデ 外面 ナデ、高台貼り付けヨコ ナデ、黄褐色が入る、器縁ナ デ	八坂Ⅱb区 溝8
350	土師器碗	-	(6.2)	-	角閃石・長石・白色粒子、 内傾反色 外傾反褐色	断面三角形の高台を外側に	内面ナデ 外面 ユビオサエ後ヨコナ デ、器縁ヨコナデ	八坂Ⅱb区 溝8
351	内裏土器碗	-	(7.4)	-	長石・角閃石・赤色粒子、 内傾反色 外傾褐色	断面方形の高台はり付け	内面ミガキ 外面 ユビオサエ、高台貼り付 け、ヨコナデ	八坂Ⅱb区 溝8
352	黄色土器碗	-	(7.0)	-	長石・角閃石・白色粒子、 淡灰褐色	断面方形の高台はり付け	内面ナデ 外面 ナデ、高台貼り付け、ヨ コナデ、器縁ナデ	八坂Ⅱb区 溝8
353	白磁碗	(15.6)	-	-	釉色の釉	口縁玉縁	内外面 施釉	八坂Ⅱb区 溝8
354	白磁碗	(15.2)	-	-	灰白色の釉	口縁玉縁	内外面 施釉	八坂Ⅱb区 溝8
355	青磁碗	-	(6.8)	-	砂粒、 黄灰白色	-	内面 施釉、胎土目肌焼2ヶ所 ナ 外面 施釉	八坂Ⅱb区 溝8
356	土鍋	(20.0)	-	-	長石・角閃石・白色粒子・石 灰・黄褐色	口縁部外方に折れる	内面 儀方角のナデ、ナデ 外面 ユビオサエ	八坂Ⅱb区 溝8
357	土鍋	(22.4)	-	-	長石・角閃石・金・黄石・石 灰・黄褐色 外面にすずがけが顕著	口縁部外反	内面ヨコナデ、へう状工具によ るケズリ状のヨコナデ、器縁工 具による儀方角のナデ 外面 ユビオサエ後後方向のナ デ	八坂Ⅱb区 溝8
358	土鍋	(25.0)	-	-	長石・角閃石・白色粒子・砂 粒 内面黄褐色 外面黄褐色	口縁部縁やかに外反	内面 飯伏の強いナデ 外面 飯伏の強いナデ、増など のナデ、ナデ後ハケ	八坂Ⅱb区 溝8
359	土鍋	-	-	-	長石・角閃石・石英・砂粒、 内傾褐色 外傾淡褐色	口縁部外方に折れる	内面ヨコナデ 外面ヨコナデ	八坂Ⅱb区 溝8
360	土鍋	-	-	-	長石・角閃石・白色粒子・石 灰、 内面黄褐色 外傾淡褐色	口縁部外方に折れる	内面ヨコハケ 外面ヨコナデ、ユビオサエ後 コナデ	八坂Ⅱb区 溝8
361	土鍋	-	-	-	長石・角閃石・白色粒子、 黄褐色	口縁部縁やかに外反	内外面 ユビオサエ	八坂Ⅱb区 溝8
362	土鍋	-	-	-	長石・角閃石・黄褐色・白色粒 子、 黄褐色	口縁部縁やかに外反	内外面 へう状のヨコナデ、コ ナデ	八坂Ⅱb区 溝8

第209図 八坂本庄遺跡B区溝14出土土器

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の遺構名
		口径	底径	高さ				
363	土師質土器 小皿	(8.4)	-	1.2	角閃石・長石・白色粒子・赤色 粒子、 黄褐色	体部斜方向へのびる	内面ヨコナデ 外面ヨコナデ、底部糸切り、横 紋付直	八坂Ⅱb区 溝8
364	土師質土器 小皿	(9.6)	-	1.3	角閃石・長石・赤色粒	体部のたし上がりはシャベでわす かに淡黄褐色	内面ヨコナデ、ナデ 外面ヨコナデ、底部糸切り後横 紋付直	八坂Ⅱb区 溝8
365	白磁碗	-	(溝底径: 8.6)	-	内外面 黄入あり	体部下半露胎	内外面 黄入あり、器 縁ケズリ、高台削出し、施 釉	八坂Ⅱb区 溝8

第210図 八坂本庄遺跡B区溝15出土土器

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の遺構名
		口径	底径	高さ				
366	土師質土器 小皿	(8.4)	-	0.7	長石・角閃石・赤色粒子・石英 粒子、 黄褐色	体部斜方向へのびる	内面ヨコナデ、不能方向ナデ 外面ヨコナデ、底部糸切り	八坂Ⅱb区 溝8
367	内裏土器碗	-	(9.4)	-	長石・角閃石・白色粒子・赤色 粒子 内傾黄褐色 外傾淡褐色	断面三角形の高台はり付け	内面ミガキ 外面 飯伏ナデ、ミガキ、底部糸 切り後高台貼り付けヨコナ デ	八坂Ⅱb区 溝8
368	陶製型瓦器碗	(16.4)	(6.8)	6.15	縦割された胎土、カラアス骨の 粒子、 黄褐色	口縁縁部内側に淡線 断面方形の高台はり付け	内面 下平なミガキ 外面 ミガキ、ユビオサエ後ミ ガキ、ヨコナデ	八坂Ⅱb区 溝8

369	白磁碗	(15.1)	(6.4)	6.5	緑白色釉、黄入り 粘土に黄赤を含む	口縁部わずかに外反臭味	内面 黄緑 外面 黄緑、高台回転削り出し 高台一段彫刻	八坂Ⅱb区 溝6
-----	-----	--------	-------	-----	----------------------	-------------	-----------------------------------	-------------

第213回 八坂本庄遺跡B区1-7(南水田を隔つ層から検出された遺物)

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
370	瓦器碗	-	-	-	長石・ (内)灰色 (外)黄褐色	-	内外面 ミガキ	八坂Ⅱb区 足跡の出土 水田層
371	土師質土器鉢	-	(6.0)	-	長石・黄閃石・石英・砂粒・ 内)淡褐色 (外)黄褐色	断面三角形の高台はり付け	内面ミガキ 外面 ナナ子、ヨコナ子、高台彫り 出し、高台彫りナナ子	八坂Ⅱb区 足跡の出土 水田層
372	内黒土器碗	-	(7.8)	-	長石・黄閃石・赤色粘土・ 内)黄褐色 (外)淡赤褐色	断面方形の高台は外開きはり付け	内面 不整方向の子 外面 ミガキ、ナ子、高台彫り 出しヨコナ子、底部糸切り歯ナ 子	八坂Ⅱb区 足跡の出土 水田層
373	瓦器碗	-	(7.0)	-	長石・黄閃石・黄緑粘土・ 灰褐色	断面三角形の高台はり付け	内面ミガキ 外面 ヌコナ子、高台彫り出し コナ子、底部ナ子 外蓋下部に深線	八坂Ⅱb区 足跡の出土 水田層
374	瓦器碗	-	(6.9)	-	長石・黄閃石・砂粒・ (内)灰褐色 (外)黄褐色(すず付跡)	断面三角形の高台はり付け	内面ミガキ 外面 ヌコナ子、底部回転ナ子、 高台彫り出し	八坂Ⅱb区 足跡の出土 水田層
375	白磁碗	-	-	-	白色釉	口縁部わずかに外に折れる	内外面 施釉	八坂Ⅱb区 足跡の出土 水田層
376	白磁碗	-	-	-	灰白色釉	口縁部外方に折れる	内外面 施釉	八坂Ⅱb区 足跡の出土 水田層
377	青磁皿	-	-	-	青褐色	-	内外面 施釉(状態がよくない) 外面下部磨削	八坂Ⅱb区 足跡の出土 水田層
378	青磁皿	-	(4.4)	-	黄入り	内外面に磨痕など	内外面 高橋 外面 高台回転削り出し、磨削	八坂Ⅱb区 足跡の出土 水田層
379	土鍋	-	-	-	長石・黄閃石・白色粘土・石 英・ (内)褐色	口縁部の平状に折れる	内面 ヌコナ子、ヨコナ子 外面 指などのア	八坂Ⅱb区 足跡の出土 水田層
380	土鍋	-	-	-	長石・黄閃石・石英・ (内)褐色 (外)黄褐色	口縁部強くの平状に折れる	内面 ヌコナ子、ヨコナ子 外面 ヌコナ子、タハケ、横方 向の子	八坂Ⅱb区 足跡の出土 水田層
381	黄褐色器	-	-	-	白色粘土・石英・ (内)淡黄褐色 (外)黄褐色	-	内面 同心円タタキ 外面 平行タタキ	八坂Ⅱb区 足跡の出土 水田層

第214回 八坂本庄遺跡B区1(8)出土土器

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
382	縄文型瓦器鉢	-	-	-	長石・黄閃石・砂粒・ 灰白色	口縁部内面に沈線1条	内面 厚層 外面 ミガキ、ユゼオエテ(厚層 磨しい)	八坂Ⅱb区 溝12
383	縄文型お鉢	-	-	-	長石・黄閃石・石英・ 黄褐色	-	内外面 (布など柔らかいもの で)ヨコナ子	八坂Ⅱb区 溝12

第216回 八坂本庄遺跡B区穴出土土器(1)

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
385	土師質土器 小皿	(7.8)	(6.0)	1.3	長石・黄閃石・石英・茶色粘 土	体部斜方向にのび端部は尖る	内面 ヌコナ子、回転ナ子 外面 ヌコナ子、厚層磨削	八坂Ⅱb区 溝12
386	土師質土器 小皿	8.9	3.1	1.1	長石・黄閃石・茶褐色粘土・ 赤褐色	体部緩やかに斜方向にのびる	内面 ヌコナ子、不整方向の子 外面 ヌコナ子、厚層磨削	八坂Ⅱb区 溝11 P-6
387	土師質土器 小皿	(9.2)	(6.4)	1.3	長石・黄閃石・石英・茶褐色 粘土	体部のたしがりは緩やか	内面 ヌコナ子、不整方向の子 外面 ヌコナ子、厚層磨削	八坂Ⅱb区 溝11 P-2
388	土師質土器 小皿	(9.4)	(7.0)	1.3	長石・黄閃石・石英・茶褐色 粘土	体部のたしがりは緩やか	内面 ヌコナ子、厚層磨削 外面 ヌコナ子、厚層磨削	八坂Ⅱb区 溝11 P-9
389	土師質土器 小皿	(10.4)	(7.1)	1.4	長石・黄閃石・茶褐色粘土・ 白褐色	体部斜方向にのびる	内面 ヌコナ子、ナ子 外面 ヌコナ子、厚層磨削	八坂Ⅱb区 溝11 P-3
390	土師質土器 小皿	(10.2)	(7.8)	1.6	長石・黄閃石・赤色粘土・ 灰色	体部斜方向にのびる	内面 不整方向の子、ヨコナ子 外面 ヌコナ子、厚層磨削	八坂Ⅱb区 溝11 P-1
391	土師質土器 小皿	(9.8)	(6.8)	1.4	長石・黄閃石・石英・淡褐色 粘土	体部のたしがりは緩やか	内面 ヌコナ子、不整方向の子 外面 ヌコナ子、ナ子、底部糸切 り深線1条	八坂Ⅱb区 溝19 P-2
392	土師質土器 小皿	(9.0)	(3.7)	1.2	長石・黄閃石・石英・茶褐色 粘土	口縁部をわずかに外方に引き出 す	内面 不整方向の子 外面 ヌコナ子、厚層磨削	八坂Ⅱb区 溝13 P-1
393	土師質土器 小皿	(9.4)	(7.5)	1.1	長石・黄閃石・赤色粘土・ 白褐色	体部斜方向にのびる	内面 ヌコナ子、不整方向の子 外面 ヌコナ子、厚層磨削	八坂Ⅱb区 溝11 P-3
394	土師質土器 小皿	(9.1)	(6.8)	1.4	長石・黄閃石・白色粘土・ 淡赤褐色	体部のたしがりはシャープ	内面 ヌコナ子、不整方向の子 外面 ヌコナ子、厚層磨削	八坂Ⅱb区 溝21 P-1
395	土師質土器鉢	(14.0)	(8.3)	4.1	長石・黄閃石・石英・茶褐色粘 土・ 黄褐色	体部は斜方向に長くのび、端部は肥 厚臭味	内面 ヌコナ子 外面 ヌコナ子、底部糸切り深 線1条	八坂Ⅱb区 溝20 P-1
396	土師質土器鉢	-	(9.0)	-	長石・黄閃石・石英・ 淡褐色	体部のたしがりは丸みをもつ	内面 ヌコナ子、回転ナ子 外面 回転コナ子、厚層磨削	八坂Ⅱb区 溝10 P-1
397	土師質土器鉢	(17.0)	(8.0)	3.0	長石・黄閃石・茶褐色粘土・ 黄褐色	体部は緩やかにたしがらがる	内面 回転コナ子 外面 回転コナ子、厚層磨削	八坂Ⅱb区 溝11 P-3
398	土師質土器鉢	-	-	-	長石・黄閃石・ 淡赤褐色	体部は斜方向にのびる	内面 回転コナ子、厚層磨削 外面 回転コナ子、厚層磨削	八坂Ⅱb区 溝18 P-2
399	土師質土器鉢	(12.4)	(9.4)	3.6	長石・黄閃石・茶褐色粘土・ 赤褐色	体部直立臭味	内面 ヌコナ子、不整方向の子 外面 ヌコナ子、底部糸切り深 線1条	八坂Ⅱb区 溝25 P-1
400	土師器碗	(14.4)	-	-	長石・黄閃石・ 淡褐色	口縁部削反	内外面 回転コナ子、黄ミガキ	八坂Ⅱb区 溝11 P-1
401	土師器碗	-	(9.0)	-	長石・黄閃石・褐色粘土・灰 色粘土	高台は外開きはり付け	内面 回転コナ子(厚層磨削しい) 外面 (厚層磨削しい)、高台コナ 子	八坂Ⅱb区 溝18 P-2
402	土師器碗	-	(6.2)	-	長石・黄閃石・石英・ 灰白色釉	内蓋蓋蓋	内外面 回転コナ子、厚層磨 削(しい)	八坂Ⅱb区 溝16 P-3
403	土師器碗	-	-	-	長石・黄閃石・赤色粘土・ 黄褐色	-	内面ミガキ 外面 ヌコナ子、底部ナ子	八坂Ⅱb区 溝12 P-2
404	内黒土器碗	-	-	-	長石・黄閃石・白色粘土・ (外)黄褐色	-	内面 ヌコナ子、下型化ミガキ 外面 ヌコナ子、ミガキ	八坂Ⅱb区 溝8 P-1

405	大塚土器類	-	7.4	-	長石・角閃石・石英、 内層灰色 外層褐色	内層状磨面	内面 2/3 平(子物)に入る 外面 コナテラ後 2/3 平、磨面 けり出し、底面未切り	八坂Ⅱb区 タ-15 P-1
406	和泉型瓦器類	(13.8)	(5.3)	4.7	長石・石英・茶色石粒、 暗青灰色、灰白色	断面方形の低い高台をはり付け	内面 2/3 平、第3ムコドオサエ 後構方向の2/3平、平行線状 5子 外面 ユビオサエ、強いコナテラ ナテ、高台貼付け後3コナテ、底 面磨面ナテ	八坂Ⅱb区 タ-15 P-6
407	和泉型瓦器類	(15.5)	(4.4)	4.8	長石・石英・石粒、 暗青灰色、灰白色	断面方形の低い高台をはり付け	内面 横方向の2/3平(磨面着し ない) 外面 強いコナテラ後構方向 の2/3平、ユビオサエ、高台貼付 け後3コナテ、底面ユビオサエ	八坂Ⅱb区 タ-15 P-6
408	和泉型瓦器類	-	-	-	石英、 暗青灰色	-	内面 強いコナテラ後2/3平 外面 強いコナテラ後2/3平、 ナテ後2/3平	八坂Ⅱb区 ナ-11 P-8

第217図 八坂本庄遺跡B区住穴出土土器(2)

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
409	須恵器燗鉢	(29.8)	-	-	長石・角閃石・白色粒子・石 粒	口縁縁部わずかに肥厚	内面 コナテナ 外面 コナテナ、強いへら切り 外面 コナテナ、板状工具による コナテナ	八坂Ⅱb区 タ-18 P-1
410	土鍋	-	-	-	長石・角閃石・石英、 内層褐色 外層暗褐色	口縁に平状に折れる	内面 コナテナ、板状工具による 横方向のナテ	八坂Ⅱb区 シ-18 P-6
411	土鍋	-	-	-	長石・角閃石、 赤褐色	口縁大きく外反	内面 コナテナ、板状工具による コナテナ 外面 コナテナ、板状工具による 横方向のナテ	八坂Ⅱb区 ナ-11 P-9
412	土鍋	-	-	-	削片・長石・角閃石・石粒、 暗褐色	-	内面 板状工具による横方 向のナテ	八坂Ⅱb区 タ-12 P-4
413	土鍋	-	-	-	長石・角閃石・石英、 内層褐色 外層暗褐色	口縁強く折れる	内面 コナテナ、板状工具の コナテナ、あらいもてで横方 向ナテ 外面 コナテナ、ハケ・ユビ オサエ、板状工具のナテナ	八坂Ⅱb区 タ-15 P-4
414	土鍋	(32.4)	-	-	長石・角閃石・石英・金雲母、 暗茶褐色	口縁部外方に折れる	内面 ユビオサエ、ヨコハケ、 板状工具によるコナテナ 外面 ユビオサエ、縦方向の ナテ、へら状工具による横方 向のナテ、コナテナ	八坂Ⅱb区 タ-14 P-1
415	土鍋	-	-	-	長石・角閃石・砂粒、 内層茶褐色 外層暗褐色(すず付)	-	内面 ユビオサエ、ナテ、ハケ 外面 ユビオサエ、ヨコハケ、 ナテ	八坂Ⅱb区 タ-12 P-1

第218図 八坂本庄遺跡B区住穴出土土器(3)

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
416	須恵器燗	(36.0)	-	-	長石・石英・白色粒子、 暗青灰色	口縁縁部は面取りされ下の方にやや 拡張	内面 コナテナ、面内肉状タテキ 外面 コナテナ、横方向の平行タ テキ	八坂Ⅱb区 タ-15 P-2
417	須恵器燗	-	-	-	長石・石英・白色粒子、 暗青灰色	-	内面 面内肉状タテキ 外面 横方向の平行タテキ	八坂Ⅱb区 タ-15 P-2

第219図 八坂本庄遺跡B区その他の出土土器(1)

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
418	土師質土器 小皿	9.0	7.2	1.4	長石・角閃石・赤色粒子、 淡褐色	体部は丸みをもちたち上がる	内面 回転ナテ、不整方向ナテ 外面 回転ナテ、底部へら切り ナテ(ハケ状工具で一方向に ナテ)	八坂Ⅱb区 包倉南
419	土師質土器 小皿	(8.4)	(8.6)	1.4	長石・角閃石・赤色粒子、 淡赤褐色	体部のたち上がりはシャープ	内面 ナテ、不整方向ナテ 外面 ナテ、底部未切り後板状 工具	八坂Ⅱb区 包倉南
420	土師質土器 小皿	(8.9)	(8.5)	1.2	長石・角閃石・石英・赤色粒子 、灰白色	体部は斜方向にのびる	内面 回転ナテ、不整方向ナテ 外面 回転ナテ、底部未切り	八坂Ⅱb区 タ-14
421	土師質土器 小皿	(9.6)	(9.4)	1.2	長石・角閃石・赤色粒子、 灰白色	体部のたち上がりは緩やか	内面 回転コナテナ、ナテ 外面 回転コナテナ、ナテ	八坂Ⅱb区 西側1レン タ
422	土師質土器坪	(15.8)	(8.4)	4.6	長石・角閃石・茶褐色粒子、 赤褐色	体部やや外反気味で口縁端肥厚	内面 回転コナテナ、底部へら切 りナテナ	八坂Ⅱb区 西側1レン タ
423	土師質土器坪	13.4	7.0	4.2	角閃石・石英・赤褐色土 、淡褐色、灰白色(口縁の一 部、すず付)	体部斜方向にのびる	内面 ナテナ、ユビオサエ 外面 ナテナ、底部へら切り(深 溝により不調整)	八坂Ⅱb区 タ-16
424	土師質土器坪	(12.0)	-	-	長石・角閃石・石英・金雲母、 褐色	-	内面 へら状工具によるコナ テナ 外面 回転コナテナ	八坂Ⅱb区 西側1レン タ
425	土師質土器坪	-	(7.0)	-	長石・角閃石・石英・白色粒 子、 淡褐色	-	内面 コナテナ、回転ナテ 外面 コナテナ(磨面着しない)、 底部へら切り	八坂Ⅱb区 タ-18
426	土師質土器坪	-	(7.0)	-	長石・角閃石・赤色粒子、 淡赤褐色	-	内面 コナテナ、回転ナテナ 外面 回転コナテナ、底部へら切 り後板状工具	八坂Ⅱb区 シ タ
427	土師器椀	(13.6)	-	-	長石・角閃石・石英、 暗茶褐色	口縁部は丸く肥厚する	内面 コナテナ、へら状工具によ るコナテナ 外面 コナテナ	八坂Ⅱb区 タ-20
428	土師器碗	-	(7.0)	-	長石・角閃石・灰色粒子、 淡褐色	断面三角形の高台をはり付け	内面 ナテナ後2/3平 外面 高台貼付け後3コナテナ(磨 面着しない)	八坂Ⅱb区 南東区
429	土師器椀	-	8.8	-	長石・角閃石・金雲母・石英、 暗褐色粒子、 内層茶褐色 外層暗褐色	高い高台が外開きにはり付け	内面 回転ナテナ、ユビオサエ、 ナテナ 外面 コナテナ、高台貼付け後3 コナテナ、磨面ナテナ	八坂Ⅱb区 タ-14
430	土師器椀	-	(8.2)	-	長石・角閃石・赤色粒子、 淡褐色	断面長方形の高台をはり付け	内面 回転ナテナ 外面 高台貼付け後3コナテナ	八坂Ⅱb区 ナ-14
431	土師器椀	-	(9.0)	-	長石・角閃石・赤色粒子・白色 粒子、 赤褐色	断面長方形の高台をはり付け	内面 コナテナ 外面 高台貼付け後3コナテナ、 磨面ナテナ	八坂Ⅱb区 タ-16
432	土師器椀	-	(7.8)	-	長石・角閃石、 淡褐色	やや高めの高台をはり付け	内面 ナテナ 外面 コナテナ	八坂Ⅱb区 シ-9

433	土師器類	-	(69)	-	長石・黄閃石・灰色粘土・白色粘土・内淡黄白色・外淡灰白色	断面方形のやや低い高台はり付け	内面 丁寧なミガキ 外面 ミガキ、ヨコナデ、底部ナデ、スタンプ	八坂Ⅱb区 遺跡下 白鳥所
-----	------	---	------	---	------------------------------	-----------------	------------------------------------	---------------------

第220回 八坂本庄遺跡B区その他の出土遺物(2)

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	高さ	器高				
434	五穀罎	-	-	-	長石・黄閃石・ 褐色	-	内面 ミガキ 外面 ヨコナデ、ユビオサデ	八坂Ⅱb区 土層Ⅰ9
435	黒色土器類	-	62	-	長石・黄閃石・ 灰白色	断面方形の低い高台はり付け	内面 放射状ミガキ 外面 ヨコナデ、ミガキ	八坂Ⅱb区 19-19
436	白磁碗	-	-	-	灰白色釉	小さな玉縁口縁	内外面 施釉	八坂Ⅱb区 土層Ⅰ9 遺構検出区
437	土師器蓋	-	-	-	黄閃石・長石・石英・赤色粘土・ 赤褐色	口縁外反	内面 斜め方向のハケ目・横方向のハケ目 外面 縦方向のナデ・ハケ、タテハケ、ヨコナデ	八坂Ⅱb区 土層Ⅰ477a 遺構検出区
438	土鍋	-	-	-	長石・黄閃石・白色粘土・石英・ 赤褐色粘土・内黄褐色 外黄褐色	口縁部外方に折れる	内面 ナデ 外面 ハケ目	八坂Ⅱb区 土層Ⅰ477a 遺構検出区
439	土鍋 (284)	-	-	-	長石・黄閃石・黄褐色・石英・ 内黄褐色・外黄褐色(内外面にすずり付)	口縁部外方に折れる	内面 ヨコナデ・横方向のナデ 外面 ヨコナデ、ナデ	八坂Ⅱb区 土層Ⅰ477a 遺構検出区

第221回 八坂本庄遺跡B区その他の出土遺物(3)

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	高さ	器高				
440	土師器類	(16.8)	-	-	長石・黄閃石・茶色粘土・ 淡灰白色	-	内面 ハケ目・斜めヨコナデ・ミガキ 外面 工具を使った強いヨコナデ・ ミガキ、ヨコナデ・横方向のナデ	八坂Ⅱb区 土層Ⅰ4 火葬竈
441	土鍋	(18.0)	-	-	長石・黄閃石・石英・黄褐色・ 白色粘土・内黄褐色 外黄褐色	口縁部外反 縁部直立気味	内面 ヨコナデ・縦横工具による 横方向ナデ 外面 ヨコナデ、ユビオサエ後板 取手による横方向のナデ	八坂Ⅱb区 土層Ⅰ4 火葬竈
442	土師器片口鉢	(17.2)	-	-	黄閃石・白色粘土・赤色粘土・ 内淡黄褐色・灰褐色 外黄褐色・黒色(全面的にすずり付)	縁部内溝気味	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ(厚縁著しい)	八坂Ⅱb区 土層21

第224回 八坂本庄遺跡B区特産土器

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	高さ	器高				
449	器台または 高所	-	-	-	黄閃石・長石・ 赤褐色	二重口縁状に立ち上がる口縁	外面 編織きざり文 波状文の上から丹塗り、研ぎ 縁に粘土粘着剤り付け	八坂Ⅱb区 遺跡

第231回 八坂本庄遺跡B区水田Ⅱ-1区

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	高さ	器高				
450	土師器坪	-	(8.0)	-	黄閃石・長石・白色粘土・ 内黄褐色 外淡黄褐色	-	内面 ナデ 外面 ヨコナデ・外底部赤塗り	八坂Ⅱb区 小区溝 水田上

写真図版



八坂本庄遺跡全景（南から）



八板本庄遺跡全景（南から）



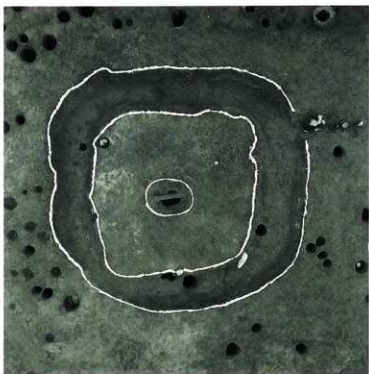
八坂本庄遺跡A区全景（真上から）



八坂本庄遺跡B区（真上から）



八坂本庄遺跡A区建物13、建物14、溝2



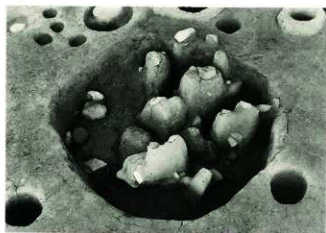
八坂本庄遺跡A区方形周溝基



八坂本庄遺跡B区Ⅱ-2面水田（西南から）



八坂本庄遺跡B区Ⅱ-2面水田（真上から）



八坂本庄遺跡A区土壙 1



八坂本庄遺跡A区土壙 2



八坂本庄遺跡A区土壙 3



八坂本庄遺跡A区土壙 4



八坂本庄遺跡A区土壙 4



八坂本庄遺跡A区大型土壙



八坂本庄遺跡A区大型土壙



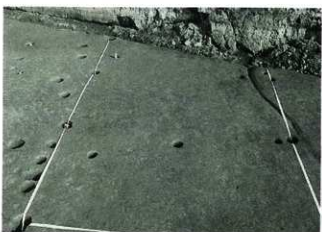
八坂本庄遺跡A区大型土壙



八坂本庄遺跡A区建物3



八坂本庄遺跡A区建物19



八坂本庄遺跡A区建物21



八坂本庄遺跡A区方形周溝墓



八坂本庄遺跡A区方形周溝墓



八坂本庄遺跡A区方形周溝墓内部主体



八坂本庄遺跡A区溝1



八坂本庄遺跡B区溝3



八坂本庄遺跡B区溝5



八坂本庄遺跡B区溝5



八坂本庄遺跡B区土壇25



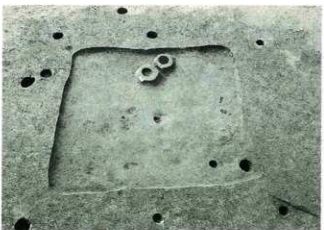
八坂本庄遺跡B区土壇26



八坂本庄遺跡B区建物27、建物28



八坂本庄遺跡B区近世墓1、近世墓2



八坂本庄遺跡B区竪穴1



八坂本庄遺跡B区土壇29、土壇30



八坂本庄遺跡B区土壇30



八坂本庄遺跡B区土壇31



八坂本庄遺跡B区土壇47



八坂本庄遺跡B区土壇48



八坂本庄遺跡B区土壇49



八坂本庄遺跡B区土壇51



八坂本庄遺跡B区II-3面水田



八坂本庄遺跡B区II-3面水田牛の足跡



八坂本庄遺跡B区溝19a



八坂本庄遺跡B区S X 2



八坂本庄遺跡B区S X 3



八坂本庄遺跡B区Ⅲ-2面水田



八坂本庄遺跡B区Ⅲ-2面水田



八坂本庄遺跡B区Ⅳ-1面水田



八坂本庄遺跡B区Ⅳ-1面水田



八坂本庄遺跡B区Ⅳ-1面水田



八坂本庄遺跡A区土壙 3 9



八坂本庄遺跡A区土壙 6 12



八坂本庄遺跡A区土壙22 20



八坂本庄遺跡A区建物基 28



八坂本庄遺跡A区建物 31



八坂本庄遺跡A区建物 32



八坂本庄遺跡A区土壙基 1 37



八坂本庄遺跡A区方形周溝基 41



八坂本庄遺跡A区方形周溝墓 40



八坂本庄遺跡A区方形周溝墓 58



八坂本庄遺跡A区溝2 57



八坂本庄遺跡A区溝2 62



八坂本庄遺跡A区溝2 59



八坂本庄遺跡A区溝2 61



八坂本庄遺跡A区溝2 64



八坂本庄遺跡A区溝2 63



八坂本庄遺跡A区溝 2 56



八坂本庄遺跡A区溝 2 49



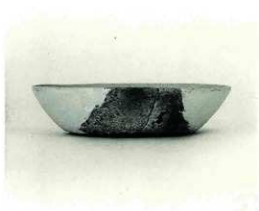
八坂本庄遺跡A区柱穴 80



八坂本庄遺跡A区柱穴 82



八坂本庄遺跡A区表探 124



八坂本庄遺跡A区表探 119



八坂本庄遺跡A区建物 36



八坂本庄遺跡A区表探 131



八坂本庄遺跡B区土壙26 134



八坂本庄遺跡B区建物86 165



八坂本庄遺跡B区土壙31 183



八坂本庄遺跡B区土壙31 192



八坂本庄遺跡B区土壙31 186



八坂本庄遺跡B区土壙31 188



八坂本庄遺跡B区土壙31 195



八坂本庄遺跡B区土壙31 208



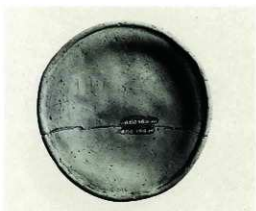
八坂本庄遺跡B区土壌41 233



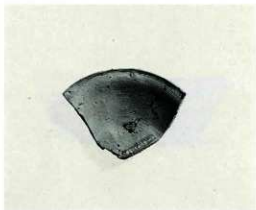
八坂本庄遺跡B区溝10と溝13の分岐点 362



八坂本庄遺跡B区土壌47 259



八坂本庄遺跡B区土壌47 259(上から)



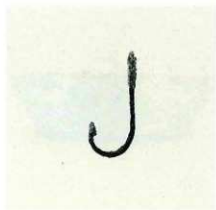
八坂本庄遺跡B区土壌47 260(上から)



八坂本庄遺跡B区土壌47 260(下から)



八坂本庄遺跡B区土壌47 254



八坂本庄遺跡B区土壌47 255



八坂本庄遺跡B区土壙51 284



八坂本庄遺跡B区土壙S X 1 295



八坂本庄遺跡B区土壙S X 1 296



八坂本庄遺跡B区土壙S X 1 297



八坂本庄遺跡B区土壙S X 1 298



八坂本庄遺跡B区土壙S X 1 300



八坂本庄遺跡B区土壙S X 1 299



八坂本庄遺跡B区土壙S X 2 302



八坂本庄遺跡 S X 2 304



八坂本庄遺跡 B 区土壙 S X 2 303



八坂本庄遺跡 B 区溝 10 320



八坂本庄遺跡 B 区溝 13 340



八坂本庄遺跡 B 区溝 13 338



八坂本庄遺跡 B 区溝 13 343



八坂本庄遺跡 B 区溝 15 368



八坂本庄遺跡 B 区柱穴 392



八坂本庄遺跡B区柱穴 390



八坂本庄遺跡B区柱穴 386



八坂本庄遺跡B区柱穴 388



八坂本庄遺跡B区柱穴 399



八坂本庄遺跡B区柱穴 397



八坂本庄遺跡B区柱穴 395



八坂本庄遺跡B区柱穴 407



八坂本庄遺跡B区柱穴 406

大分県文化財調査報告書第150輯
八坂川河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

八坂の遺跡 I

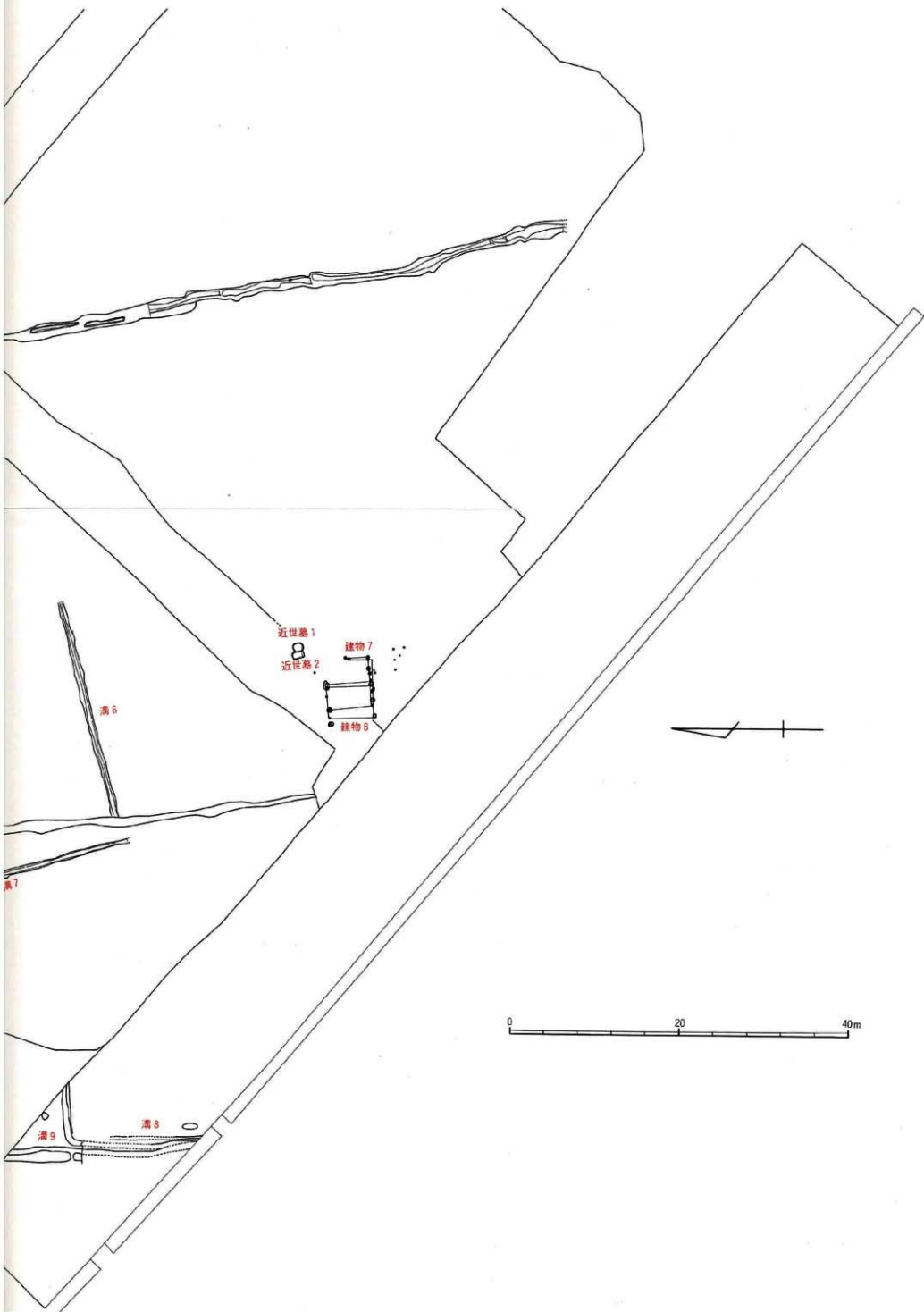
総 説
八坂久保田遺跡
八坂本庄遺跡

2003(平成15)年3月31日

発行 大分県教育委員会
〒870-0021 大分県大分市府内町3-10-1
印刷 三恵印刷株式会社
〒870-0941 大分市下郡3055-8

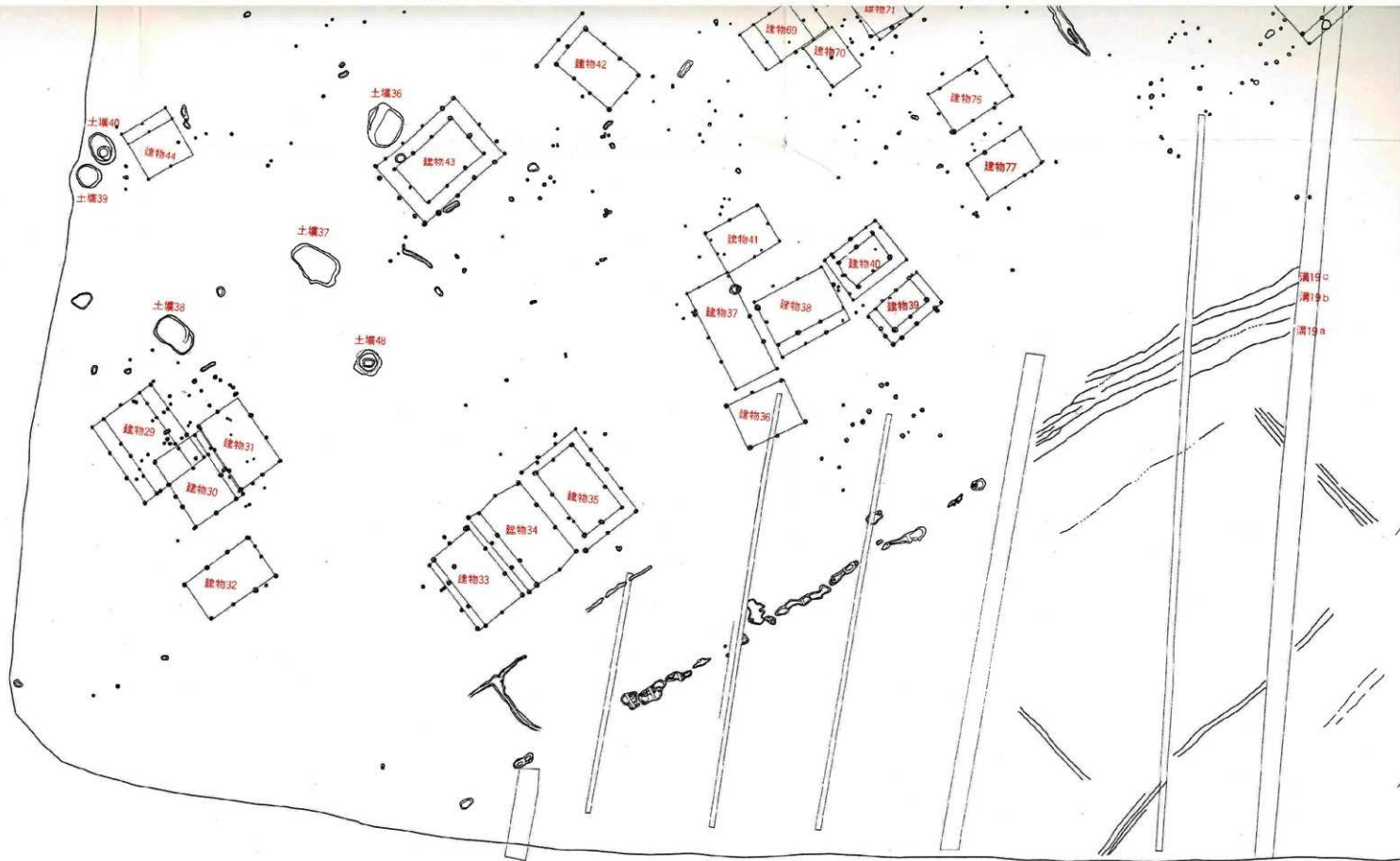


付図1 八坂本庄遺跡B区第I面遺構配置図(1/400)

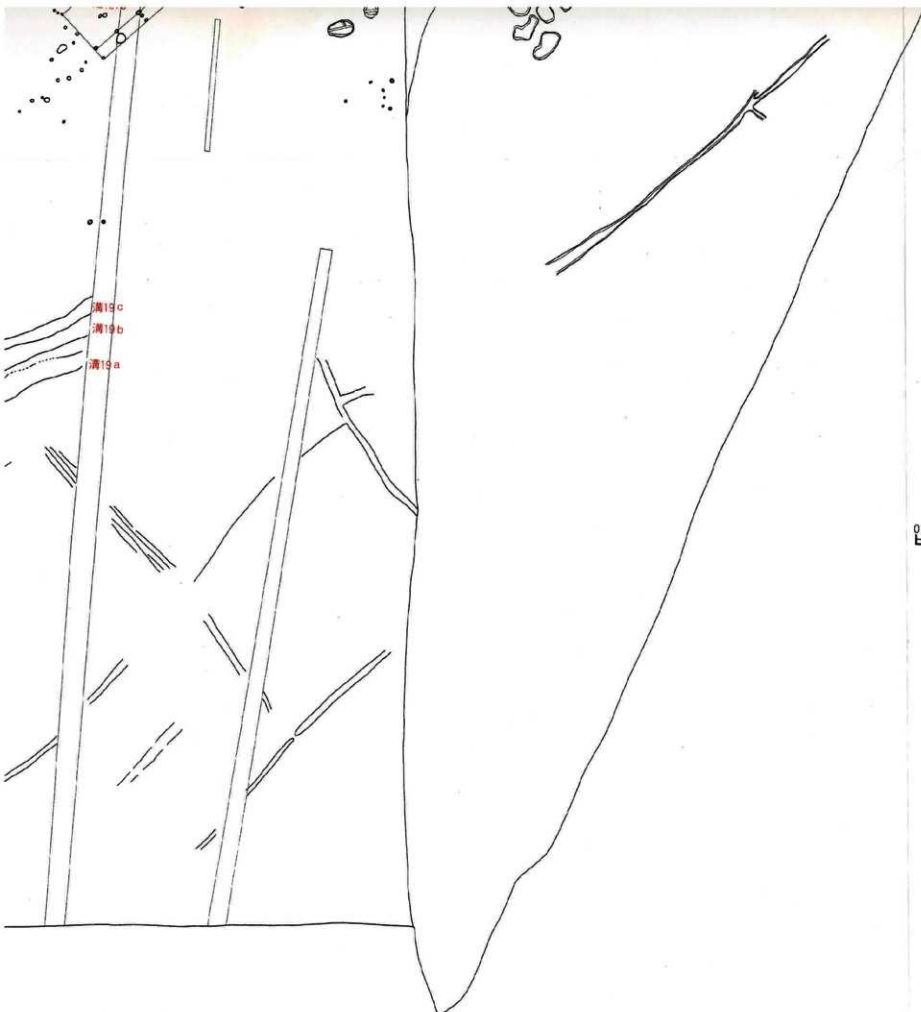








付図2 八坂本庄遺跡B区第Ⅱ面遺構配置図(1/300)







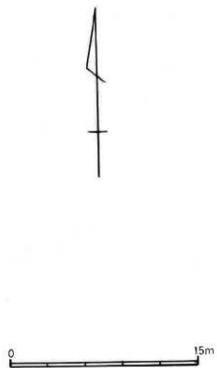


付図3 八坂中遺跡掘立柱建物跡配置図 (1/300)









付図4 八坂中遺跡土坑配置図 (1/300)







付図5 八坂中遺跡井戸、地下式土塙、墓、竪穴、溝、鍛冶関連遺構、埋納遺構配置図 (1/300)



付図6 八坂川下流域灌漑図（河道工事以前）（1）





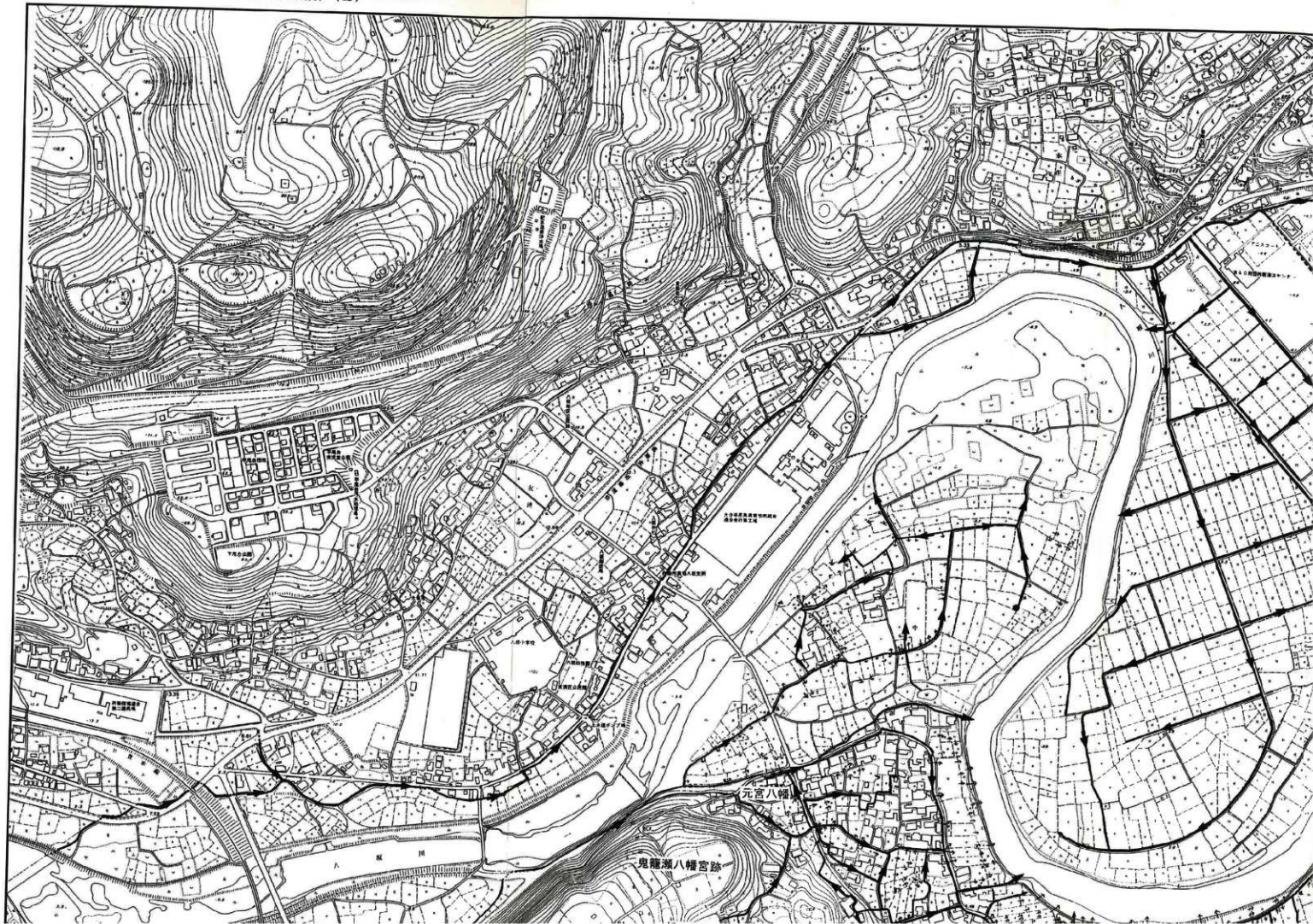




凡例

- : 井 戸
- : 水 路

付図7 八坂川下流域灌漑図（河道工事以前）(2)



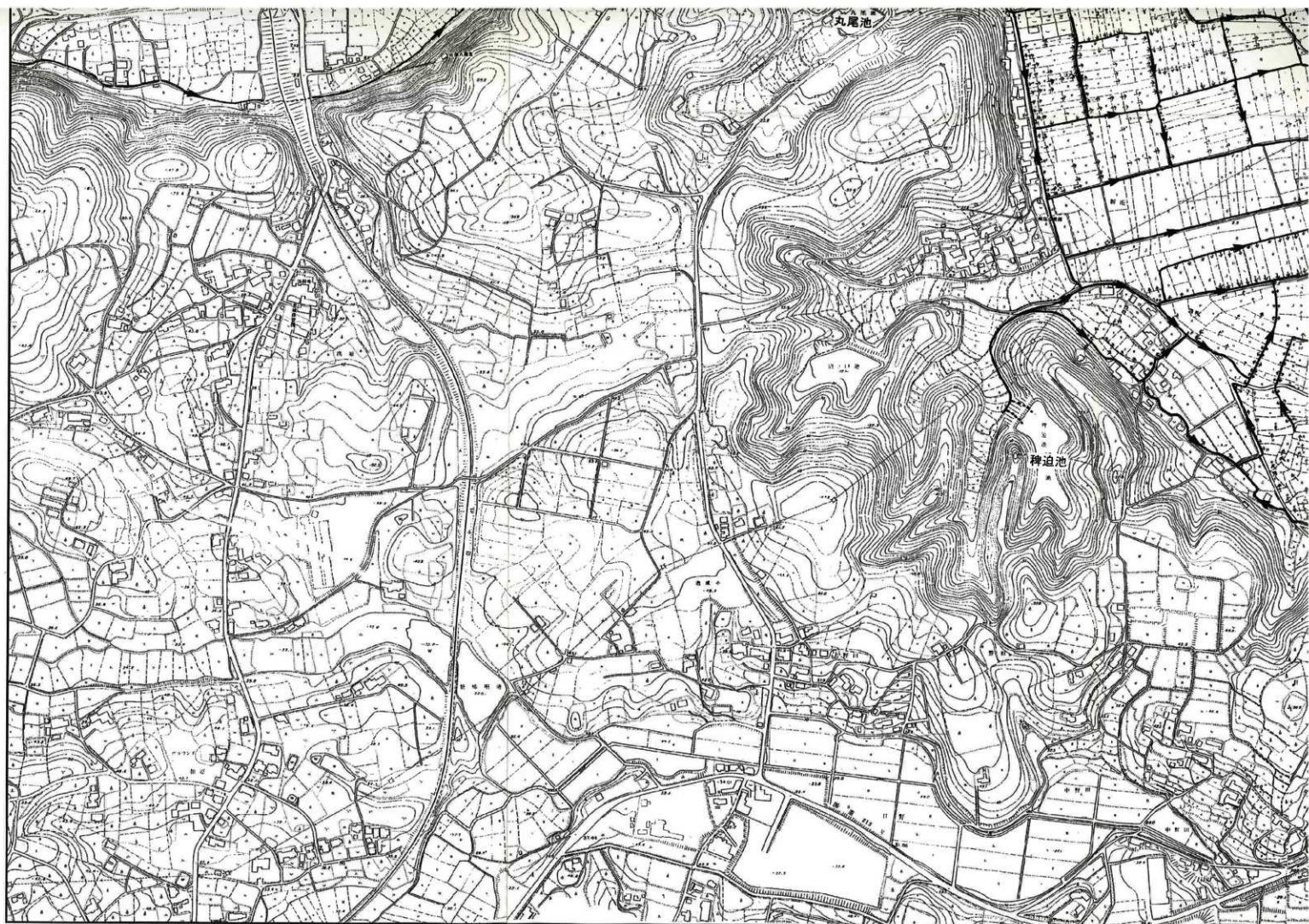


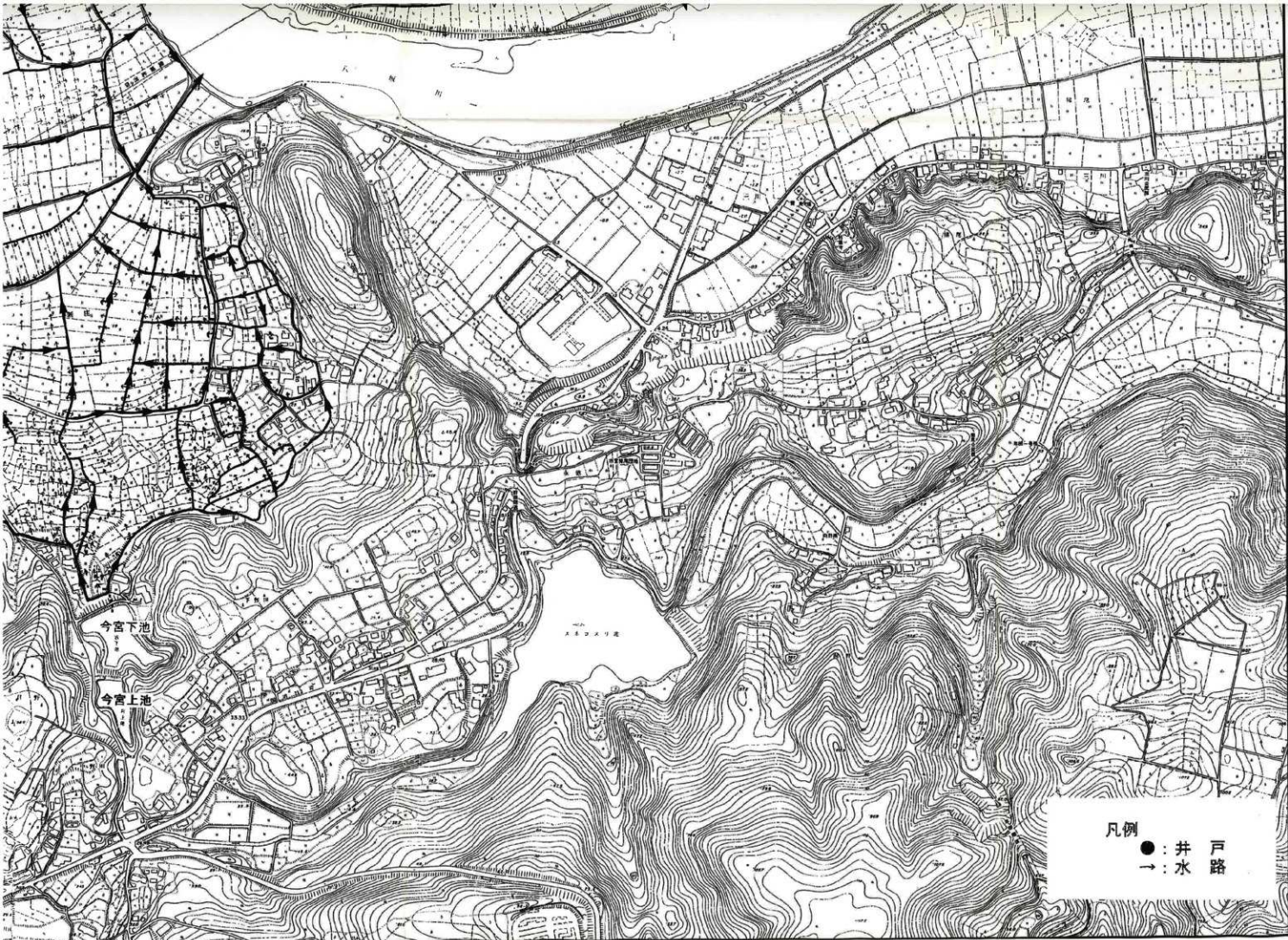
庄地山八幡宮跡

西谷池

東谷池

浜田八幡神社





凡例

- : 井 戸
- : 水